

# 北向遺跡

## 発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第146集



き　た　む　か　え　い　せ　き

# 北向遺跡

発掘調査報告書

---

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 146 集

平成 18 年

財団法人 山形県埋蔵文化財センター





調査区遠景(北から)



巻頭写真 1



調査区(北区) 近景(北から)



調査区(南区) 近景(南から)



# 序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した北向遺跡の調査成果をまとめたものです。

北向遺跡は、松尾芭蕉の「奥の細道」で有名な山寺立石寺や仙台へ通じる、二口峠への入口にあたる山形市大字風間に位置します。遺跡の周囲は、果樹地帯ですが、近年宅地化が進み、山形市北部の新たなベッドタウンとして開発が進んでいます。

この度、山形県村山総合支庁建設部の臨時道路整備事業（一般県道東山七浦線）に伴い、工事に先立って北向遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、奈良～平安時代の堅穴住居や掘立柱建物跡などの遺構が密集して検出されました。遺物では、堅穴住居を中心に須恵器や土師器と呼ばれる土器がまとまって出土しました。

特に今調査では、堅穴住居が何回も建て替えられた様子が認められ、その中の遺物に時期差がある事が分かり、当地域の土器の変遷を考える上で、貴重な資料が得られました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及・学術研究、教育活動などの一助になれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成18年3月

財團法人 山形県埋蔵文化財センター  
理事長 佐藤 敏彦

## 例　言

1 本書は平成 15 年度臨時道路整備一般県道東山七浦線に係る「北向遺跡」の発掘調査報告書である。

2 既刊の年報、調査説明資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。

3 調査は山形県教育委員会の委託により財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

4 調査要項は下記の通りである。

遺　跡　名	北向遺跡
遺　跡　番　号	平成 14 年度新規登録
所　在　地	山形県山形市大字風間字北向
調　査　主　体	財団法人山形県埋蔵文化財センター
理　事　長	佐藤 敏彦
受　託　期　間	平成 15 年 4 月 1 日～平成 17 年 3 月 31 日
現　地　調　査	平成 15 年 5 月 7 日～平成 15 年 7 月 29 日
調査担当者	調査第二課長 尾形與典 主任調査研究員 伊藤邦弘 調査研究員 植松暁彦 調　査　員 佐竹桂一

5 本書の作成・執筆は、植松暁彦が担当した。「自然化学分析」についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。

6 業務委託は下記の通りである。

基準点測量	工藤測量株式会社
造構の写真測量・実測	株式会社シン技術コンサル
資料の理化学分析	パリノ・サーヴェイ株式会社

7 出土遺物・調査記録類については、報告書作成終了後すみやかに山形県教育委員会に移管する。

8 発掘調査及び本書を作成するにあたり、下記の方から御協力、御助言をいただいた。

山形大学 阿子島 功教授

## 凡　例

- 1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は次の通りである。
- 2 遺構番号は、現地調査段階での番号を、そのまま報告書の番号として踏襲した。
- 3 遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第X系(日本測地系)により、高さは海拔高で表す。
- 4 遺構実測図は1/40～1/400他の縮図で採録し、各々スケールを付した。
- 5 土層観察においては、遺構を覆う基本層序をローマ数字で表し、遺構覆土については算用数字を付して区別した。焼土は■、炭は□を付した。
- 6 遺構実測図中の遺物実測図は原則として1/3で採録した。
- 7 本文中の遺物番号は、遺物観察表・遺物図版ともに共通のものとした。
- 8 遺物実測図、拓本図は1/3で採録し、各挿図にスケールを付した。
- 9 遺物実測図中の土器について、土師器は断面白抜き、須恵器は黒ドット、赤焼土器は白抜きドットを各々断面右下に付した。
- 10 遺物観察表中において、括弧内の数値は図上復元による推定値(器高は残存値)を示している。
- 11 基本層序および遺構覆土の色調記載については、1997年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版基準土色帖」に掲った。

# 目次

I	調査の経緯
1	調査に至る経緯 ..... 1
2	調査の方法と経過 ..... 1
II	遺跡の立地と環境
1	地理的環境 ..... 4
2	歴史的環境 ..... 4
III	遺跡の概要
1	調査区と層序 ..... 5
2	遺構と遺物の分布 ..... 5
IV	検出遺構と出土遺物
1	堅穴住居跡 ..... 12
2	掘立柱建物跡 ..... 97
3	土坑跡・溝跡 ..... 102
4	その他の出土遺物 ..... 110
V	まとめ ..... 117
報告書抄録 ..... 卷末	
付編	

「北向遺跡の自然科学分析」パリメ・サーベイ株式会社

## 表

表1 遺物観察表(1) ..... 111	表4 遺物観察表(4) ..... 114
表2 遺物観察表(2) ..... 112	表5 遺物観察表(5) ..... 115
表3 遺物観察表(3) ..... 113	表6 遺物観察表(6) ..... 116

## 図版

第1図 遺跡位置図 ..... 2	第8図 遺構分割図(3) ..... 11
第2図 道路概要図 ..... 3	第9図 S T 6 遺構図 ..... 13
第3図 基準点測量図 ..... 3	第10図 S T 6 遺物実測図(1) ..... 15
第4図 基本層序 ..... 6	第11図 S T 6 遺物実測図(2) ..... 16
第5図 遺構配置図 ..... 7	第12図 S T 8 遺構図 ..... 18
第6図 遺構分割図(1) ..... 9	第13図 S T 8 遺物実測図(1) ..... 19
第7図 遺構分割図(2) ..... 10	第14図 S T 8 遺物実測図(2) ..... 20

第15図	S T 25 道構図	21	第56図	S T 15 A・B・C遺物実測図	69
第16図	S T 25 道物実測図	22	第57図	S T 16 道構図	70
第17図	S T 74A・B・SL78 道構図	23	第58図	S T 16 道物実測図	70
第18図	S T 74 道物実測図(1)	24	第59図	S T 17 道構図	72
第19図	S T 74・SL78 道物実測図(2)	25	第60図	S T 17 道物実測図	73
第20図	S T 85 道構図	27	第61図	S T 28・29・30 道構図	75
第21図	S T 85 道物実測図(1)	29	第62図	S T 29EL・30EL 道構図	77
第22図	S T 85 道物実測図(2)	30	第63図	S T 28 道物実測図	78
第23図	S T 86 道構図	32	第64図	S T 29 道物実測図(1)	79
第24図	S T 86 道物実測図(1)	33	第65図	S T 29 道物実測図(2)	80
第25図	S T 86 道物実測図(2)	34	第66図	S T 30 道物実測図(1)	81
第26図	S T 89 A 道構図	36	第67図	S T 30 道物実測図(2)	82
第27図	S T 89 A 道物実測図(1)	37	第68図	S T 35 道構図	85
第28図	S T 89 A 道物実測図(2)	38	第69図	S T 35 道物実測図(1)	87
第29図	S T 89 A 道物実測図(3)	39	第70図	S T 35 道物実測図(2)	88
第30図	S T 89 B 道構図	40	第71図	S T 36 道構図	89
第31図	S T 89 B 道物実測図	40	第72図	S T 36 道物実測図	90
第32図	S T 89 C 道構図	41	第73図	S T 39・41 道構図	91
第33図	S T 89 C 道物実測図	41	第74図	S T 39・41 道物実測図	92
第34図	S T 90 道構図	43	第75図	S T 42 A・B・C 道構図	93
第35図	S T 90 道物実測図(1)	45	第76図	S T 42 A・B・C 道物実測図	94
第36図	S T 90 道物実測図(2)	46	第77図	S T 68・69 道構図	95
第37図	S T 90 道物実測図(3)	47	第78図	S T 69 道物実測図	95
第38図	S T 94 道構図	48	第79図	S T 70 道構図	96
第39図	S T 94 道物実測図(1)	49	第80図	S T 70 道物実測図	96
第40図	S T 94 道物実測図(2)	50	第81図	S B 156 道構図	98
第41図	S T 100 A 道構図	51	第82図	S B 156 道物実測図	98
第42図	S T 100 B 道構図	52	第83図	S B 157 道構図	99
第43図	S T 100 B 道物実測図	53	第84図	S B 101 道構図	100
第44図	S T 100 C 道構図	54	第85図	S B 102・S A 103 道構図	101
第45図	S T 100 C 道物実測図(1)	55	第86図	S B 108 道構図	102
第46図	S T 159 道構図	57	第87図	S B 108 道物実測図	102
第47図	S T 159 道物実測図	58	第88図	S K 5・7・31・58・SP27・130 道構図	103
第48図	S T 12 道構図	59	第89図	S K 1・2・93・S P10・S D 9 道構図	104
第49図	S T 12 道物実測図	60	第90図	道構出土道物実測図(1)	105
第50図	S T 13 道構図	61	第91図	道構出土道物実測図(2)	106
第51図	S T 13 道物実測図	61	第92図	道構・クリップ出土道物実測図(3)	107
第52図	S T 14 道構図	63	第93図	調査区出土道物実測図	108
第53図	S T 14 道物実測図(1)	64	第94図	堅穴住居カマド分類図(1)	118
第54図	S T 14 道物実測図(2)	65	第95図	堅穴住居カマド分類図(2)	119
第55図	S T 15 A・B・C 道構図	67	第96図	堅穴住居変遷図	121

## 写真図版

卷頭写真1 調査区遠景（北から）

卷頭写真2 調査区（北区）近景（北から）

写真図版1 調査区全景（上空写真）

写真図版2 南区完掘状況（上空）他

写真図版3 北区南半完掘状況（上空）他

写真図版4 道構検出状況（北区北半）（↑N）他

写真図版5 道構完掘状況（北区南半）他

写真図版6 道構検出状況（南区中央）（↑S）他

写真図版7 道構完掘状況（南区中央）（↑S）他

写真図版8 S T 6 完掘状況（↑N）他

写真図版9 S T 6 E L 土層断面（↑N）他

写真図版10 S T 8 完掘状況（↑N）他

写真図版11 S T 1 2 完掘状況（↑N）他

写真図版12 S T 1 4 完掘状況（↑S）他

写真図版13 S T 1 4 E L 完掘状況（↑S）他

写真図版14 S T 1 5 A - B 遺物出土状況（↑S）他

写真図版15 S T 1 5 B E L 完掘状況（↑S）他

写真図版16 S T 1 6 完掘状況（↑S）他

写真図版17 S T 1 7 E P 1 - 2 土層断面（↑W）他

写真図版18 S T 2 9 - 3 0 遺物出土状況（↑W）他

写真図版19 S T 2 9 - 3 0 完掘状況（↑W）他

写真図版20 S T 2 9 E L 土層断面（↑N）他

写真図版21 S T 3 0 完掘状況（↑W）他

写真図版22 S T 3 0 E P 1 土層断面（↑S）他

写真図版23 S T 3 5 完掘状況（↑S）他

写真図版24 S T 3 5 完掘状況（↑W）他

写真図版25 S T 3 5 E P 3 (2 1) 土層断面（↑W）他

写真図版26 S T 4 2 A 完掘状況（↑N）他

写真図版27 S T 3 9 - 4 1 完掘状況（↑W）他

写真図版28 S T 3 9 E P 2 1 土層断面（↑S）他

写真図版29 S T 7 4 A - B 完掘状況（↑SW）他

写真図版30 S T 8 5 完掘状況（↑S）他

写真図版31 S T 8 5 E P 6 土層断面（↑S）他

写真図版32 S T 8 6 完掘状況（↑E）他

写真図版33 S T 8 9 A 完掘状況（↑S）他

写真図版34 S T 8 9 A E P 4 精査状況（↑W）他

写真図版35 S T 9 0 完掘状況（↑S）他

写真図版36 S T 9 0 E L 完掘状況（↑S）他

卷頭写真3 調査区（南区）近景（南から）

写真図版37 S T 9 0 E P 2 1 / S T 1 0 0 B E P 1

完掘状況（↑S）他

写真図版38 S T 9 0 遺物（RM3 6 6）出土状況（↑S）他

写真図版39 S T 1 0 0 B 完掘状況（↑S）他

写真図版40 S T 1 0 0 B 遺物（RP4 2 8）出土状況（↑E）他

写真図版41 S T 1 0 0 C 遺物（P 4 1 4 - 4 1 5）

出土状況（↑S）他

写真図版42 S B 1 0 1 - S B 1 0 2 完掘状況（↑W）他

写真図版43 S B 1 0 1 E P 3 土層断面（↑S）他

写真図版44 S B 1 5 6 - 1 5 7 完掘状況（↑S）他

写真図版45 S B 1 5 7 E P 6 6 土層断面（↑S）他

写真図版46 S B 1 0 8 完掘状況（↑N）他

写真図版47 S K 2 検出状況（↑S）他

写真図版48 S P 1 3 8 土層断面（↑S）他

写真図版49 S G 3 2 土層断面（↑S）他

写真図版50 出土遺物（1）

写真図版51 出土遺物（2）

写真図版52 出土遺物（3）

写真図版53 出土遺物（4）

写真図版54 出土遺物（5）

写真図版55 出土遺物（6）

写真図版56 出土遺物（7）

写真図版57 出土遺物（8）

写真図版58 出土遺物（9）

写真図版59 出土遺物（10）

写真図版60 出土遺物（11）

写真図版61 出土遺物（12）

写真図版62 出土遺物（13）

写真図版63 出土遺物（14）

写真図版64 出土遺物（15）

写真図版65 出土遺物（16）

写真図版66 出土遺物（17）

写真図版67 出土遺物（18）

写真図版68 出土遺物（19）

写真図版69 出土遺物（20）

写真図版70 出土遺物（21）

# I 調査の経緯

## 1 調査に至る経過

今回の発掘調査は、臨時道路整備事業一般県道東山七浦線道路改良工事に伴い実施されたものである。

山形市北東部の風間地区に所在する北向遺跡は、本事業に伴い平成 14 年に県教育庁社会教育課文化財保護室による遺跡詳細分布調査によって遺跡の存在が確認され、新規発見遺跡として登録された。

同年、文化財保護室は、更に本調査に先駆け、事業計画部分に 6ヶ所の試掘トレンチを行い、詳細な遺跡の粗密について分布調査を実施した。その結果、表土から約 50cm 下に、重複した竪穴住居跡や柱穴跡などが確認され、須恵器や土師器などの遺物も発見され、奈良から平安時代にかけての東西約 500 m の範囲に広がる集落跡とした。

重複した竪穴住居

この調査を受けて、山形県教育委員会と村山総合支庁建設部道路課などの関係機関による調整協議が図られた。これにより工事に先立ち図面、写真などによる記録保存を目的とした緊急発掘調査で対応する事となった。

そのため、事業計画部分のうち 1,170 m<sup>2</sup> の範囲について、平成 15 年度に財團法人山形県埋蔵文化財センターが山形県より発掘調査の委託を受け、この度調査の実施に至ったものである。

## 2 調査の方法と経過

本調査は、平成 15 年 5 月 7 日から同年 7 月 29 日までの日程で実施した。調査面積は、道路改良工事に係る幅約 9 m × 長さ約 130 m の 1,170 m<sup>2</sup> である。

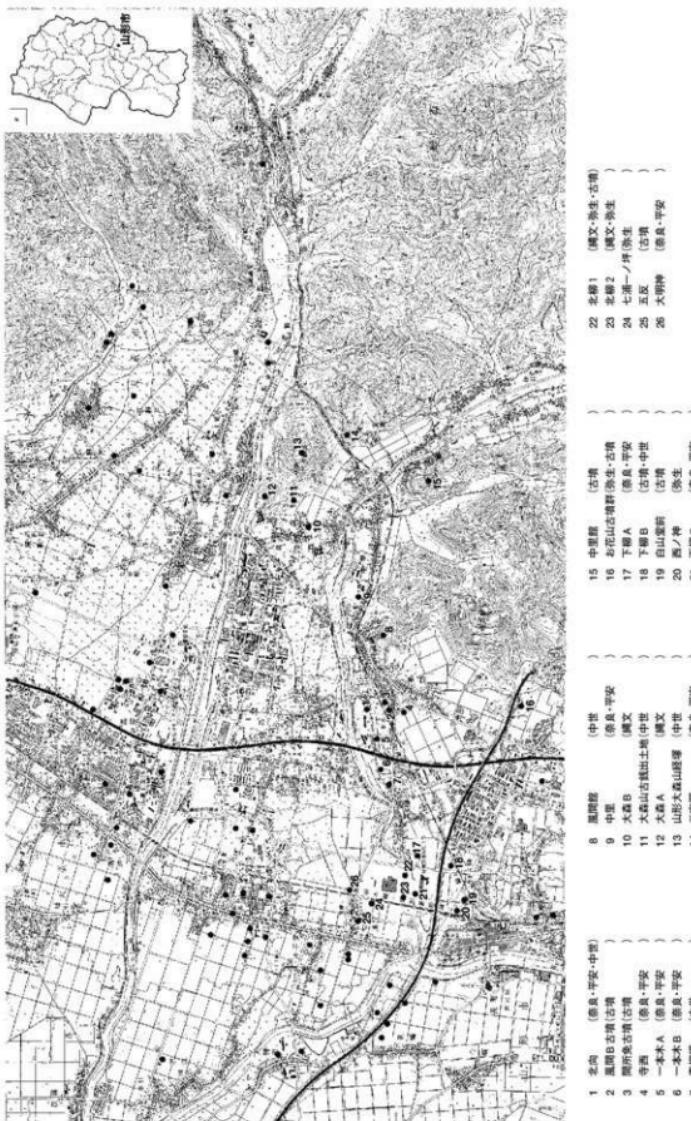
平成 15 年 4 月に事前打ち合わせを開催し、発掘調査に至る経過報告・調査機関・調査体制・調査方法・安全対策等について関係機関とともに協議を行う。

発掘調査は、調査区を中央部で分断する市道を境に大きく北区と南区に分け、最初に重機により遺構面まで表土除去作業を北区北端部から徐々に行った。

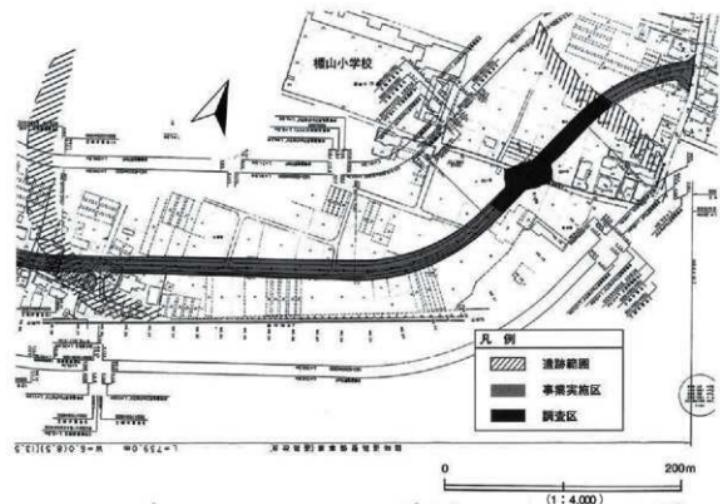
次に遺構面において面整理を行い、遺構の存在を検出・確認した。その後、北区から主に調査を行い、随時南区に調査を移行した。調査では、遺構精査とともに遺構の埋土の観察を行い、遺構の形状や遺物の出土状況などを図面や写真により記録した。

最後に竪穴住居跡の貼床などを外し、貼床の掘り方の状況やその下位の遺構の記録や写真撮影を行った。7月 18 日には遺構の空中撮影による記録を行った。7月 12 日に現地説明会を開催し 152 名の参加者を迎えた。

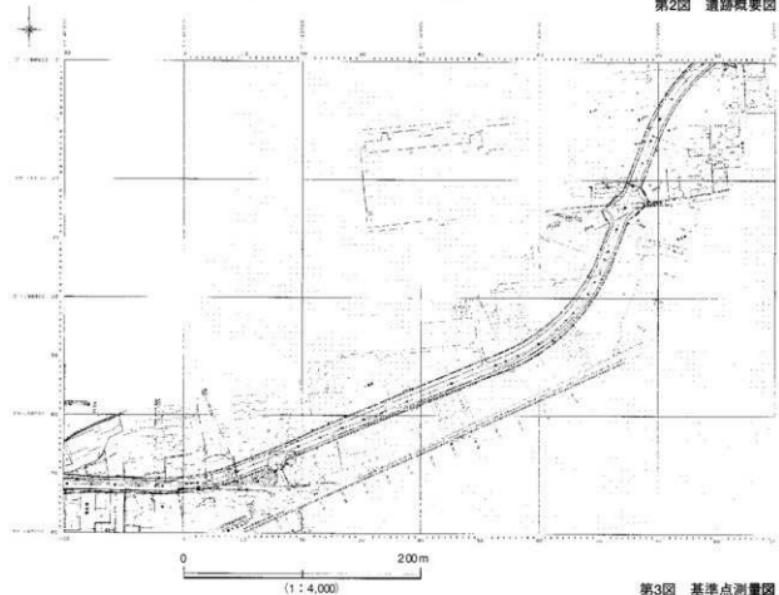
調査区を区画するグリッドは 5 m × 5 m で設定し、周辺の工事杭を基準に、公共座標に沿って、X 軸は北から南へ 8 ~ 32、Y 軸を西から東へ 72 ~ 82 とし、「8 - 72」等と位置を示した。なおグリッドは磁北に合わせた。高さは海拔標高で表している。



第1図 通路位置図(国土地理院発行2万5千分の1地形図「山形北部」「山寺」を1/2に縮小して使用)



第2図 遺跡概要図



第3図 基準点測量図

## II 遺跡の立地と環境

### 1 地理的環境

北向遺跡は、山形市北東部のJR仙山線稻山駅から西に約500mの地点に所在し、周辺は果樹畠や宅地が広がる。遺跡東側は、大森山をはじめとする奥羽山脈を背景とし、西側には白鷹丘陵を遠くに望む事ができる。

この付近は、奥羽山脈の面白山(1,264m)に源を発して西流し須川に注ぐ立谷川と、立谷川の南を西流して馬見ヶ崎川に注ぐ村山高瀬川の両河川によって形成された、複合扇状地の扇端部にあたる。

この扇状地は、立谷川扇状地と称され、半径8kmで落差約120mと急勾配をなしている。扇端部は、本遺跡から西に1kmの羽州街道に沿っており、近年まで湧泉が点在していた。

#### 村山高瀬川左岸

扇状地南半にあたる本遺跡は、村山高瀬川の左岸の自然堤防上に立地し、標高は約128mを測る。村山高瀬川は、明治34年の古地図でも北側に複数の支流が認められる。この地域は、村山高瀬川が氾濫を繰り返し、河道を変えていく過程で自然堤防が形成され、本遺跡の地山が形成されていったものと考えられる。

今調査区の中には、古代と推定される河川跡が北東から南西に走行しており、調査区の制約から全体は不明だが、上記の村山高瀬川の支流の一部と考えられる。

### 2 歴史的環境

北向遺跡周辺には、現在多くの古墳・奈良～平安時代・中世の遺跡が確認されている。

#### 古墳時代

古墳時代では、風間A(問所)・風間B・お花山古墳群等の古墳群が分布する。特に風間A・B古墳は、本遺跡の南側約300mに接し、昭和30年代前半の上水道工事や貯水池工事に伴い、直刀や石棺等が出土した。本遺跡の古代集落の形成には、これら前代の墳墓群を構築した在地集團が関与したと推測される。

#### 奈良～平安時代

本遺跡の主体的な奈良～平安時代では、一本木A・B・寺西・中里遺跡などがあげられる。特に一本木A・B遺跡は、本遺跡と西側で隣接し、本遺跡と同じく村山高瀬川左岸の自然堤防上に立地する。両遺跡は、現在でも周辺の水田より一段高く果樹畠などに利用され、遺物の散布も認められる。また、遺跡南方約300mの寺西遺跡でも多くの遺物の散布が認められる。これらは、本遺跡を含め近接しており、当地区が古代の拠点的な集落域だった可能性がある。

#### 中世

本遺跡で最も新しい時期として、中世の遺構や遺物が若干ある。同時期の遺跡には、青柳橋跡・風間館跡・浜田館跡・中里館跡等が分布する。

風間館跡・風間館跡・中里館跡は、山城で山寺街道や二口街道の要所として設置される。青柳橋跡・浜田館跡は、平地式の城館で在地豪族の所謂方形居館の一つと考えられ、これらも上記主要街道に面して館跡が構築されている。

### III 遺跡の概要

#### 1 調査区と層序

本遺跡は、広義的には現村山高瀬川左岸の自然堤防（微高地）上に立地する。狹義的には、西流する村山高瀬川の支流などが北から南へ走行し、所々に浮島状に形成された自然堤防（微高地）上に立地すると考えられる。この河川旧流路は、調査区東側の河川跡としたものがその一部と考えられる。概ね遺跡範囲は、これら河川の氾濫により土砂が堆積し、現在も一段高い畑地等に利用される地区的範囲と判断される。なお、調査区内の地山は、基本的に微砂やシルトであるが、上記の旧河川の洪水等に関わる砂礫層が表出する所もある。

基本層序は、I 層黒褐色耕作土（現耕作土）、II 層が黒褐色粘質シルト（旧表土）、III 層が暗褐色微砂（包含層）、IV 層が黒褐色粘質シルト～砂礫層（地山）である。III 層下部から遺物の包蔵が認められ、遺構の検出面は IV 層直上面であった。これらのの中には、調査区の中央部から北側にかけて地山面が徐々に低くなり、北端部では II ～ III 層が更に細分される。

基本層序

また、調査区北端部の堅穴住居跡覆土や旧河川跡堆積土中には、白色火山灰が含まれており、時期的に定点を捉える事ができる。他に調査区南端部では、現代の耕作による土取りや中世に掘り込まれた幅広の溝状の遺構が、古代遺構面を削平し、古代の包含層である III 層や地山面 IV 層の上面が認められない状況がある。

白色火山灰

#### 2 遺構と遺物の分布

本遺跡は、奈良～平安時代の集落跡で、今調査によって堅穴住居跡 38 棟、掘立柱建物跡 5 棟、溝跡、土坑等の遺構が確認された。

全体的に遺構は、調査区中央部から南部にかけて集中して分布し、調査区北半部では希薄になる。本遺跡で主体的な堅穴住居群も、大きくみれば調査区中央部～南半部に密集して建てられ、重複関係から少なくとも 4 時期以上の変遷が認められる。但し、一部の堅穴住居跡は、調査区北端部や南端部から単体で検出され、更なる遺構の広がりが推測された。

堅穴住居群

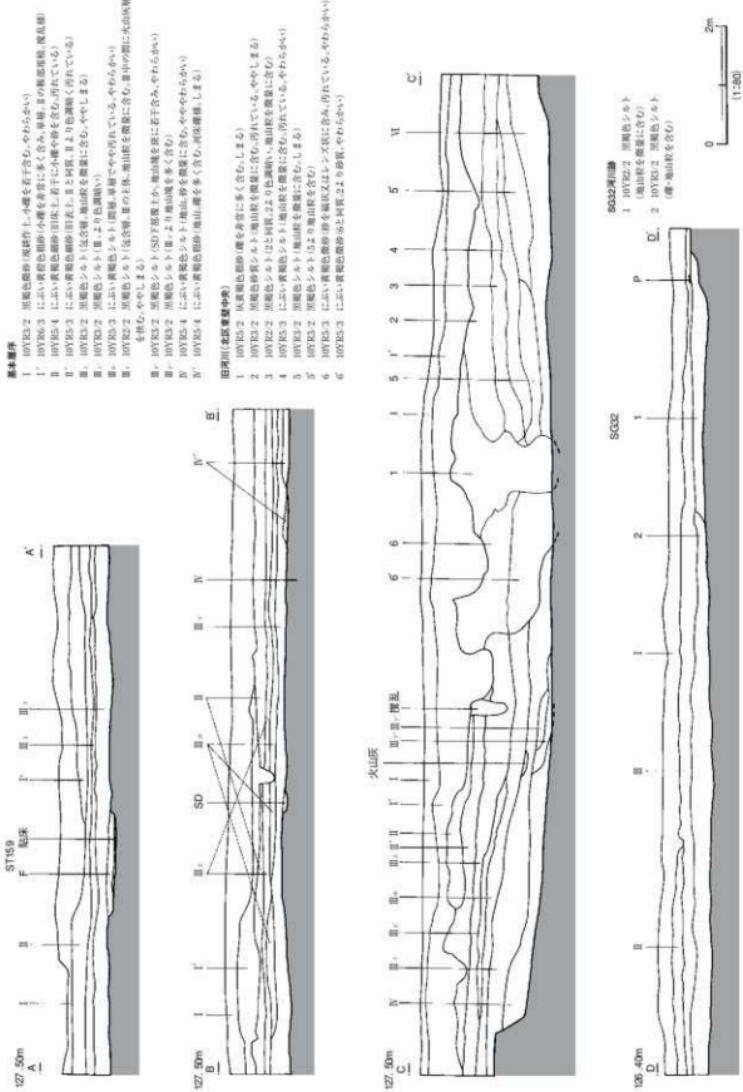
堅穴住居群は、その集中域の住居の重複関係や分布状況等から、小～中型（約 4 ～ 5 m）と大型住居（約 7 m 以上）で構成される住居の小ブロックに細分される事も観えた。この住居ブロック毎の間は、全体に遺構が希薄で、土坑や小ピットが単体で分布する。

掘立柱建物跡は、2 × 2 ～ 4 m 間前後の建物規模で、調査区中央部や南半部の集中する堅穴住居域の外側（南北両端）にまとまって分布する。建物跡は、主軸等を近接した建物に合わせるものが多く、堅穴住居群と共に概ね南北方向かそれに直交して構築される。

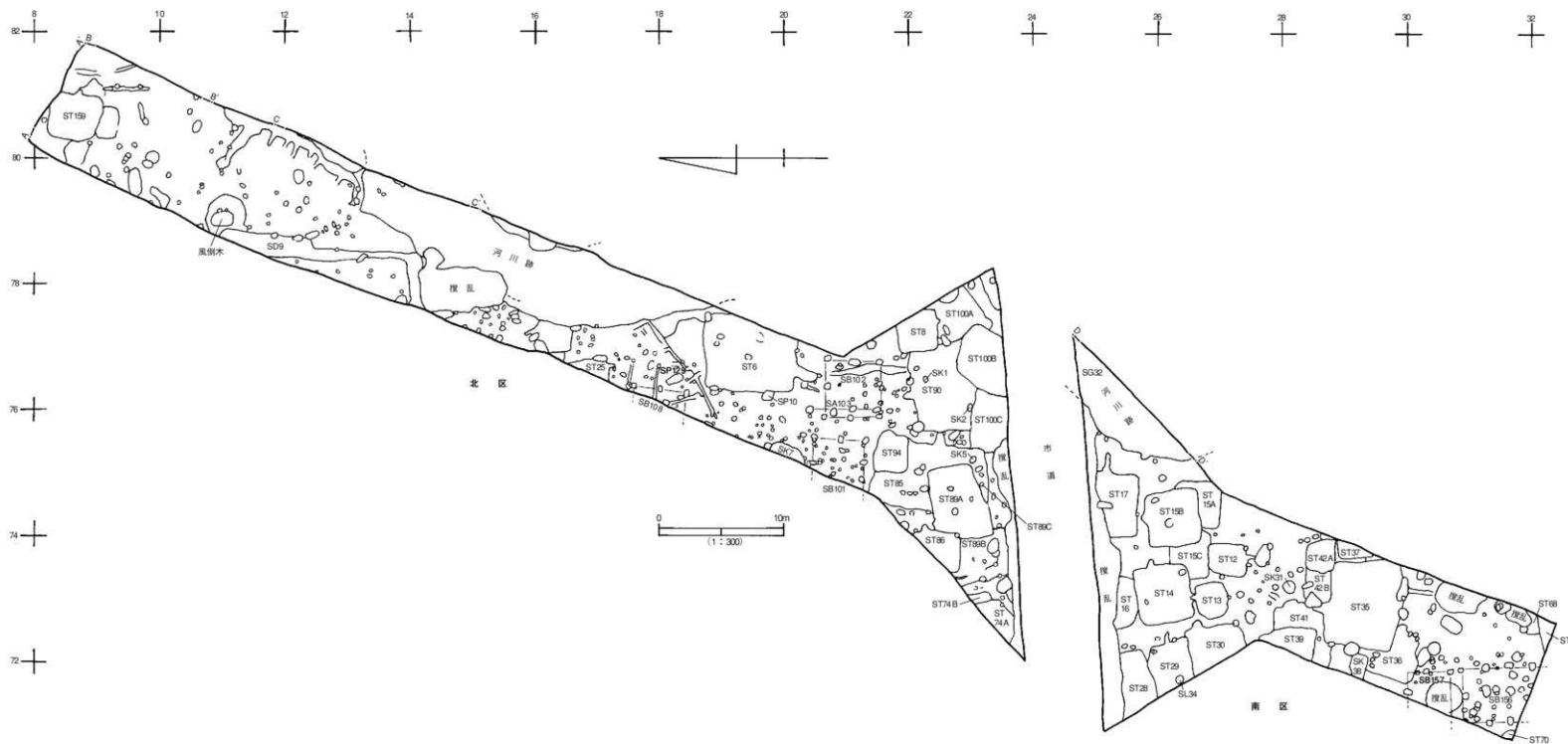
掘立柱建物跡

出土遺物では、堅穴住居跡を中心に土器が出土した。供膳具の壺・高台壺、煮炊具の甕、貯蔵具の壺・甕等が出土した。種別としては土器師・須恵器・赤焼土器等があり、他に刀子や紡錘車等の鉄製品、砥石などの石製品が出土した。時期的には奈良～平安時代前半の土器群が大半だが、古相の有段の土器師壺や新相の小底径の赤焼土器壺などが散見される。

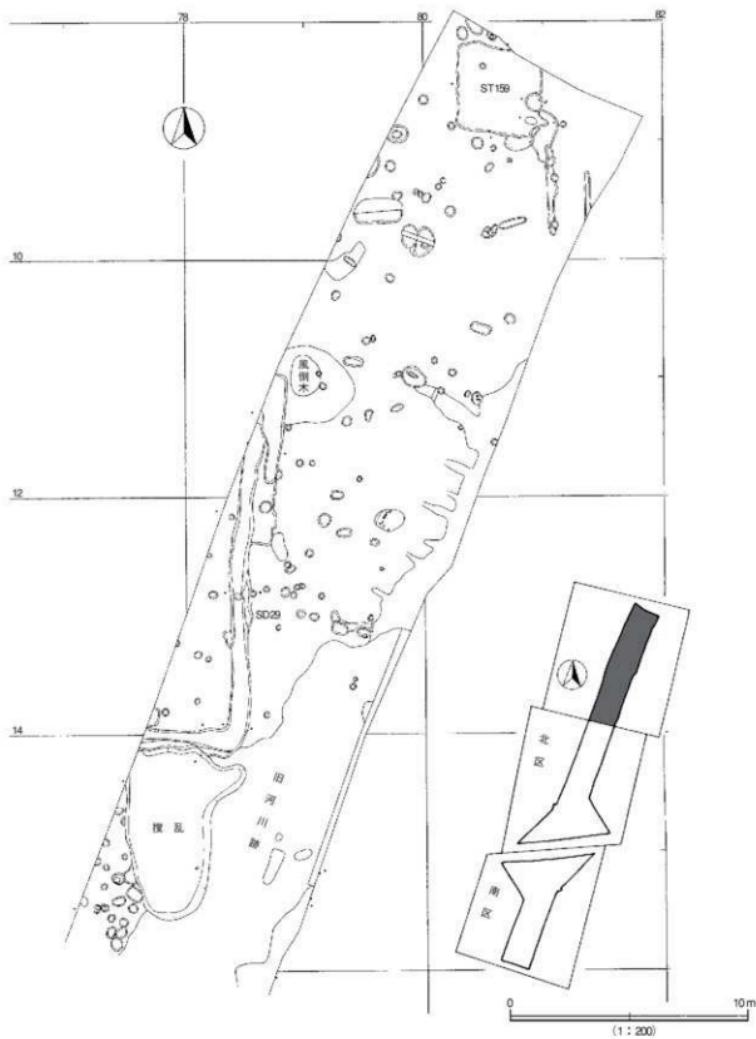
遺物相



第4回 基本圖序

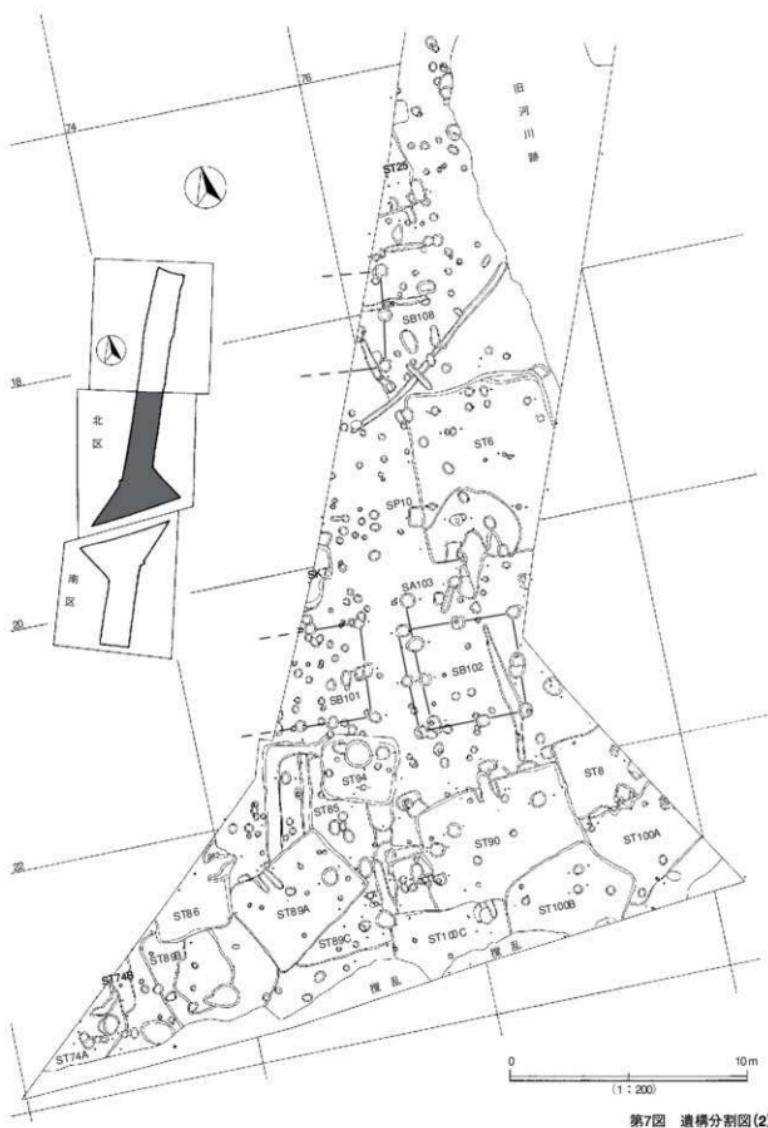


第5図 遺構配置図

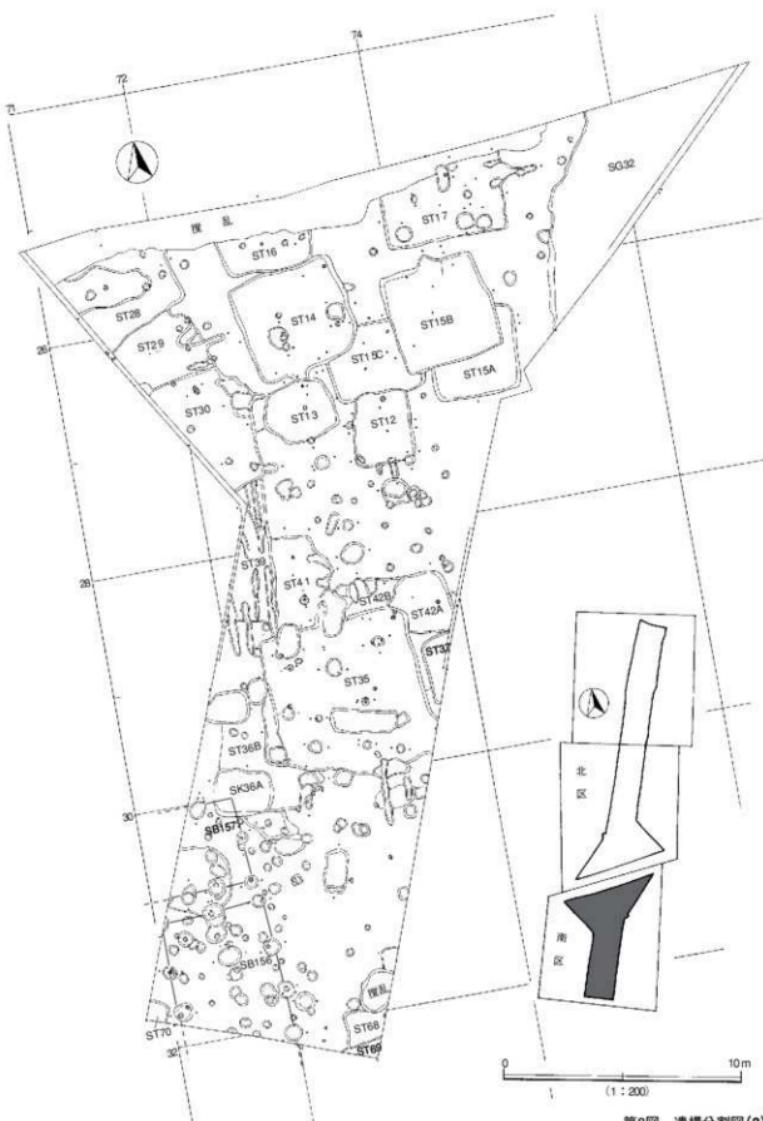


第6図 遺構分割図(1)

三 遺跡の概要



第7図 遺構分割図(2)



第8図 造構分割図(3)

## IV 検出遺構と出土遺物

### 1 壊穴住居跡

本調査区では、壊穴住居が北区 16 軒、南区 22 軒確認された。時期は全て奈良～平安時代に属する。以下に北区と南区に分け概述する。

#### S T 6 (第9図)

**大型住居** 北区の南東部、76～77～18～20 グリッドに位置する。平面形は大型の長方形で南北約 72m、東西約 6.0m を測る。方位は南北軸で N - 2° - E を測る。床面は平坦で貼床がなされており、壁はは垂直に立ち上がる。確認面から床面までの深さは約 40cm である。覆土は、大別 2 層に分かれ、上層が黒褐色砂質シルト、下層が黒褐色シルトで、各々遺物が出土した。

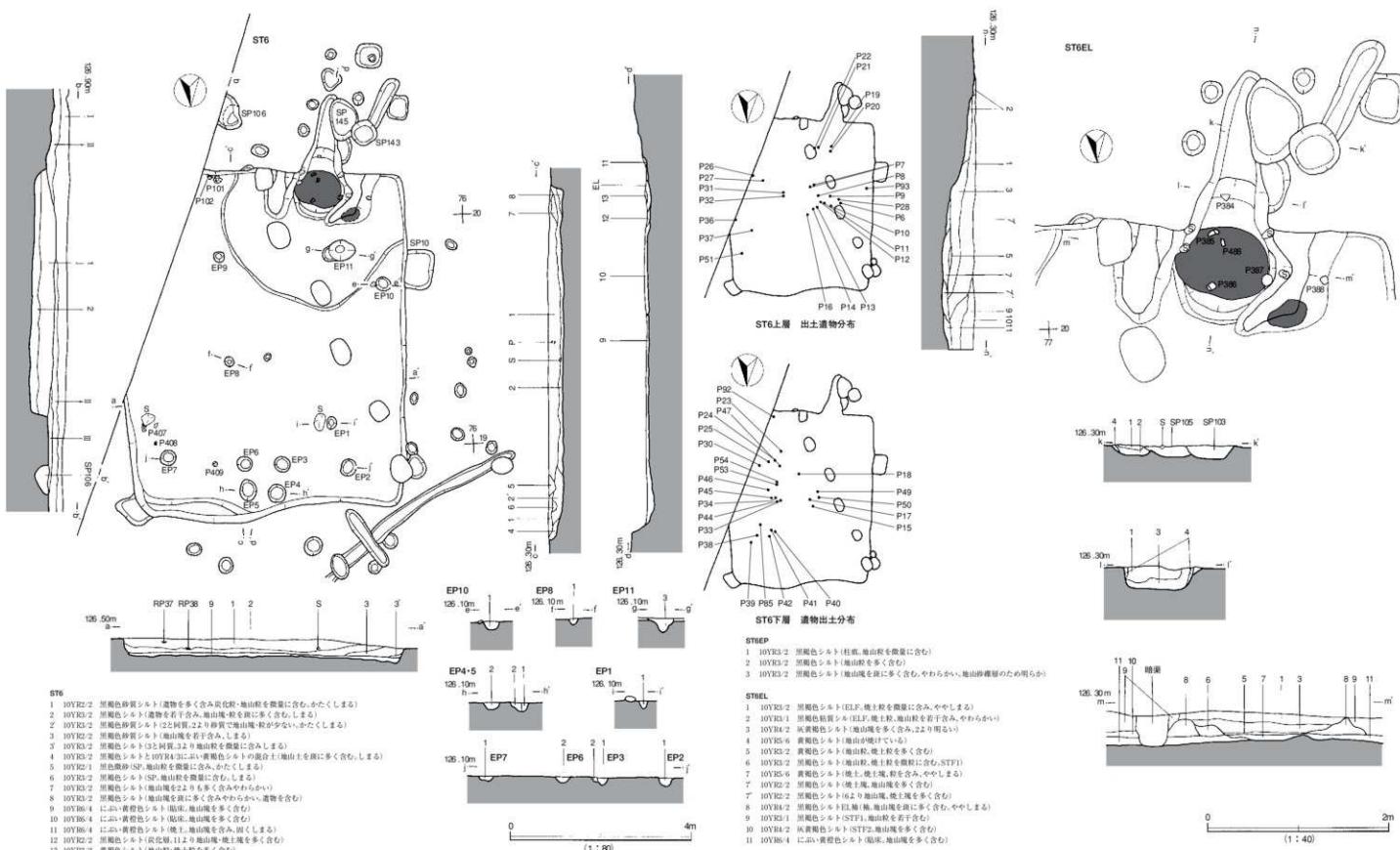
主柱穴は、EP11 などが確認された。平面形は直径約 56cm の楕円形で、床面からの深さは 30cm を測り、貼床精査に検出し、柱穴覆土が貼床を切る事から壊穴住居に伴うものと判断した。また、他に柱穴は、小規模なもの (EP 1～10) が確認され、平面形は直径約 22～48cm の円形で、床面からの深さは 16～20cm を測る。全体に小形のものが多く、支柱穴等と推測される。EP 3～6 は、北壁中央に 4 基が方形状に並び、その関連性が推測された。更に、EP 1 東側や EP 7 の南東では、直径 35cm 程の川原石が対で確認され、それに伴う明確な主柱穴は確認できなかったが、出土状況などから礎盤的な可能性も窺えた。

カマドは、南壁中央やや西寄りに設置されている。煙道部は長く張り出し、煙道端から燃焼部の長さ約 280cm、煙道幅約 50cm、袖幅は約 250cm を測る。焼土の広がりは南北 79 × 東西 102cm である。なお、袖西側にも径 27～45cm の焼土が検出された。

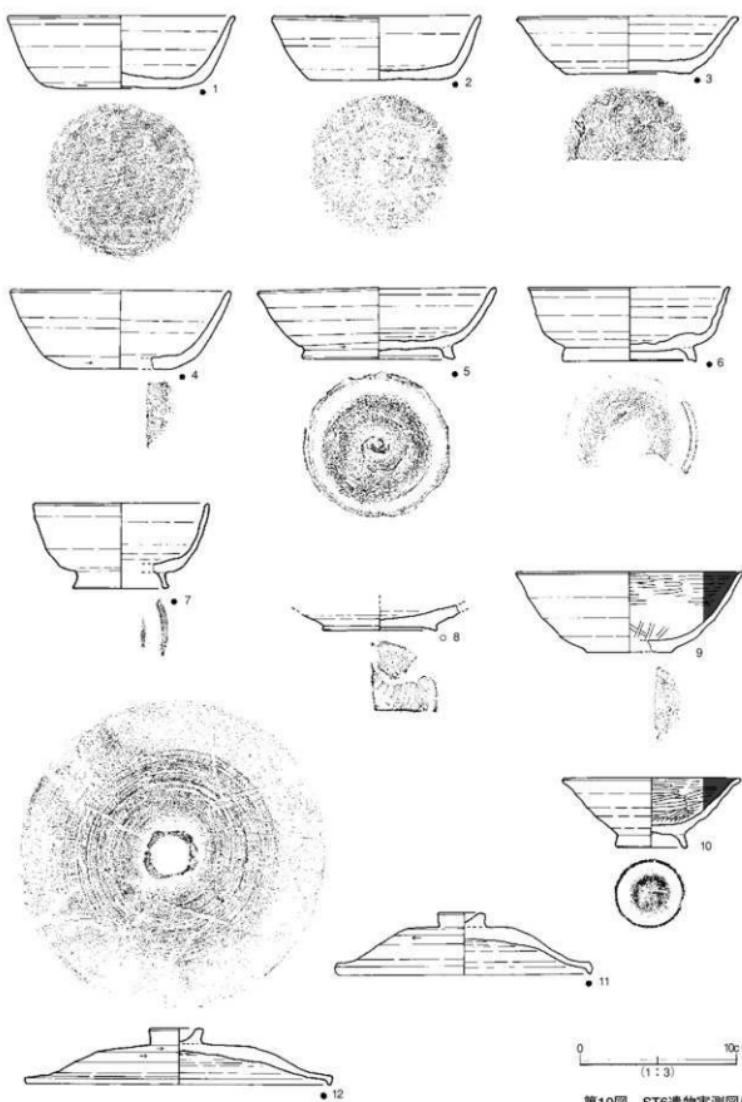
出土遺物は、床面から RP101・102・407～409、カマド周辺から RP384～388・486・488 が出土する。覆土は RP6～34・36～42・44～47・49・51・53・54・85・92・93 などが出土する。

実測可能なものは、須恵器壺 (10-1 : [RP387]・2 : [RP388]・3 : [RP17・51]・4 : [RP407])、須恵器高台壺 (10-5 : [RP101]・6 : [RP34・46]・7)、赤焼土器高台壺 (10-8 : [RP384])、土師器壺 (10-9 : [RP45])、土師器高台壺 (10-10 : [RP45])、須恵器蓋 (10-11 : [RP36]、12 : [RP36])、土師器鉢 (11-1 : [RP488])、土師器瓶 (11-2 : [RP488])、土師器鉢 (11-3)、土師器甕 (11-4 : [RP102])、須恵器小壺 (11-5 : [RP10]) である。

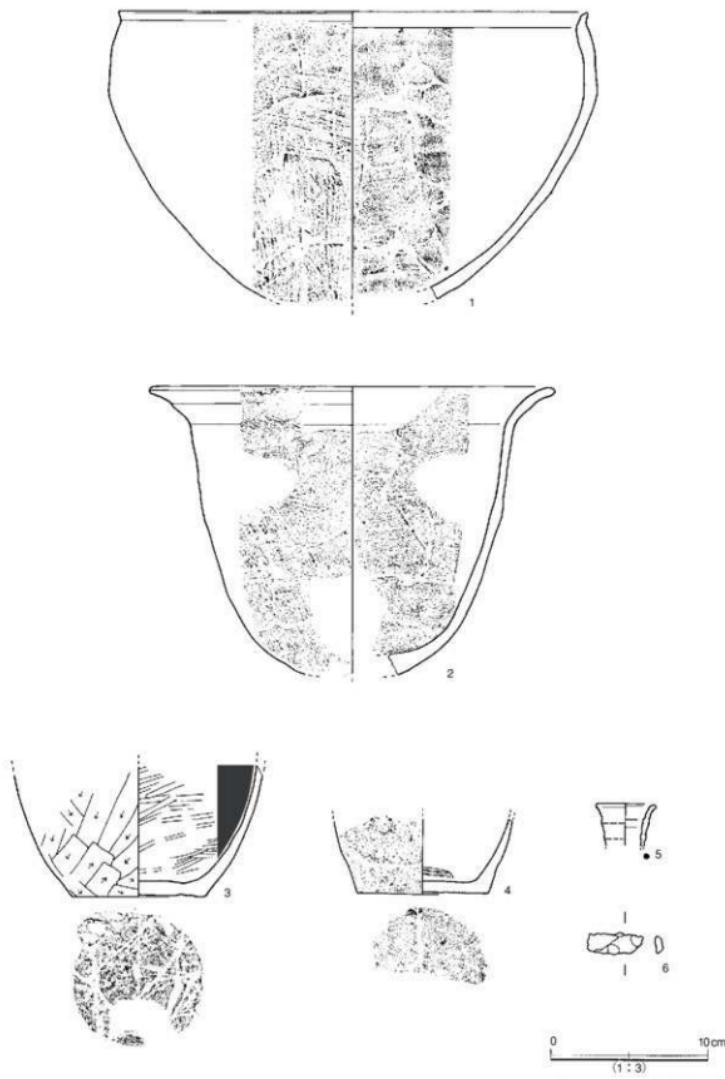
床面などの須恵器壺類は、全体に口径が 13～15cm、底径が 9cm 前後と大きく、器高が 4cm 前後と低い箱型や逆台形のものが多く、高径指数 (器高 / 口径 × 100%) が 30 前後である。底部切り離しは、ヘラ切り離しが多いが、10-1 は、静止系切後に外周をヘラケズリする。上層の 10-3 は回転糸切で、底径がヘラ切りのものよりや小径化する。高台壺は、壺部が壺同様に箱型や逆台形を呈し、10-5 は精巧な作りである。赤焼土器では高台壺 10-8 の高台が短く張出す形態で特徴的である。鉢、甕類は、土師器が多く、内外面ハケメ調整を施すもの (11-1・2・4) や底部に木葉痕を有するもの (11-3・4) など古相を呈するものが多い。時期的には 8 世紀後半～末頃と推測され、覆土上層は 9 世紀後半頃と時期幅が認められる。



第9図 ST6構造図



第10図 ST6遺物実測図(1)



第11図 ST6遺物実測図(2)

**S T 8 (第12図)**

北区南東端の76～77・21～22グリッドに位置する。ST 8は、ST100 A, ST90と重複(新旧関係 ST100A → ST90 → ST 8)し、西側が調査区外に延びる。一部現代の暗平面形はほぼ方形と考えられ、南北約3.6m × 東西約3m以上を測る。主軸方位は南北軸でN - 3° - Wを測る。床面は平坦で貼床がなされており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面から床面までの深さは約4cmである。覆土は黒褐色砂質シルトである。

カマドは、南壁中央に設置されている。煙道部は短い張り出しで、煙道端から燃焼部の全長約100cm、煙道幅約35cm、袖幅は約105cmを測る。焼土の広がりは径55cm程度である。袖には拳大的川原石を補強材として1～3個設置し、西側袖には石の外れた痕みも検出された。

出土遺物は、床面からRP225～227・234・315カマド及び周辺からはRP228～233・314・316などが出土している。

袖部に河原石のあるカマド

実測できたものは、須恵器壺(13 - 1:[RP515])、赤焼土器壺(13 - 2:[RP228・316]・3:[RP229]・4:[RP225]・5:[RP228・231]・6:[RP316]・7:[RP227]・8:[RP226])、赤焼土器高台壺(13 - 9:[RP232])、土師器高台壺(13 - 10:[RP314・231]・11:[RP234])、土師器鉢(13 - 12:[RP315])、土師器壺(14 - 1・2:[RP231]・3:[RP458])、土師器壺底部(14 - 4)である。

全体に赤焼土器が主体を占める。赤焼土器壺は、口径約13cm前後、器高5cm前後の高径指数が35～40のやや椀状の器形である。底部は5～6cm内外と全体に小さい。高台壺類は、全体に大振りで、赤焼土器高台壺(13 - 9)は、口径15cm弱と大振りで高台の脚部が長い、所謂足長高台状を呈する。土師器高台壺(13 - 10)も壺部が大振りで、口径約15cm、器高7cm弱を測る。高径指数は、両者とも40以上である。壺類は土師器壺(14 - 1・2)で、内外面ハケメ調整を施す。14 - 3・4は底部で網代痕がある。14 - 4は網代痕の後、刻みのある粘土粗痕を貼り付ける。他に長さ10cmの刀子も出土した。時期的には、一部古相の須恵器壺片(13 - 1)があるが、カマド周辺の赤焼土器や土師器の供器器から10世紀中～後葉の所産と考えられる。

**S T 25 (第15図)**

北区中央の76～77・16～17グリッドに位置する。西側は調査区外となり、全体規模は不明ながら、検出長で南北約3.4m以上 × 東西1.3m以上を測る。カマド東袖部が暗枠に壊される。

平面形は、方形を基調とし、主軸方位は南北軸でN - 5° - Wを測る。床面は平坦で貼床がなされ、壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面から床面までの深さは約40cmである。

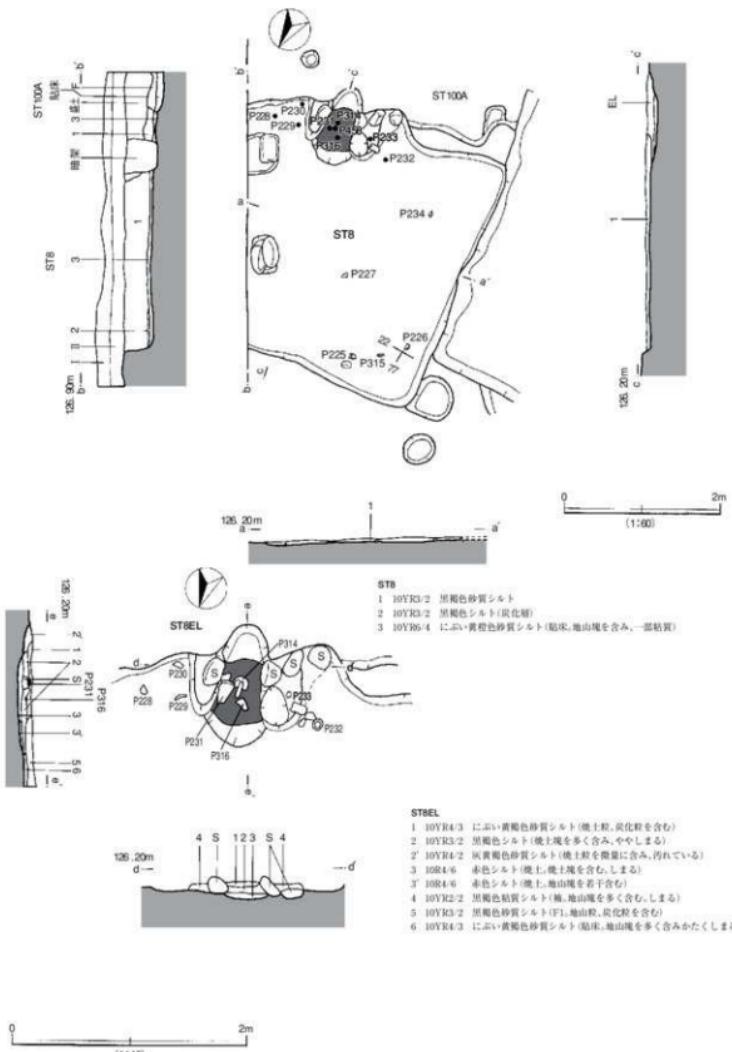
カマドは、南壁東端に設置されている。煙道部はやや長い張り出しで、煙道端から燃焼部は長さ約140cm、煙道幅約30cm、袖幅は約160cmを測る。焼土の広がりは径42～45cmを測る。全体に焼土の分布は不明瞭で、焼土粒を若干含む程度である。

なお、貼床は、地山土を小ブロックでやや含む暗褐色シルトである。貼床下に直径約90cmの円形の浅い掘り込みがあり、焼土が堆積し、古い段階のカマドなどの痕跡と推測された。

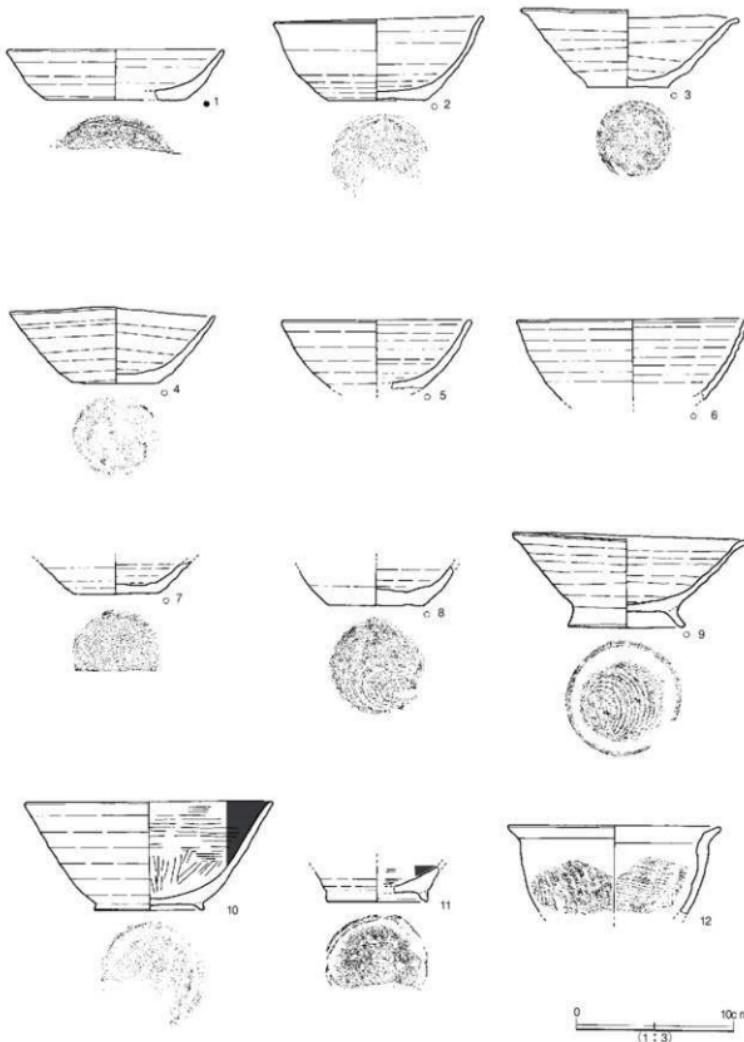
貼床下の焼土

出土遺物は、床面からRP463・464、貼床からRP490などが出土している。須恵器高台壺(16 - 1:[RP490])は、口径15.8cm、器高6.6cmの高径指数41前後の法量が大きいタイプで、底部切り離しは回転糸切で、同心円状の線刻がある。赤焼土器壺(16 - 2:[RP463])は、底部が回転糸切離して、底径が5.3cmと小さいものである。

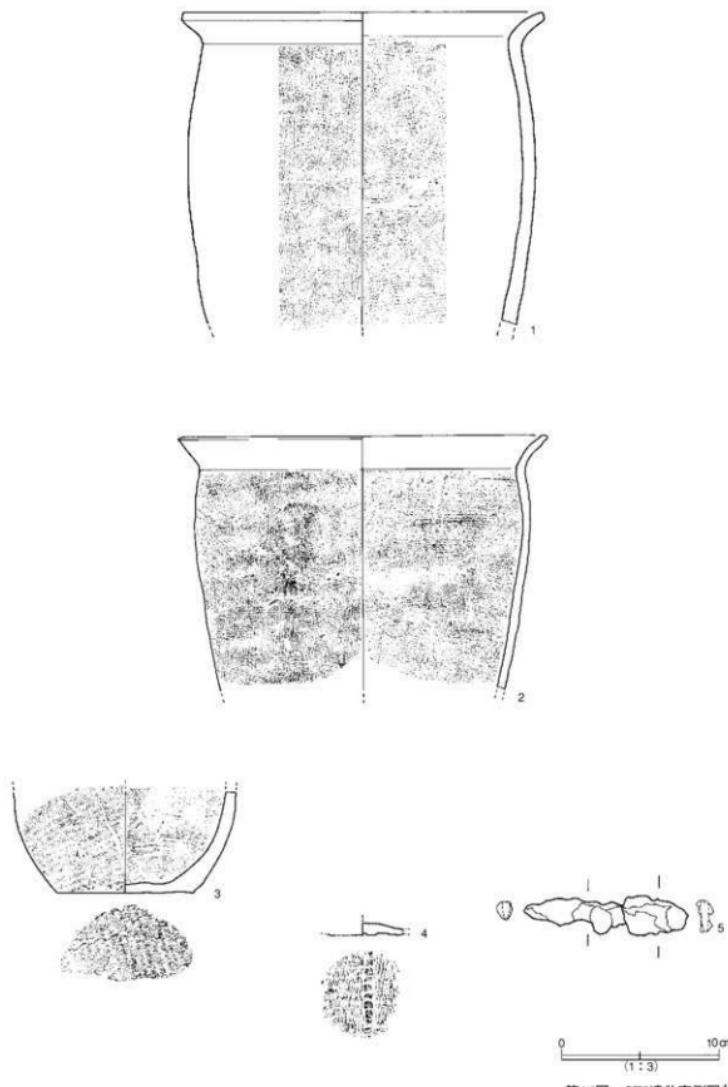
時期的には、赤焼土器壺などから9世紀末～10世紀前半代の所産と考えられる。



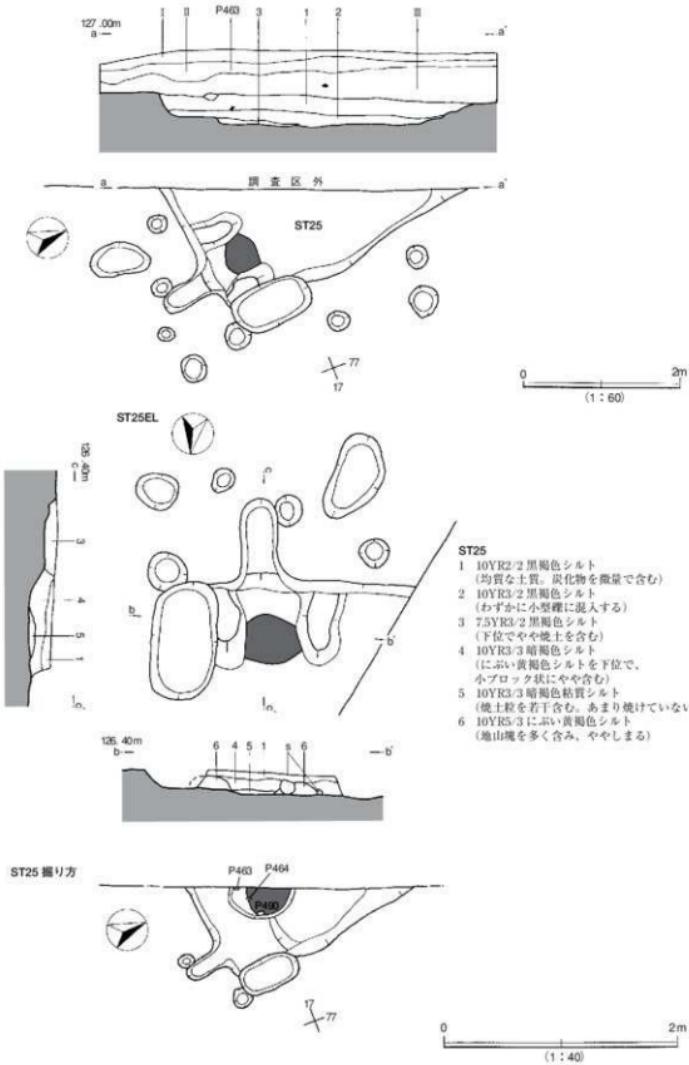
第12図 ST8造構図



第13図 ST8遺物実測図(1)



第14図 ST8遺物実測図(2)



第15図 ST25造構図



第16図 ST25遺物実測図

## ST74A・74B・SL78（第17図）

ST74A・74B・SL78は、北区の南西端の72-22~23グリッドに位置する。ST74Aは、ST74BやSL78と重複（新旧関係ST74B→ST74A・SL→ST74A）し、西側は調査区外に延び、南側は現道路盤に壊される。全体規模は不明だが、南北約1.8m以上×東西4.6m以上を測る。

平面形は、南側の直線的なラインが堅穴住居の南壁と考えられ、隅丸方形状と推測される。主軸方位は東西軸でN-50°-Eを測る。床面は平坦で貼床がなされており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面から床面までの深さは約35cmである。

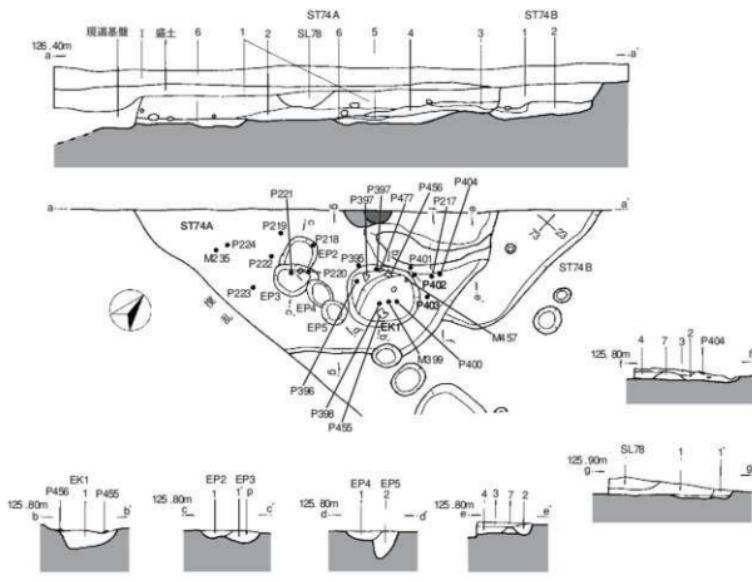
主柱穴は、EP2-5が確認され、平面形は直径30~58cmの楕円形で床面からの深さは10~34cmを測る。特にEP5は最も掘り方が深く、重複関係から柱の建て替えも推測された。

貯蔵穴は、床面南東端のやや大形のEK1が推測され、平面形が円形で、南北78×東西92cm、床面からの深さ22cmを測る。覆土や底面からRP397・455・456・477、RM457が出土した。

**煙道のないカマド** カマドは、焼土や南側袖の位置から住居東壁中央にあたり、住居内に東西方向に延びる事が推測された。カマドの形態は、焼土や北側袖などは調査区外に延びるため全体は不明だが、一般的な住居壁際にあるカマドと異なり、煙道が不明確で、袖が住居内に長く突出し、焼土（径34cm）や炭化層が住居内のはば中央部付近に設けられる特徴的な形態である。

遺物は、床面などからRP217~224・395・396~404・455・456、RM235・399などが出土する。実測図化したものは、須恵器壺（18-1: [RP398]・2: [RP400]・6: [RP456]）、同高台壺（18-3: [RP455]・4: [RP403]・5: [RP223]）、同蓋（18-12: [RP402]）、同壺（19-7）、赤焼土器壺（18-7: [RP401]・8: [RP254・217]・9: [RP397]・10）、土師器高台壺（18-11: [RP396]）、土師器鉢（18-13: [RP219]・19-1: [RP221]）、土師器壺（18-14: [RP224]・19-2: [RP224]・3: [RP477]・4: 5: 6: [RP224]）、土師器鉢（19-11: [RP218]）、刀子（19-12: [RM457]）である。

須恵器の壺（18-1・2）では、口径13cm内外、器高3.7cm前後の高径指数27~28を測るものが多い。器形は口径に比して器高が低いタイプで、底部径は6cm代の回転系切離しである。同高台壺では、一部底径の大きい古相のもの（18-5）があるが、EKなどからは、18-3・4のように底径が7cm代の法量が小さい形態が多いようである。

**ST74AEP**

- 1 10YR3-2 黒褐色シルト (地山塊を若干含み、炭化物を微量に含む。やわらかい)
- 1' 10YR3-2 黒褐色シルト (Jと同質、Jより色調暗く炭化、やわらかい)
- 2 10YR2-2 黒褐色シルト (地山塊を微量に含む。やわらかい)

**ST74A**

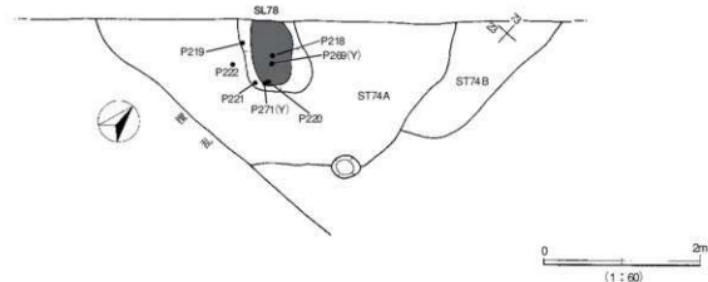
- 1 10YR3-2 黒褐色シルト (耕作土)
- 1' 10YR3-2 にひい 黑褐色砂質沙 (地道基礎)
- 1 10YR3-2 黑褐色シルト (STP1。地山塊を微量に含む。しまる)
- 2 10YR3-2 黑褐色シルト (STP2。地山塊・塊を多く含む。かたくしまる)
- 3 10YR3-2 黑褐色シルト (ELF。地山塊・塊を多く含む。しまる)
- 4 10YR4-2 黑褐色シルト (ELF。地山塊・塊を多く含む。しまる)
- 5 10R4-4 黑褐色シルト (ELF地土。块土を多く含む。やわらかい)
- 6 10YR3-2 黑褐色シルト (細粒。地山砂質を多く含む。やわらかい)
- 7 10YR3-3 にひい 黑褐色砂質シルト (ELF。地山塊を多く含む。しまる)

**SL78**

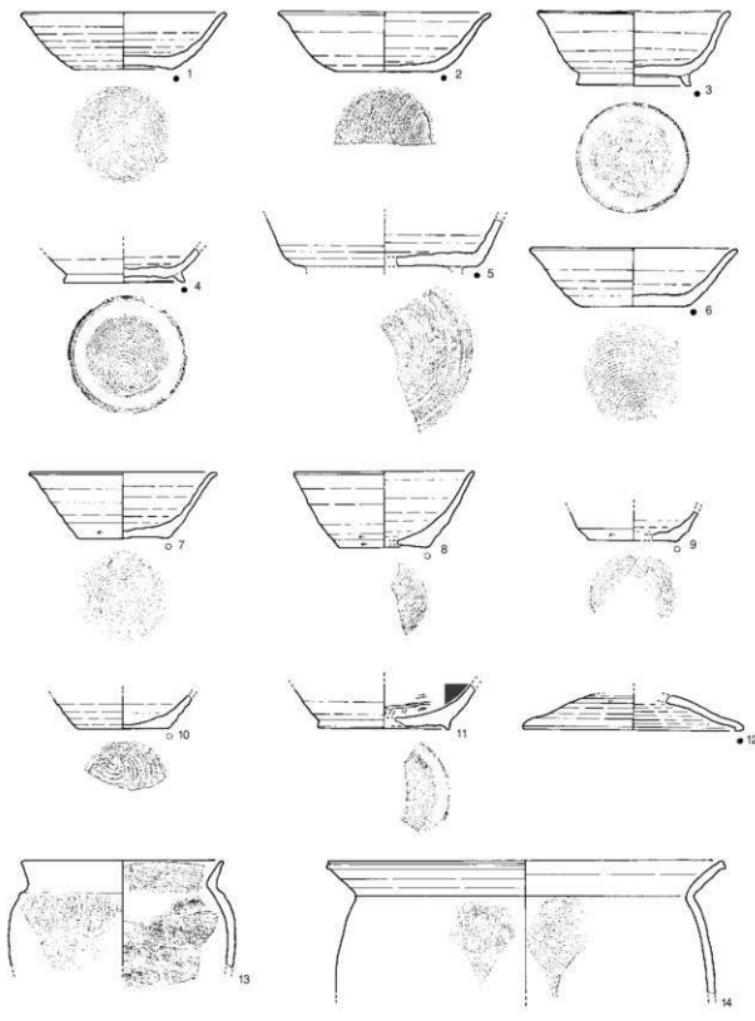
- 1 10R5-4 赤褐色シルト (块土。块土塊を多く含み、地山塊を若干含む。かたくしまる)
- 1' 10YR3-2 黑褐色シルト (块土。地山塊を含む。しまる)
- 2 10YR3-3 にひい 赤褐色シルト (地山塊を多く含む。しまる)

**ST74B**

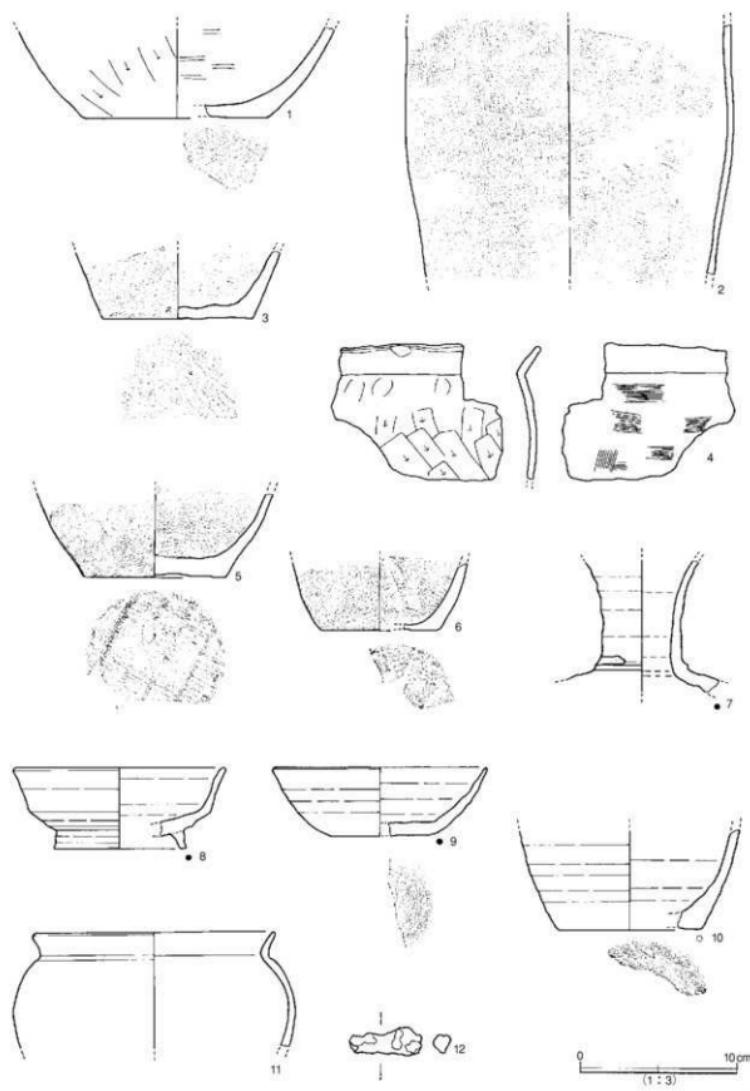
- 1 10YR3-2 黑褐色シルト (块土。地山塊を含む。しまる)
- 2 10YR3-3 にひい 黑褐色シルト (地山塊を多く含む。しまる)



第17図 ST74A・B・SL78遺構図



0  
10cm  
(1:3)  
第18図 ST74遺物実測図(1)



第19図 ST74・SL78遺物実測図(2)

赤焼土器壊(18-7~10)では、全体に小形で、底部径が5.5~5.7cmで、全て回転糸切り離しである。法量が分かる18-7・8は、口径が11cm代で器高が4cm代の高径指数35~42をとるもので、小形の椀状を呈する。18-7~9は体部下半にヘラケズリを施す。

土師器高台壊(18-11)は、高台が短く張出すもので、内面黒色処理する。19-1は同鉢で、底径が11cm代と大きい。同窓類では、内外面にハケメを施すもの(18-13・14、19-2~6)が多い。19-4は外面部上半までケズリが認められ、19-3・5の底部は網代痕が残る。

時期は、一部古相も含むが、須恵器や土師器の供膳器から9世紀中~後葉頃が推測される。

ST74Bは、南・東壁の一部が検出され、北側を調査区外、西側をST74Aに切られる。概ね方形を基調とし、方位は南北軸でN-5°-Eを測る。床面は、平坦で貼床され、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面までの深さは約35cmである。主柱穴やカマド、出土遺物はない。

#### 焼 土 造 構

SL78は、焼土造構で、ST74Aを切る。平面形は梢円形を呈し、北側が調査区外に伸びる。南北90cm以上×東西80cmで、確認面からの深さは20cmで、焼土が充満し、良く焼けている。覆土や床面からRP219~222・269・271などが出土した。実測し得たのは、須恵器高台壊(19-8:[RP220])、須恵器壊(19-9:[RP271])、赤焼土器壊(19-10:[RP219])などである。

須恵器高台壊(19-8)は、口径13.4cm、器高5.1cmの高径指数38の稜椀タイプである。須恵器壊は、口径13.5cm、器高4.4cmの高径指数32で、底部は回転糸切だが径6cm代とやや大きい。時期的には、S T 74 Aとの重複や須恵器壊などから9世紀後半と考えられる。

#### S T 8 5 (第20図)

周溝のある長方形の住居

北区の南端中央部、74-75-22~23グリッドに位置する。ST85は、ST94、ST89A、ST90、ST100Cに切られる。遺存状況は、二重の周溝とカマド部のみが確認され、南西部をST89A、北東部をST94に大きく切られ、南側は道路路盤などによる削平のため既に破壊を受ける。周溝は、覆土の状況から住居床面に伴うものと考えられ、床は貼床されない。

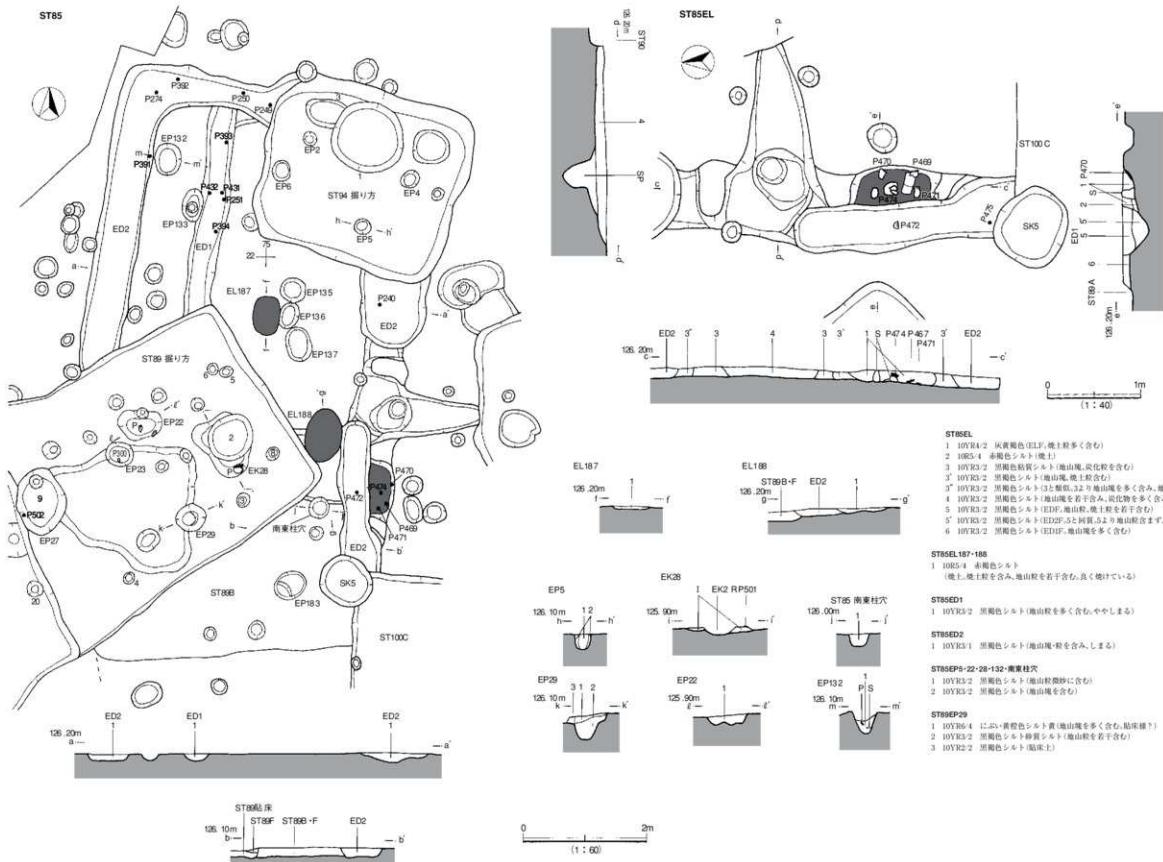
平面形は長方形で、外周のED2で南北約7.5m、東西約5.0m、内周のED1で南北約6.7m、東西約3.5mを測る。主軸方位は南北軸でN-12°-Eを測る。周溝は、北側でED1がED2に切られ、小形から大形への建て替えが推測された。両周溝は、南壁を除きほぼ全周し、幅46~66cm、断面形U字状を呈し、緩やかな立ち上がりで、確認面からの深さは約10cm前後である。

主柱穴は、小形のED1に伴うものは判然としないが、大形のED2には、北西角のEP132の他に、重複する竪穴住居の貼床下から、北東角のEP5(ST94貼床下)、南東角のEP、南西角のEP22・29・2(ST89A貼床下)が確認された。平面形は直径22~70cmの円形、不整梢円形で床面からの深さは16~38cmを測る。他にも小柱穴が不規則な分布で確認された。

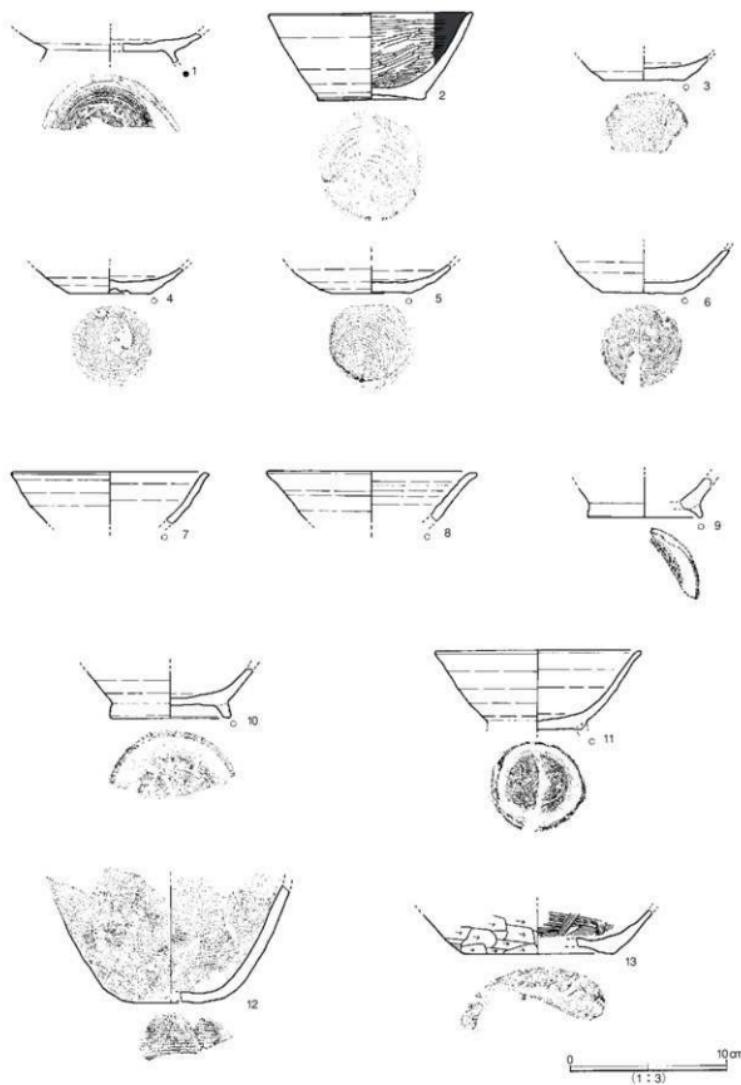
カマドは、東壁中央に設置され、明確な煙道はなく、袖幅は約170cmを測る。焼土の広がりは南北75cm×東西35cm以上で、西側をED2に切られる。他に住居内にSL187・188とした焼土造構が検出されたが、周溝との重複から新相で、ST85に伴うものかは不明である。

貯蔵穴としたEK2は、ST89Aの貼床下から検出され、径66cmの不整形を呈し、深さ12cmを測る。重複関係や規模からST85に伴う可能性が推測された。

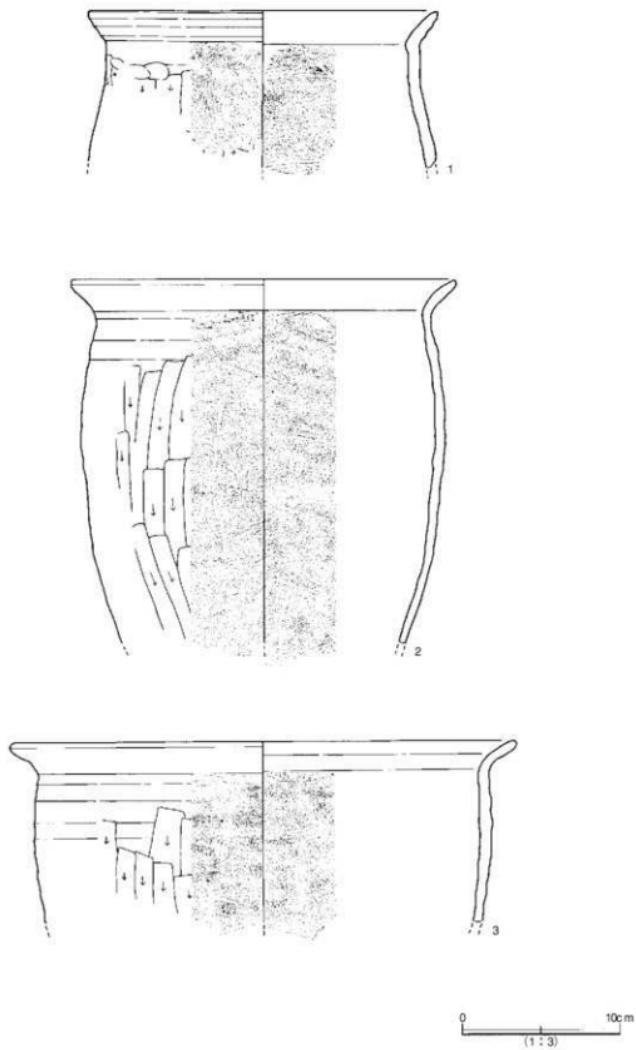
他に、カマドに北接して長さ約200cm、幅約50cmの長い張り出しがあり、先端はST90に切られ、周溝との境には径50cm程のピットを有する。当初、カマドの煙道などと考えていたが、覆土や床面に焼土や炭がほとんどなく、カマド以外の性格が推測された。



第20図 ST85遺構図



第21図 ST85遺物実測図(1)



第22図 ST85遺物実測図(2)

出土遺物は、ED 2 から RP240・249・250・274・391・392・472・474、ED1 から RP251・393・394・431・432、カマド周辺から RP469～471 が出土している。実測可能なものは、須恵器高台壺(21-1:[RP500])、土師器高台壺(21-2:[RP469])、赤焼土器壺(21-3:[RP431]-4:[RP432]-5-6:[RP472]-7:[RP475]-8:[RP474])、赤焼土器高台壺(21-9:[RP394]-10:[RP272]-11)、土師器壺(21-12-13:[RP469]-22-1-2:[RP469]-3:[471])である。

全体に赤焼土器が多く、カマドの一括資料では、口径13cm 前後(21-8)、底径5cm 弱(21-5)の赤焼土器壺片がある。土師器高台壺(21-2)は、高台を短く引き出す。壺は、内面ハケメ(22-1・2)、ロクロ調整(22-3)のものがあるが、両者とも体部上半部までケズリ調整を施し、口径が22～23cmの中形、29cmの大形品がある。他に、赤焼土器壺片が、新旧関係のある ED 1(22-3・4)と ED 2(22-6)から出土したが、底径は5cm前後的小径で、カマド資料と類似し、ED 1・2 に明確な時期差は認められない。両者とも時期的に判然としないが、9世紀前半頃としておく。

#### ST 86 (第23図)

北区南西端の73-22グリッドに位置する。ST86は、ST89B、ST89Aと重複(ST89A→ST89B→ST86)し、西側が調査区外に延びる。平面形は方形と推測され、東西約3.3m、南北約3.5m以上を測る。主軸方位は南北軸でN-3°-Eを測る。床面は平坦で貼床がされ、壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面から床面までの深さは約20cmである。柱穴は検出されなかった。

カマドは、東壁中央に設置される。煙道部はやや短く、煙道端から燃焼部は長さ約135cm、煙道幅約40cm、長さ30cm大の河原石を配するカマド袖部の幅は約140cmを測る。焼土の広がりは径66cmを測る。

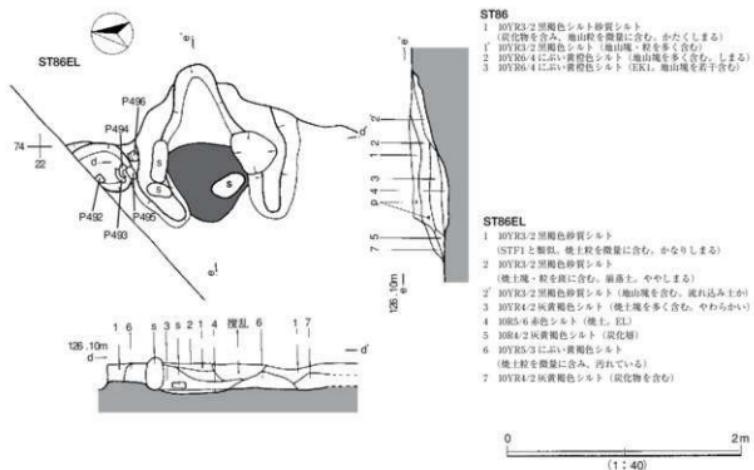
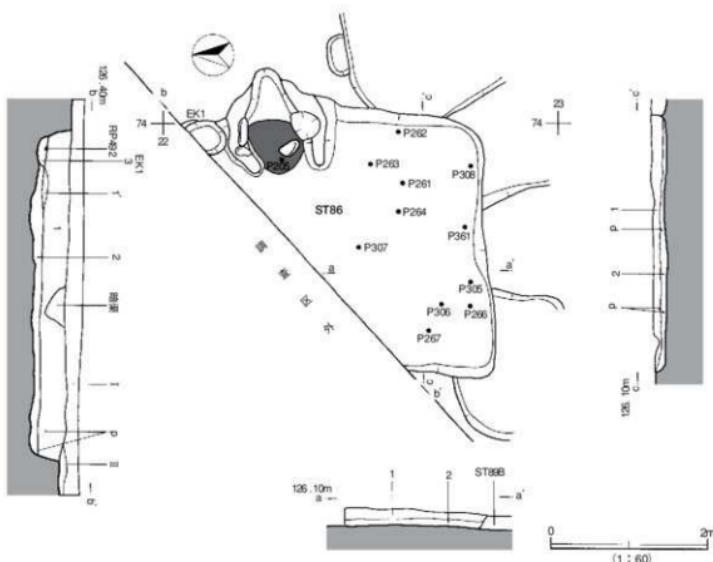
河原石をカマド袖部に配置

貯蔵穴(EK 1)は、カマド北側に隣接し、北側が調査区外に延びる。平面形は、楕円形で東西40cm南北50cm以上を測る。床面からの深さは約15cmで、遺物がまとまって出土した。

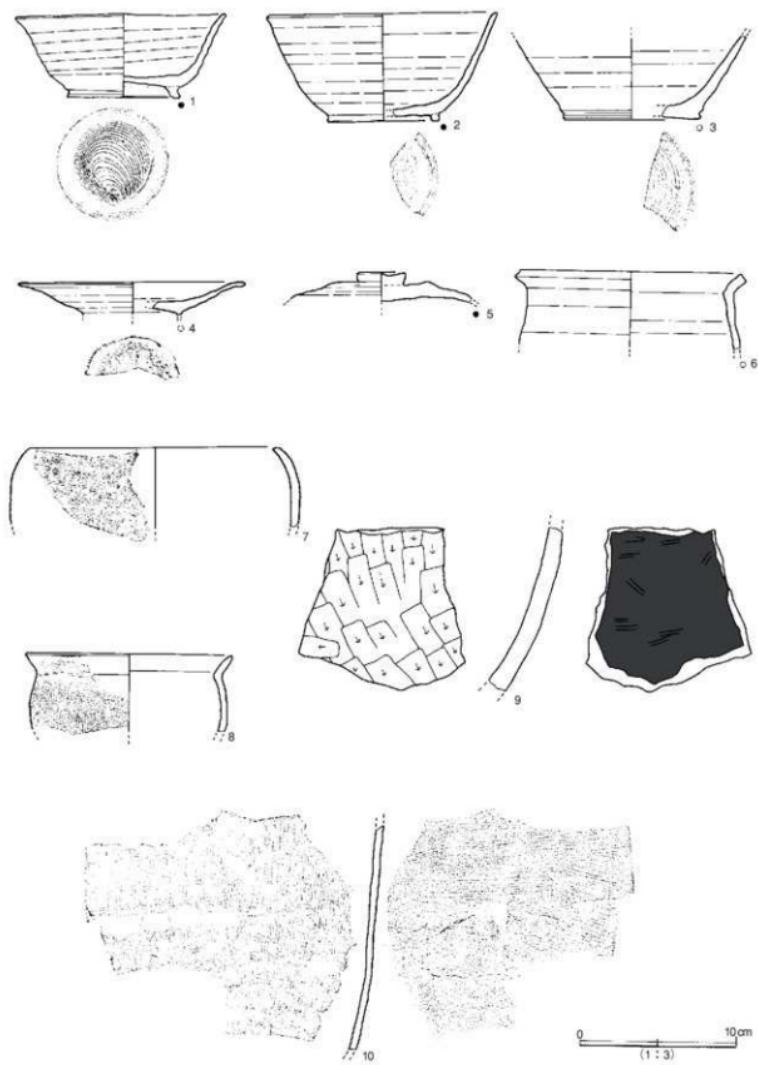
出土遺物は、覆土や床面、カマド、貯蔵穴などから RP261～264・266・267・305～308・361・494・495が出土する。実測図は、須恵器高台付壺(24-1:[RP493・494]・2:[RP495])、赤焼土器高台付壺(24-3:[RP305])、赤焼土器皿(24-4:[RP264])、須恵器蓋(24-5:[RP262])、赤焼土器壺(24-6:[RP308]、25-3:[RP261])、土師器鉢(24-7:[RP493]・9)、土師器壺(24-8-10、25-1:[RP209・265]・2:[RP493・512]・4)、須恵器小壺(25-5)、刀子(25-6)である。

貯蔵穴 EK 1 からは、須恵器高台壺(24-1・2)が出土し、24-1は口径13.3cm、器高5.3cmの高径指数3.98の中形、24-2は口径14.4cm、器高6.8cmの高径指数47.2の大形品がある。24-7は口縁部内湾する金属器模倣の土師器鉢で、内面は摩滅が著しいがミガキが施されるようである。土師器壺(25-2)は、口縁部欠損するが器高32cm以上を測り、内外面ハケメ調整で、底部は網代痕が残る。カマド周辺の土師器壺(25-1・4)も内外面ハケメ調整で、外面は縦位のハケメ後に、部分的に横位のハケメを単発的に施す。25-4も底部に網代痕がある。他に床面から体部中位の沈線下に刻み目を持つ須恵器の小壺(25-4)などがある。

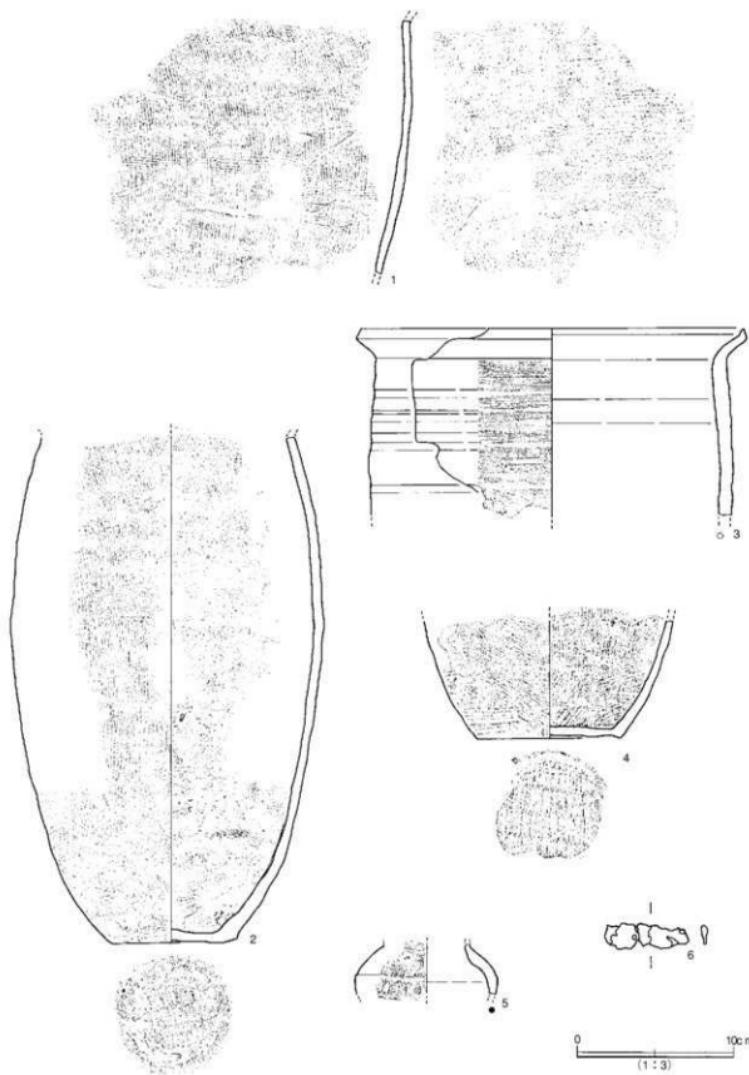
覆土には、赤焼土器の高台壺・皿(24-3・4)や壺(24-6・25-3)などがあり、やや新相と考えられる。24-3は体部下端を短く引き出し高台とする。24-4は口縁部が長く外反する高台皿で、施釉陶器模倣であろう。壺は口径14cm前後(24-6)の中形品と口径25cm前後(25-3)の大形品がある。時期は、貯蔵穴や床面資料から9世紀中葉～後半頃である。



第23図 ST86造構図



第24図 STB6遺物実測図(1)



第25図 ST86遺物実測図(2)

## ST89A(第26図)

北区南西端の73～75・22～23グリッドに位置する。ST89 Aは、ST85、ST89 Bと重複(新旧関係ST85→ST89B→ST89 A)する。平面形は長方形で、南北約3.6m、東西約5.0mを測る。東西軸でN-60°-Eを測る。床面は、平坦で貼床され、壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面から床面までの深さは約20cmである。

主柱穴は4基(EP 1・3・4・9)と判断され、平面形は直径約16～26cmの円形で、床面からの深さは22～32cmを測る。他にも小ピットが確認されたが、支柱穴等と推測される。

カマドは、北壁中央のやや西寄りに設置される。一般的な壁際にあるカマドと異なり、住居外の煙道がほとんど認められない。北壁に直交して住居内に袖が約100cm突出し、袖幅は約76cmを測り、袖の内側(煙道部)の幅は約28cmである。袖内部の北壁から35cmの部分に、径東西26cm×南北40cmの焼土の広がりが認められた。

更に西側袖の先端部南側には、径約45cmの焼土があり、袖との重複から、袖構築以前のカマドに係る焼土と判断された。

貯蔵穴(EK 2)は、東壁中央付近の床面に、床面東端付近に径70cm前後、床面からの深さ20cmのものが検出され、赤焼土器窓(RP299)が埋設される。

出土遺物は、床面などからRP234・279～281・285～289・291～293・295・297・410・411・454・487、RQ412、カマド周辺からRP278・282・283・290・294・491、EK2からRP299が出土する。実測可能なものは、須恵器窓(27-1:[RP491]・2:[RP290]・3:[RP411]・4、同高台付窓(27-5:[RP291])、赤焼土器窓(27-6)、同高台窓(27-7:[RP287])、須恵器蓋(27-8:[RP454])、赤焼土器蓋(27-9:[RP283])、赤焼土器窓(27-13:[RP289・295]、28-1:[RP288]-2:[RP293]・410)、29-1:[RP487]・3・4:[RP299])、同鉢(27-10:[RP280]・11・12、28-3:[RP278]・5:[RP45・501])、土師器窓(27-14:[RP279]、28-4:[RP410]・6:[RP502])、砥石(29-2:[RQ412])である。

床面資料などからは、須恵器窓(27-1～3)が、逆台形を呈し、口径13～14.6cm、器高4cm前後の高径指数26～29をとるもので、底径8.5～9cmとやや大きく、底部切り離しはへラ切りである。同高台窓(27-5)も同等の底径8.8cmで、底部は静止糸切でヘラケズリを施す。蓋は、口径15.5cmの須恵器蓋(27-8)や口径20cm以上の大振りの赤焼土器蓋(27-9)がある。

鉢・甕類では、赤焼土器が多く、鉢では口径10cm、器高6cm程度の小形品(27-13・29-3)と、口径21cm(27-5)や27cm(27-3)の大形品がある。甕では、口径20cm前後(27-13・28-1・29-3)のものがあり、28-1は体部中位から下半を縦位へラケズリする。

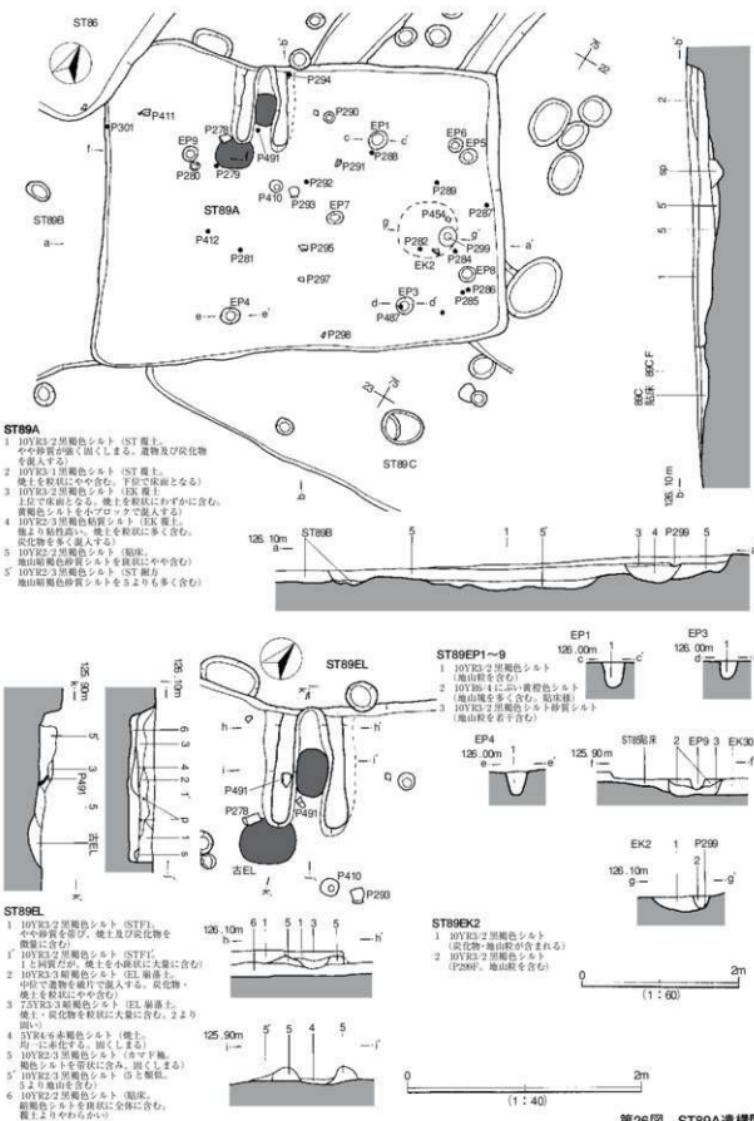
埋設土器の赤焼土器窓(29-4)も同等の形態と考えられ、器高24cm以上を測り、体部中位から下にヘラケズリを施す。

また、28-2は、赤焼土器窓で、口径・器高とも約15cmの中形品で、内外面ハケメ調整である。27-14は、土師器窓底部に木葉痕がある。他に赤焼土器窓(27-6)や同高台窓(27-7)なども出土するが覆土中で、後出の形態と考えられる。

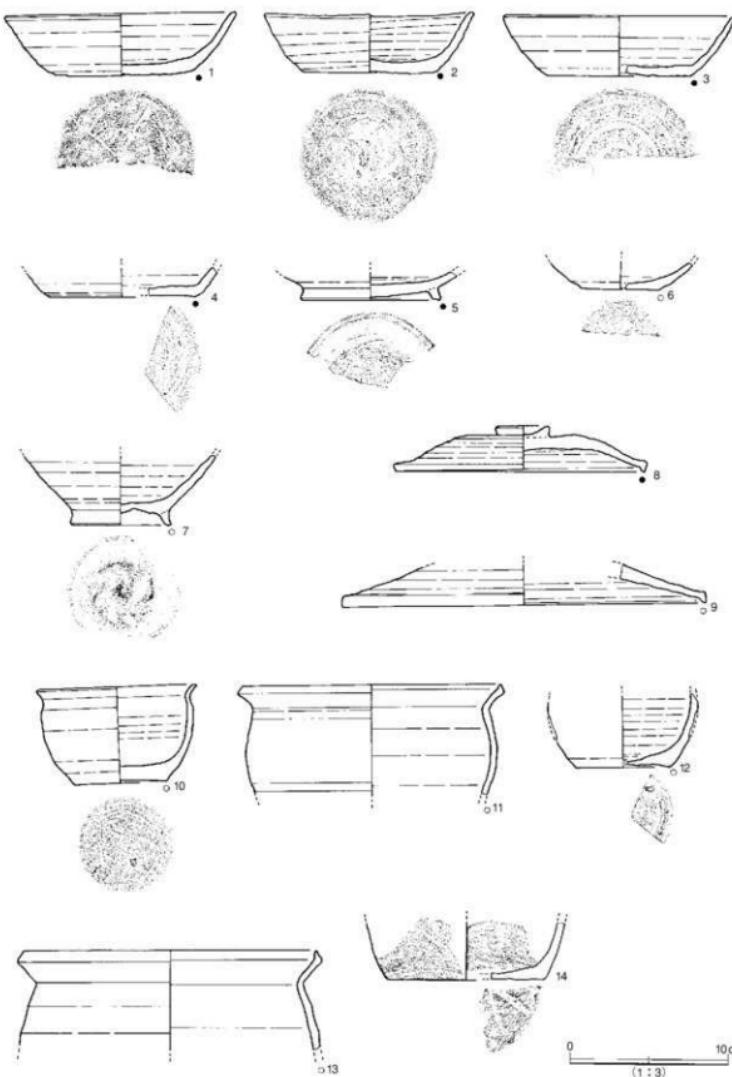
29-2は安山岩製の砥石で4面に磨り面がある。

時期的には、床面の須恵器窓類などから9世紀初頭～前葉頃であろう。

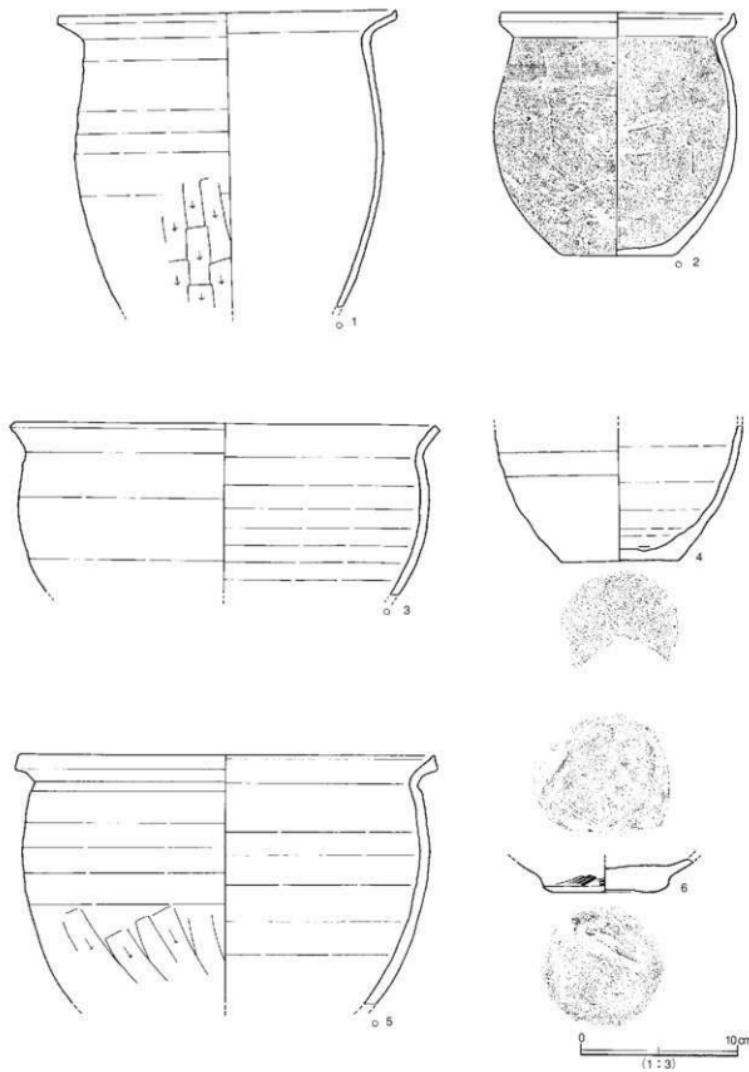
煙道のないカマド



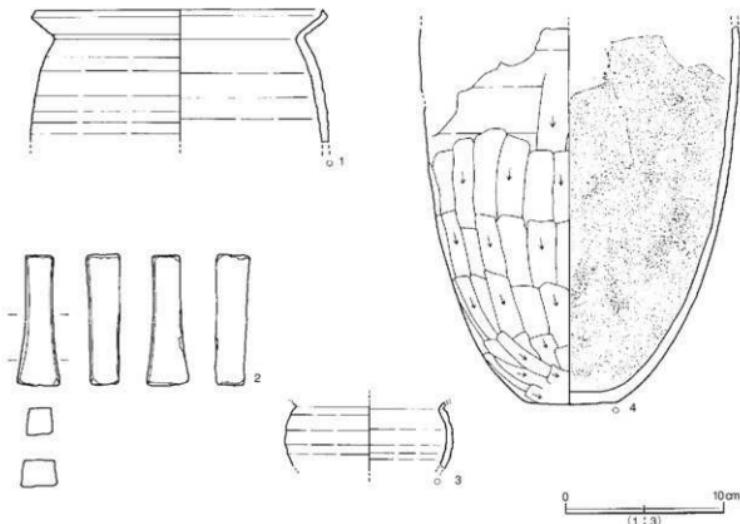
第26図 ST89A構造図



第27図 ST89A遺物実測図(1)



第28図 ST89A遺物実測図(2)



第29図 ST89A遺物実測図(3)

## ST89B (第30図)

北区南端の73-23グリッドに位置する。ST89Bは、ST89A、ST86と重複（新旧関係ST89B→ST89A→ST86）し、南側を現道路路盤に埋される。貼床部のみの検出で、幅70cmの周溝状の掘り方である。床面は既にはば削平を受けるようである。

平面形は方形で、南北約4.8m、東西約5.2mを測る。方位は東西軸でN-75°-Eを測る。掘り方の壁は緩やかに立ち上がる。確認面から掘り方底面までの深さは約14cmである。柱穴は小ピットを検出したが、明確な主柱穴は認められない。

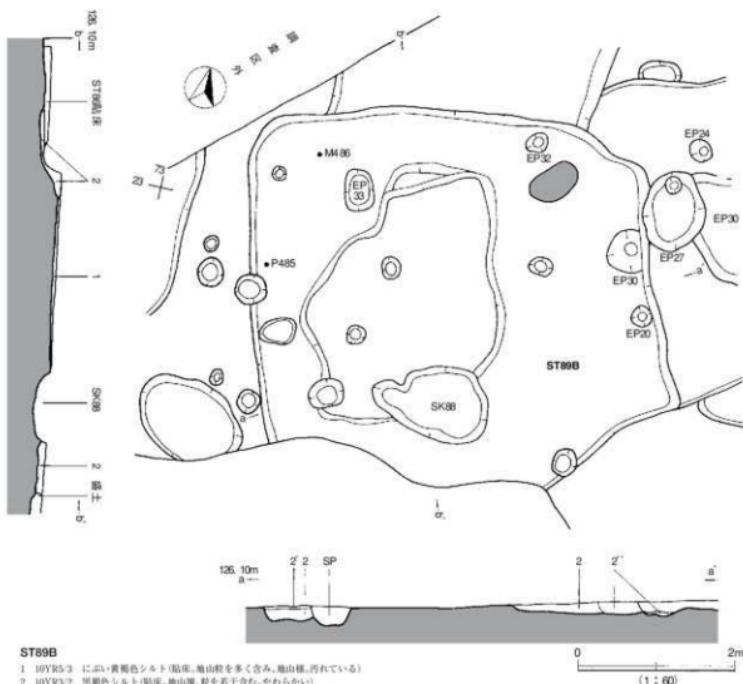
他に、北東角の底面からは、平面橢円径の直径約40×66cmの炭化層を検出した。

出土遺物は、床面からRP485・486が出土している。実測可能なものは、赤焼土器壺(31-1:[RP485])、刀子(31-2:[RP486])である。実測した赤焼土器壺(31-1)は、口径約21cmの大形品である。時期は重複関係などから8世紀末～9世紀初頭と考えられる。

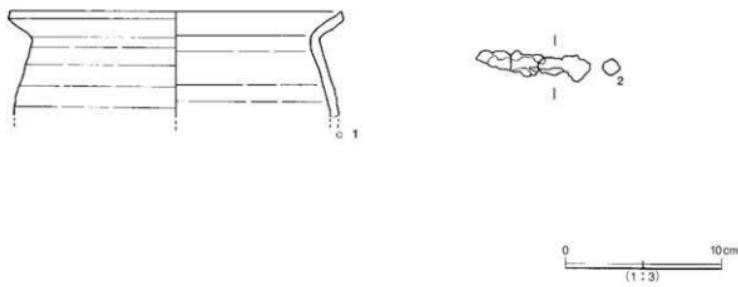
## ST89C (第32図)

北区南端の75-23グリッドに位置する。ST89Cは、ST85ED、ST89E、ST100に切られる。全体に北側の覆土や床面の遺存状況が良く、南側は道路路盤の搅乱により削平を受ける。平面形は方形を基調とし、南北約2.5m以上、東西約4.0m以上である。方位は東西軸でN-81°-Eを測る。床面は平坦で、貼床される。壁の立ち上がりは不明だが、確認面から床面までの深さは約10cmである。小ピットが2基(EP20・21)確認され、平面形は直径約20～50cmの形で床面からの深さは6cmを測る。床面北側に径55cm前後の焼土(EL)が確認される。

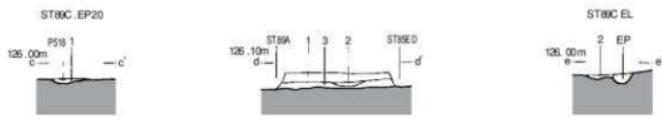
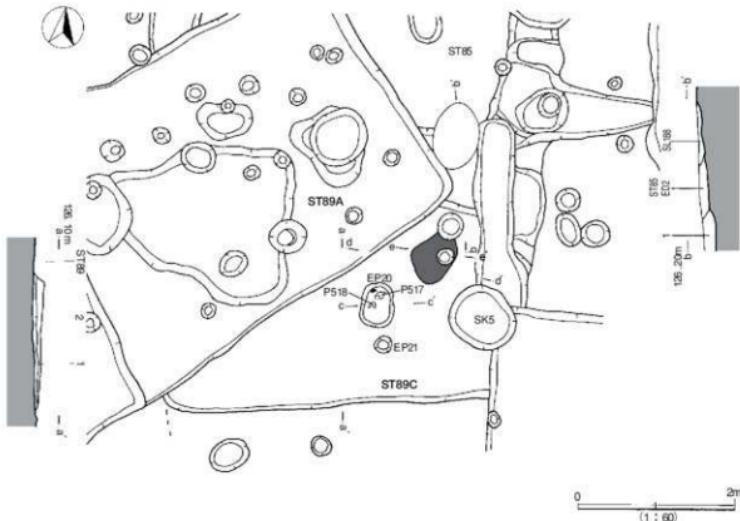
出土遺物は、床面からRP518が出土している。実測したものは、土師器壺(33-1:[RP517])である。遺物量が少なく時期は判然とせず、重複関係などからも8世紀後半代であろう。



第30図 ST89B遺構図

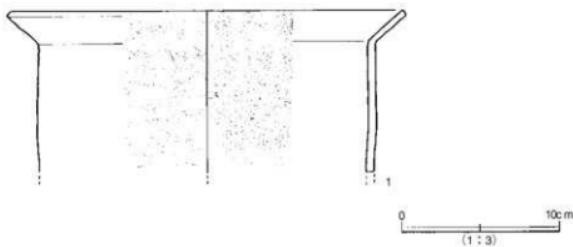


第31図 ST89B遺物実測図



第32図 ST89C造構図

1) 10YR 4/2-2 黄褐色色シルト (覆土、堆山塗を四層に含む。ややしまる)  
2) 10YR 5/0 - 木色・茶色 (壁上、堆山塗を微量に含む。  
3) 10YR 4/2-3 に近い黄褐色シルト (貼灰。堆山塗を含み、内れている。しまる)



第33図 ST89C遺物実測図

## S T 9 0 (第 34 図)

**大型住居** 北区の南端中央の 22 ~ 23 - 76 ~ 77 グリッドに位置する。ST90 は、ST85・ST100 A を切り、ST8・ST100 B・ST100 C に切られる。平面形はほぼ方形で、南北・東西とも約 6.6m を測る大型の住居である。主軸方位は南北軸で N - 9° - E を測る。床面は平坦で、貼床がなされており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面から床面までの深さは約 18cm である。

支柱穴は 4 基 (EP 2・4・20・21) と判断される。平面形は直径約 20 ~ 65cm の円形で、床面からの深さは 14 ~ 32cm を測る。他にも西壁中央付近に土器などを含む EP 5・7・8 や小ピットが複数確認されたが、位置や規模から支柱穴などと推測される。

カマドは北壁中央に設置されている。煙道部はやや長い張り出しで、煙道先端から燃焼部の全長約 147cm、煙道幅約 60cm、袖幅は約 110cm を測る。焼土の広がりは径 60cm 程である。他に床面精査の過程で、東壁中央に径 60 ~ 74cm、南壁東寄りに径 68 ~ 82cm の焼土が検出され、古い時期のカマドの痕跡と考えられた。

出土遺物は、覆土や床面、貼床などからは RP206・310 ~ 313・317 ~ 320・325・328・329・331 ~ 349・429・430・473・498・499・510・514・516、RM327、RP350 ~ 352・355 ~ 359・366・426・427・438・476、カマド及び周辺からは RP328・329 が出土する。

実測図は、須恵器壺 (35 - 1:[RP347・500]・2:[RP504]・3:[RP514]・4:[RP510]・5・12:[RP346])、須恵器高台壺 (35 - 6:[RP359]・7:[RP337])、赤焼土器壺 (35 - 8:[RP438]・9:[RP369]・10:[RP476]・11:[RP429]・13)、土師器壺 (35 - 14:[RP427]・15、36 - 1・2:[RP357])、須恵器双耳壺 (35 - 16)、須恵器甕 (36 - 3:[RP358])、須恵器鉢 (36 - 4:[RP338])、土師器甕 (36 - 5:[RP352]・37 - 2:[RP498・516])、土師器鉢 (36 - 6:[RP476])、須恵器平瓶 (36 - 7:[RP499])、須恵器壺 (37 - 1:[RP345])、刀子 (37 - 3:[RM353])、紡錘車 (37 - 4:[RM366]) である。

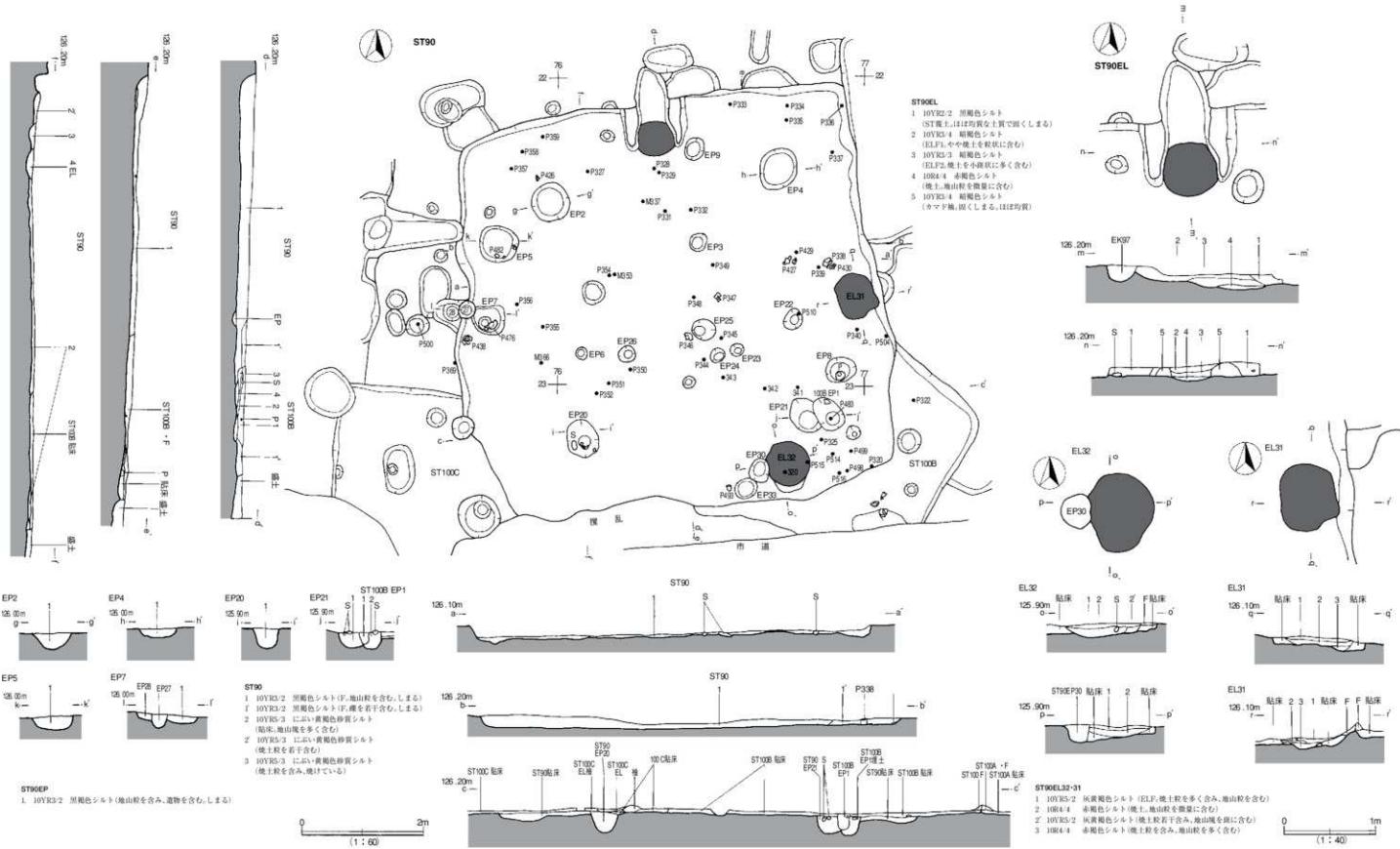
覆土中の資料が大半で、全体に古~新相の時期幅がある。床面及び床面直上の資料は少ない。床面や柱穴などの供器盤は、須恵器壺 (35 - 1) が緩やかな逆台形を呈し、口径 13.4cm、器高 3.5cm の高径指数 26 と低く、底部切り離しもヘラ切りだが、底径は 7cm とやや小径化する。柱穴出土の須恵器壺 (35 - 4) は、口径約 13cm、器高 3.9cm の高径指数 30 をとり、底部 6.7cm で回転系切りもみえる。赤焼土器壺 (35 - 8・10) は、碗状を呈し、口径約 13cm、器高 4.5 ~ 4.9cm で、高径指数は 35 ~ 37 である。底部は 6cm 前後の回転系切りである。土師器壺 (35 - 14・36 - 2) は、国分寺下層式期の新相の無段平底である。35 - 14 は口径 12cm、器高 5cm 前後の高径指数 42 で、外面中位~下半をヘラケズリする。36 - 2 は外面下端をヘラケズリする。

甕は、土師器甕の口径約 16cm の口縁部短く外反する 36 - 5 や長胴形の 37 - 2 があり、両者内外面ハケメ調整である。大形の須恵器甕片 (36 - 3) は外面平行タタキ、内面同心円状アテである。また、鉄製の長さ 13cm の刀子 (37 - 3)、長さ 23cm の紡錘車 (37 - 4) がある。

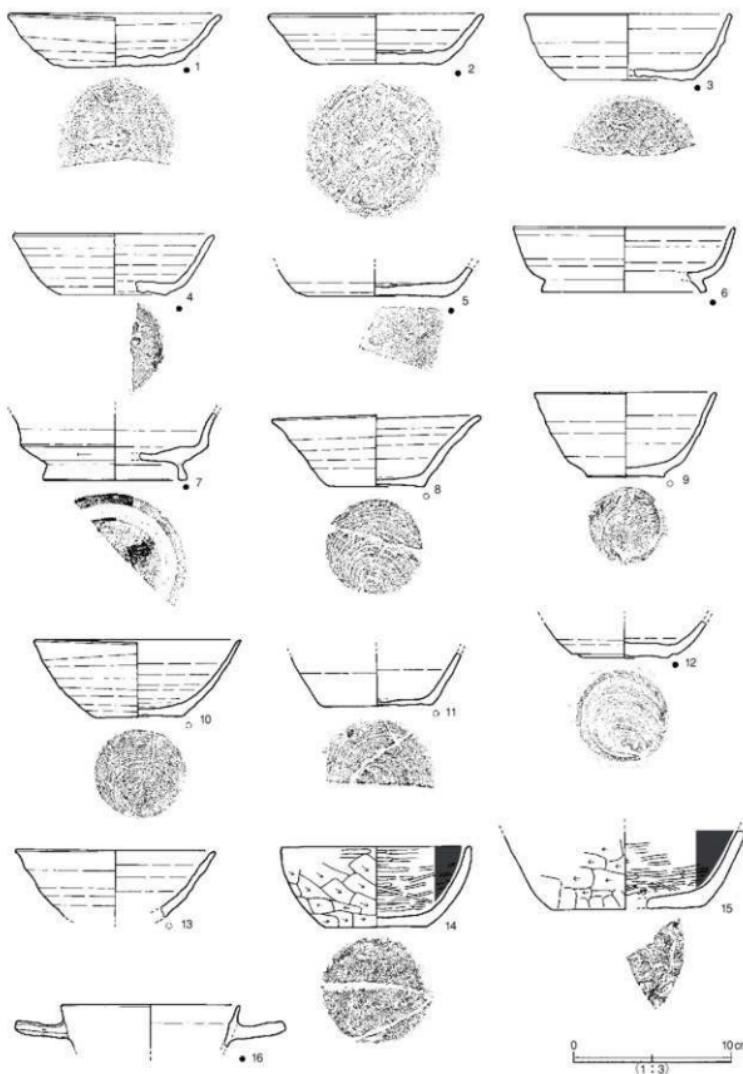
貼床中では、須恵器壺 (35 - 3) は、口径 13cm、器高 4.2cm の高径指数 32 で、底径約 8cm 大のヘラ切りがある。須恵器平瓶 (36 - 7) は、器高 8cm 以上で体部最大径約 13cm を測る。体部上半を横位の平行沈線で 3 段に区画し、中に緻密な櫛描波状文を廻らせる。

他に、口径約 11cm の須恵器双耳壺 (35 - 16)、底径 9cm 大の大振りな土師器壺 (35 - 15)、外面細密なハケメで内面ミガキの土師器甕 (36 - 5) などが覆土中にある。

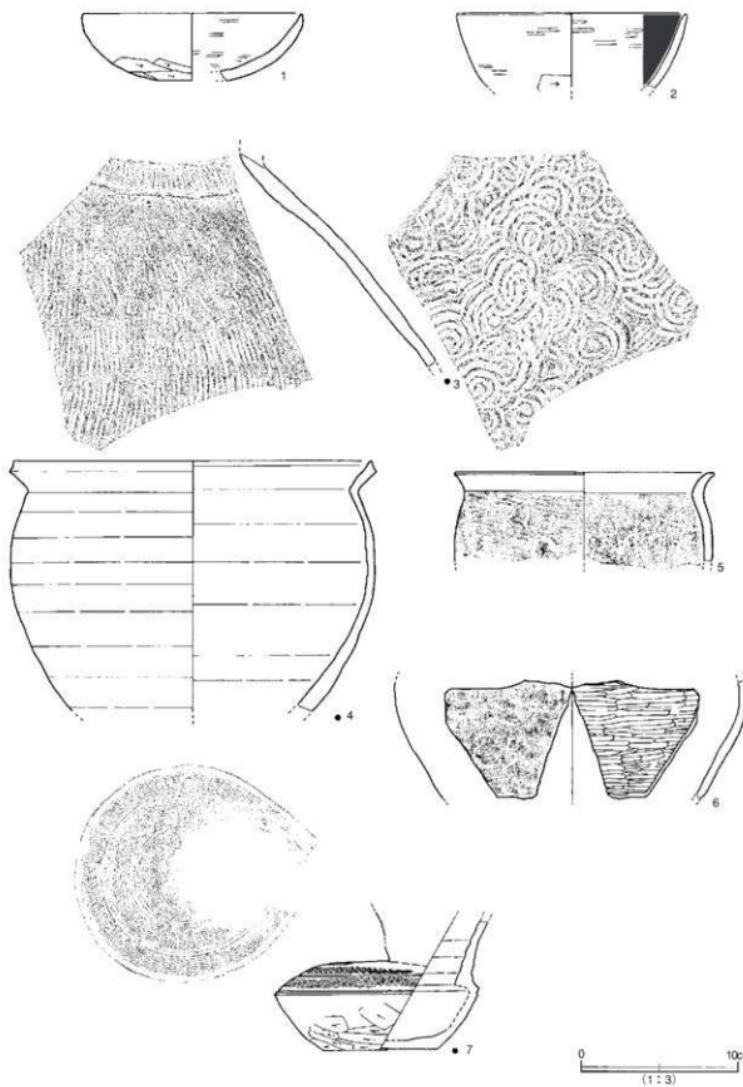
時期はカマドの変遷からも時期幅があり、供器盤から 8 世紀末~9 世紀中葉と捉える。



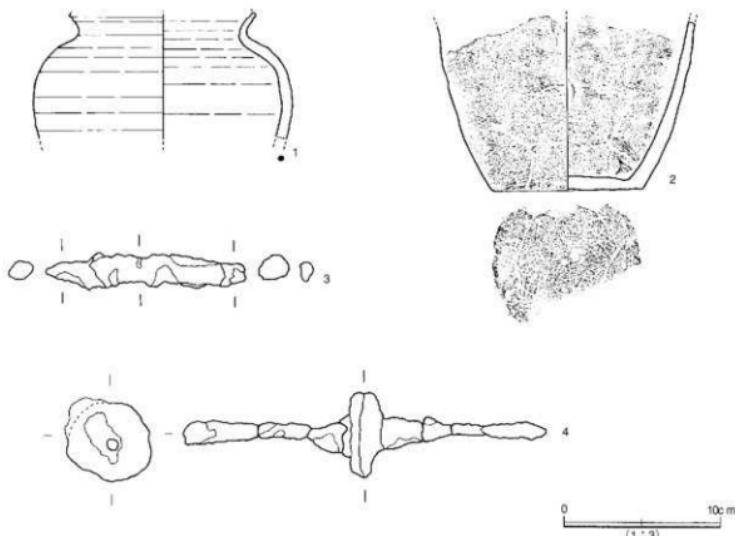
第34図 ST90構造図



第35図 ST90遺物実測図(1)



第36図 ST90遺物実測図(2)



第37図 ST90遺物実測図(3)

## S T 9 4 (第38図)

北区南半中央の75-21グリッドに位置する。ST94はST85EDを切る。平面形は方形で、東西約3.2m、南北約2.8mを測る小型の住居である。主軸方位は東西軸でN-70°-Eを測る。 小型住居床面は平坦で、壁はなだらかに傾斜している。確認面から床面までの深さは約20cmである。

柱穴はEP 2~4・6などが認められた。平面形は、直径約21~56cmの円形で、床面からの深さは12~21cmを測るが、小規模な形状などから明確な主柱穴かは不明である。

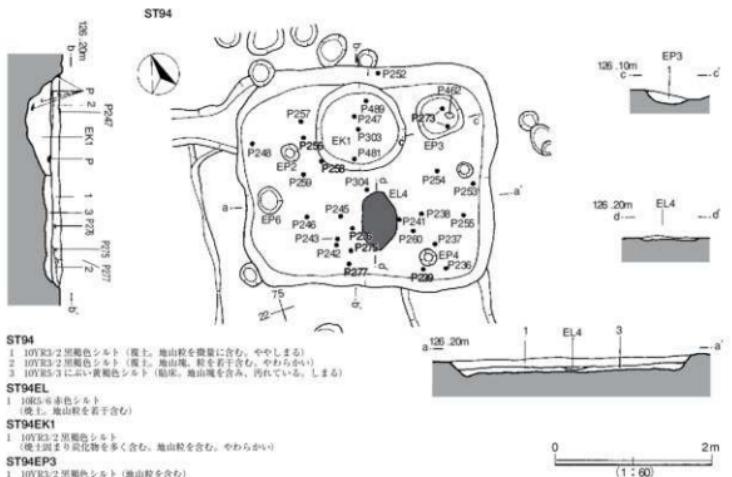
カマドは検出されなかったが、床面中央のやや南側に径東西44×南北74cmの焼土がある。

貯蔵穴(EK1)は、北壁中央沿いに直径約112cmの円形で、床面からの深さ30cmを測る。

出土遺物は、覆土やEK・EPなどからRP236~239・241~243・245~248・252~260・出土遺物多い273・275~277・303・304・462・489が出土している。

実測可能なものは、須恵器壺(39-1:[RP246]・2:[RP304])、須恵器高台壺(39-3:[RP242])、赤焼土器壺(39-4:[RP255]・5・6:[RP238]・7:[RP253]・10:[RP481]・11:[RP303・489])、赤焼土器高台壺(39-8:[RP255・273])、土師器高台壺(39-9:[RP462])、土師器壺(40-1:[RP239]・2:[RP236・239]・3・4:[RP275])である。

主に覆土の資料が多く、底部がへラ切で古相の須恵器壺(39-1)なども認められるが、底部回転系切で底径が5cmほどの小径である須恵器壺(39-2)や、赤焼土器壺が主体の時期と考えられる。赤焼土器壺は、口径12~13cm弱、器高が3.6~4.2cmで、高径指数26~27の身の浅いタイプ(39-6・11)と、高径指数が30~38の身がやや深めのタイプ(39-4・5・10)がある。



第38図 ST94遺構図

底部は、全て回転系切離しで、底径は5cm代と小径である。これら赤焼土器壺類には、39 - 8・10の重みが著しいものもある。

EP3からは内外面黒色処理された両黒の土師器高台壺(39-9)があり、口径約12cm、器高5.3cmと小振りで、高径指数44前後を測る。壺では、内外面ハケメの土師器壺の大(口径約28cm:40-1)、小(40-3)と、外面口クロ成形後に体部中位までケズリを施す赤焼土器の大形の壺(口径約22cm:40-2・4)がある。

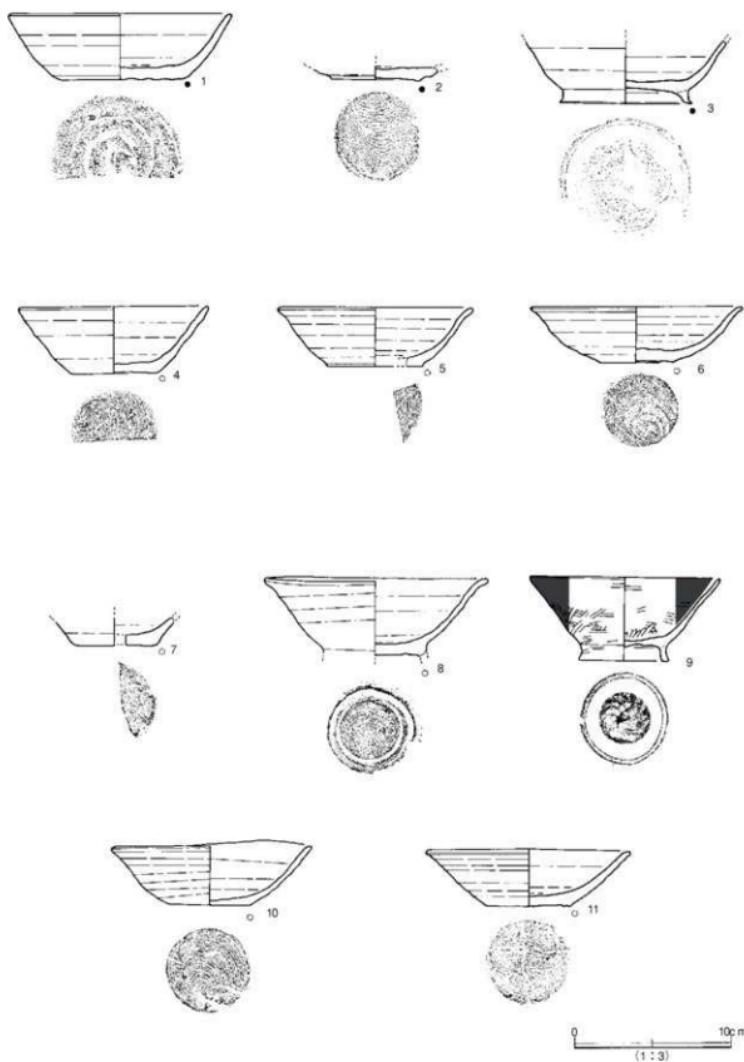
時期的には、赤焼土器の身の浅い供器が主体を占める10世紀中～後葉とする。

#### S T 1 0 0 A (第41図)

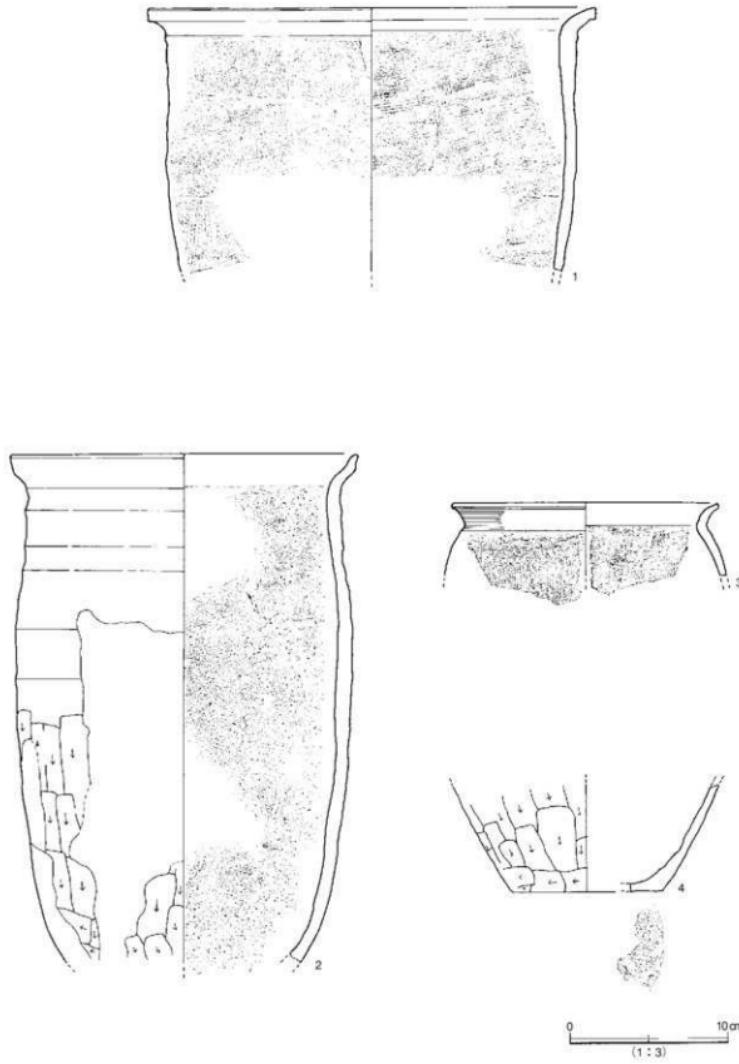
北区南東端の77-22～23グリッドに位置する。東側は調査区外に延び、西側をST90・100B、北側をST8に切られる。南側の壁のラインが直線的で、平面形は長方形と考えられ、南北3.7m×東西4.2m以上を測る。主軸方位は東西軸でN-61°-Eを測る。床面は平坦で貼床がなされており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面から床面までの深さは約8cmである。主柱穴やカマドは検出されない。出土遺物もない。住居の重複関係から時期の上限は9世紀代である。

#### S T 1 0 0 B (第42図)

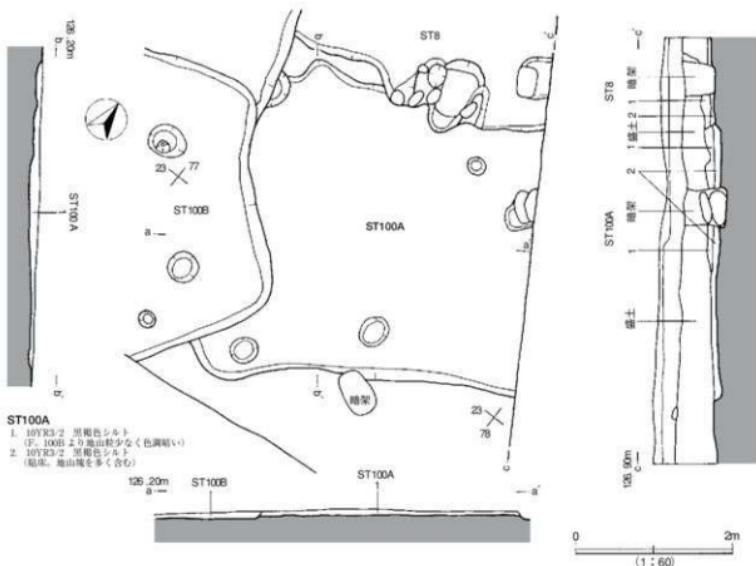
北区南端中央部の76-77-22～23グリッドに位置する。南側は調査区外で、北側でST90、東側でST100Aを切る。全体に平面形は、不整径だが方形を基調とし、南北約4.1m×東西約5.0mを測る。主軸方位は東西軸でN-54°-Eを測る。床面は平坦で、貼床である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面から床面までの深さは約8cmである。EP 1・2・4・8・30の柱穴を検出したが、EP 1・8を除き全体に小規模である。平面形は直径約35～60cmの円形で、床面からの深さは26～41cmを測る。



第39図 ST94遺物実測図(1)



第40図 ST94遺物実測図(2)



第41図 ST100A遺構図

カマドは未検出だが、南壁中央付近の床面に梢円形の径88cm前後の炭化層が検出され、周辺からRP321・323・324が出土した。他に北側床面からRP428が出土する。

## 小判型の炭化層

実測可能なものは、須恵器壺(43-1:[RP498]・2:[RP483])、須恵器高台壺(43-3)、赤焼土器壺(43-4:[RP428]・5:[RP428])、赤焼土器高台壺(43-6:[RP324])、土師器壺(43-7)、土師器壺(43-8:[RP473]・10:[RP317])、赤焼土器壺(43-9・11)である。

全体に床面からは、赤焼土器が多く出土し、壺類は口径14~15cm前後で、器高4.9~5.5cmの高径指数35~37(43-4・5)のもので、歪みが著しい。43-6は同高台壺で、器高が7.1cmと高く、深身の法量が大きい、高径指数は68である。他の供膳器では、須恵器壺(43-1・2)があり、底径が7cm前後とやや大きく逆台形を呈する器形である。底部切り離しは、回転糸切(43-1:高径指数28)とヘラ切(43-2)に分かれる。

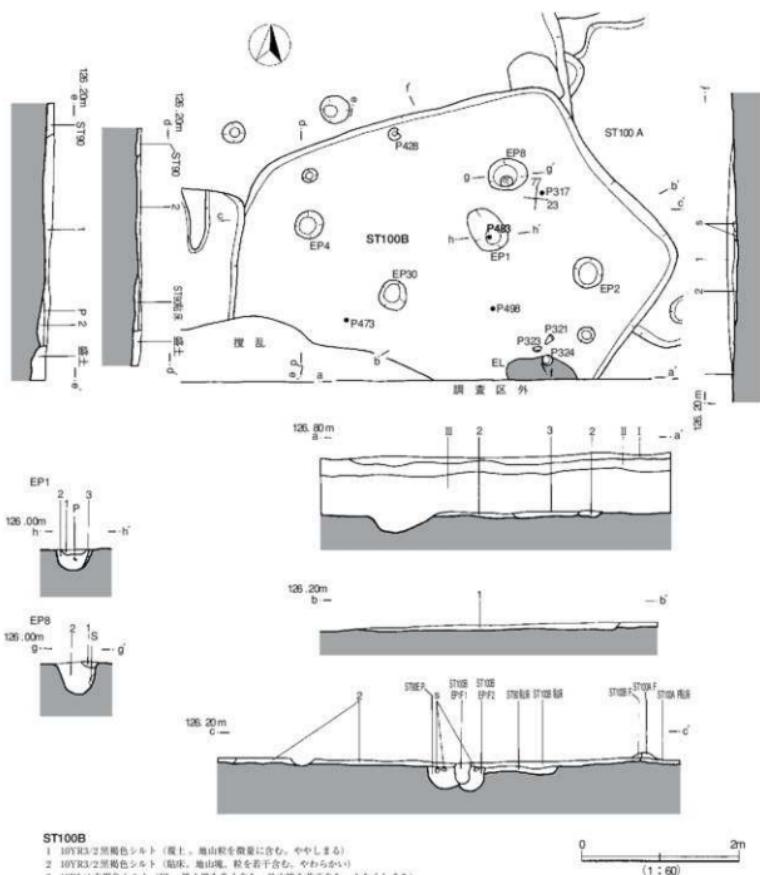
壺類では、赤焼土器壺(43-9・11)と土師器壺(43-10)がある。赤焼土器壺では、口径が11cm代の小形品(43-11)と口径約12cm代の中形品(43-9)がある。

時期的には床面の土器などから9世紀末~10世紀初頭頃と推定される。

## S T 1 0 0 C (第44図)

北区75-23グリッドに位置する。南側は現道路盤の搅乱で削平され、調査区外に延びる。北側でST90、東側でST100B、西側でST89Cを切り、北西角がSK5に切られる。

平面形は、方形を基調とし、東西約5m、南北4m以上を測る。主軸方位は東西軸でN-89°-Eを測る。床面は平坦で貼床がなされており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面から床面

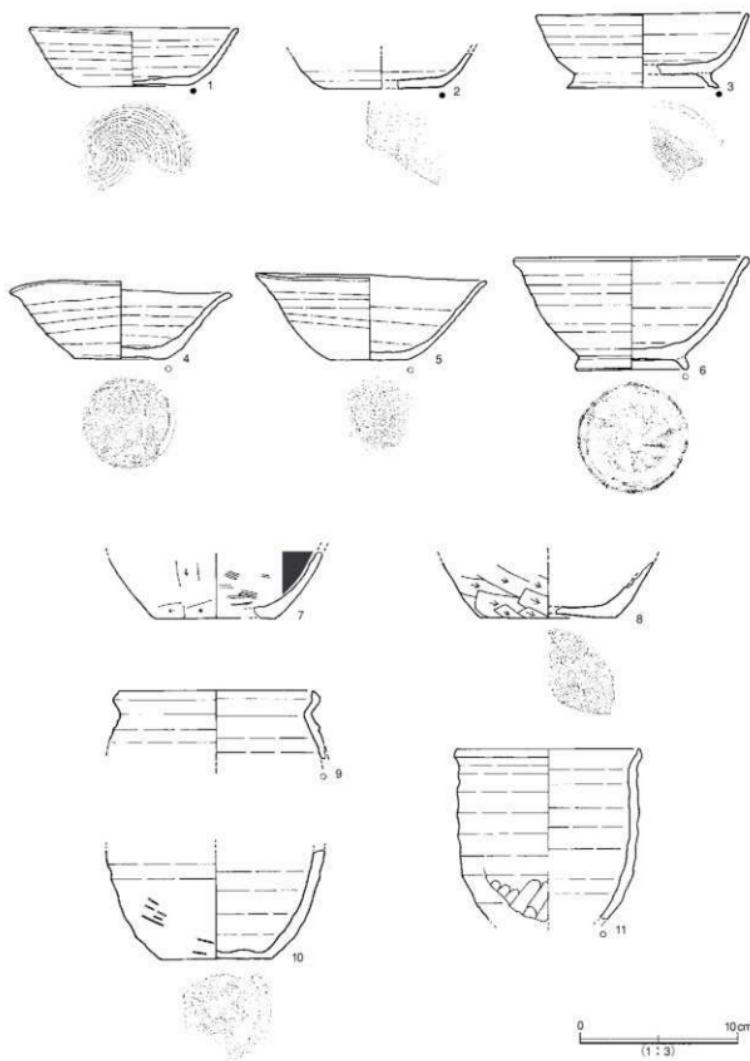
**ST100B**

- 1 10YR3-2 黒褐色シルト（覆土。地山塊を微量に含む。ややしまる）
- 2 10YR3-2 黒褐色シルト（貼床、地山塊。粒を若干含む。やわらかい）
- 3 10R5/4 赤褐色シルト（II。地土塊を多く含み、地山塊を若干含む。かたくしまる）

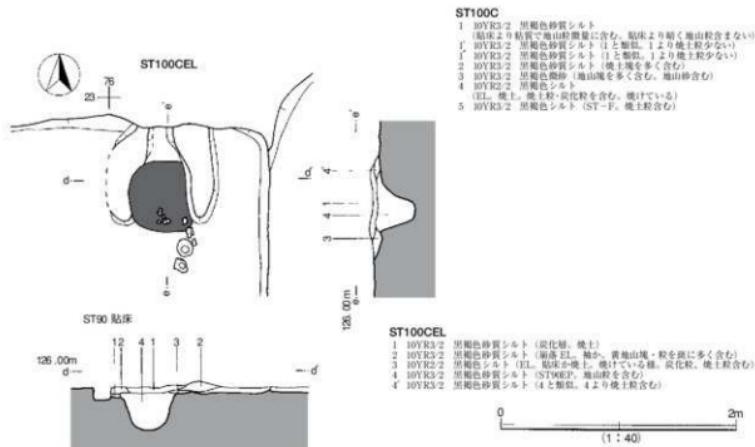
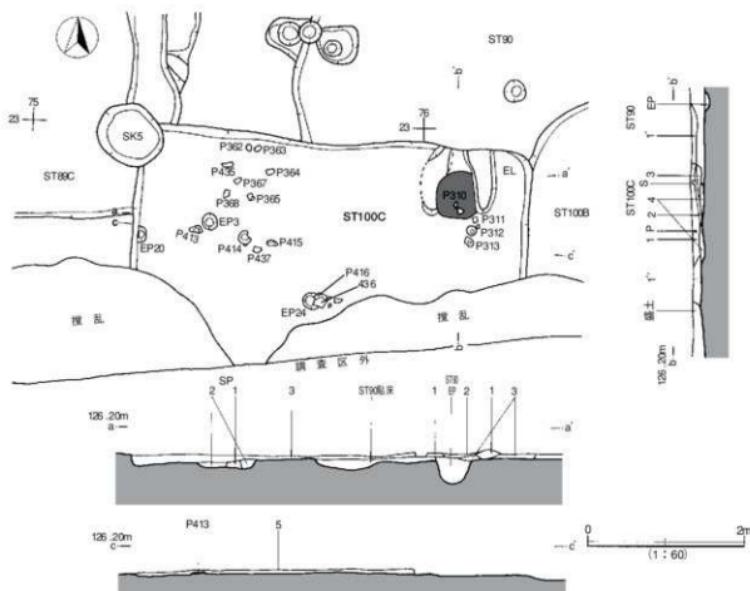
**ST100B-EP**

- 1 10YR3-2 黒褐色シルト（地山塊を若干含む）
- 2 10YR3-2 黑褐色シルト（地山塊を微量に含む。しまる）
- 3 10YR3-2 黑褐色シルト（地山塊を多く含む）

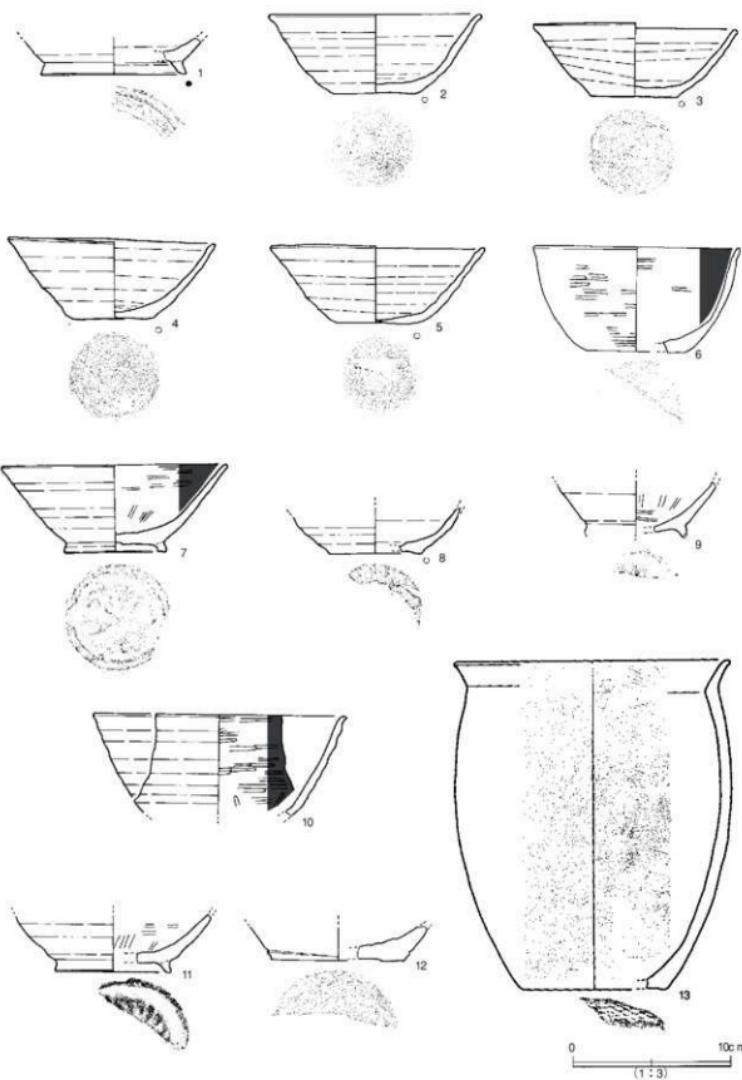
第42図 ST100B造構図



第43図 ST100B遺物実測図



第44図 ST100C構造図



第45図 ST100C遺物実測図(1)

までの深さは約5cmである。柱穴はEP 3・20・24が確認され、円形で径約20cm前後を測る。カマドが北壁東端に設置される。明確な煙道部は認められず、燃焼部は全長約90cm、袖幅は約95cmを測る。焼土の広がりは径60～49cmを測る。なお、焼土下にはST90の柱穴がある。

**カマドや床面から出土する遺物** 出土遺物は、床面からはRP362～368・413～416・436・437、カマド及び周辺からはRP250・310～313が出土する。

実測可能なものは、須恵器高台壺(45-1)、赤焼土器壺(45-2:[RP313・476]・3:[RP310]・4:[RP414]・5:[RP312]・8:[RP435])、土師器壺(45-6・10:[RP368])、土師器高台壺(45-7:[RP416]・9:[RP365]・11:[RP437])、土師器甕(45-12:[RP415]・13:[RP218・311・320])である。

カマド周辺や床面からは、赤焼土器や黒色土師器の壺類を中心に出土した。カマド周辺の赤焼土器壺(45-2・3・5・8)は、口径約13cm前後、器高5cm前後、高径指数35～38の楕状を呈する歪みがあるもので、底径は主に5cm前後を測る。土師器では、内面黒色処理の高台壺が多く、口径が15cm強の法量が大きいタイプ(45-10)と、口径が14cm代の法量が小さいタイプ(45-7:高径指数38)がある。高台は菊花状のナデツケを施すものが多い(45-7・9・11)。

甕類(45-13)では、カマド周辺より口径約17cm、器高約21cm、底径9cm代で、底部は網代痕がある。他にやや厚手で底径が8.5cmとやや大きい土師器鉢(45-12)なども出土する。

柱穴などからは、全体に古相の土器群が出土し、高台径が9cm代のやや大形の須恵器高台壺(45-1)や、無台平底の楕状の土師器壺(45-6:高径指数50)などがある。

時期的には、床面やカマド周辺の赤焼土器群から10世紀初頭～前葉の所産であろう。

#### S T 1 5 9 (第46図)

北区北端の80-8グリッドに位置し、北東角が調査区外に延びる。平面形は方形で、南北約3.7m、東西約3.5mを測る。主軸方位は南北軸でN-2°-Eを測る。床面は平坦で、貼床がなされ、壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面から床面までの深さは約10cmである。明確な柱穴は検出されなかった。

カマドが東壁南端に設置されている。煙道部は短い張り出し状で、煙道端から燃焼部の長さは約85cm、煙道幅は約30cm、袖幅は約94cmを測る。焼土の広がりは径40～47cmを測る。

**火山灰を含むカマド** カマドの覆土は、暗褐色シルトを主とし、火山灰塊や粒を含む。

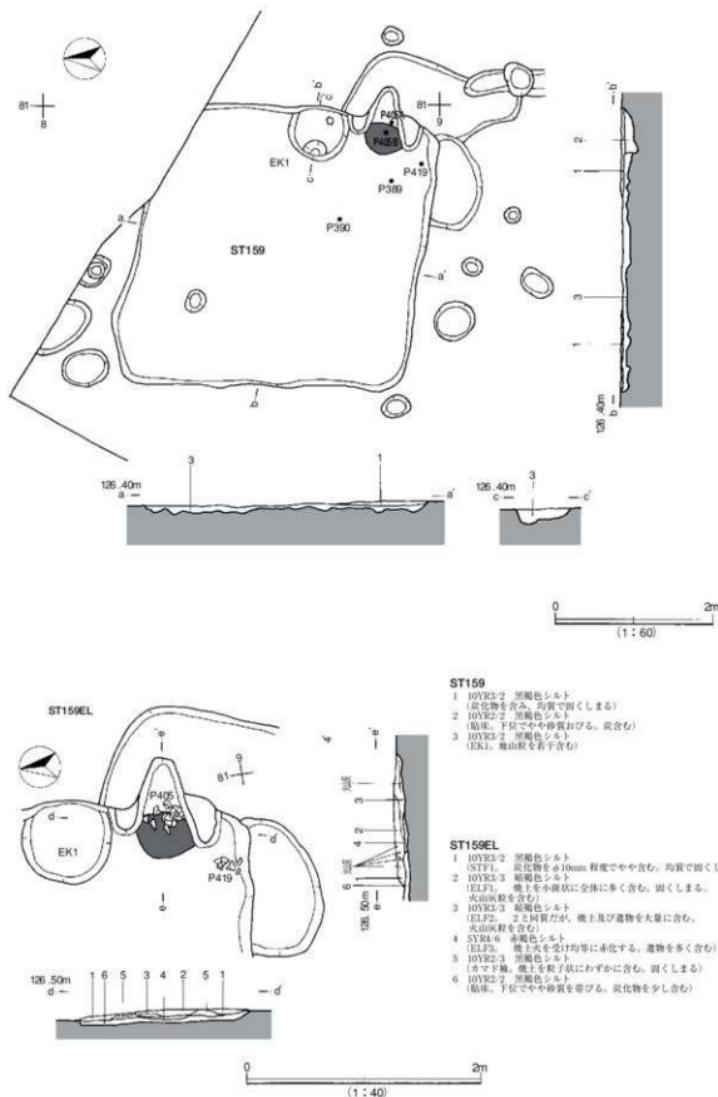
カマド北側に隣接して貯蔵穴としたEK 1がある。直径約70cmの円形で、床面からの深さは18cmを測り、土師器甕片が出土した。

出土遺物は、床面からはRP389・390、カマド内及び周辺からはRP405A・B・419が出土している。実測したものは、赤焼土器壺(47-1:[RP405]・2:[RP419]・3:[RP389・390]・4:[RP405])、土師器高台付壺(47-5:[RP405])、土師器甕(47-6)である。

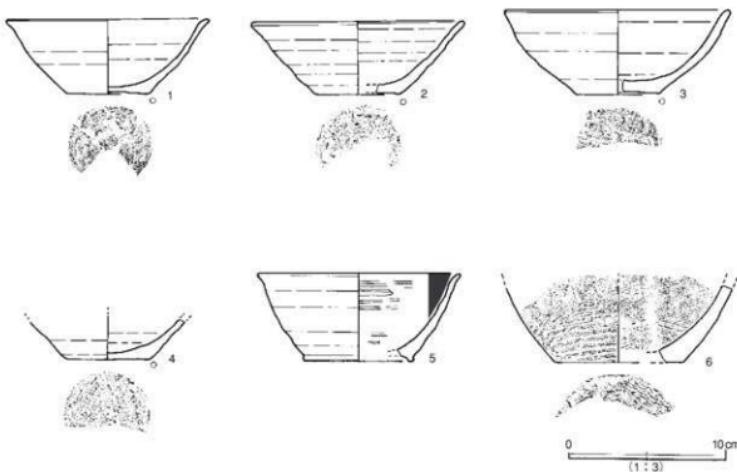
カマド内や周辺から赤焼土器壺が主に出土した。口径13～14cm、器高4.1～5.3cmの高径指数31(47-1)・34(47-2)・38(47-3)のものがある。底径は約5.3cmにまとまり、全て回転糸切である。他に土師器高台壺(47-5)も出土し、口径約13cm、器高5.6cmの高径指数44で、内面横ミガキされるが、黒色処理が剥落する。高台は短く、底径は6.9cmである。

貯蔵穴内の土師器甕は内外面ハケメ調整で、底部は網代痕が残る。

時期的には、赤焼土器の供膳形態や火山灰などから10世紀初頭～前葉頃の所産であろう。



第46図 ST159造構図



第47図 ST159遺物実測図

## ST12 (第48図)

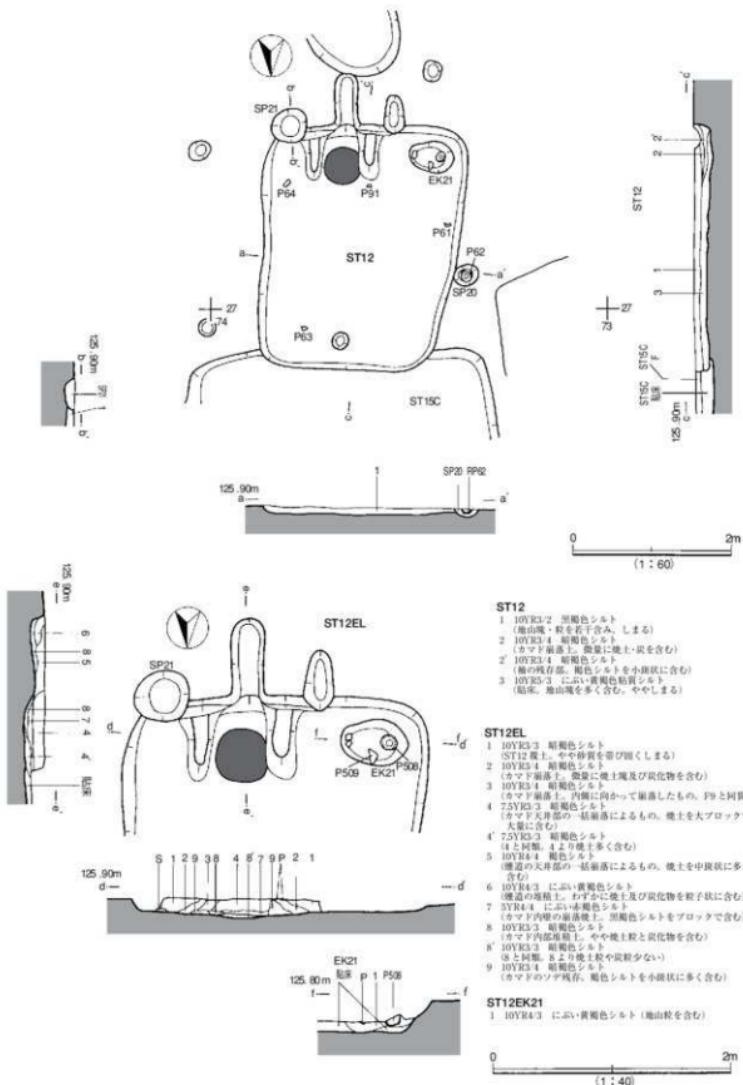
**小 型 住 居** 南区北半の中央部の73-27グリッドに位置する。ST12は、ST15Cを切る。平面形は長方形を呈し、南北約3.1m、東西約2.5mを測るやや小型の住居である。主軸方位は南北軸でN-4°-Eを測る。床面は平坦で、貼床がされており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面から床面までの深さは約10cmである。

カマドは、南壁中央やや東寄りに設置されている。煙道部は長い張り出し状を呈し、煙道端から燃焼部の長さは約137cm、煙道幅約28cm、袖幅は約91cmを測る。焼土の広がりは径約42cmである。

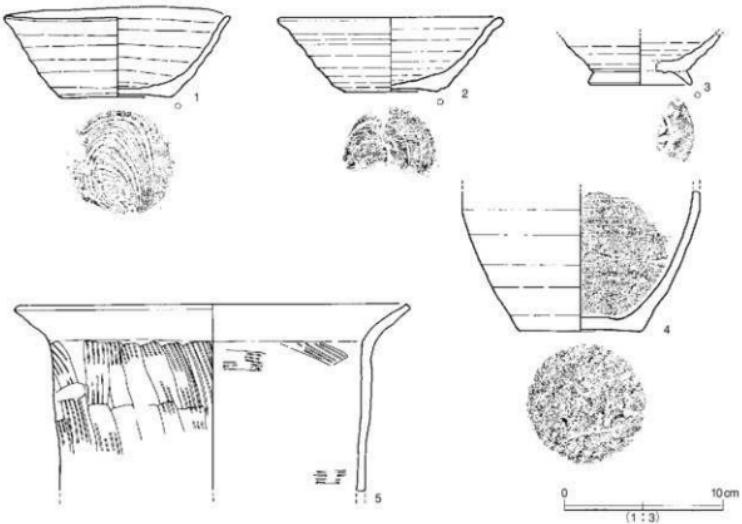
貯蔵穴は、貼床精査時に、カマドの西側の南西角に南北38cm×東西57cmの楕円形のEK21が検出された。確認面からの深さは38cmである。赤焼土器壺、同高台壺が出土した。

出土遺物は、床面からはRP61・62・63貯蔵穴からはRP508・509が出土している。実測可能なものとして、赤焼土器壺(49-1: [RP508]・2: [RP61])、赤焼土器高台壺(3: [RP509])、土師器壺(4: [RP62]・5: [RP63])がある。

貯蔵穴からは、ほぼ完品の赤焼土器の壺(49-1・2)や高台壺(49-3)が出土する。49-1・2は、共に口径は14cm代だが、器高が各5.7cm・4.8cmで、高径指数は各40・33と、楕状・逆台形の器形である。底径も前者が約7cmとやや大きく、後者は5.9cmである。49-3は同高台壺だが、底径約6.5cmと小さい。壺類は内外面ハケメの土師器壺(49-5: 口径約25cm)とロクロ成形(49-4)がある。時期的には、9世紀末～10世紀前半頃と推測される。



第48図 ST12構造図



第49図 ST12遺物実測図

## ST13 (第50図)

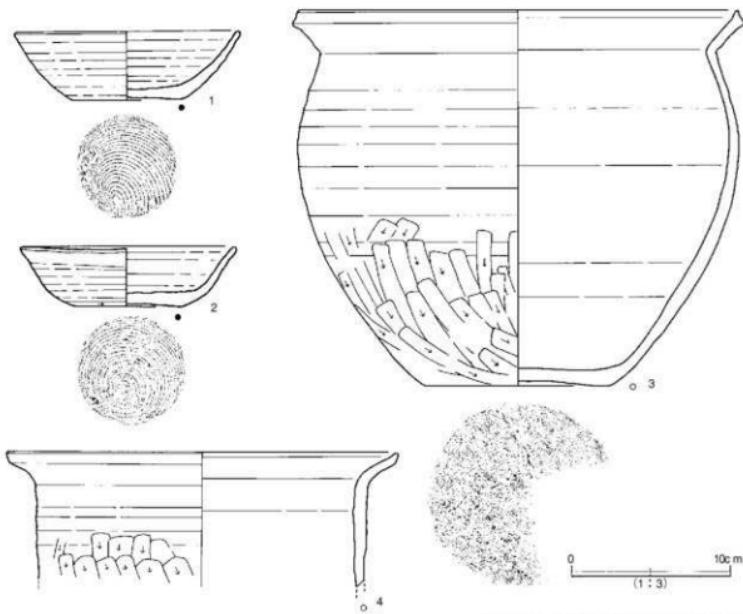
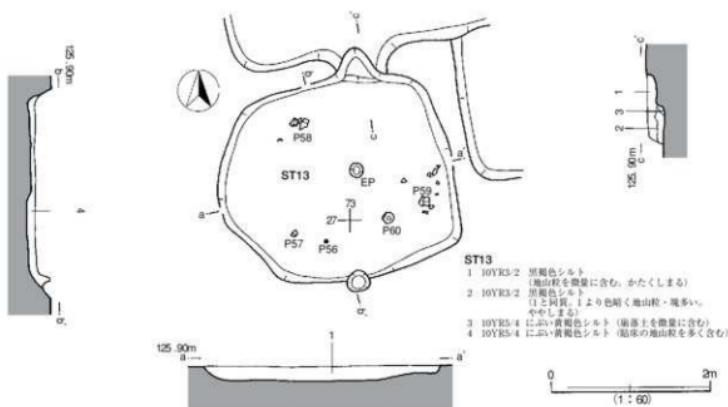
南区北半の中央部、72~37~26~27グリッドに位置する。ST13は、重複するST14を切る。小型住居全体に小型で、平面形はほぼ不整形形を呈し、南北約2.6m、東西約3.0mを測る。主軸方位は東西軸でN~82°~Eを測る。床面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。確認面から床面までの深さは約18cmである。床面中央に小形の柱穴が1基確認された。

南壁中央やや東寄りに煙道状の全長約45cm、幅約40cmを測る突出部がある。当初、カマドの煙道と考えたが、焼土や炭化物が全く認められない事から、他の役割などが推測された。

出土遺物は、床面からはRP56~60が出土する。実測可能なものとして、須恵器壺(51-1:[RP56]・2:[RP60])、赤焼土器鉢(3:[RP57・58・59])、赤焼土器壺(4:[RP58・71])がある。

床面からは、須恵器壺や赤焼土器鉢・壺類がまとめて出土した。須恵器壺(51-1・2)は、口径14cm前後、器高3.8・4.4cmで、高径指数28~30の口径に比して器高のやや低い逆台形を呈する器形である。底部は、回転糸切だが、底径は約68cmとやや大きい。51-3は、赤焼土器の壺で、口径約27cm、器高24cmの器高が低く肩がやや張るタイプで、体部外面下半に縦位のケズリが施される。51-4は、赤焼土器の長胴壺の口縁部(口径24.6cm)で、体部外面上半まで縦位のケズリ調整が施される。

時期的には、底径がやや大きい須恵器壺類(底部切り離しは回転糸切)などから9世紀第三四半期を主とした9世紀中葉~後半と考えられた。



第50図ST13遺構図・第51図ST13遺物実測図

## S T 1 4 (第 52 図)

南区北半の中央部、72～73・25～26 グリッドに位置する。ST14 は、東側で ST15 C を切り、南側を ST13、北側を ST16 に切られる。

平面形は方形を呈し、南北約 4.4m、東西約 4.7m を測る。主軸方位は東西軸で N - 80° - E を測る。床面は平坦で貼床がなされており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面から床面までの深さは約 30cm である。

主柱穴は、床面・貼床精査時に、床面中央付近の東西壁際に対て検出された EPI・2 など 2 基が推測された。両者は、直径が 75～95cm 前後の不整円形で、床面から 5cm 程のやや浅い掘り込みで、EPI には柱根痕が認められる。また、両者の周囲にある EP3・4 などは支柱穴などと推測された。平面形は直径 20～25cm の円形を呈し、床面からの深さは 16～24cm を測る。

カマドは南壁中央やや西寄りに設置される。煙道部は、南側を ST13 に切れ不明だが、焼成部までは 73cm 以上を測る。煙道幅約 66cm、袖幅は約 114cm で、焼土は径 50cm 前後である。

出土遺物は、床面や覆土から RP71・72・77～86・94～100・140・196、RM87 が出土している。

実測可能なものとして、須恵器壺 (53・1 : [RP82]・2 : [RP79]・3 : [RP77]・4 : [RP98])、須恵器高台壺 (5 : [RP80・140]・6 : [RP96]・7 : [RP84]・8 : [RP99])、土師器壺 (9 : [RP83]・10)、須恵器蓋 (11 : [RP86])、須恵器壺 (12 : [RP72・85・94])、須恵器壺 (54・1 : [RP81])、鎌 (3 : [RM87]) などがある。

床面の資料は少ないが、覆土下位の資料に一定のまとまりが認められる。

須恵器壺は、底径が大きくヘラ切りを主体とし、箱形 (53・1・3) や逆台形 (53・2) を呈するものが多い。前者は、口径は 13.5cm 前後、器高は 3.2cm 前後と低く、高径指数は 24～25 で、口径に比して器高が非常に低い。底径も 9cm 以上で全体に大きい。後者は、口径が 14.4cm、器高 4.8cm で、高径指数は 29 ほどで、底径は 7cm 代とやや小径化する。53・4 は底部切り離しが静止系切りで、底径は 7cm 代後半で、後者に近い。

須恵器高台壺でも、底径が 9cm 以上を測る大形のもの (53・5～7) が多く、底部切り離しは、全てヘラ切りである。一部、底部や体部にヘラケズリ調整を施すもの (53・6・7) もある。器形的には、口縁部欠損などで全体を知るものは 53・5 などに限られるが、口径 15cm 前後、器高 4.6cm 前後で、高径指数は 32 ほどの箱形や逆台形を呈するものであろう。なお、53・8 は、底径が 7.4cm ほどで、やや小径化する。

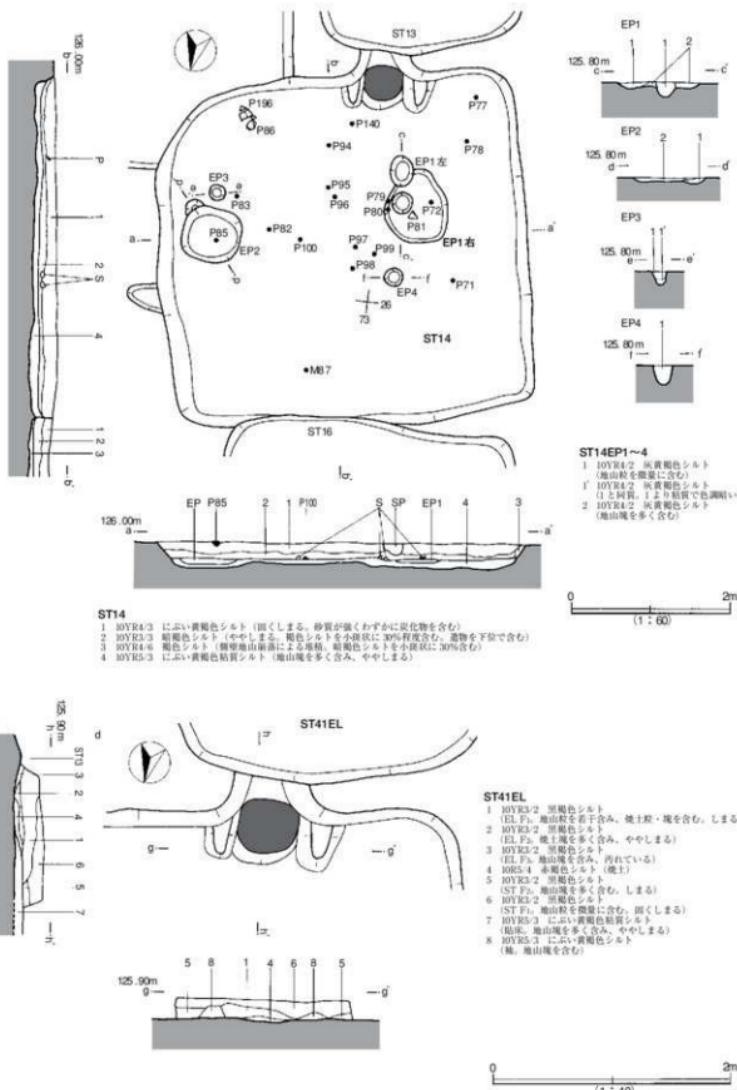
他に床面直上の須恵器蓋 (53・11) は、口径約 15cm で上記の須恵器壺類に付くものであろう。

土師器の供膳器では、口径 15cm 以上で法量の大きい無段平底の所謂国分寺下層式期の新段階の 53・9 があり、椀状を呈し、内外面ミガキで、内面黒色処理する。他に ST15C や ST30 の土器片と接合した有段丸底の土師器壺 (53・10 : 国分寺下層式期古段階) が出土する。

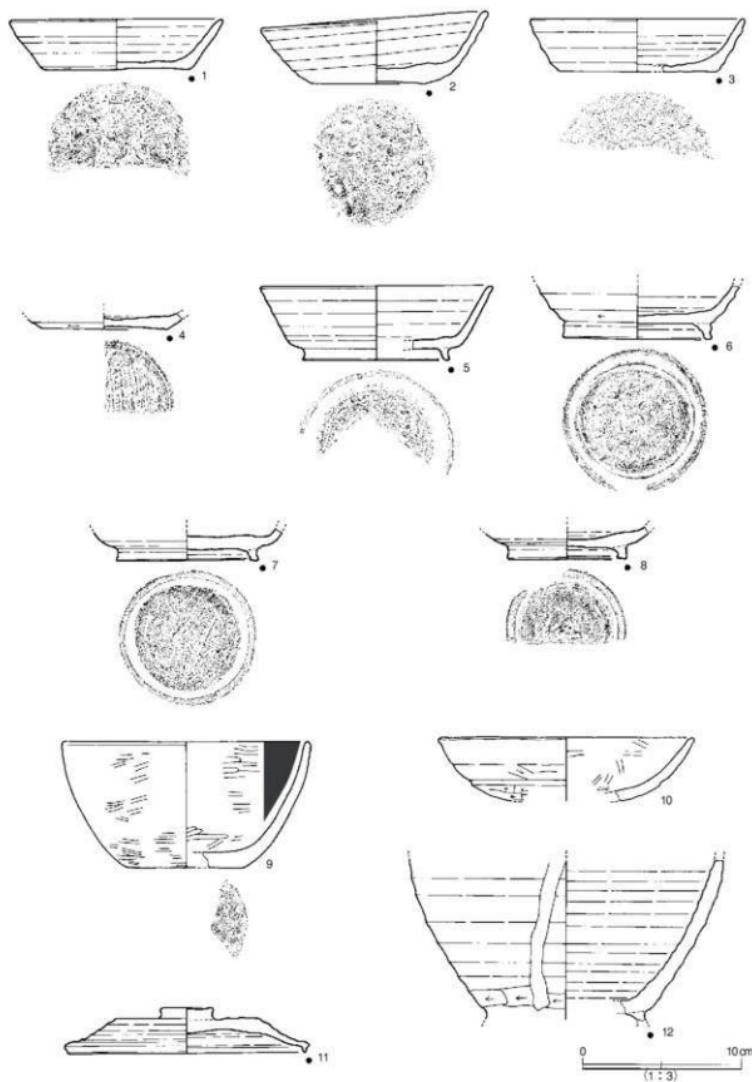
壺類では須恵器の 53・12 があり、体部外面の高台との境にケズリ調整がある。壺類では、内外面ハケメ調整の土師器壺 (54・2) があり、底部は木葉痕がある。

他に床面より金属製品として、長さ 15cm、幅 3cm の反りのある鎌も出土した。

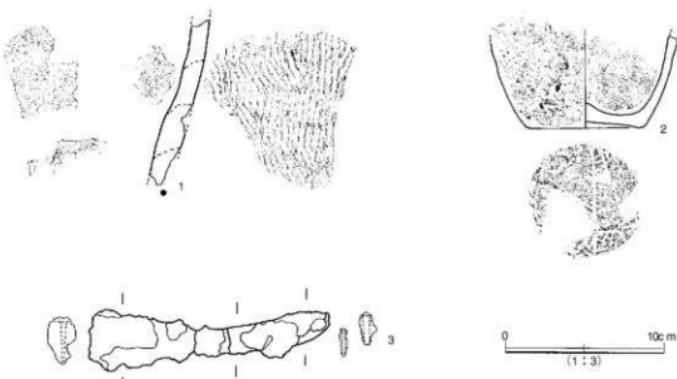
時期的には、底径の大きい須恵器供膳器や、国分寺下層式期の土師器壺類から、8世紀中葉～後半の土器群と捉えられる。



第52図 ST14造構図



第53図 ST14遺物実測図(1)



第54図 ST14遺物実測図(2)

## S T 1 5 A (第55図)

南区の北半部中央～東側、74～26グリッドに位置する。ST15 Aは、北西部の大半をST15 Bに切られる。平面形はほぼ方形と推定され、南北、東西とも約3.7mを測る。主軸方位は南北軸でN-1°～Wを測る。床面は平坦で、貼床がなされており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面から床面までの深さは約18cmであり、主柱穴等のピット、カマドは未検出である。

出土遺物は、床面からはRP67-105・126・130が出土している。実測可能なものは須恵器坏(56-12:[RP105])、土師器坏(5:[RP67・126])がある。

床面資料として逆台形を呈する須恵器坏(56-12)がある。口径12.5cm、器高3.9cmで、高径指数31を測る。底径は7.4cmほどで、ヘラ切り離しである。覆土では、ST15Bとの境に土師器坏(56-5)があり、身の浅い無段平底風の坏で、内外面丁寧なミガキで、内面黒色処理する。時期的には、両遺物の特徴から8世紀末～9世紀前半頃と判断される。

## S T 1 5 B (第55図)

南区の北半部中央～東側の74～26グリッドに位置する。ST15 Bは、ST15 A・15 Cを切る。平面形は方形で、南北約4.3m東西約4.4mを測る。主軸方位は東西軸でN-83°～Eを測る。床面は平坦で、貼床がなされており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面から床面までの深さは約26cmである。床面に一部炭化層の広がりが認められ、焼失家屋の可能性も窺えた。

重複のある住居群

床面炭化層

カマドは、北壁中央に設置されている。煙道部は短い張り出しで、煙道部端から燃焼部までの長さは約110cm、煙道幅約54cm、袖幅は約113cmを測る。焼土の広がりは径約30cmである。床面から主柱穴ピットなどは検出されなかった。

出土遺物は、床面からはRP65・66・68・104・115～117・127～129・131・132・134・135～139・497・RQ114、カマド及び周辺からRP133が出土している。

実測可能なものは、須恵器坏(56-1:[RP104・128])、赤焼土器鉢(2:[RP135])、土師器坏(3:[RP115]・4:[RP132]・6:[RP116・117])、土師器高台坏(7:[RP497])、土師器鉢(8:[RP131・139])、紡錘車の未成品(9:[RQ114])である。

床面からは、土師器の高台壺(56-7)や赤焼土器の鉢(56-2)、須恵器壺(56-1)、土師器鉢(56-8)などが出土した。56-7は、須恵器模倣と考えられる内外面丁寧なミガキ調整の内面黒色処理される土師器高台壺で、口径14.5cm、器高4.3cmで、高径指数30を測る。器形は、口径に比して器高が低いタイプで、底径は9.8cmと大きく、須恵器高台壺の底部切り離しがヘラ切りの一群に類似する。56-1は底部回転糸切の須恵器壺だが、底径が6.4cmとやや大きく、口径14.7cm、器高4.6cmの高径指数32を測るもので、覆土中の破片とも接合しており、やや時期的に後出の可能性もある。56-2は赤焼土器の鉢状の鉢で、口径は25cm前後を測り、口縁部と体部の境に平行沈線を廻らす。56-8は内面黒色処理する土師器鉢(口径21.6cm・器高16.5cm)で、外面体部はハケメ、内面ミガキを施すものである。一部覆土の破片と接合する。他に小形の土師器壺類があり、内面はミガキ調整だが、外面ミガキ(56-3)や外面ケズリ(56-4・6)を施すものがある。他に直径3.8cm、高さ2.4cmの側面が台形状で、上部に刺突痕跡が認められる軽鍾車の未成品と推測されるものが出土した。

時期は、床面資料や重複関係等から、大きく9世紀後半頃と捉えておく。

#### ST15C(第55図)

南区北半の中央部、73-26グリッドに位置する。ST15Cは、ST12・14・15Bに切られる。平面形は方形と推測され、南北約3.2m、東西約3.8mを測る。主軸方位は東西軸でN-87°-Eを測る。床面は平坦で貼床され、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面までの深さは約22cmである。主柱穴、カマドは検出されず、東壁南角際で炭化物が多く検出された。

出土遺物は、床面からRP141・193~195が出土している。実測したものは、須恵器壺(56-11)、須恵器高台壺(10:[RP141])、土師器鉢(13:[RP193])である。

覆土下位からの出土が多く、須恵器壺(56-11)は底径7.9cmの底部切り離しがヘラ切りで、同高台壺(56-10)は底径9.7cmのヘラ切りで、底部に「×」が線刻される。

56-13は土師器鉢で、体部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がる形態で、外面の体部上半には粘土繊痕が残り、ハケメや指オサエ、幅広のミガキ、ケズリなどの調整が認められ、体部下半は細かいケズリにより器面を調整する。内面はハケメ調整である。

時期的には須恵器供器や重複関係から8世紀後半~末頃と考えられる。

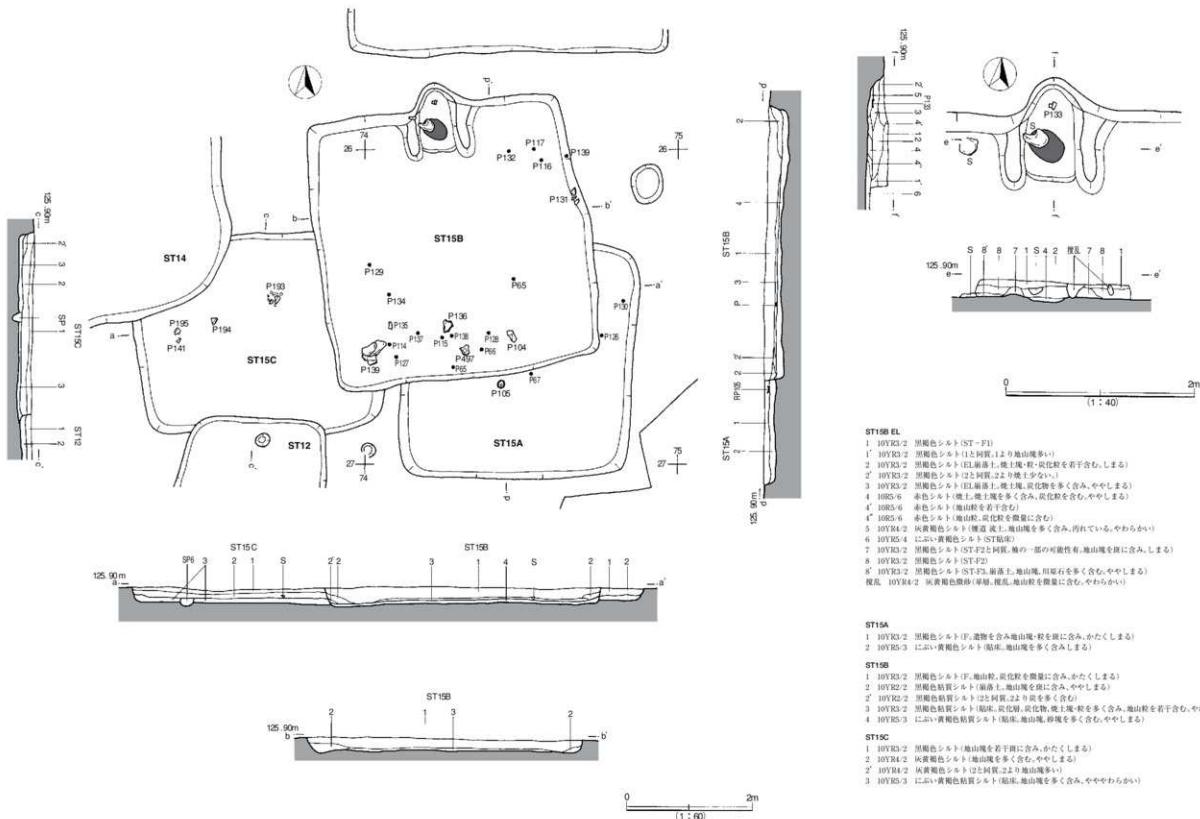
#### ST16(第57図)

南区の北端中央、72~73-25グリッドに位置する。ST16は、ST14を切り、北側を道路路盤の搅乱とSK22に切られる。平面形は方形を基調とし、現存長で東西約4.0m、南北約1.6m以上を測る。主軸方位は東西軸でN-85°-Wを測る。床面は平坦で、貼床がなされており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面から床面までの深さは約18cmである。柱穴はEP1~4を確認したが、平面形は径14~30cmの円形で全体に掘り込みは浅く、建物に伴うか判然としない。

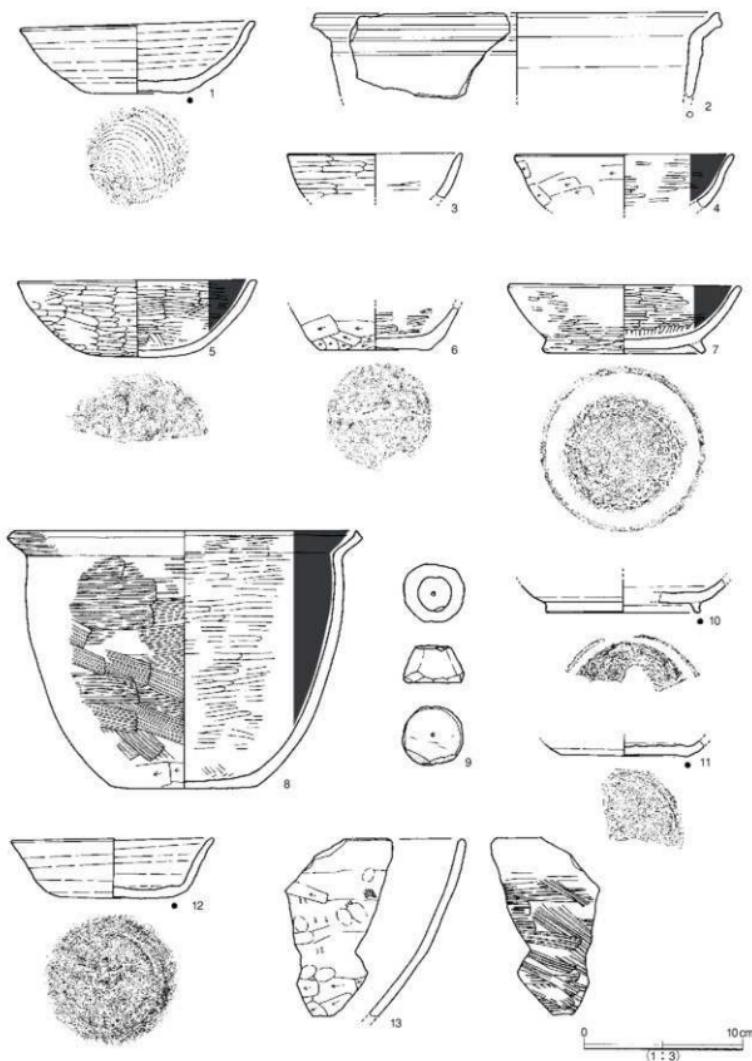
明確なカマドは未検出だが、南東角に径58cm~88cmの平面楕円形の焼土の広がりが確認された。焼土の西側には不明瞭ながら床面上に地山塊を多く含む盛土状のものが認められ、袖の一部と判断した。対になる袖部は東壁の上位にあったのではないかろうか。

出土遺物は覆土を主にRP69・70・90・118・125が出土している。実測可能なものとして、須恵器壺(57-1:[RP69])、土師器壺(2:[RP125]・3・4:[RP90])がある。

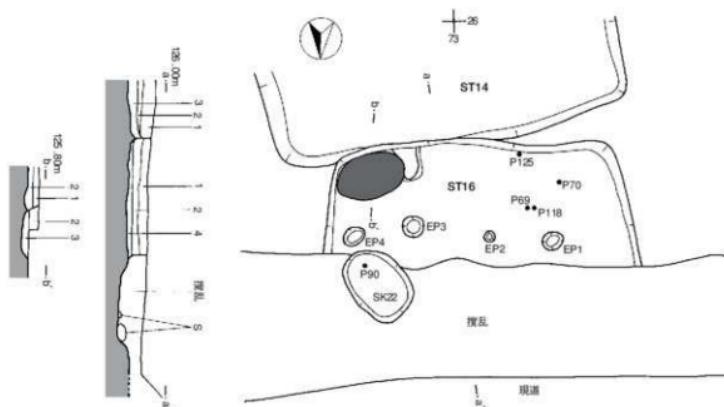
出土土器は、覆土中のものが多い。須恵器壺(58-1)は、底径が7.7cmでヘラ切り離しで



第5図 ST15A-B-C遺構図



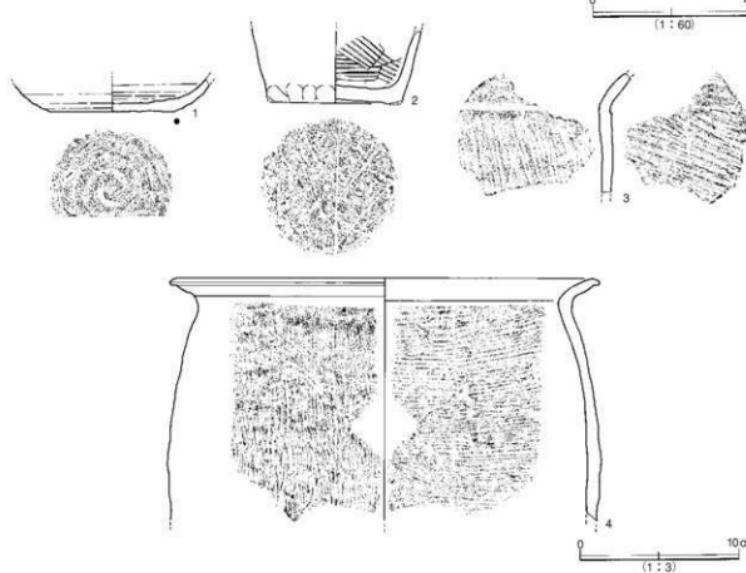
第56図 ST15A・B・C遺物実測図



**ST16**

- 1 10YR3/2 屋根色砂質シルト (P1)、地山材を断面に含む。かたくしまる。
- 2 10YR3/3 地山色シルト (P2)、地山材をまだら又は斑状に含む。しまる。
- 3 10YR4/3 に高い黄色色砂質シルト (EL)、地土塊を多く含み、炭化物を含む。砂質を含み、ややしまる。
- 4 10YH4/4 黄色シルト (粘土)、地山塊を多く含み、汚れている。ややしまる。

0 2m  
(1 : 60)



第57図ST16遺構図・第58図ST16遺物実測図

ある。甕類は全て土師器で、58 - 4 は口径 26.7cm で、最大径が体部上～中位にあたる長胴甕である。内外面ハケメ調整(外面縦位・内面横位)である。58 - 2 は外面の体部下端に指オサエ、内面ハケメ調整で、底部に木葉痕がある。床面資料の 58 - 3 は、土師器甕の口～体部片で、頸部に沈線が一条廻る。外面沈線下に縦位ハケメ、内面は斜・横位のハケメを施す。

時期的には須恵器坏や土師器甕の主体、重複関係から 8 世紀末～9 世紀前葉頃だろう。

#### S T 1 7 (第 59 図)

南区の北端中央～東側、74 - 25 グリッドに位置する。北側が現道路盤の搅乱を受け壊されている。平面形はほぼ方形を呈し、東西約 5.1m、南北が現存長約 3.2m を測る。主軸方位は東西軸で N - 90° - E を測る。床面は平坦で、貼床がなされており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面から床面までの深さは約 22cm である。

柱穴は、貼床精査時に検出し、EP 2・3 などが推定された。平面形は直径約 70cm のほぼ円形で、床面からの深さは 22cm を測る。覆土は、貼床との差異が不明瞭だったが、焼土塊などを含み、柱痕跡もなく、柱の建て替えや抜き取りなども推測された。他に EP 4～6 なども検出されたが、EP 2・3 などと比べ、小規模で支柱穴などの可能性も窺えた。

カマドは、東壁中央に設置されている。煙道部は長い張り出し状を呈し、煙道端から燃焼部 長い 煙道 は長さ約 258cm、煙道幅約 32cm、袖幅は約 145cm を測る。煙道中央部には古い段階の SP も認められた。焼土は、全体に希薄で広がりは径 72cm 前後だが、明確な焼土層は径 20～30cm ほどで、焼土西側に同規模の炭化層の広がりが認められた。

貯蔵穴は、南東角の EP1 で、平面形は直径約 70cm のほぼ円形で、深さは 12cm を測る。EP2・3 と形態は類似したが、覆土に焼土を含まず、周辺の土器集中から貯蔵穴と判断した。

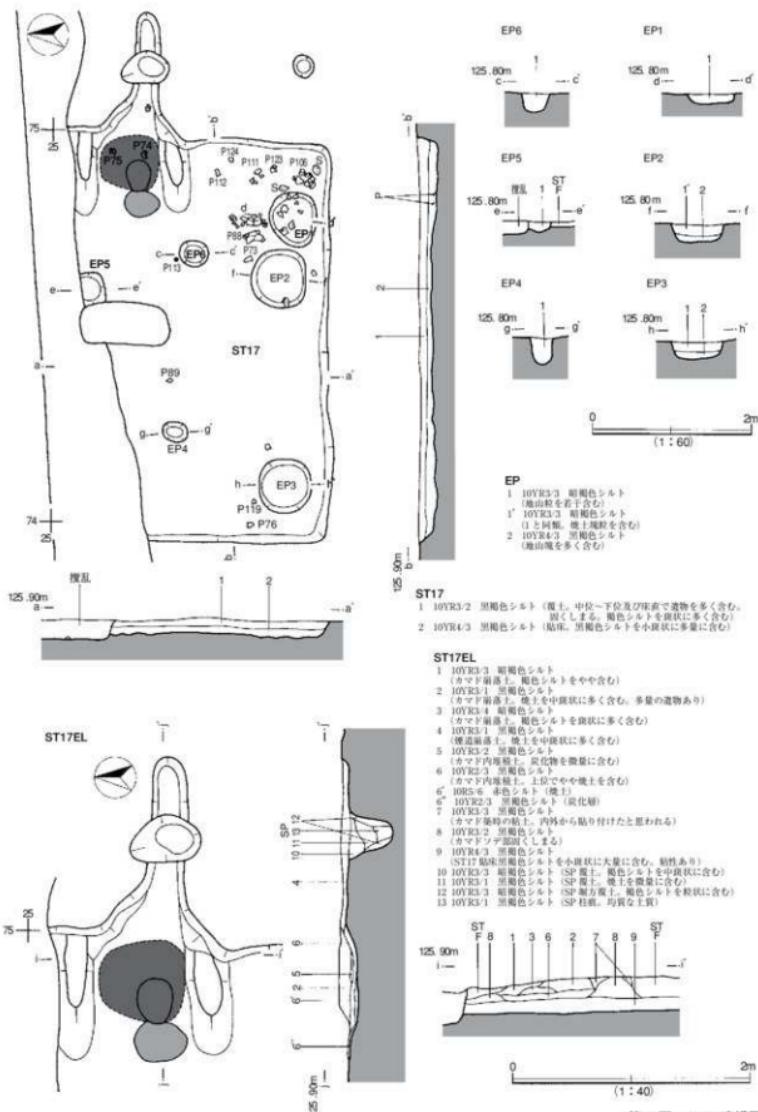
出土遺物は、床面からは RP73・76・88・89・106～112・119～124、カマド及び周辺から RP74・75 が出土している。実測可能なものとして、須恵器坏 (60・1:[RP110]・2:[RP73])、土師器坏 (3:[RP89])、土師器鉢 (4:[RP107・111])、土師器甕 (5:[RP88]・6:[RP108・109・123]・7・8:[RP74]・9:[RP101・107]・10:[RP74・106・122]) がある。

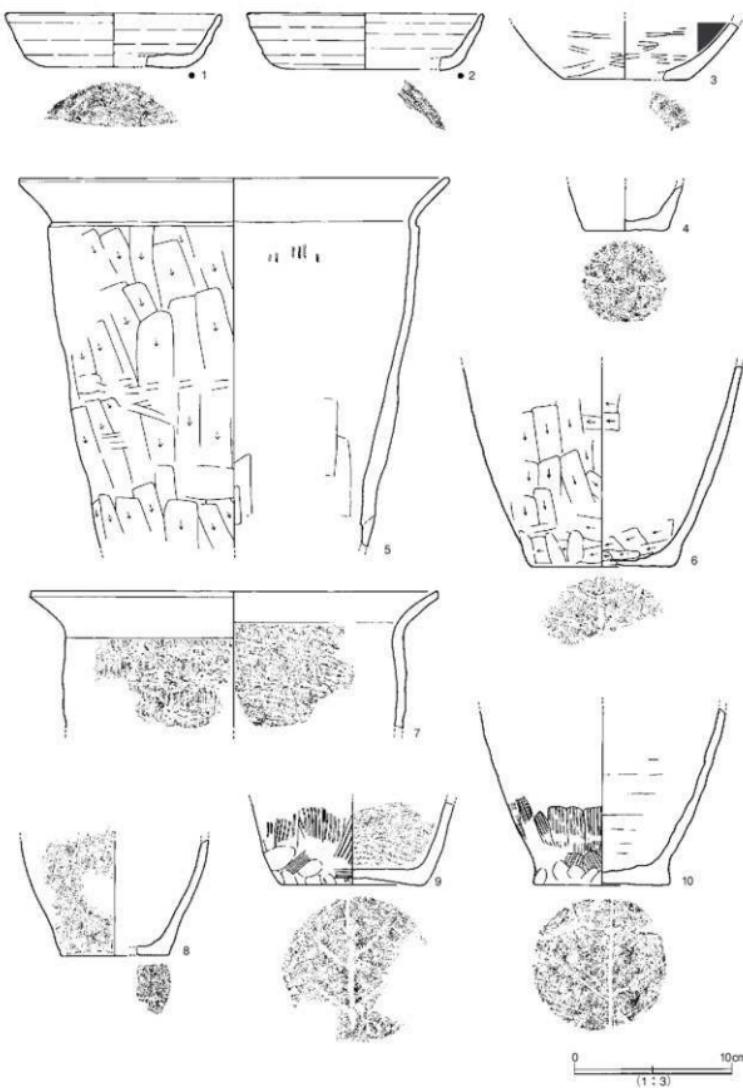
遺物の大半が、床面若しくは床面上直から出土し、特に南東角付近から集中的に出土した。須恵器坏は、箱形を呈し、口径 13.4cm(60 - 1)、口径 14.8cm(60 - 2) を測るものがある。両者とも器高は 3.5cm 前後で、高径指数は前者が 25、後者が 24 で、全体に口径に比して器高が高い形態である。底径は両者とも 9～10cm と大きくヘラ切り離しである。

土師器の坏 (60 - 3) は、深身の無段平底の碗状を呈し、国分寺下層式期の新段階のものと考えられ、内外面ミガキを主に、内面黒色処理する。他に小形の鉢状のもの (60 - 4) もある。

甕類は、土師器が主体で、内外面ケズリを主とする (60 - 5・6)、内外面ハケメを主とする (60 - 7～9)、外面ハケメ・内面粘土粙痕を明瞭に残すもの (60 - 10) など多様である。しかし、底部は、全体に木葉痕 (60 - 6・8～10) があるものが大半で、底径は 9 cm 前後を測るものが多く共通性もある。60 - 5 は、口縁部 (口径 27cm) が強く外反し、体部が下位に向かってすばむ長胴形の甕で、器高は 23cm 以上を測る。外面は、頸部に沈線が廻り、その直下から縦位のケズリを全面に施すもので、部分的に横・斜位にやや幅広のミガキを施す。形態が類似する 60 - 6 の体部下半や底部からは、内面もケズリやナデを主とするようである。

時期的には、須恵器坏類や土師器坏・甕の形態から 8 世紀中～末葉頃の所産と考えられる。





第60図 ST17遺物実測図

## S T 2 8 (第 61 図)

**南区西壁際の重複住居** 南区の北半部西壁際の 71 - 25 グリッドに位置する。ST28 は、貼床床面のみの検出で、西側が調査区外に延び、北側は現道路盤の荒乱に壊され、南側で ST29 を切る。平面形は不明だが、南・東壁の残存ラインから方形を基調とするのが分かる。現存長で南北約 4.0m 以上、東西約 4.35m 以上を測る。主軸方位は南北軸で N - 14° - W を測る。ほぼ貼床のみの検出で、貼床の掘り方は、住居中央部が東西に長い地山の高まりがあり、不整の周溝状を呈する。断面形は U 字状を呈し、確認面から掘り方底面までの深さは約 28cm である。カマドや貯蔵穴は検出されず、貼床精査時に小ビットが幾つか検出されたが、位置や規模などから柱穴と認定するには至らなかった。

出土遺物は、貼床床面からは RP 1、貼床土から RP142・143・147 が出土している。実測したものは、須恵器高台坏 (63 - 1 : [RP142・143])、赤焼土器坏 (2 : [RP1])、土師器坏 (3 : [RP147])、須恵器蓋 (4 : [RP147]) がある。

貼床上面からは、赤焼土器坏 (63 - 2) があり、口径 13cm、器高 4.9cm の高径指数 37 を測る椀状のもので、底径は 4.7cm で回転系切である。他に、貼床土から須恵器棱椀 (63 - 1)・同蓋 (63 - 4) や土師器坏 (63 - 3) などがある。63 - 1 は、口径 12.9cm、器高 4.7cm の高径指数は 36 である。底径は 8.5cm のヘラ切りである。68 - 3 は、底径 7.6cm ほどの無段平底の椀状で、内外面ミガキ調整を主に、内面は黒色処理される。

時期的には、貼床床面の土器などから 9 世紀末～10 世紀前葉頃と考えられる。

## S T 2 9 (第 61・62 図)

南区の北半部西壁の 71 ~ 72 - 26 グリッドに位置する。ST29 は、北側を ST28、南側を ST30、西側を焼土遺構 (SL) に切られ、西側が更に調査区外に延びる。平面形は、南北を住居に切られ判然としないが、カマドが付く東壁や、南側の貼床のラインから方形を基調とするようである。なお、東壁ラインが北東角でクラシク状に屈曲する。主軸方位は東西軸で N - 60° - E を測る。床面は平坦で、貼床される。確認面から床面までの深さは約 15cm である。

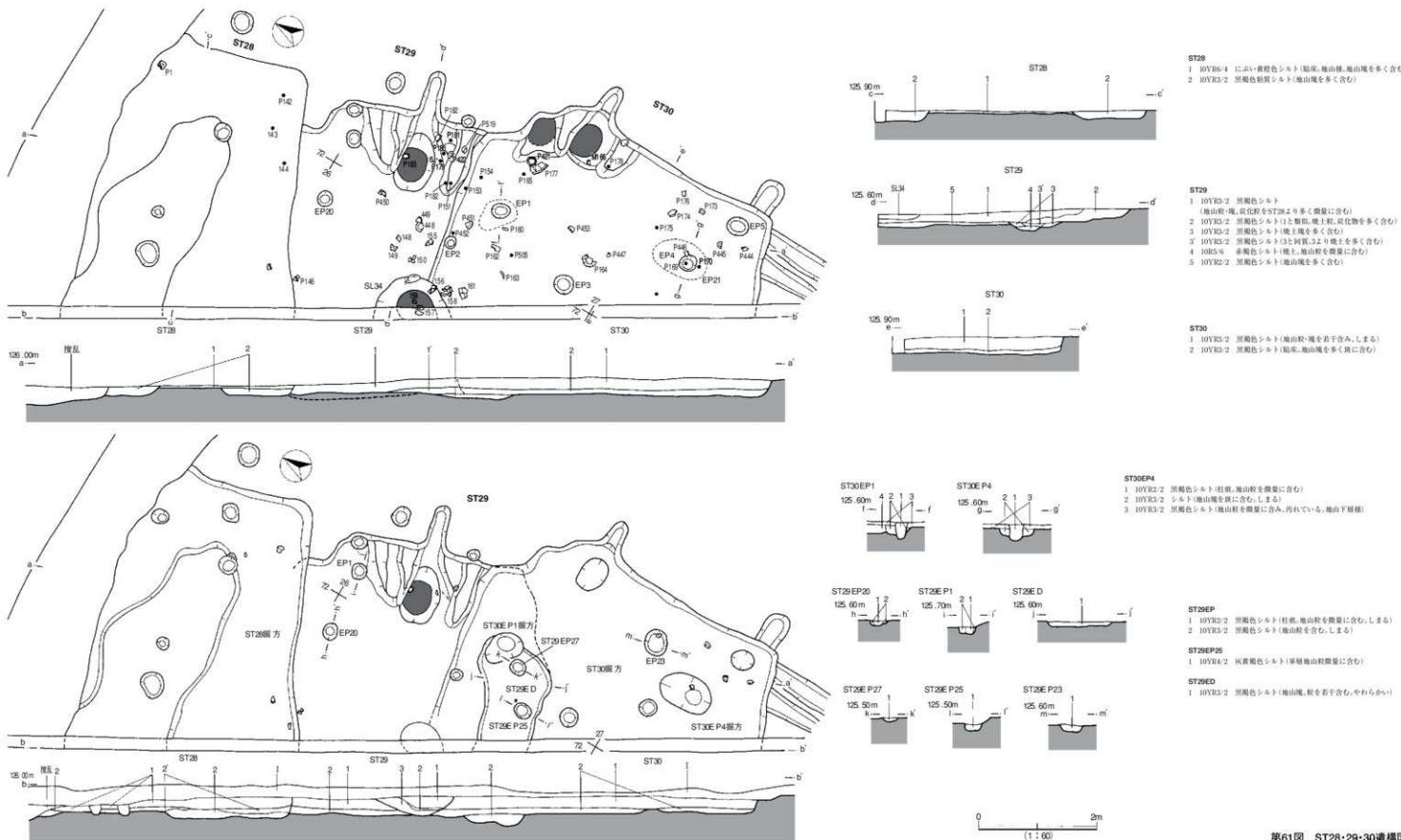
主柱穴は、EP20・25などを確認した。平面形は直径約 30cm のほぼ円形で、床面からの深さは 8 ~ 10cm を測る。EP25 などは貼床精査時の検出であるが、周溝状の貼床土を明らかに切っている事から住居の柱穴と判断した。他にも小ビットが検出される。

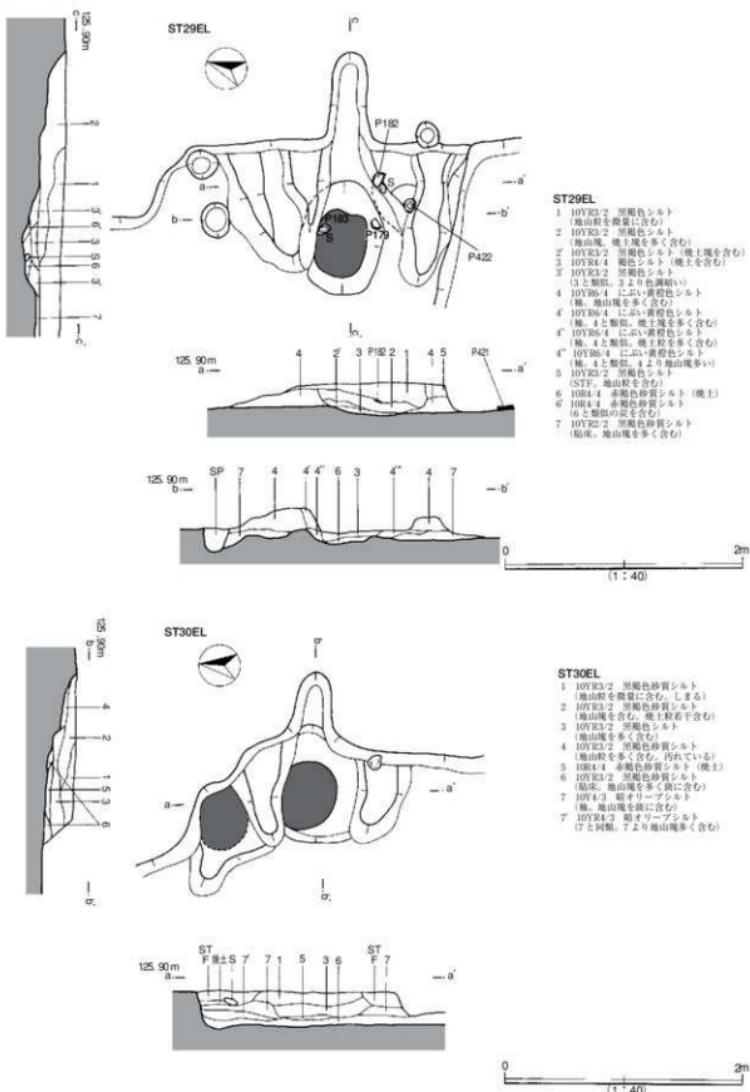
カマドが東壁中央に設置されている。煙道部は長い張り出し状を呈し、煙道端から燃焼部の長さは約 200cm、煙道幅約 35cm、袖幅は約 184cm を測る。焼土の広がりは径 42 ~ 60cm である。南側の袖部壁際からは土器がまとまって出土し、当初、カマド内出土の土器群とも考えたが、出土状況から、カマド袖部の補強材に転用した可能性も窺えた。

出土遺物は、覆土などからは RP151・152・155・179・180・181・448・519、床面からは RP146・148・149・150・182・183・420・422・449・450 がある。

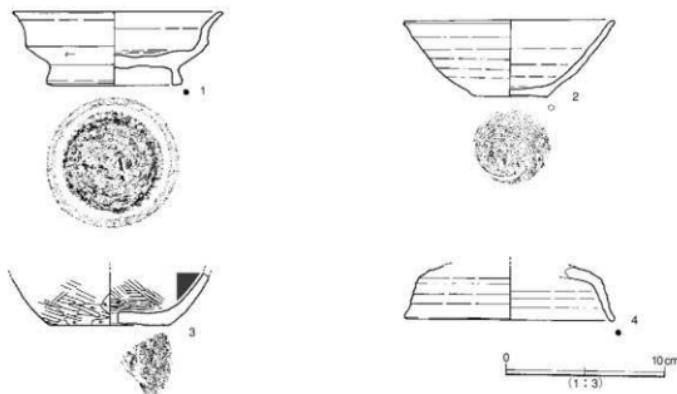
実測可能なものとして、須恵器坏 (64 - 1 : [RP448]・2 : [RP448]・3 : [RP149]・4 : [RP450・519])、須恵器高台坏 (5 : [RP422]・6 : [RP155])、土師器高台坏 (7 : [RP182])、土師器高杯 (8 : [RP450])、赤焼土器坏 (9 - 10 : [RP146]・65 - 3 : [RP150])、土師器甕 (1 : [RP183])、土師器鉢 (2 : [RP449]) がある。

覆土の須恵器坏では、逆台形を呈するもの (64 - 1・3) とやや椀状を呈するもの (64 - 2・





第62図 ST29EL・ST30EL造構図



第63図 ST28遺物実測図

4)がある。前者は、口径13.5～14.5cm、器高3.8～3.9cmの高径指数は28で、口径に比して器高が低い類似性がある。一方底部は、底径7.6～8.2cm、底部切り離しは64-1がヘラ切り、64-3が静止糸切りで、体部下端にヘラケズリする。後者は、口径14cm前後、器高は4.7～5cmで、高径指数34～35とやや深身である。底部は、径6.5～6.7cm前後で、切り離しは回転糸切である。後者は、全体に履土上位から出土し、前者は下位の出土で古相と考えられる。

須恵器高台坏(64-5・6)では、器高が高く法量が大きいタイプで、底部切り離しが回転糸切りである。64-5は口径14.2cm、器高6.3cmの高径指数は44で、底径も8.4cmとやや大きい。64-6は口縁部欠損するが、深身で器高7.7cm以上を測り、底径も9cmと大きい。

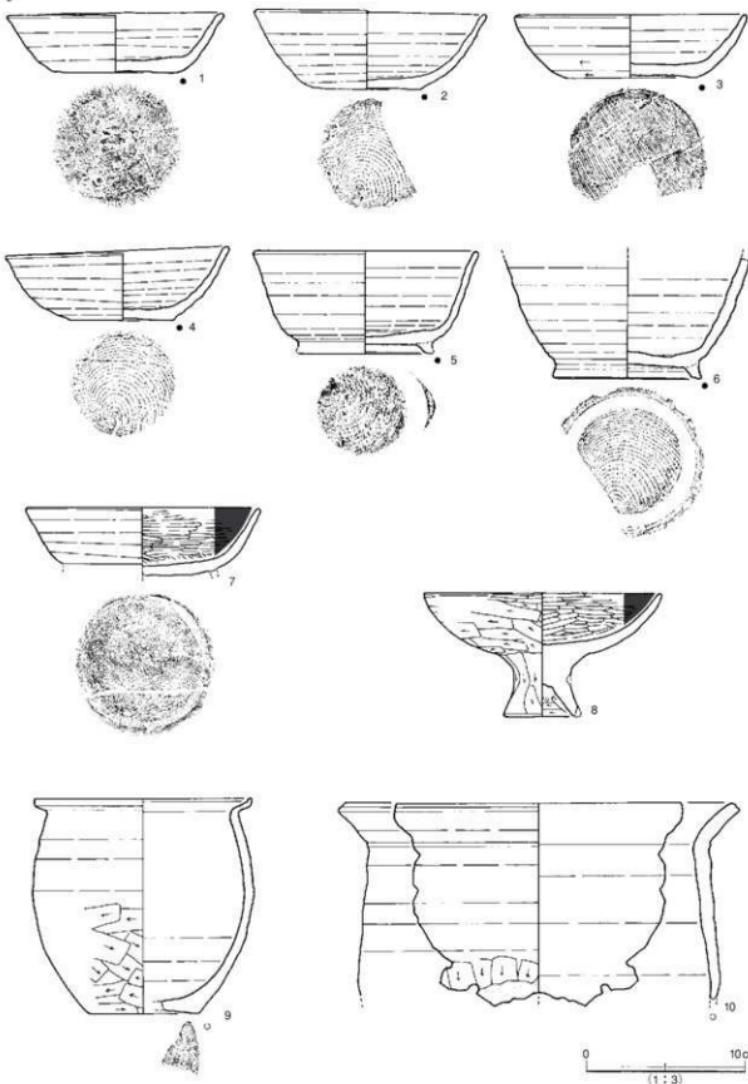
土師器の供膳器では高台坏(64-7)・高坏(64-8)があり、両者とも内面黒色処理される。64-7は、坏部が逆台形を呈し、口径14cm、坏部の底径9.5cm前後と大振りである。外面口クロ成形、内面ミガキ調整である。64-8は、坏部(口径14.8cm)に比べ脚部(底径4.8cm)が小さい高坏で、外面がケズリを主とした調整で、坏部内面はミガキ調整である。

壺類では、赤焼土器の小形品(64-9・65-3)と大形品(64-10)、土師器の小形品(65-1)がある。64-9は小形品で口径13.6cm、器高13.6cmで、体部外下面半～中位にケズリを施す。64-10は図上復元ながら口径24.3cmを測る。65-3は内外面口クロ成形だが、底径が64-9に近似し同様な形態かもしれない。他に65-2の肩に張りのある赤焼土器の壺は、やや薄手で体部外下面の下半が横ケズリ、上半が縦・横位のケズリを施す。

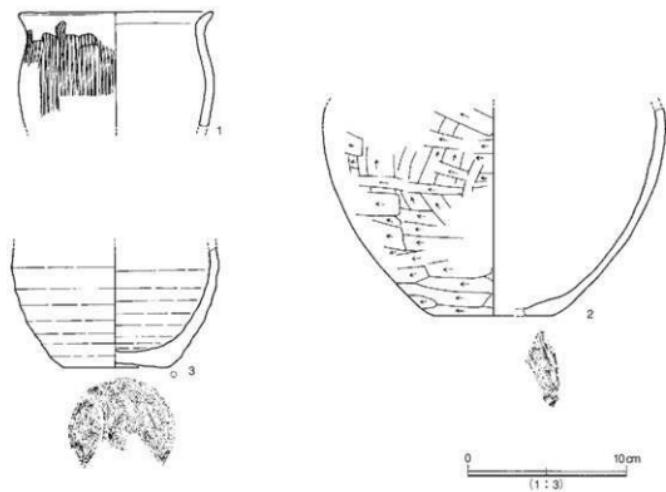
一部覆土上面に、須恵器坏の回転糸切り離しの一群を含むが、ST29を切る調査区西壁のSL34の混入が推測された。時期は、カマドなど土器群から8世紀末～9世紀初頭頃であろう。

### ST30(第61・62図)

南区の北半の71～72～26～27グリッドに位置する。ST30は、北側でST29を切り、西側が調査区外に延びる。平面形は方形を呈すると推測される。なお、東壁ラインは、カマド北側袖部付近が外側に張り出す。方位は東西軸でN-80°-Eを測る。床面は平坦で、貼床が



第64図 ST29遺物実測図(1)



第65図 ST29遺物実測図(2)

なされており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面から床面までの深さは約25cmである。

主柱穴はEP1・21が認められ、両者とも床面で柱痕跡が検出されたが、掘り方は貼床の下で検出された。平面形は直径約30cmのはば円形で、床面からの深さは28cmを測る。他にEP3・5などが検出されたが、規模などから判然としない。

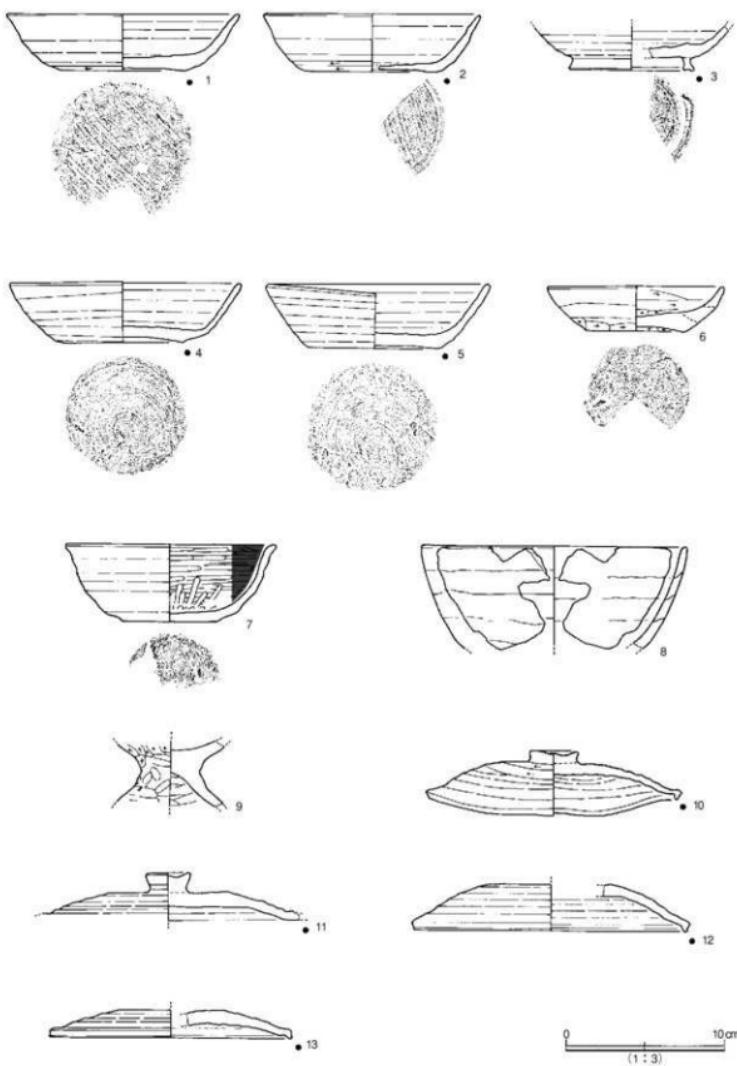
カマドが東壁中央やや北寄りに設置されている。煙道部は短く張り出し、煙道端から燃焼部は全長約145cm、煙道幅約31cm、袖幅は約114cmを測る。焼土の広がりは径56cmである。北側の袖部は、南側の袖に比べ幅広で、外側に弧状に張り出し、袖上面に焼土が認められる。

出土遺物は、覆土からは、RP153・154・165・170・171・175・178・452、床面からはRP158・160～164・169・173・174・176・177・421・444・445・446・451・452・453・505、RM166がある。

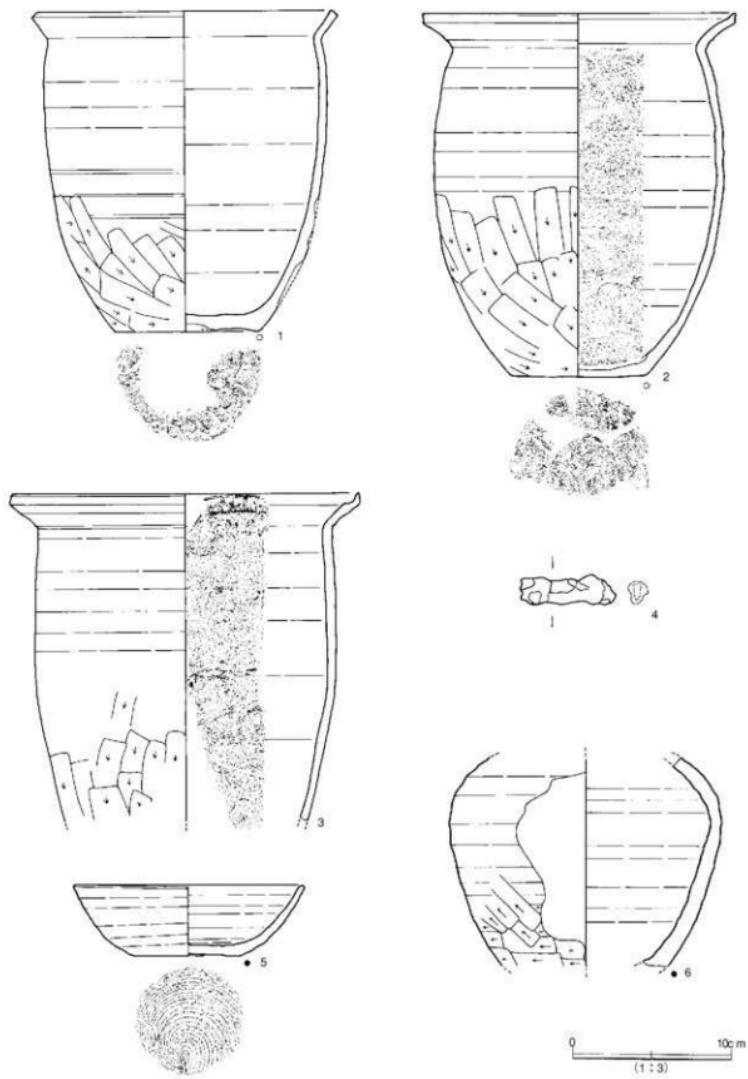
実測図は、須恵器壺(66-1:[RP162]・2:[RP505]・4:[RP164・169]・5:[RP174・446])、同高台壺(66-3:[RP445])、土師器壺(66-6:[RP178・453]・7:[RP452])、同鉢(66-8:[RP447])、同高壺(66-9:[RP451])、須恵器蓋(66-10:[RP421]・11:[RP160]・12:[RP444]・13:[RP176])、赤焼土器壺(67-1:[RP176・177]・2:[RP158・161])、土師器壺(67-3:[RP513])、刀子(67-4:[RM166])である。なお、SL34は須恵器壺(67-5:[RP157])、同壺(67-6:[RP156])である。

覆土下位や床面から遺物が出土した。須恵器壺(66-1・2)は、逆台形状で、口径14cm内外、器高3.6cm前後で、高径指数25～27を測る。底径は8cm前後で、底部切り離しは静止糸切である。同高台壺(66-3)は、底径7.4cmでヘラ切離しである。

須恵器壺(66-4・5)は、ヘラ切り器形が類似するが、酸化炎焼成様のものである。口径



第66図 ST30遺物実測図(1)



第67図 ST30遺物実測図(2)

約14cm、器高4cm前後の、高径指数27～30である。底径は8cm前後で、底部切り離しは回転糸切りである。なお、須恵器蓋(66-10-13)は、口径が15～17cmのものが多い。

土師器坏は、粘土紐痕を残すもの(66-6)とロクロ成形のもの(66-7)がある。前者の66-6は口径11cmの無段平底の小形品で、国分寺下層式期の新相と考えられる。内外面ケズリを施すが、粘土紐痕は残す。後者の66-7は、口径約13cm、器高4.8cmの高径指数36のやや深身である。底部は6cmとやや小径化する。66-8は口径約16cmで鉢形を呈し、幅約1.5cmの粘土紐が認められる。他に66-9は高坏で、外面にケズリやミガキ、ハケメが認められる。

甕類では、赤焼土器や土師器の長胴甕があり、口径が約19cmの中形品(67-1・2)と口径が約22cmの大形品(67-3、内面下位にハケメ)がある。体部最大径はほぼ体部中位で、外面のケズリも体部中位から施す。時期的には、回転糸切りの須恵器坏や土師器坏などから9世纪前～中葉のST29に近い段階と推測された。

なお、ST29覆土を切るSL34焼土遺構は、平面形が直径約120cmの不整円形を呈する。当初、焼土遺構覆土に焼土が充満し、遺物も多数含む事から、他の住居のカマドの可能性も推測されたが、遺構の半分が調査区外に伸びて不明で、調査時に焼土遺構として登録した。須恵器坏(67-5)や同蓋(67-6)などが出土した。67-5は、口径約14cm、器高4.5cmの高径指数32である。底径は6.8cmの回転糸切り離しである。時期的には9世纪中葉から後半である。

### S T 3 5 (第68図)

南区の中央部、72～73～28～30グリッドに位置する。ST35は、南西でST36、北西でST41、北東でST42A、ST42Bを切る。他に、住居のカマド東側が現代の暗渠に、床面中央部や北壁西側で長方形や楕円形の土坑に壊されている。また、中世と考えられる掘り込みにより住居西側が大きく削平され、全体に壁などは北側の遺存状況が良好である。

平面形はほぼ方形で、南北約6.7m、東西約6.9mを測る大型住居である。一部西壁南側に大型住居テラス状の浅い掘り込みが軸をずらして認められ、土層の重複から建て替えの可能性も窺えた。方位は南北軸でN-6°～Wを測る。床面は平坦で、貼床がなされており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面から床面までの深さは約62cmである。

主柱穴は4基(EPI・3・7・83b)と判断され、平面形は直径約18～80cmの円形、楕円形を呈し、床面からの深さは6～18cmを測る。他にEP2・4～6・22～26・83a・84などのピットを床面、貼床精査時に検出したが、明確な主柱穴の組み合わせには至らず、支柱穴等の役割が推測された。

カマドが北壁ほぼ中央に設置されている。カマド東側を現代の暗渠に壊され、煙道や袖を欠く。煙道部は短く張り出し状を呈し、煙道端から燃焼部は全長約118cm、煙道幅約30cm以上、袖幅は約60cm以上を測る。焼土の広がりは径56cmである。残存する西側の袖部の張り出しは明確でなく、焼土の位置や大形の煙道部から、袖部自体の必要性が薄かったのかもしれない。

出土遺物は、床面などからはRP86・99・150・184・185・187～189・191・192・197・199・201・202・300・420・423・433・434・506・507・511が出土した。

実測図化は、須恵器坏(69-1:[RP420]・2:[RP202]・3・5:[RP188・189]・6:[RP187])、須恵器高台坏(69-4:[RP186])、赤焼土器坏(69-7:[RP507]・8:[RP199・201])、赤焼土器高台坏(69-9:[RP506])、須恵器蓋(69-10:[RP184]・12:[RP433])、土師器坏(69-11)、

土師器蓋 (69 - 13 : [RP197])、赤焼土器壺 (69 - 14 : [RP511]・16)、須恵器壺 (69 - 15)、赤焼土器鉢 (69 - 17)、土師器壺 (70-1)、鉄斧 (70-2:[RM185])、縄文土器 (69 - 18) がある。

遺物は覆土下位や床面から出土したが、全体に須恵器壺は、底部がやや小径化した逆台形を呈し、底部切り離しがヘラ切り (69 - 3・5・6) と回転糸切り (69 - 1・2) が併存する段階である。特に 69 - 5・6 は、口径 14cm 前後、器高 4cm 前後の高径指数 27 前後、底径も 8cm 前後とまとまりを持ち、酸化焰的な色調である。69 - 5 は胎土も軟質である。一部 69 - 1・2 は、更に底部が小径化 (6.2・6.5cm) し、椀状を呈するものもある。69 - 1 は口径約 12cm、器高 4.5cm で高径指数は 37 の深身で、前述の一群より後出で、最も新相のタイプと考えられる。

赤焼土器壺 (69 - 7・8) では、綴やかな逆台形の同型で、口径 14cm 前後、器高約 4.4cm の高径指数 30 前後である。底径は約 6.8cm で両者共に回転糸切である。

須恵器高台壺 (69 - 4) は、底径 7.4cm の回転糸切りである。赤焼土器の高台壺 (69 - 9) は、底径が 6.6cm で高台に菊花状のナデツケを行う。両者とも底径が縮小化傾向にある。

無段平底の土師器壺 (69 - 11) は、貼床出土で、静止糸切り離しを行う特徴がある。

壺類では、体部下端に横位にヘラケズリを施す赤焼土器壺 (69 - 14)、口径 14cm の小形の赤焼土器壺 (69 - 16)、口径約 21cm の大形の土師器壺 (70 - 1) がある。他には、70 - 2 が長さ 8 cm、幅 5 cm の鉄斧である。69 - 18 は縄文土器片で地文 LR である。

時期的には、床面などの須恵器壺類の形態から全体に 9 世紀中葉だが、新相の一群が後葉に入るだろう。

#### ST 36B (第 71 図)

中世土坑に切られた住居

南区中央の 71 ~ 72 - 28 ~ 30 グリッドに位置する。ST36B は、北東を ST35、北西を SK38、南西を中世の SK36A などの土坑に切られる。平面形が不明確であるが、西側の貼床ラインなどから方形を基調とするものと推測される。規模は南北約 4.5m 以上、東西約 4.4m を測る。方位は南北軸で N - 7° - W を測る。床面は平坦で貼床がなされており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。検出面から床面までの深さは約 7cm である。住居内には小ビットが確認されたが、柱穴かは判然としない。

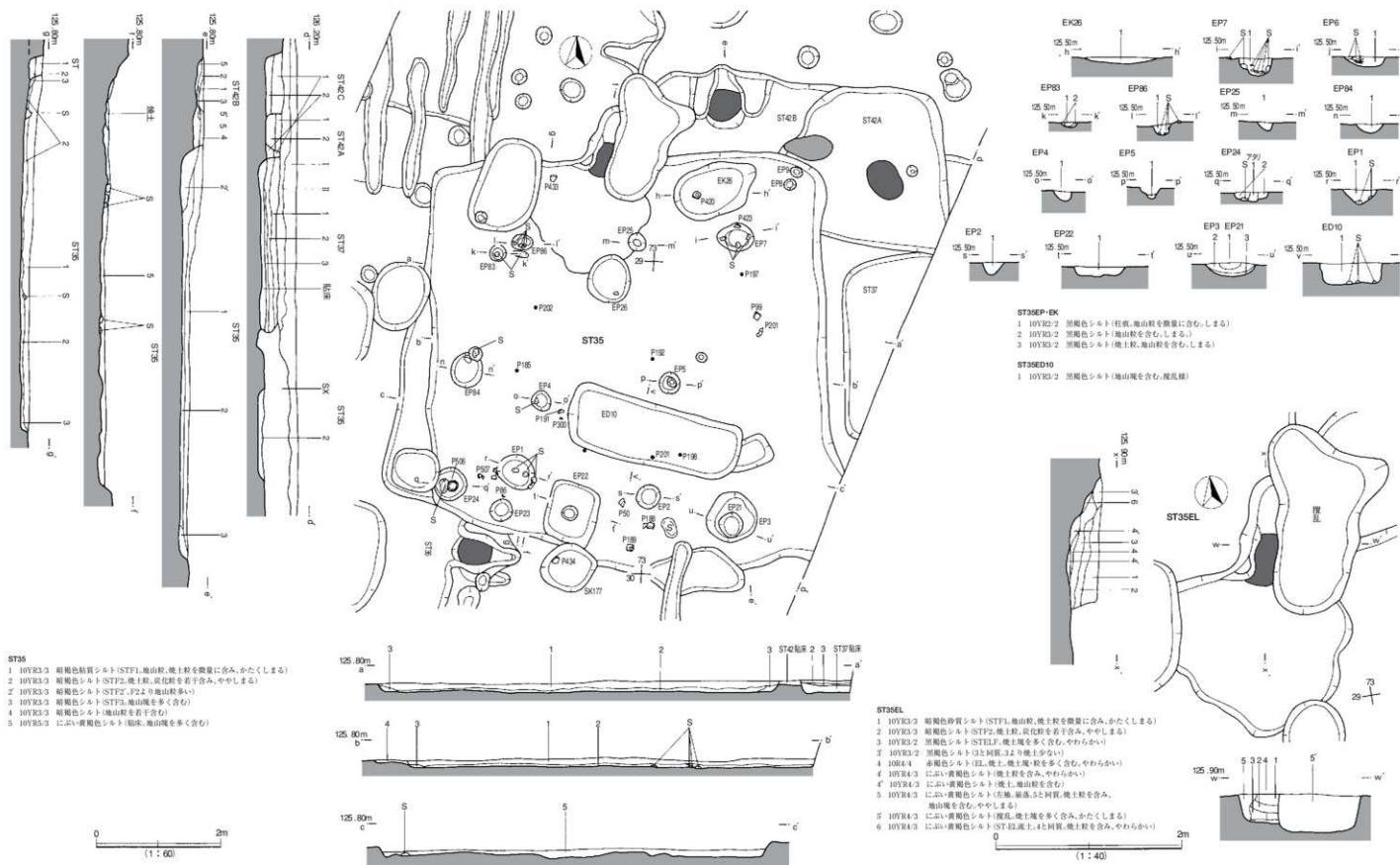
カマドが東壁南寄りに設置されている。北側の袖を ST35 に接され、南側の袖は新しい時期の柱穴に切られる。煙道部は短い張り出しで、煙道端から燃焼部の長さ約 113cm、煙道幅約 25cm、袖幅は 160cm 以上を測る。焼土の広がりは往 65cm である。カマドの南袖部が煙道先端から住居南東角を結ぶラインで構築され、カマド全体が張出す形態である。北側の袖部も残存する部分から同様な袖部と考えられる。

出土遺物は、カマド内から RP375 が出土し、実測したものは、赤焼土器壺 (72 - 1)、同高台壺 (72 - 2 : [RP375]) である。72 - 1 は、径約 1.5cm の底部穿孔のあるもので、口径約 13.2cm、器高約 5 cm で、高径指数 38 である。底径は約 5.5cm で、内面にケズリ痕跡がある。72 - 2 は、底径 6 cm で、やや足長で薄手の高台は菊花状のナデツケを施す。

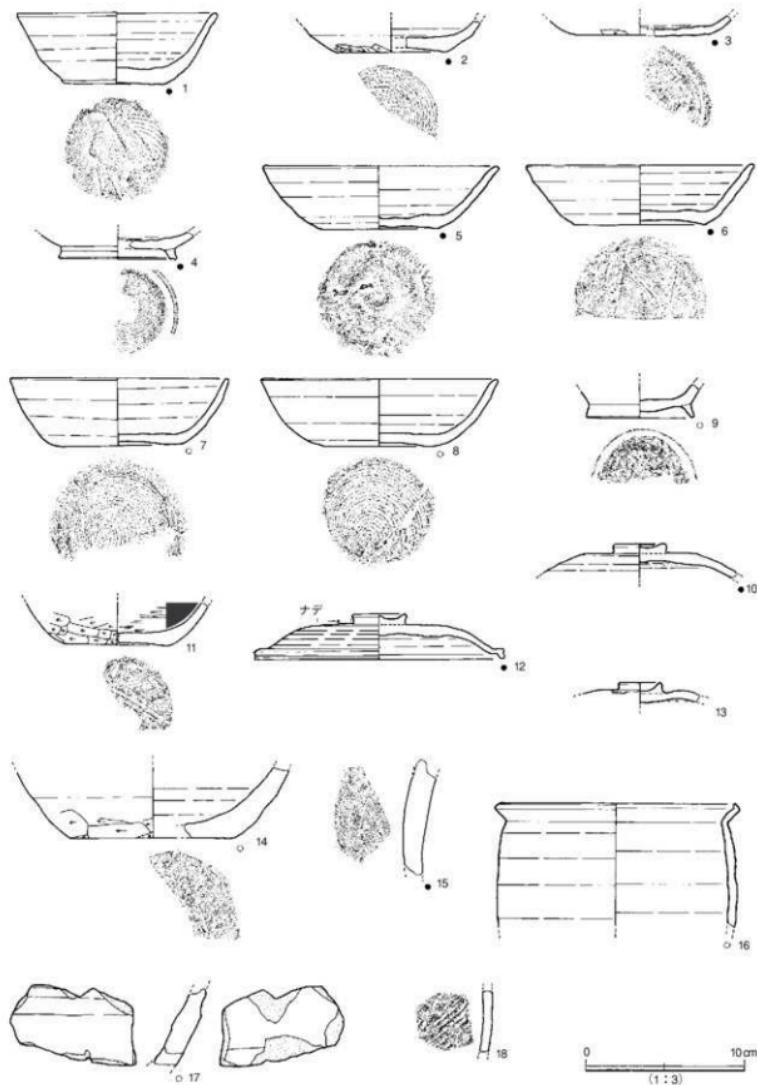
時期的には、ST35 との新旧関係からそれ以前だが、主体的な赤焼土器などから 9 世紀後半頃が考えられる。

#### ST 37 (第 68 図)

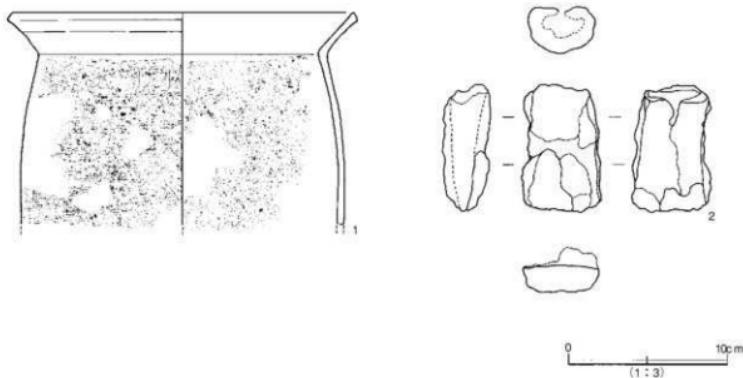
南区中央の東壁際の 73 ~ 74 - 28 ~ 29 グリッドに位置する。ST37 は、ST42 C を切り、



第68図 ST35構造図



第69図 ST35遺物実測図(1)



第70図 ST35遺物実測図(2)

住居の半分以上が調査区外に延びる。平面形は不明だが、南西角、北西角の存在などから方形を基調とし、南北約2.7m、東西約1.3m以上と推測される。方位は南北軸でN-7°-Wを測る。

**床面炭化層** 床面は平坦で、貼床がなされており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面から床面までの深さは約10cmである。床面には炭化層が広がっており、焼失家屋と考えられた。主柱穴、カマドは未検出で、出土遺物もない。時期は不明だが、隣接するST35と主軸を同じくする事から近接した時期の可能性がある。

#### S T 3 9 (第73図)

南区中央の西壁際の72-27~28グリッドに位置する。ST39は、ST41を切り、西側が調査区外に延びる。また、現代の耕作による歛状の擾乱が南北に走行する。

平面形は不明だが、東・南壁などから方形を基調とした南北4.7m×東西2.1m以上と推測される。床面は平坦で、貼床がなされており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面から床面の深さは約15cmである。

主柱穴はEP21などが推測され、平面形は直径約30cmの円形で、床面からの深さは約30cmを測る。他にEP22・23などを検出したが、規模などから支柱穴などが推測された。

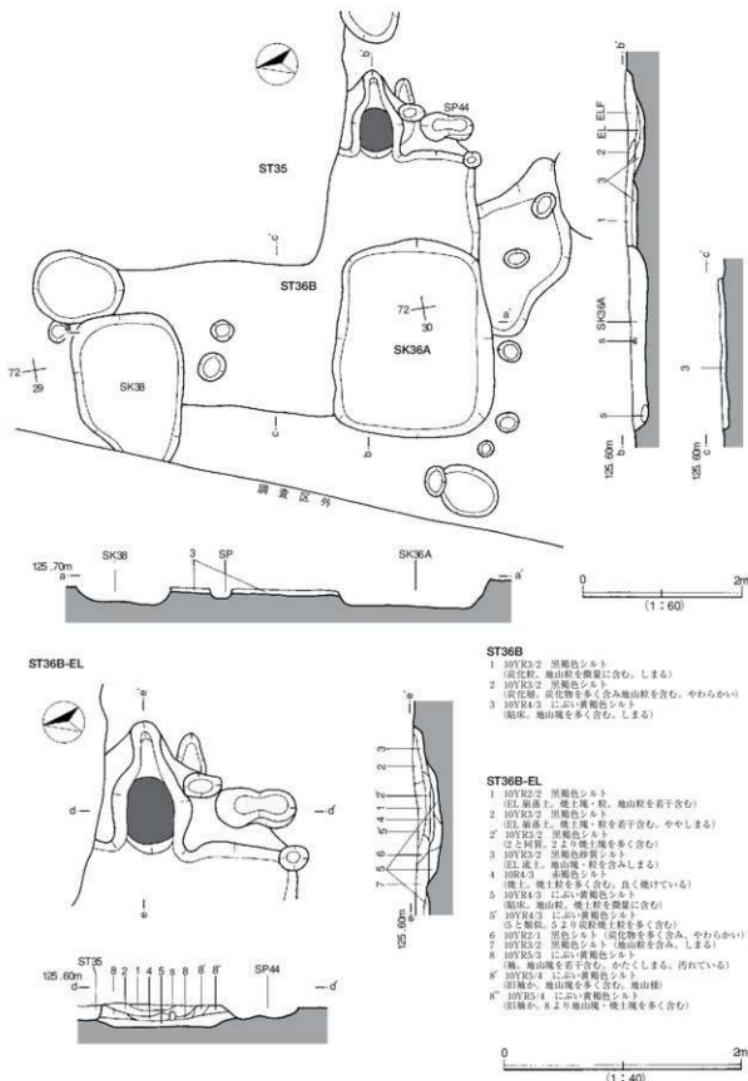
南壁東寄りの焼土と炭化層の広がりが認められ、西側が更に調査区外に延びる。煙道や袖部は不明だが、住居に伴うカマドの一部と考えられた。

出土遺物は、覆土からRP425などが出土する。実測したものは、須恵器壺(74-1)、同壺(74-2)[RP425]である。須恵器壺(74-1)は、口縁部欠損の須恵器壺で底径5.8cmの回転糸切り離しである。74-2は壺の頸部で緻密な撫摩波状文を廻らす。

時期は、出土遺物が少なく不明瞭だが、須恵器壺などから9世紀後半頃としておく。

#### S T 4 1 (第73図)

南区中央の西壁寄りの72-28グリッドに位置する。ST41は、西側をST39、南側をST35





第72図 ST36遺物実測図

に切られ、西側が更に調査区外に延びる。平面形は長方形を呈し、南北約4.0m以上、東西4.0m以上を測る。方位は東西軸でN-90°-Eを測る。床面は平坦で、貼床がなされており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面から床面までの深さは約17cmである。柱穴はEP1・21・22などが推測され、平面形は直径約22~36cmの円形で、床面からの深さは10~32cmを測る。他にもEP23・24などが検出されたが、規模などから支柱穴などと考えられる。

カマドが東壁の中央やや北寄りに設置される。煙道・袖部は短く外に張り出す形態で、煙道端から燃焼部の長さ約113cm、煙道幅約35cm、袖幅は約143cmを測る。焼土は径51~70cmだが、全体に不明瞭で、床面はあまり焼けていない。また、住居北東角に南北30cm×東西90cm程の焼土の広がりが検出された。

出土遺物は、カマドからRP424などが出土する。実測図は、須恵器壺(74-3)、土師器壺(74-4・5)である。須恵器壺(74-3)は、逆台形を呈する形態で、口縁部13cm、器高4cm前後と推測され、高径指数は31前後と考えられる。

土師器壺は、国分寺下層式期の有段丸底(74-5)と無段平底(74-4)があり、前者が前代の系譜を引く古相と考えられる。両者とも内面はミガキ調整で黒色処理する。外面は、74-5が段下位をケズリ、段上位は粘土紐痕を残し、軽いナデ調整などである。74-4の外面底部下端や底部は、手持ちヘラケズリを施す。

時期的には、ST35・39との重複関係や出土遺物から8世紀末~9世紀前葉頃と考えられる。

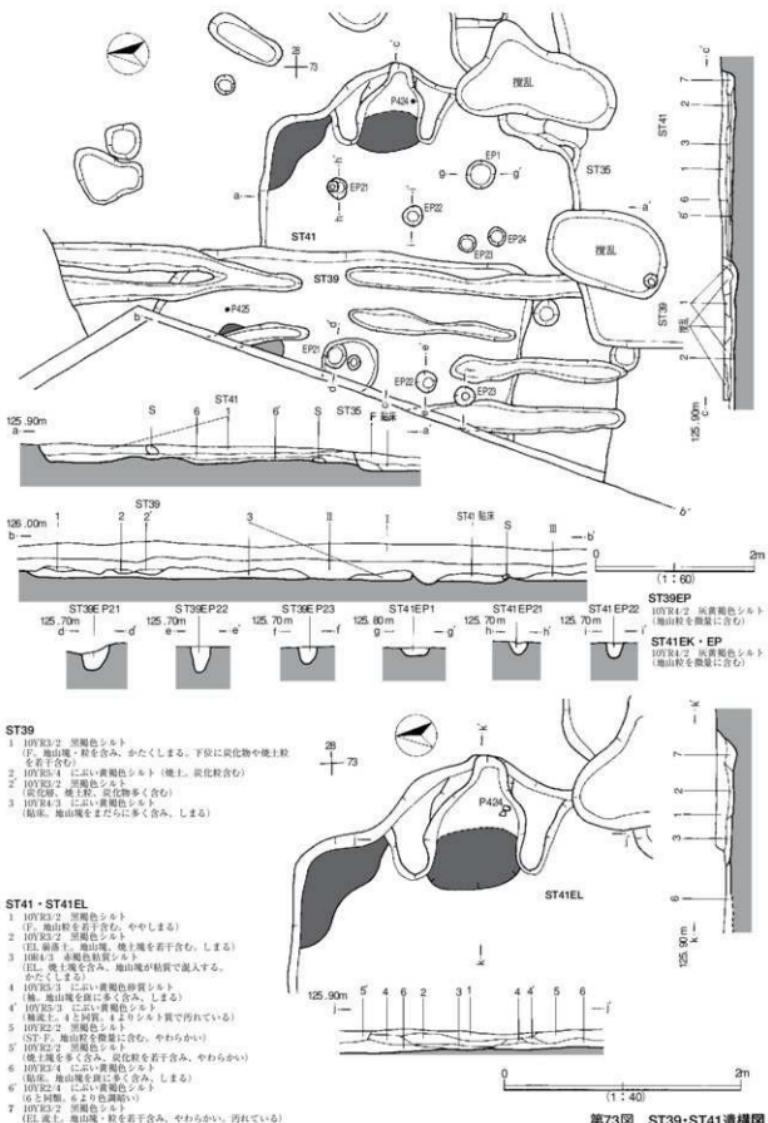
#### S T 4 2 A (第75図)

南区中央の東側、73-28グリッドに位置する。当初、ST42Aは、北壁ラインがST42B北壁とはほぼ同一のため單一の住居と考えていたが、土層などから重複関係にある住居2棟として区別した。ST42Aは、西側でST35・42B、東側でST42Cを切る。平面形は不整の方形を呈し、南北約2.6m、東西約2.8mを測る。方位は東西軸でN-90°-Eを測る。床面は平坦で、貼床がなされ、壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面から床面の深さは約12cmである。

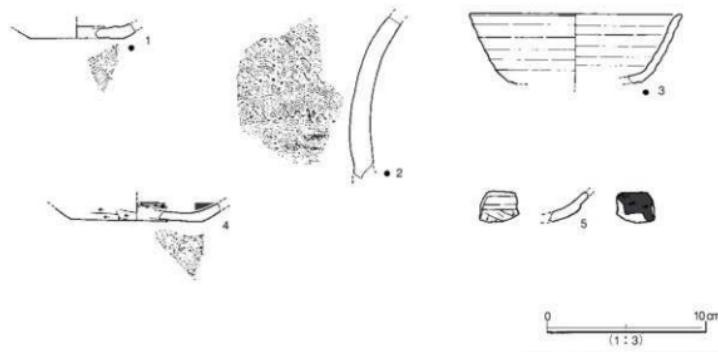
明確なカマドは認められなかったが、焼土が西壁中央に直交して、東西82×南北40cmの楕円形に広がる。また、床面中央部にも径51~66cmの不整円形に焼土が認められた。

出土遺物として登録したものはないが、須恵器高台壺(76-1)、同蓋(76-2)、土師器壺(76-3)などが出土し、実測図化した。76-1は、底径6.8cm程の底部回転糸切り離しである。

他に76-3の小形の土師器壺があり、口径10cm前後を測る。



第73図 ST39-ST41造構図



第74図 ST39-ST41遺物実測図

時期的には、遺物が少なく不明瞭だが、重複関係から9世紀後半以降と考えられる。

#### S T 4 2 B (第75図)

南区中央の73-28グリッドに位置する。ST42 Bは、西側を現代の暗架、東側をST42 A、南側をST35に切られる。カマド周辺のみの検出で、平面形は北壁や北西角から方形を基調とするのだろう。検出部分で南北1.3m以上×東西2.9m以上を測る。方位は東西軸でN-87°-Eを測る。床面は平坦で、貼床され、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面までの深さは約15cmである。

カマドが北壁西寄りに設置される。袖の上面は既に削平を受ける。煙道部は短い張り出しが僅かに確認され、煙道端から燃焼部は長さ約100cm、煙道幅約30cm、袖幅127cmを測る。焼土の広がりは径52cmである。

出土遺物ではなく、時期は不明であるが、重複関係から9世紀前半の段階であろう。

#### S T 4 2 C (第75図)

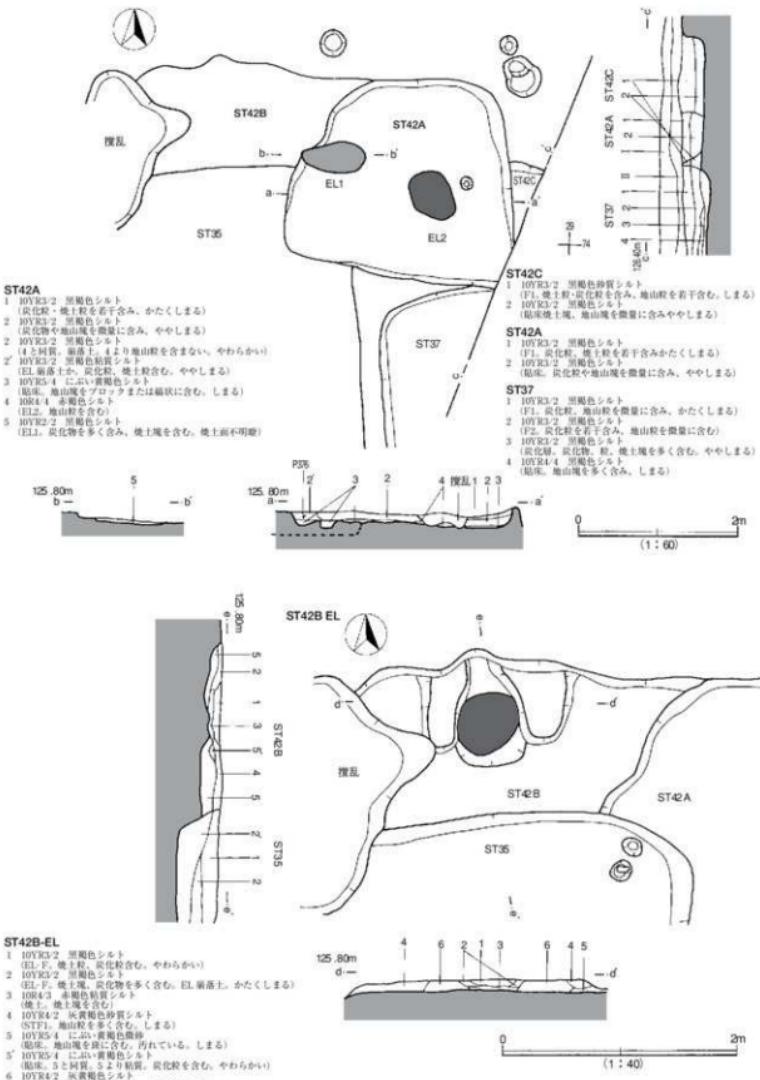
南区の中央の東壁際の73-74-28-29グリッドに位置する。ST42 Cは、床面の部分的な検出に留まり、西側をST42 A、南側をST37に切られ、東側の大半が調査区外に延びる。

平面形は不明で、南北1.1m以上を測る。方位は東西軸でN-87°-Eを測る。床面は平坦で、貼床がなされ、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面までの深さは約15-25cmである。カマドや柱穴は未検出で、出土遺物もなく、時期も不明である。

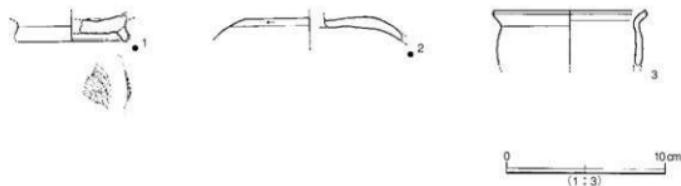
#### S T 6 8 (第77図)

南区の南東角の72-32グリッドに位置する。ST68は、上面を中世の溝状の掘り込みにより既に削平を受け、南側をST69、北側がSX67に切られ、東側が調査区外に延びる。

平面形は不明だが、西壁や北西角から方形を基調としたものと推測され、南北1.4m以上×東西1.8m以上を測る。方位は東西軸でN-87°-Eを測る。床面は平坦で、貼床がなされており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面から床面までの深さは約15cmである。主柱穴、カマド等は未検出である。出土遺物は、床面からRP204-206が出土する。小破片のため図示し



第75図 ST42A・B・C遺構図



第76図 ST42遺物実測図

なかったが、一部ST69と接合した土師器鉢(78-2:[RP206・207])がある。外面ハケメを施す。

時期は、遺物が少なく不明だが、重複関係などから一応9世紀代と捉えておく。

#### S T 6 9 (第78図)

**南区南東角** 南区の南東角、72-32グリッドに位置する。ST69は、上面を中世の溝状の掘り込みにより既に削平を受け、ST68と重複し、住居の南・東側の大半が調査区外に延びる。

平面形は不明だが、北壁や北西角の存在から方形を基調とし、南北0.8m以上×東西18m以上を測る。方位は東西軸でN-81°-Eを測る。床面は平坦で、貼床がなされ、壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面から床面までの深さは約30cmである。主柱穴、カマド及び小ピット等は未検出である。

出土遺物は、床面や覆土からRP207~210が出土する。実測したものは、赤焼土器壺(78-1:[RP209])がある。口径14cm前後、器高は10cm以上を測る小~中形品で、体部の綫位のケズリは中位から下半に施すものである。

時期的には、壺の口縁や体部形態から9世紀代と考えられる。

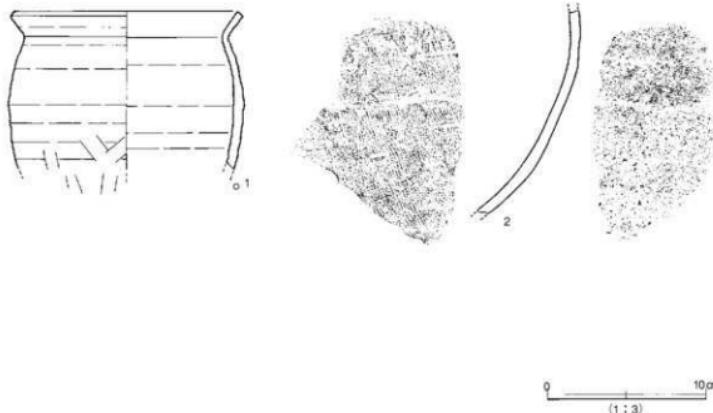
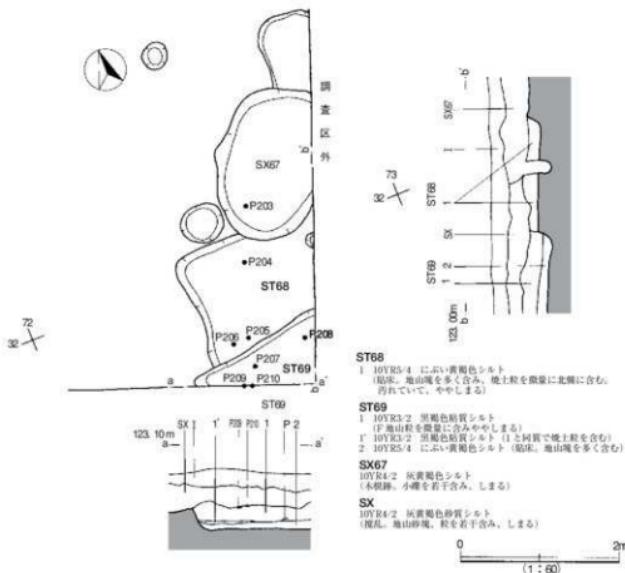
#### S T 7 0 (第79図)

**南区南西角** 南区の南西角、70-31グリッドに位置する。西側、南側が調査区外に延び、住居の北東角付近のみの検出である。当初、大形の土坑として登録したが、下層の貼床状の土層や形状、遺物の出土状況から竪穴住居と判断した。平面形は不明であるが、南北・東西とも0.9m以上を測る。床面は平坦で、貼床がなされており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面から床面までの深さは約15cmである。主柱穴、カマド等は未検出である。

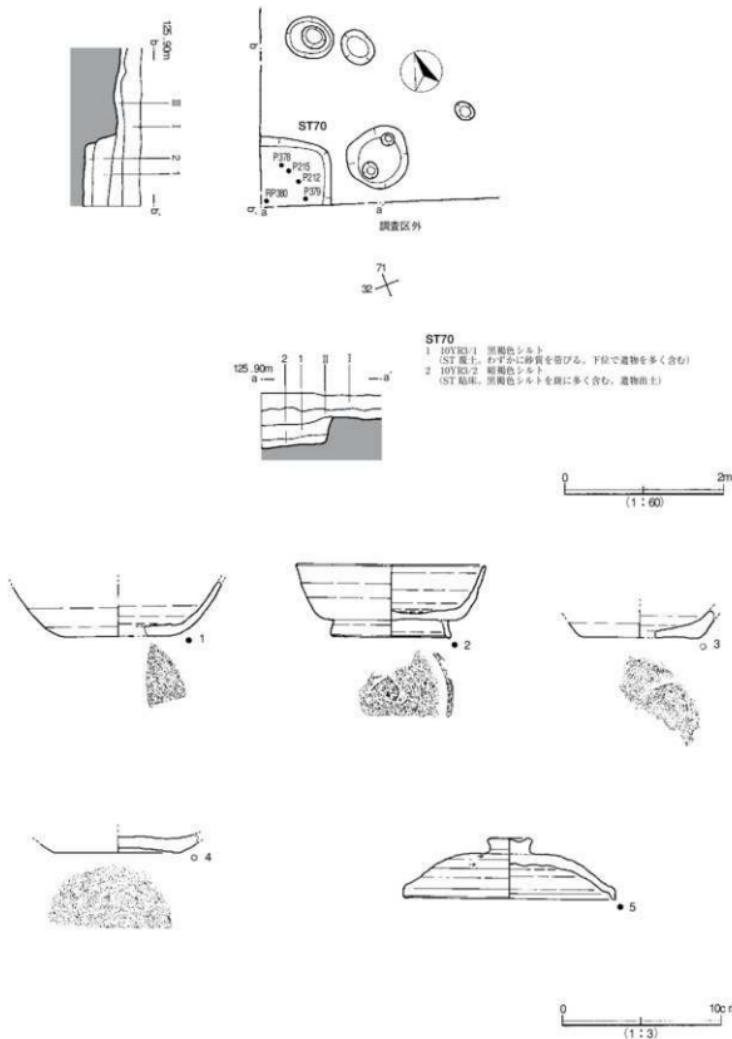
出土遺物は、床面などを主にRP212・215・378~380が出土している。実測可能なものとして、須恵器壺(80-1:[RP215]、須恵器高台壺80-2:[RP215]、赤焼土器壺80-3:[RP215]、4:[RP378]、須恵器蓋80-5:[RP380])がある。

須恵器壺(80-1)は、底径が7cmとやや小径で、逆台形を呈する形態で、底部切り離しはヘラ切である。同高台壺(80-2)は、壺部が箱~逆台形を呈し、高台がやや高い形態である。口径12cm前後、器高46cmの高径指数39である。高台の底径は7.5cm程度、底部切り離しはヘラ切である。なお、須恵器蓋(80-5)は、口径13cm前後で、器高は3.9cmの山笠形である。

赤焼土器壺(80-3)は、底径が7.2cmとやや小径で、回転系切である。赤焼土器壺(80-4)は、底径7.6cmのヘラ切りで、胎土軟質で酸化炎焼成の須恵器模倣と考えられる。時期的には、全体的な供膳器の形態から9世紀前半頃と考えられる。



第77図ST68・ST69造構図・第78図ST69遺物実測図



第79図ST70遺構図・第80図ST70遺物実測図

## 2 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、南区で2軒、北区で3軒検出した。両者とも調査区中央部の集中的な竪穴住居群の外側に分布し、南区では南西角付近、北区は南半部中央付近に分布する。南と北に分けて概述する。

### SB156（第81図）

南区南端部の71～31グリッド、IV層上面で検出された。南側が調査区外に延びる。建物規模は、 $2 \times 3$ 間以上で、梁行4.4m（約15尺）、桁行5.8m（約19尺）以上を測る。主軸方位はN-3°-Wである。柱間距離は、梁間で210（約7尺）～220（約7尺）cm、桁間で200（約7尺）～210（約7尺）cmある。柱穴構成は、北側梁間EP56・63・49、東側桁間EP49・50・51・53、西側桁間EP56・55・54である。

柱穴は、隅丸方形や不整円形を呈する。長軸で55～90cm、確認面からの深さは10～32cmを測り、壁は垂直か傾斜し底面は平坦である。柱穴の覆土は、暗褐色シルトや褐色シルトで地山塊や粒を多く含む。柱痕跡は径14～32cmの黒褐色シルトで地山粒を微量に含むものである。

出土遺物は、E P 50から土師器壺(82-1:[RP381])が出土し、有段丸底壺の形態で、外面段下半をヘラケズリ、内面をミガキ、黒色処理する。E P 54からは須恵器蓋(82-2)が出土し、上部平坦で、口径13cm以上を測る。

時期的には、遺物が少なく判断が難しいが土師器壺の形態などから8世紀中葉以降の段階と捉えておく。

### SB157（第83図）

南区南端部の71～30グリッド、IV層上面で検出された。西側が調査区外に延びる。また、北東角はST36に切られているため不明である。建物規模は、 $2 \times 3$ 間以上で、梁行3.4m（約11尺）、桁行3.6m（約12尺）以上を測る。主軸方位はN-89°-Eである。

柱間距離は、梁間で180（約6尺）、桁間で130（約4尺）～160（約5尺）cmある。柱穴構成は、東側梁間(ST36)・EP47・48、南側桁間EP46・72・66・48である。

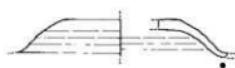
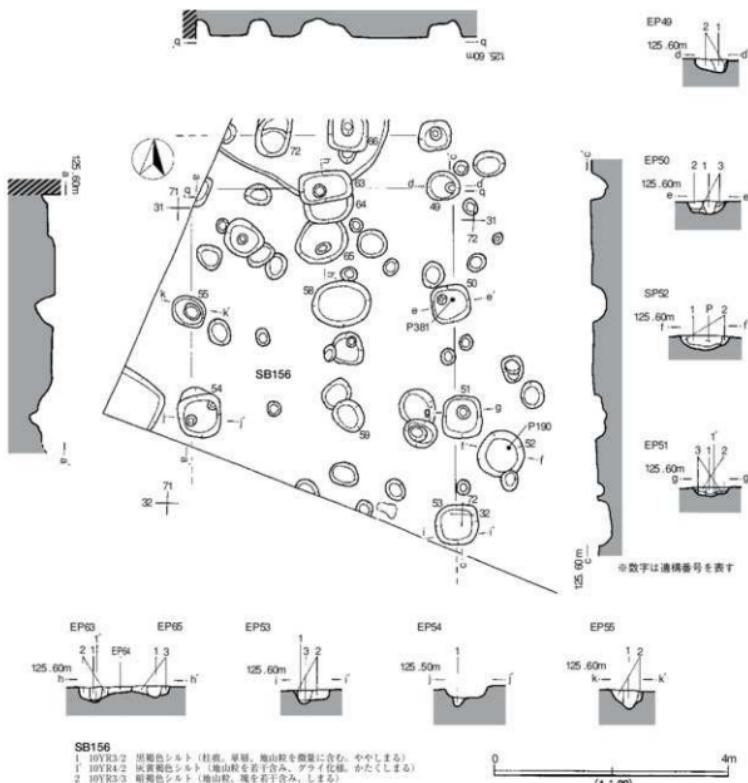
柱穴は、隅丸方形や不整円形を呈する。長軸で50～80cm、確認面からの深さは15～30cmを測り、壁は垂直か傾斜し底面は平坦である。柱穴の覆土は、暗褐色シルトや褐色シルトで地山塊や粒を多く含む。柱痕跡は径15～22cmの黒褐色シルトで地山粒を微量に含むものである。

出土遺物はなく、時期は不明だが、SB156と主軸を同じくする事から同時期頃の所産と考えられる。

### SB101（第84図）

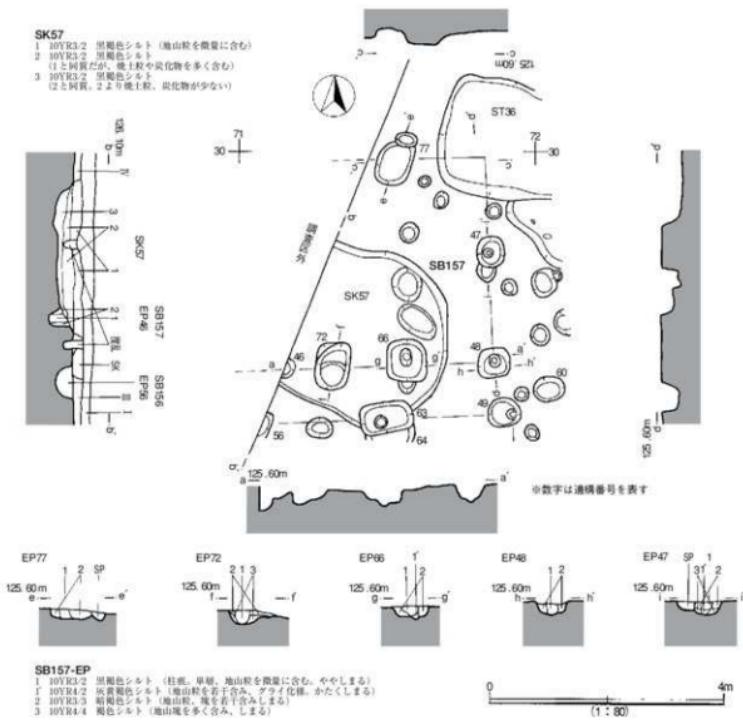
北区中～南部の75～20～21グリッド、IV層上面で検出された。西側が調査区外に延びる。建物規模は、 $2 \times 3$ 間以上で、梁行4.04m（約13尺）、桁行4.36m（約15尺）以上を測る。主軸方位はN-90°-Eである。柱穴構成は、東側梁間EP2・3・4、北側桁間EP1・2、南側桁間EP7・6・5・4である。柱間距離は、梁間で190（約6尺）～214（約7尺）cm、桁間で100（約3尺）～204（約6尺）cmある。

柱穴は、不整円形や不整梢円形を呈する。長軸で38～58cm、確認面からの深さは20～32cmを測り、壁は垂直か傾斜し底面は平坦である。柱穴の覆土は、黒褐色シルトや暗褐色シルトで地



0 10cm  
(1:3)

第81図SB156遺構図・第82図SB156遺物実測図



第83図 SB157遺構図

山シルトを多く含む。柱痕跡は径 14 ~ 18cm の黒褐色シルトで地山シルトを含むものである。

出土遺物がなく、時期の判断には窮するが、周辺の ST90 などと主軸を同じくする事から、

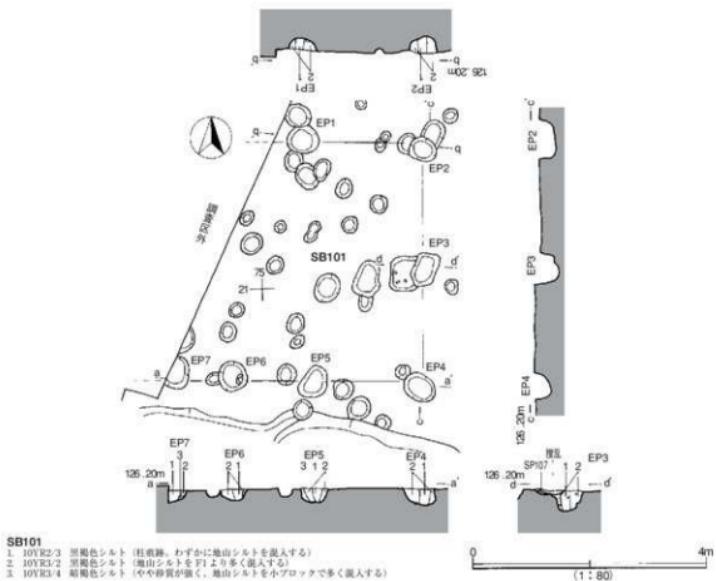
9世紀代としておく。

### S B 1 0 2 (第 85 図)

北区中～南部の 76 ~ 21 グリッド、IV 層上面で検出された。建物規模は、2 × 2 間で、梁行 4.42m (約 15 尺)、桁行 4.72m (約 16 尺) を測る。主軸方位は N-88° - W である。

柱間距離は、梁間で 200 (約 7 尺) ~ 234 (約 8 尺) cm、桁間で 178 (約 6 尺) ~ 244 (約 8 尺) cm ある。柱構成は、西側梁間 EP1・7・6、東側梁間 EP3・115・4、北側桁間 EP1・2・3、南側桁間 EP6・5・4 である。

柱穴は、不整規円形や隅丸形を呈する。長軸で 46 ~ 60cm、確認面からの深さは 10 ~ 32cm を測り、壁は垂直か傾斜し底面は平坦である。柱穴の覆土は、暗褐色シルトや黒褐色シ



第84図 SB101遺構図

ルトで地山シルトを含む。柱痕跡は径 14 ~ 18cm (EP115 のみ 40cm) の黒褐色シルトでわずかに粘性を帯びるものである。

出土遺物ではなく、時期は不明だが、隣接する SB101 と主軸方向がほぼ同じである事などから同時期の 9 世紀代としておく。

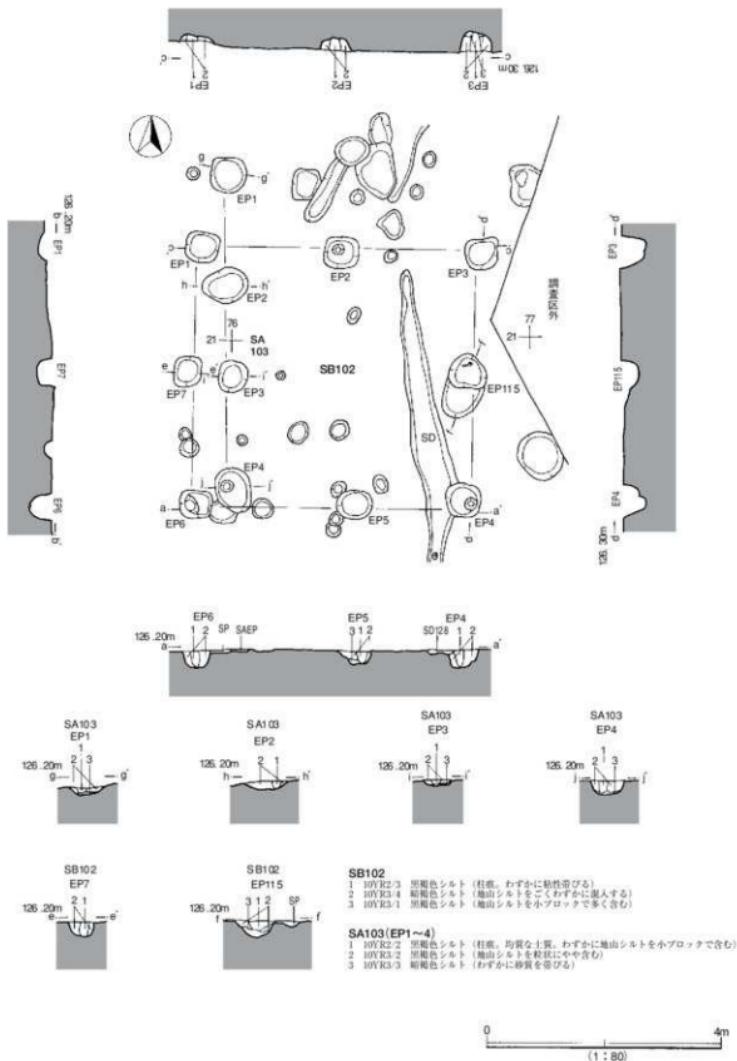
なお、SB102EP1 ~ 6 に平行して、SA103EP1 ~ 4 の柱列が検出された。柱間は、やや不規則ながら、柱痕跡が認められた。SB101 の付設される可能性もある。

#### S B 1 0 8 (第 86 図)

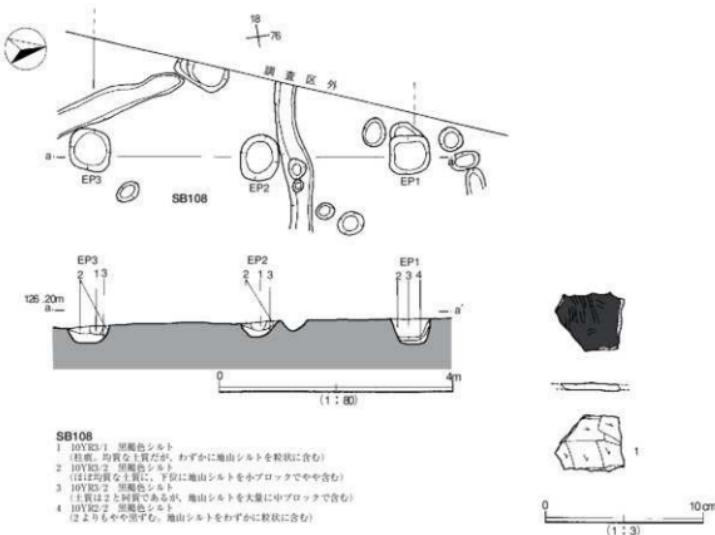
北区中央部の 76 - 17 ~ 18 グリッド、IV 面上面で検出された。建物規模は、梁行 2 間 5.44m (約 18 尺)、桁行は西側の調査区外に延びるため不明である。主軸方位は N-10° - E である。柱間距離は、梁間 262 (約 9 尺) ~ 282 (約 9 尺) cm である。柱穴構成は東側梁間 EP 1・2・3 である。

柱穴は、開丸方形や楕円形を呈する。長軸で 62 ~ 80cm、確認面からの深さは 22 ~ 42cm を測り、壁は垂直か傾斜し底面は平坦である。柱穴の覆土は、暗褐色シルトや褐色シルトで地山塊や粒を多く含む。柱痕跡は黒褐色シルトで地山粒を微量に含むものである。

遺物は、EP 1 から土師器鉢 (87-1) が出土した。外面ケズリ調整で、内面はミガキで黒色処理する。時期的には、遺物が少量で判然としないが、8 ~ 9 世紀代であろう。



第85図 SB102・SA103造構図



第86図SB108遺構図・第87図SB108遺物実測図

### 3 土坑跡・溝跡

土坑は、大形のものや明確に遺物が出土するものを登録した。調査区全体に分布するが、北半部では希薄である。また、堅穴住居群と堅穴住居群の間の空白地帯に特に分布する傾向が観えた。溝跡は、数量的に少なく、SD 9のみが明確に検出できた。主なものを記す。

#### SK 7古・新（第88図）

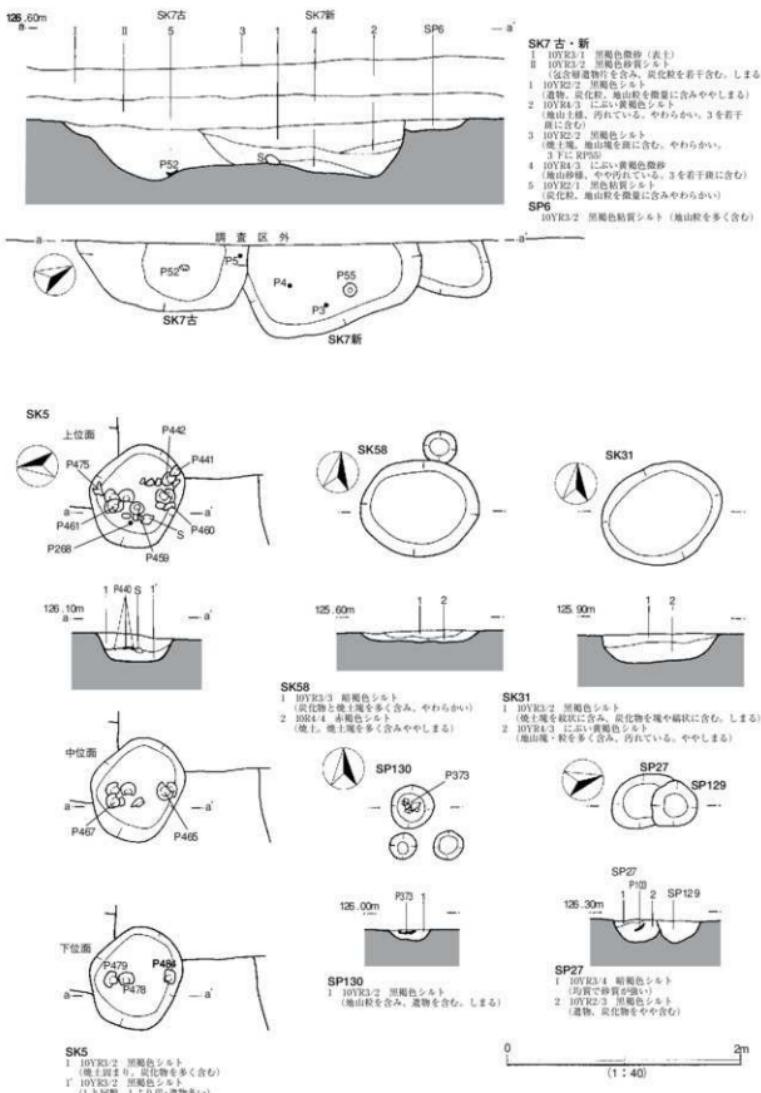
北区南半西壁付近の19～20～75グリッドに位置し、西側が調査区外に伸びる。当初、大重複する土坑

SK 7古は平面形直径南北142cmを測る不整円形である。床面はほぼ平坦で、壁は急斜し、確認面からの深さは32cmを測る。覆土は黒色粘質シルトで炭化粒や地山粒を微量に含む。

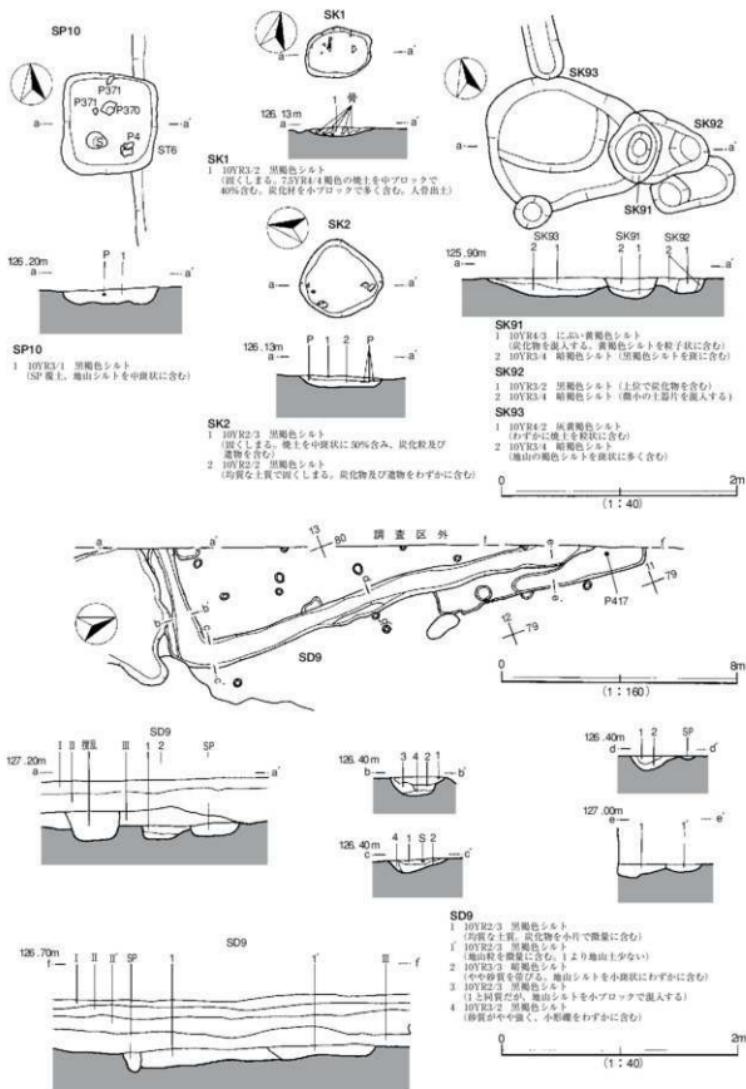
出土遺物は覆土からRP 5、底面付近からRP52が出土した。RP52は土師器坏で、口径14cmで、内面ミガキで黒色処理する。時期的には9世紀後半である。

SK 7新は平面形直径南北150cmを測る不整円形である。床面はほぼ平坦で、壁は急斜し、確認面からの深さは40cmを測る。覆土は黒褐色シルトや黄褐色シルトで炭粒、地山粒を含む。

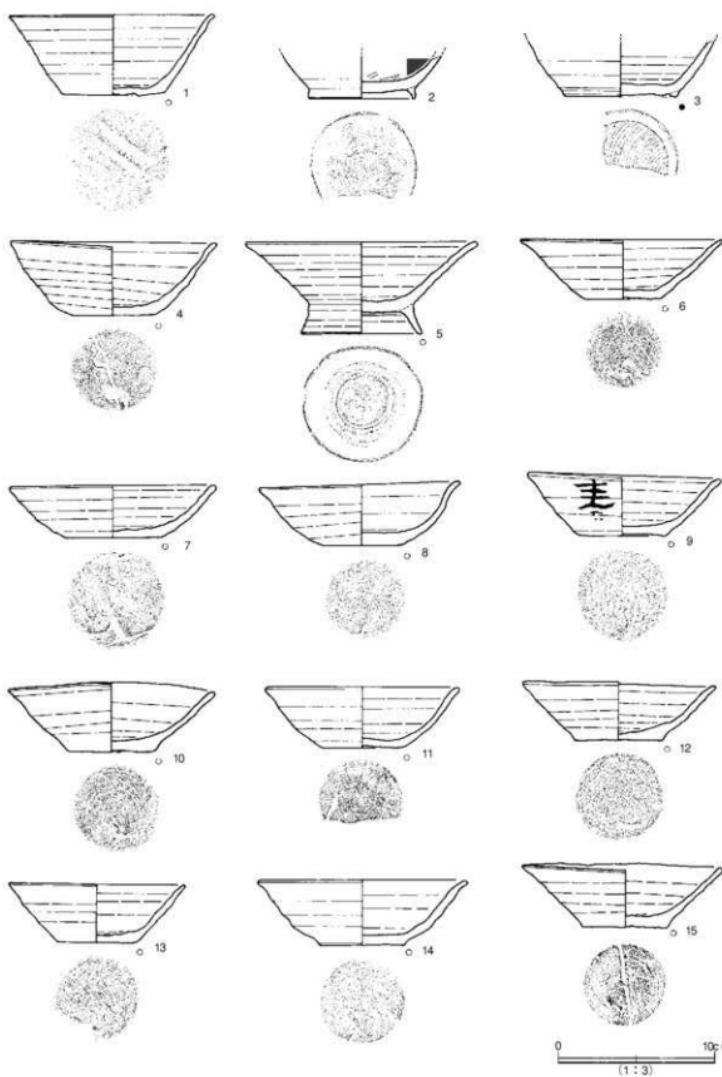
出土遺物は、覆土からRP3・4、底面からRP55が出土した。RP55は赤焼土器坏(91-5)で、縦やかな碗状を呈し、口径12.6cm、器高4.7cmの高径指数36をとる。底部は5cmと小径で、回転糸切りである。時期の詳細は不明だが、SK 7古との重複関係や出土遺物から9世紀後半だろう。



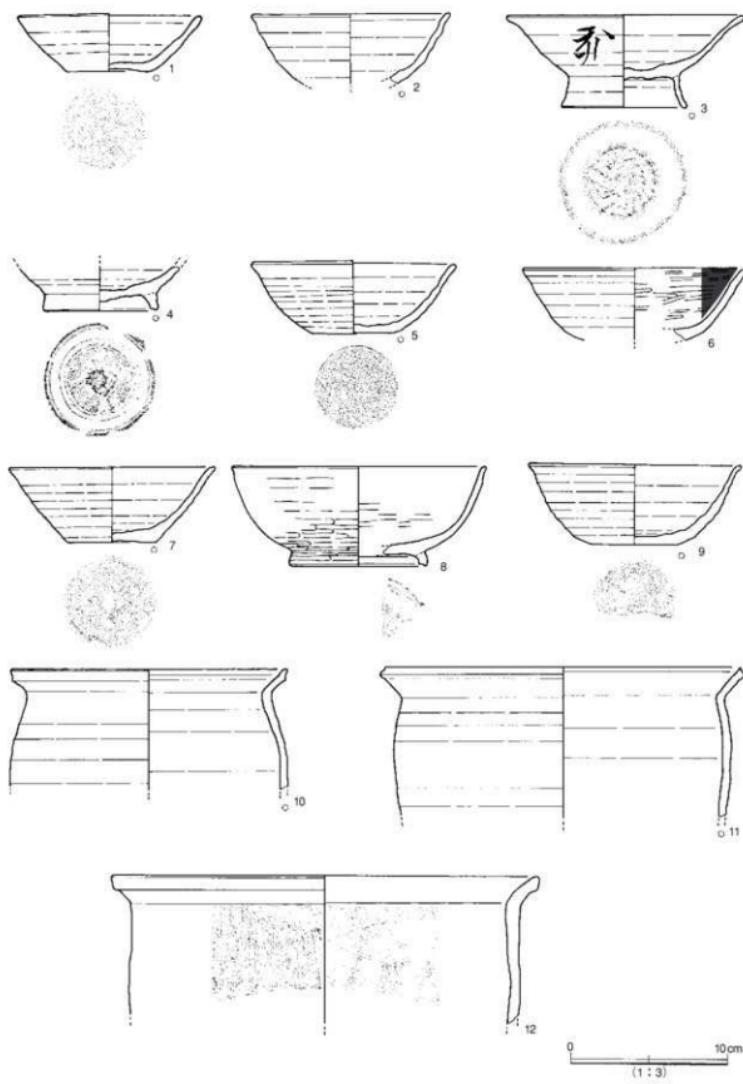
第88図 SK5-7-31-58・SP27-130構造図



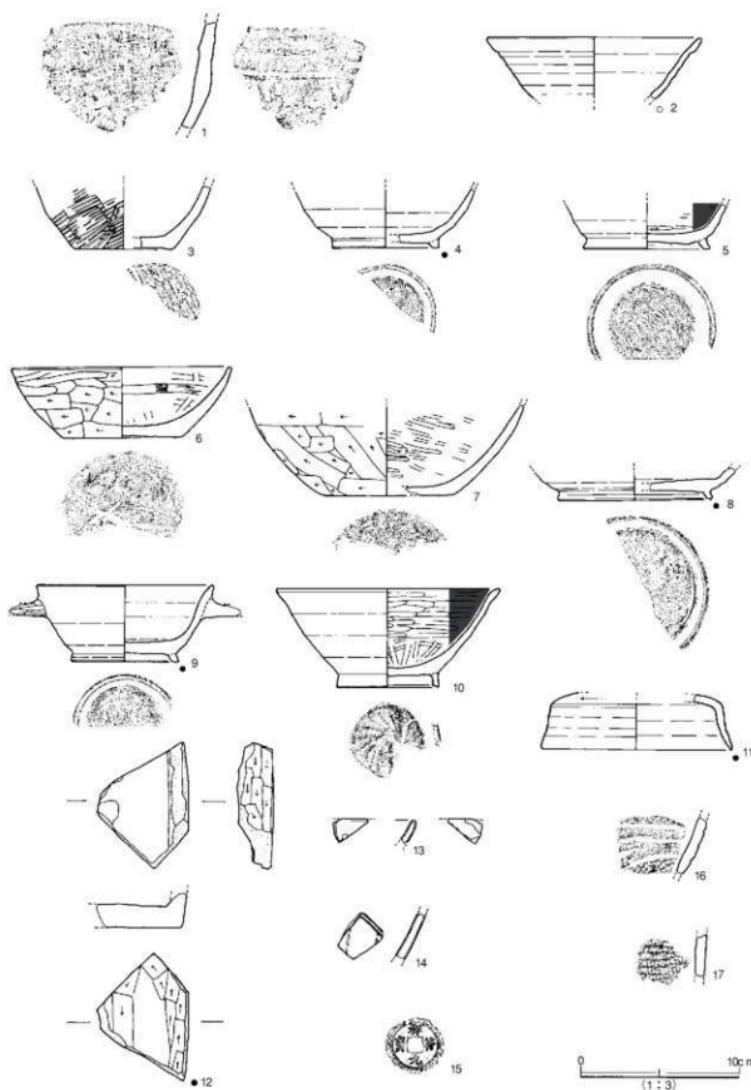
第89図 SK1・2・93・SP10・SD9造構図



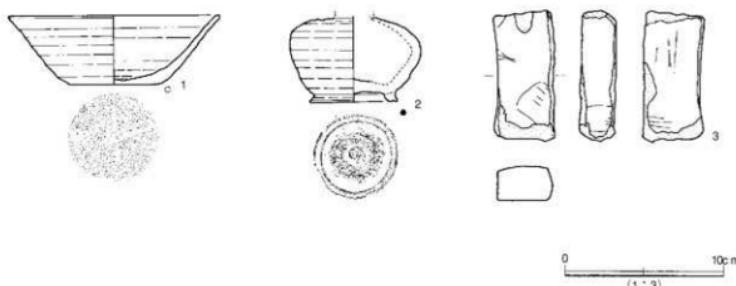
第90図 遺構出土遺物実測図(1)



第91図 遺構出土遺物実測図(2)



第92図 遺構・グリッド出土遺物実測図(3)



第93図 調査区出土遺物実測図

## SK 5 (第88図)

北区南端の23 - 75グリッドに位置する。ST85・90・100Cを切る。平面形は直径長軸90cm、短軸72cmを測る不整円形である。床面は平坦で、壁は急斜し、確認面からの深さは22cmを測る。覆土は黒褐色シルトで焼土や多量の炭化物を含む。

**埋 納 遺 構 か** 遺物は、赤焼土器の供膳器を中心に、一括性が高く重なりあって出土した。环類の出土状況から埋納遺構の可能性もある。

覆土上位からRP268・440・441・442・459・460・461、中位からRP465・466・467、下位からRP478・479・484が出土した。

**赤焼土器環類の一括出土** 全体的には、国化したもので赤焼土器環(12点)・高台環(3点)のみで構成される。赤焼土器環(90 - 6 ~ 15・91 - 1・2)は、全体に歪みが大きいものが多いが、浅い碗状や、体部が口縁部にかけて直線的に外傾する形態で、口径12 ~ 13cm前後で、器高4cm前後を測るものが多い。高径指数で30 ~ 32の範疇に収まる。底径は、5cm前後測り、底部切り離しは全て回転糸切りである。一部、90 - 7の更に浅身で高径指数27と皿状を呈するものや、90 - 10・13の高径指数が34前後のやや深身のものもある。

赤焼土器高台環は、短い高台(91 - 4)と所謂足長高台(90 - 5・91 - 3)がある。器形の分かる足長高台の一群は、口径14.5 ~ 14.8cm、器高5.8 ~ 5.9cmと近似し、高径指数も40前後をとる大振りなものである。底径は7.6 ~ 7.8cmとほぼ同じだが、底部切り離しは、回転糸切り(90 - 5)と菊花状ナデ(91 - 3)と異なる。91 - 4は、高台が短いが厚手で、底部切り離しは91 - 3と同様に菊花状ナデである。

なお、90 - 9・91 - 3は、体部外面に字種不明の墨書きがされる。

時期的には、10世紀初頭の火山灰を含むST159の赤焼土器より高径指数などが全体に低く、足長高台などの新相の出現などから、それ以降の10世紀中~後葉頃と考えられる。

## SK58 (第88図)

南区の南端西側、31 - 71グリッドに位置する。SB156内にある。平面形は直径長軸100cm・短軸82cmを測る楕円形である。床面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは10cmほどを測る。覆土は、暗褐色シルトを主とし、炭化物と焼土塊を多く含み、周囲が掘立柱建物跡の柱穴群の中で特徴的である。時期は不明だが、覆土はSB群と同じである。

**SK31 (第 88 図)**

南区中央の 28 - 73 グリッドに位置する。平面形は直径長軸 104cm・短軸 84cm を測る不整円形である。床面は平坦で、壁は急斜し、確認面からの深さは 24cm ほどを測る。覆土は黒褐色シルトや黄褐色シルトで焼土塊や炭化物・地山粒を含む。ST35 周辺の堅穴住居ブロックと ST15 周辺の堅穴住居ブロックの中間地帯にあり、覆土が特徴的である。時期は古代である。

**SP130 (第 88 図)**

南区北半、26 - 75 グリッドに位置する。平面形は直径長軸 38cm・短軸 36cm を測る円形である。床面は平坦で、壁は緩やかで、確認面からの深さは 8cm ほどを測る。覆土は黒褐色シルトの単層で地山粒を含む。出土遺物は、赤焼土器甕 (RP373) が出土した。赤焼土器甕は、破片ながら口径約 17cm(91 - 10) と口径約 22cm(91 - 11) が認められる。9世紀代であろう。

**SP27 (第 88 図)**

北区中央、17 - 76 グリッドに位置し、SP27 を SP129 が切る。平面形が直径 45cm の円形を呈し、床面はほぼ平坦で、壁は急斜し、確認面からの深さは 20cm を測る。覆土は暗褐色シルトや黒褐色シルトで、炭化物を含む。出土遺物は、赤焼土器甕 (91 - 9 : [RP103]) が出土した。91 - 9 は、碗状で、口径 13.4cm、器高 5.1cm の高径指数 38 の身の深いタイプである。時期は 9世紀後半であろう。

**SP10 (第 89 図)**

北区中央、19 - 76 グリッドに位置し、ST 6 を切る。平面形は直径長軸 85cm・短軸 80cm を測る隅丸方形である。床面は平坦で、壁は急斜し、確認面からの深さ 12cm ほどを測る。覆土は、黒褐色シルトの単層で地山シルトを含む。赤焼土器や土師器の甕などの (91 - 7 : [RP4-370]・8 : [RP371]) が出土する。図示した赤焼土器甕 (91 - 7) は、口径 13cm、器高 4.8cm の高径指数 37 をとる身の深い小振りなものである。土師器高台甕 (91 - 8) は、口径約 16cm と推定され、器高 6.4cm で高径指数は 41、底径 8.5cm をとる大形品で、内外面ミガキ調整である。時期は赤焼土器甕の形態からなどから 10世紀前半と考えたい。

**SK 1 (第 89 図)**

北区南半、22 - 76 グリッドに位置する。ST90 覆土上面での検出である。平面形は直径長軸 54cm・短軸 43cm を測る楕円形である。床面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がり、確認面からの深さ 8cm ほどを測る。覆土は黒褐色シルトで焼土塊を多く含む。多数の骨片と赤焼土器甕 (90 - 1)・土師器高台甕 (90 - 2) が出土した。90 - 1 は、口径約 13cm、器高 5cm の高径指数 39 と深身の甕である。90 - 2 はロクロ土師器で、底径 6.6cm である。時期は、重複関係から ST90 より新しく、遺物も破片で覆土に混入した可能性もあり、9世紀後半以降である。

焼土と骨片出土

**SK2 (第 89 図)**

北区南半、23 - 76 グリッドに位置する。SK 1 と同様の焼土を含む形態で、ST90 覆土上面の検出である。平面形は直径長軸 72cm・短軸 68cm を測る不整円形である。床面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がり、深さ 10cm ほどを測る。覆土は黒褐色シルトで焼土や炭化物を含む。

焼 土 遺 構

出土遺物は、須恵器高台甕 (90 - 3)、赤焼土器甕 (90 - 4) 片等が出土した。90 - 3 は、底径 7.2cm の短い高台が付く。90 - 4 は口径約 13cm、器高 4.8cm の高径指数 38 で、深身の緩やかな形態である。底径は 5.2cm と小径で回転糸切りである。時期は 9世紀後半以降であろう。

**SK93 (第 89 図)**

南区中央、27 - 73 ~ 74 グリッドに位置し、SK93 を SK91 が切る。SK93 は平面形が直径 110cm 前後の不整円形を呈し、床面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは 15cm を測る。覆土は暗褐色シルトを主とし、焼土粒や地山粒を含む。大形の土坑で、ST35 周辺の住居群と ST15 周辺の住居群との間にあら。遺物はないが、覆土は古代である。

**SD9 (第 89 図)**

北区北端、11 ~ 14 - 77 ~ 78 グリッドに位置する。溝の幅は、40 ~ 50cm で、南北方向に走行し、南側の 14 - 79 グリッド付近で西に直角に屈曲、北側の 11 - 79 グリッド付近で西に屈曲し、調査区外に延びている。南北 13m、東西 4m 以上を測る。断面形は逆台形や U 字型を示し、確認面からの深さは 10 ~ 16cm を測る。覆土は、黒褐色シルトや暗褐色シルトで炭化物や地山粒・地山シルトを含む。出土遺物は、土師器甕片 (92 - 1 : [RP417]) があり、内外面ハケメを施す。時期は遺物が少ないが、覆土は古代である。区画施設の可能性がある。

**S G 32 河川跡 (第 4・5 図)**

**南区の河川跡** 南区の北東角、25 ~ 26 - 75 ~ 76 グリッドに位置する。SG32 河川跡は、北側が現道に切れられ、南・東側が調査区外に延び、北東から南に走行する。検出長で約 13m 以上を測り、幅は約 4m 以上を測る。河床はほぼ平坦で、中央部は砂礫層になる。岸は緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは 30cm 前後で、覆土は暗褐色砂質シルトを主とする。

出土遺物は、土師器や須恵器の环類 (92 - 6 : [RP2] - 92 - 8 : [RP443]) などが出土する。土師器では、無段平底の浅身 (92 - 6) と深身で法量の大きい (92 - 7) ものがある。92 - 6 は、口径約 14cm、器高 4.5cm で高径指数 33 である。底径 7.4cm 程で、底部ヘラケズリ調整である。

外側部中一下半がヘラケズリ、口縁部付近にミガキを施す。内面はミガキと一部ハケメやナデ調整する。92 - 7 は底径 8 cm 前後を測り、外側ヘラケズリ、内面ミガキで鉢状を呈する。

須恵器高台坏 (92 - 8) は、底径 9.6cm と大きく、底部切り離しはヘラ切である。全体に古相の一群が看取られ、概ね 8 世紀末頃には河川は埋没するようである。

**4 その他の出土遺物 (第 92・93 図)**

上記以外の遺構や調査区壁、包含層などの出土土器群で特徴的なものをまとめて記しておく。

古代では、92 - 9 が須恵器双耳付高台坏で、口径 11cm、器高 4.9cm の高径指数 44 を示す。底径は約 7 cm で、ヘラ切である。92 - 11 は、須恵器蓋で、平坦な天井部から斜めに縁部が付く形態で、口径約 12cm を測る。93 - 2 は須恵器小壺で、器高 5.4cm 以上を測る。

**中世** 他に古代と時期は異なるが、中世の遺物として、92 - 13・14 の青磁がある。小片ながら 92 - 14 は蓮弁文と考えられ、13 ~ 15 世紀頃であろう。また、92 - 15 は、宋銭の「祥符元寶」(初鑄 1009 年)で、概ね上記中世段階に対応したものであろう。

**縄文** 92 - 16・17 は縄文土器で、92 - 16 は縄文時代晩期中葉の大洞 C 1 ~ 2 式である。92 - 17 は、小破片で器形は不明だが、薄手で緻密な地文 L R で、92 - 16 とはほぼ同じ、縄文時代晩期頃のものと考えられる。

表1 遺物観察表(1)

序号	実測 寸法 mm	材 質	器 種	1口径	底径	高さ	底部切削・調整	外　面		内　面		造　模	文　印	備　考
								左	右	左	右			
1	12	陶器	片	141.0	90	46	脚部切削・ケリ	△P12	△P10	ST6-EL	RP367			
2	11	陶器	片	131	90	41	ハラ削り	△P11	△P10	ST6-EL	RP368			
3	9	陶器	片	144	80	36.5	脚部削り	△P9	△P10	ST6-F29-46	RP17-31			
4	18	陶器	片	130.0	66	30		△P18	△P10	ST6X	RP407			
5	16	陶器	高台片	130	96	43	ハラ削り	△P16	△P10	ST6Y	RP361			
6	13	陶器	高台片	120	84	47	ハラ削り	△P13	△P10	ST6	RP384-46			
7	17	陶器	高台片	111	80	34		△P17	△P10	ST6-F22				
8	14	赤陶土	高台片	172	160	36	脚部削り	△P14	△P10	ST6-EL	RP364			
9	20	陶器	片	144	54	43	脚部削り	△P20	△P10	ST6-MC3	RP445	黑色化		
10	15	陶器	高台片	112	43	44	脚部削り	△P15	△P10	ST6	RP440	黑色化		
11	20	陶器	片	163	30			△P20	△P10	ST6Y	RP36			
12	22	陶器	片	194	36			△P22	△P10	ST6X	RP36			
13	24	陶器	片	204	180			△P24	△P10	ST6-EL	RP409			
14	22	陶器	片	205	180			△P22	△P10	ST6-EL	RP408			
15	23	陶器	片	184	51	49	脚部削り	△P23	△P10	ST6-EL	RP409			
16	21	陶器	片	184	51	43	脚部削り	△P21	△P10	ST6F	RP409			
17	10	陶器	片	182	47.5	40	脚部削り	△P10	△P10	ST6Y	RP410			
18	19	陶器	小盤	127	28.0			△P19	△P10	ST6-圓盤中央	RP310			
19	19	陶器	小盤	127	28.0			△P19	△P10	ST6				
20	8	陶器品	刀子	36	12	3								
21	32	陶器	片	137	90	32	ハラ削り	△P32	△P10	ST6	RP343			
22	37	赤陶土	片	132	61	33	脚部削り	△P37	△P10	ST6-EL	RP228-316			
23	34	赤陶土	片	138	51	49	脚部削り	△P34	△P10	ST6Y-EL	RP229			
24	38	赤陶土	片	129	55	48	脚部削り	△P38	△P10	ST6	RP223			
25	36	赤陶土	片	141.0	42			△P36	△P10	ST6-EL	RP228-231			
26	40	赤陶土	片	146	44.0			△P40	△P10	ST6-EL	RP216			
27	26	赤陶土	片	131	30	20	脚部削り	△P26	△P10	ST6Y	RP227			
28	30	赤陶土	片	100	26	20	脚部削り	△P30	△P10	ST6Y	RP228			
29	210	赤陶土	高台片	148	74	41	脚部削り	△P210	△P10	ST6EL-ST600系集	RP222			
30	30	赤陶土	高台片	136	65	40	脚部削り	△P30	△P10	ST6-EL	RP314-215	黑色化		
31	22	赤陶土	高台片	144	63	41	脚部削り	△P22	△P10	ST6-EL	RP214	黑色化		
32	31	赤陶土	片	134	56			△P31	△P10	ST6Y	RP311			
33	1	陶器	片	226	260			△P1	△P10	ST6				
34	28	陶器	片	216	184			△P28	△P10	ST6-EL	RP211			
35	27	陶器	片	184	65			△P27	△P10	ST6-EL	RP458			
36	29	陶器	片	143	60			△P29	△P10	ST6				
37	9	陶器品	刀子	162	80	10					ST6			
38	8	陶器	高台片	138	70	66	脚部削り	△P8	△P10	ST6-EL	RP406			
39	2	赤陶土	片	133	54	36	脚部削り	△P2	△P10	ST6	RP463			
40	131	陶器	片	120	42	36	脚部削り	△P131	△P10	ST6	RP308			
41	90	陶器	片	133	60	34	脚部削り	△P90	△P10	ST6A	RP400			
42	137	陶器	高台片	122	72	47	脚部削り	△P137	△P10	ST6A-EL	RP453			
43	138	陶器	高台片	126	72	47	脚部削り	△P138	△P10	ST6	RP463			
44	137	陶器	高台片	114.0	50	38	ハラ削り	△P137	△P10	ST6	RP223			
45	132	陶器	片	133	66	37	脚部削り	△P132	△P10	ST6A-EL	RP456			
46	140	陶器	片	118	42	36	脚部削り	△P140	△P10	ST6A	RP401			
47	134	陶器	片	118	42	36	脚部削り	△P134	△P10	ST6A	RP217-254			
48	130	陶器	片	150	19	39	脚部削り	△P130	△P10	ST6A	RP307			
49	143	赤陶土	片	146	19	39	脚部削り	△P143	△P10	ST6	RP279			
50	133	陶器	高台片	162	29			△P133	△P10	ST6A	RP306	黑色化		
51	140	陶器	片	130	70	66		△P140	△P10	ST6	RP401			
52	141	陶器	片	127	67			△P141	△P10	SL28	RP210			
53	152-1	陶器	片	224	64			△P152-1	△P10	ST6	RP214			
54	134	陶器	片	113	37			△P134	△P10	SL29	RP221			
55	132-2	陶器	片	116	37			△P132-2	△P10	ST6	RP224			
56	136	陶器	片	162	42			△P136	△P10	ST6A-EL	RP477			
57	131	陶器	片	162	42			△P131	△P10	ST6A	RP224			
58	130	陶器	片	133	62	44	脚部削り	△P130	△P10	SL28	RP211			
59	132	陶器	片	166	62			△P132	△P10	SL28	RP219			
60	1342	赤陶土	片	133	62			△P1342	△P10	SL28	RP211			
61	140	陶器	片	133	73			△P140	△P10	ST7A	RP218			

表2 遺物観察表(2)

種類 番号	文書名	種類	器種	口径	底径	高さ	底部切離・調整	外 壁	内 壁	遺 情	実 I <sup>a</sup>	備 考
12	鉢-2	陶器品	刀子	46	12	10		外ラミ	内ラミ	ST7AA-031	IP442	
1	瓶	陶器品	高台附			(20)	ハラ切離	外ラミ	内ラミ	ST700-EP1-ST700C	IP500	
2	801	土器類	高台附	120	36	36	無規則	外ラミ	内ラミ	ST700-EP1-ST706	IP446	黒地光
3	74	陶器品	瓶	52	16	16	無規則	外ラミ	内ラミ	ST700-ED1	IP431	
4	29	陶器品	瓶	31	13	13	無規則	外ラミ	内ラミ	ST700-ED1	IP432	
5	261	陶器品	瓶	49	16	16	無規則	外ラミ	内ラミ	ST700-ED1	IP433	
6	94	陶器品	瓶	39	16	16	無規則	外ラミ	内ラミ	ST700-ED1	IP472	
7	207	陶器品	瓶	120	32	32		外ラミ	内ラミ	ST700	IP475	
8	33	陶器品	瓶	130	32	32		外ラミ	内ラミ	ST700	IP474	
9	27	陶器品	高台附	70	20	20		外ラミ	内ラミ	ST700-ED1	IP394	
10	60	陶器品	高台附	74	31	24	菊花彫	外ラミ	内ラミ	ST700-ED1	IP372	
11	72	陶器品	高台附	120	37	36	無規則	外ラミ	内ラミ	ST700-ST700C	IP445	内側円柱(125.6mm)
12	55	土器類	瓶	160	32	32		外ラミ	内ラミ	ST700-EL	IP474	
13	26	土器類	瓶	160	32	32		外ラミ	内ラミ	ST700-EL	IP468	
14	92	土器類	瓶	120	30	30		外ラミ	内ラミ	ST700-EL	IP469	
15	97	土器類	瓶	120	32	32		外ラミ	内ラミ	ST700	IP480	
16	40	土器類	瓶	200	62	62		外ラミ+ナラ	内ラミ	ST700-EP12B	IP471	
17	97	陶器品	高台附	131	39	39	無規則	外ラミ	内ラミ	ST700	IP493-494	
18	96	陶器品	高台附	144	79	68	無規則	外ラミ	内ラミ	ST700-EL	IP495	
19	84	陶器品	高台附	164	84	84	無規則	外ラミ	内ラミ	ST700	IP500	
20	808	陶器品	瓶	140	82	82		外ラミ	内ラミ	ST700	IP504	
21	303	陶器品	瓶	140	82	82		外ラミ	内ラミ	ST700	IP505	
22	79	土器類	瓶	127	62	62		外ラミ+ナラ	内ラミ	ST700	IP506	
23	809	土器類	瓶	130	60	60		外ラミ	内ラミ	ST700-EL	IP507	
24	802	土器類	瓶	130	62	62		外ラミ	内ラミ	ST700-EL	IP508	
25	311	土器類	瓶	140	62	62		外ラミ	内ラミ	ST700-EL	IP509	
26	107	土器類	瓶	140	62	62		外ラミ	内ラミ	ST700	IP510	
27	130	土器類	瓶	140	62	62		外ラミ	内ラミ	ST700	IP511	
28	804	土器類	瓶	140	62	62		外ラミ	内ラミ	ST700	IP512	
29	130	陶器品	瓶	140	62	62		外ラミ+ナラ	内ラミ	ST700	IP513	
30	804	土器類	瓶	140	62	62		外ラミ	内ラミ	ST700-EL	IP514	
31	800	陶器品	瓶	130	62	62		外ラミ	内ラミ	ST700	IP515	
32	鉢-10	陶器品	刀子	34	14	4		外ラミ	内ラミ	ST700	IP516	
33	80	陶器品	刀子	140	84	20	ハラ切離	外ラミ	内ラミ	ST700-EP12A	IP491	
34	76	陶器品	刀子	132	80	20	ハラ切離	外ラミ	内ラミ	ST700	IP492	
35	128	陶器品	刀子	140	80	20	ハラ切離	外ラミ	内ラミ	ST700-ST706	IP493	
36	123	陶器品	刀子	130	80	20	ハラ切離	外ラミ	内ラミ	ST700-EP12	IP494	
37	122	陶器品	高台附	166	80	80	静止状態→アーチ	外ラミ	内ラミ	ST700	IP495	
38	120	陶器品	刀子	130	80	20	無規則	外ラミ	内ラミ	ST700-EL	IP496	
39	123	陶器品	高台附	81	44.5	24	菊花彫	外ラミ	内ラミ	ST700	IP497	
40	126	陶器品	蓋	136	29	29		外ラミ+内ラミ	内ラミ	ST700-ST700B	IP498	
41	129	陶器品	蓋	120	25.5	25.5		外ラミ	内ラミ	ST700	IP499	
42	90	陶器品	瓶	100	58	61	無規則	外ラミ	内ラミ	ST700	IP500	
43	110	陶器品	瓶	160	70	70		外ラミ	内ラミ	ST700-ST700B	IP501	錫箔糊
44	123	陶器品	瓶	160	80	80		外ラミ	内ラミ	ST700	IP502	
45	118	陶器品	瓶	160	80	80		外ラミ	内ラミ	ST700	IP503	
46	124	土器類	瓶	160	80	80		外ラミ	内ラミ	ST700	IP504	
47	132	陶器品	瓶	120	68	68		外ラミ+ナラ	内ラミ	ST700-EP1	IP505	
48	194	陶器品	瓶	140.5	69	134		外ラミ+内ラミ	内ラミ	ST700	IP506-410	
49	229	陶器品	瓶	120	68	68		外ラミ+ナラ	内ラミ	ST700-EL	IP507	
50	127	土器類	瓶	174	80	80		ナラ、鶴の彫刻	内ラミ	ST700-EL-EP12A ST700C-EP12B	IP508	
51	227	土器類	瓶	120	68	68		ナラ+ナラ	内ラミ	ST700	IP509-301	
52	118	土器類	瓶	160	68	68		ナラ	内ラミ	ST700	IP510	
53	113	陶器品	瓶	160	68	68		ナラ	内ラミ	ST700	IP511	
54	204	陶器品	瓶	72	20	17		外ラミ	内ラミ	ST700-ES	IP512	宝山彌留
55	106	陶器品	瓶		42			外ラミ	内ラミ	ST700-EL	IP513	
56	105	陶器品	瓶		37	128.5		外ラミ+内ラミ	内ラミ	ST700-ES2	IP514	
57	26	陶器品	瓶	120	68	68		外ラミ+内ラミ	内ラミ	ST700	IP515	
58	2-4	陶器品	刀子	72	12	10		外ラミ	内ラミ	ST700	IP516	
59	133	土器類	瓶	120	68	68		外ラミ	内ラミ	ST700	IP517	
60	164	土器類	瓶	120	70	26	ハラ切離	外ラミ	内ラミ	ST700-ST708	IP518-500	
61	2	土器類	瓶	120	80	32	ハラ切離	外ラミ	内ラミ	ST700-ST700B	IP519	

表3 遺物観察表(3)

序号	支識番号	材質	器種	口径	底径	高さ	底部切削・調整	外観	内観	造形	文様	備考
3	40	陶器	片	13.11	8.2	42	ハラ留り	口P.12	口P.10	ST90	EP514	
4	31	陶器	片	13.71	8.7	38.3	赤留り	口P.10	口P.10	ST90 EP22	EP530	
5	30	陶器	片	14.0	10.0	110	ハラ留り→ヘラテグリ	口P.12	口P.10	ST90 EP20		
6	56	陶器	高台付	11.60	10.0	41.0		口P.10	口P.10	ST90	EP309	
7	174	陶器	高台付	10.0	12.0	42	ハラ留り	口P.12	内P.10	ST90	EP327	鉢底
8	43	陶器	片	13.12	8.1	43.3	赤留り	口P.10	口P.10	ST90	EP458	
9	40	陶器	片	13.0	8.0	44	赤留り	口P.12	口P.10	ST90	EP469	
10	41	陶器	片	13.0	12	40.0	赤留り	口P.12	口P.10	ST90 EP27	EP476	
11	47	陶器	片	—	6.8	13.3	赤留り	口P.10	口P.10	ST90	EP429	
12	48	陶器	片	—	6.6	12.0	赤留り	口P.12	口P.10	ST90 ST100CF	EP346	
13	46	陶器	片	12.0	—	42.0		口P.10	口P.10	ST90 ST100CF兼用		
14	43	陶器	片	12.0	6.5	31.3	ハラタズリ	口P.12	口P.10	ST90	EP427	黑色化 回字印丁模様
15	32	陶器	片	10.0	—	46.0	ハラタズリ	内P.10	口P.10	ST90		黒色化 回字印丁模様
16	34	陶器	高台付	11.07	—	27		内P.10	口P.10	ST90		
1	44	陶器	片	—	—	43.0	ハラタズリ	内P.10	口P.10	ST90E8B		回字印丁模様 黒色化
2	213	陶器	片	14.4	—	46.0		内P.10	口P.10	ST90	EP327	黒色化 回字印丁模様
3	58	陶器	束	—	—	12.0		内P.10	口P.10	ST90	EP359	
4	36	陶器	瓶	12.0	—	13.0		口P.10兼用	口P.10	ST90 ST100CF	EP338	
5	126	陶器	束	—	—	10.0		内P.10	口P.10	ST90	EP322	
6	52	陶器	瓶	—	—	7.0		内P.10	口P.10	ST90 EP27	EP476	
7	183	陶器	平底	—	—	41	ハラタズリ	口P.10	口P.10	ST90	EP489	伏拝牛頭面模様底
1	180	陶器	束	11.2	—	17.0		口P.10	口P.10	ST90	EP540	
2	42	陶器	束	—	—	10.0	ハラ留り	口P.10	口P.10	ST90 ST100CF	EP486-104	
3	86-4	陶器	片	12.5	15	15		口P.10	口P.10	ST90	EM213	
4	86-1	陶器	柄繩目	—	—	—		口P.10	口P.10	ST90	EM396	
1	30	陶器	片	11.00	7.6	42	ハラ留り	口P.12	口P.10	ST90	EP246	
2	94	陶器	片	—	9.0	43.3	赤留り	口P.10	口P.10	ST90E18	EP386	
3	173	陶器	高台付	—	10.0	42.0	ハラ留り	口P.12	口P.10	ST90	EP242	
4	68	陶器	片	12.00	34	42	赤留り	口P.12	口P.10	ST90	EP255	
5	49	陶器	片	12.2	—	38	赤留り	口P.10	口P.10	ST90	EP259	
6	90	陶器	片	12.0	—	35	赤留り	口P.12	口P.10	ST90 ST26	EP228	
7	92	陶器	片	—	—	10.0	赤留り	口P.10	口P.10	ST90E8	EP253	
8	71	陶器	高台付	14.0	—	32.0	赤留り	口P.12	口P.10	ST90	EP255-271	
9	82	陶器	高台付	11.00	34	33	菊丸ナデ	口P.10	口P.10	ST90 EP3- ST90	EP462	画面
10	62	陶器	片	12.0	32	44	赤留り	口P.10	口P.10	ST90 E8J	EP461	
11	70	陶器	片	12.9	32	33	赤留り	口P.10	口P.10	ST90 E8L	EP381-489	
1	61	陶器	束	10.0	—	10.0	ハラナデ	内P.10	口P.10	ST90 ST36	EP220	
2	47	陶器	束	12.0	—	12.0	ハラナデ	内P.10	口P.10	ST90 ST26	EP226-228	低窓小笠形化付蓋
3	96	陶器	束	—	—	10.0	ハラナデ	内P.10	口P.10	ST90		
4	181	陶器	片	—	—	10.0	ハラナデ	内P.10	口P.10	ST90 ST35	EP275	
5	180	陶器	片	12.1	47	37.3	赤留り	口P.10	口P.10	ST90 ST36	EP498	
6	180	陶器	片	—	—	17.0	ハラ留り	口P.12	口P.10	ST90	EP495	
7	187	陶器	高台付	13.00	34	47		口P.10	口P.10	ST90E7 E8K		
8	181	陶器	片	14.0	—	40	赤留り	口P.10	口P.10	ST90	EP428	
9	178	陶器	片	14.0	48	35	赤留り	口P.10	口P.10	ST90	EP429	
10	179	陶器	高台付	14.00	31	37	菊丸ナデ	口P.10	口P.10	ST90	EP324	
7	173	陶器	片	—	—	41.0	ハラナデ	内P.10	口P.10	ST90		
8	184	陶器	束	—	—	10.0	ハラナデ	内P.10	口P.10	ST90	EP473	
9	182	陶器	束	12.0	—	14.0		口P.10	口P.10	ST90	EM206	
10	177	陶器	束	—	—	10.0	ハラナデ	口P.12	口P.10	ST90	EP327	
11	182	陶器	束	—	—	11.0	ハラナデ	口P.10	口P.10	ST90	EM206	
1	138	陶器	高台付	—	—	19.0	ハラ留り	口P.10	口P.10	ST90 EP21		
2	161	陶器	片	13.0	13	30	赤留り	口P.10	口P.10	ST90 E8L	EP313-474	
3	178	陶器	片	12.0	34	46	赤留り	口P.10	口P.10	ST90 ST100E8	EP330	
4	180	陶器	片	12.0	30	30	赤留り	口P.10	口P.10	ST90	EP414	
5	180	陶器	片	12.0	30	48	赤留り	口P.10	口P.10	ST90 E8L	EP312	
6	182	陶器	片	13.0	42	61	赤留り	口P.10	口P.10	ST90 E8L	EP312-501	
7	154	陶器	高台付	14.0	60	55	菊丸ナデ	口P.10	口P.10	ST90	EP416	黒色化
8	153	陶器	片	—	—	12.0	赤留り	口P.10	口P.10	ST90	EP415	黒色化
9	157	陶器	高台付	—	—	12.0	菊丸ナデ	口P.10	口P.10	ST90	EP360	黒色化
10	184	陶器	片	13.0	—	67		口P.10	口P.10	ST90	EP368	黒色化
11	150	陶器	高台付	—	—	17.0	菊丸ナデ	口P.10	口P.10	ST90	EP437	黒色化

表4 遺物観察表(4)

序号	支識番号	材質	器種	口径	底径	高さ	底部切削・調整	外観	内観	造形	文様	備考
12	108	土器質	甌	18.4	12.0	6.9		ハサメ、ナガリ	ツブ	ST100C	RP413	
12	167	土器質	甌	17.0	10.0	6.8	脚丸削	ハサメ、ナガリ	ツブ	ST100C XL SKJ 302	RP258-311-320	
1	2	赤陶土器	甌	13.0	9.4	4.3	脚丸削	ハサメ	ツブ	ST100 EL	RP460	
2	5	赤陶土器	甌	13.0	9.3	4.6	脚丸削	ハサメ	ツブ	ST100	RP415	
3	3	赤陶土器	甌	14.0	10.0	5.0		ハサメ	ツブ	ST100	RP389-390	
4	4	赤陶土器	甌	13.0	9.3	4.7	脚丸削	ハサメ	ツブ	ST100 EL	RP460	
5	6	土器質	高台杯	12.7	8.0	3.6		ハサメ	ツブ	ST100 EL	RP460	無名化
6	1	土器質	甌	10.0	6.0	4.0	脚丸削	ハサメ	ツブ	ST100 EL	RP460	
7	102	赤陶土器	甌	14.2	6.8	3.7	脚丸削	ハサメ	ツブ	ST100	RP500	内外面に付着物あり
2	201	赤陶土器	甌	14.0	5.6	4.7	脚丸削	ハサメ	ツブ	ST100	RP460-500	
3	201	赤陶土器	高台杯	10.0	5.0	3.0		ハサメ	ツブ	ST100	RP500	
4	201	土器質	甌	7.9	4.0	2.8		ハサメ	ツブ	ST100	RP500	
5	204	土器質	甌	14.0	6.0	3.0		ハサメ、ナガリ	ツブ、ハサメ	ST100 ST14	RP500-596	
1	307	瓦器質	甌	14.0	6.6	4.3	脚丸削	ハサメ	ツブ	ST100	RP500	
2	308	瓦器質	甌	13.0	6.6	3.8	脚丸削	ハサメ	ツブ	ST100	RP460	
3	308	赤陶土器	甌	17.0	11.0	3.7		ハサメ	ツブ	ST100	RP500-58-59	
4	220	赤陶土器	甌	12.0	6.0	3.0		ハサメ	ツブ	ST100	RP500-71	
1	318	瓦器質	甌	13.0	9.2	3.2	ハサメ削	ハサメ	ツブ	ST100	RP500	
2	314	瓦器質	甌	14.0	8.0	4.1	ハサメアズリ	ハサメ	ツブ	ST100	RP500	瓦底に白色物
3	313	瓦器質	甌	13.0	8.0	3.0	ハサメ削	ハサメ	ツブ	ST100	RP500	
4	322	瓦器質	甌	17.0	10.0	3.0	脚丸削等→ハサメアズリ	ハサメ	ツブ	ST100	RP500	
5	320	瓦器質	高台杯	14.0	9.2	4.7	脚丸削	ハサメ	ツブ	ST100	RP500-140	
6	321	瓦器質	高台杯	9.5	5.4	2.8	ハサメ削	ハサメ	ツブ	ST100	RP500	
7	320	瓦器質	高台杯	9.0	5.0	2.5	ハサメアズリ	ハサメ	ツブ	ST100	RP500	
8	317	瓦器質	高台杯	7.5	4.0	2.5	ハサメアズリ	ハサメ	ツブ	ST100	RP500	
9	311	土器質	甌	13.0	8.0	3.0	ハサメ削	ハサメ	ツブ	ST100	RP500	
10	312	土器質	甌	14.0	8.0	3.0	ハサメアズリ	ハサメアズリ、ナガリ	ツブ	ST100 ST10C ST20F	瓦底有	
11	320	土器質	甌	13.0	7.0	2.9		ハサメ	ツブ	ST100	RP500	
12	323	土器質	甌	13.0	7.0	2.8		ハサメ	ツブ	ST100	RP500-85-94	瓦底自然歯
1	314	瓦器質	甌	13.0	6.0	3.0		ハサメ	ツブ	ST100	RP500	
2	313	瓦器質	甌	7.4	5.0	2.8	ナガリ削	ハサメ	ツブ	ST100 EL	RP500	
3	3-3	漆器品	甌	13.0	3.0	8			ツブ	ST100	RM87	
1	325	瓦器質	甌	13.0	6.4	4.0	脚丸削	ハサメ	ツブ	ST100	RP104-128	
2	322	赤陶土器	甌	13.0	6.0	3.0		ハサメ	ツブ	ST100	RP110	
3	324	土器質	甌	14.0	8.0	2.8		ハサメ	ツブ	ST100	RP113	
4	328	土器質	甌	13.0	6.0	3.0		ナガリ、ナガリ	ツブ	ST100	RP112	無名化
5	320	瓦器質	甌	13.0	6.0	3.0		ナガリ、ナガリ	ツブ	ST100	RP112	無名化
6	323	瓦器質	甌	6.0	2.7	2.0		ナガリ	ツブ	ST100	RP116-117	無名化
7	311	瓦器質	高台杯	14.0	9.0	4.0	ナガリ削	ナガリ	ツブ	ST100 RM87 Y	RP400	無名化
8	327	瓦器質	甌	12.0	9.0	3.0	ハサメ、ナガリ、ナガリ	ナガリ	ツブ	ST100	RP120-129	無名化
9	342	石器質	高台杯	3.0	2.4	1.0			ツブ	ST100	RD214	織田信玄公御用・三脚・四脚・五脚
10	328	瓦器質	高台杯	8.7	7.0	3.0	ハサメ削	ハサメ	ツブ	ST100C ST112	RP340	瓦底へ墨跡
11	329	瓦器質	甌	12.0	10.0	3.0	ハサメ削	ハサメ	ツブ	ST100	RP340	
12	327	瓦器質	甌	12.0	7.4	3.0	ハサメ削	ハサメ	ツブ	ST100	RP340	
13	323	瓦器質	甌	—	—	—		ナガリ、ナガリ、ナガリ	ツブ	ST100	RP340	口縁開拓・土被
1	338	瓦器質	甌	27	13.0	4.0	脚丸削	ハサメ	ツブ	ST100	RP340	
2	320	瓦器質	甌	6.4	4.0	2.8	ナガリ削	ナガリ	ツブ	ST100	RP340	
3	324	瓦器質	甌	6.4	4.0	2.8	ナガリ削	ナガリ	ツブ	ST100	RP340	
4	340	瓦器質	甌	13.0	6.0	3.0	ハサメ、ナガリ	ナガリ、ナガリ	ツブ	ST100	RP340	
1	340	瓦器質	甌	13.0	6.0	3.4	ハサメ削	ハサメ	ツブ	ST100	RP340	
2	340	瓦器質	甌	13.0	6.0	3.0	ハサメ削	ハサメ	ツブ	ST100	RP340	
3	342	瓦器質	甌	13.0	6.0	3.0	ナガリ	ナガリ、ナガリ	ツブ	ST100	RP340-111	
4	341	瓦器質	甌	13.0	6.0	3.0	ナガリ	ナガリ、ナガリ	ツブ	ST100	RP340	
5	340	瓦器質	甌	6.0	3.0	2.0	ナガリ	ナガリ、ナガリ	ツブ	ST100	RP340-108-122	
1	340	瓦器質	高台杯	12.0	8.0	4.7	ナガリ削	ナガリ、ナガリ	ツブ	ST100	RP340-141	横板
2	343	瓦器質	甌	13.0	6.0	3.0	ナガリ削	ナガリ、ナガリ	ツブ	ST100	RP340	
3	340	瓦器質	甌	6.0	3.0	2.0	ナガリ	ナガリ	ツブ	ST100	RP340	
4	340	瓦器質	甌	6.0	3.0	2.0	ナガリ	ナガリ	ツブ	ST100	RP340	
5	347	瓦器質	甌	9.2	5.0	2.0	ナガリ削	ナガリ、ナガリ	ツブ	ST100 F	RP340-107	
6	340	瓦器質	甌	6.0	3.0	2.0	ナガリ削	ナガリ、ナガリ	ツブ	ST100 EL	RP340-108-122	
1	340	瓦器質	高台杯	12.0	8.0	4.7	ナガリ削	ナガリ、ナガリ	ツブ	ST100	RP340-141	横板
2	343	瓦器質	甌	13.0	6.0	4.7	ナガリ削	ナガリ、ナガリ	ツブ	ST100	RP340	
3	344	瓦器質	甌	13.0	6.0	4.7	ナガリ削	ナガリ、ナガリ	ツブ	ST100	RP340	

表5 遺物観察表(5)

序号	支拂	材質	器種	口径	底径	高さ	底部切削・調整	外観	内観	造形	文様	備考
1 354	同上	金	筒	130	—	130	ハサワリ	口 P 12	口 P 10	STB	EP14C	
1 364	同上	金	筒	130	76	38	ハサワリ	口 P 12	口 P 10	STB	EP440	
2 365	同上	金	筒	143	68	30	無削り	口 P 12	口 P 10	STB	EP448	
3 352	同上	金	筒	143	62	35.5	無削り	口 P 12, タツリ	口 P 10	STB	EP140	
4 360	同上	金	筒	140	65	47	無削り	口 P 12	口 P 10	STB	EP529	
5 370	同上	金	筒	144	84	61	無削り	口 P 12	口 P 10	STB	EP422	
6 368	同上	金	筒	90	—	177	無削り	口 P 12	口 P 10	STB	EP110	
7 354	同上	金	筒	145	87	—	(42) 錆止め切欠き→ハサワリ	口 P 12	口 P 10	STB	EP182	
8 360	同上	金	筒	148	148	78	ナリオホルム、ボルト、船底板	口 P 12, タツリ	口 P 10	STB EL	EP430	茶色化、鉛底板入り
9 358	赤地土器	黑	筒	120	66	126	—	口 P 12, タツリ	口 P 10	STB EL - STB EL		
10 361	赤地土器	黑	筒	143	—	125	錆止め切欠き	口 P 12, ハサワリ	口 P 10	STB F	EP146	新規発見
11 327	同上	金	筒	120	—	72	—	ナリオホルム、ボルト	口 P 12	STB	EP185	
12 363	同上	金	筒	170	—	131	ハサワリ	ナリオ、タツリ	口 P 10	STB	EP440	
13 355	赤地土器	黑	筒	66	—	75	—	口 P 12	口 P 10	STB	EP130	
14 374	同上	金	筒	140	78	163	錆止め切欠き	口 P 12, タツリ	口 P 10	STB	EP442	
15 372	同上	金	筒	130	84	80	錆止め切欠き	口 P 12, タツリ	口 P 10	STB EP22	EP90	
16 379	同上	金	筒	74	—	20	ハサワリ	口 P 12	口 P 10	STB	EP440	
17 384	同上	金	筒	145	76	39	無削り	口 P 12	口 P 10	STB	EP164 - 169	茶色化
18 382	同上	金	筒	141	82	42	無削り	口 P 12	口 P 10	STB	EP174 - 484	茶色化
19 383	同上	金	筒	110	43	31	手附ハサワリ	ナリオ、ハサワリ	口 P 10	STB - STB	EP178 - 451	
20 362	同上	金	筒	133	168	48	無削り	口 P 12	口 P 10	STB	EP452	茶色化
21 386	同上	金	筒	160	—	92	—	ナリオ、船底板	口 P 10	STB	EP447	
22 389	同上	金	筒	141	—	—	ナリオ、ハサワリ、オホルム	ナリオ、ナリオ	口 P 10	STB	EP450	
23 373	同上	金	筒	138	—	45	—	ナリオ、タツリ	口 P 10	STB	EP425	
24 377	同上	金	筒	—	—	30	—	口 P 10	口 P 10	STB	EP190	
25 378	同上	金	筒	170	—	25	—	口 P 12	口 P 10	STB	EP444	
26 375	同上	金	筒	130	—	17.5	—	口 P 12	口 P 10	STB	EP130	
1 380	赤地土器	黒	筒	182	180	202	—	口 P 12, タツリ	口 P 10	STB - STB EL	EP118 - 177	
2 381	赤地土器	黒	筒	180	181	229	—	口 P 12, タツリ	口 P 10 (赤色)	STB - SL24	EP118 - 181	
3 383	赤地土器	黒	筒	220	—	200	—	口 P 12, タツリ	口 P 10	STB - SL28	EP513	
4 401	青・1	青銅品	刀子	90	18	12	—	口 P 12	口 P 10	SL24	EM106	
5 367	同上	金	筒	142	68	45	無削り	口 P 12	口 P 10	SL24	EP117	
6 373	同上	金	筒	—	—	120	—	口 P 12	口 P 10	STB	EP130	
7 382	同上	金	筒	121	62	43	無削り	口 P 12	口 P 10	STB	EP426	自然施
8 387	同上	金	筒	160	193	59	無削り	口 P 12, タツリ	口 P 10	STB	EP302	
9 393	同上	金	筒	144	—	47	ハサワリ	口 P 12, タツリ	口 P 10	STB EP22		
10 389	同上	金	筒	174	—	177	無削り	口 P 12	口 P 10	STB	EP116	
11 401	同上	金	筒	140	78	41	ハサワリ	口 P 12	口 P 10	STB	EP180 - 189	茶色化・船主款
12 396	同上	金	筒	142	84	38	—	口 P 12	口 P 10	STB EP10	EP140	茶色化
7 394	赤地土器	黒	筒	135	68	44	無削り	口 P 12	口 P 10	STB	EP907	
8 403	赤地土器	黒	筒	147	62	43	無削り	口 P 12	口 P 10	STB	EP119 - 201	
9 401	赤地土器	黒	筒	160	—	121	ナリガナ	口 P 12	口 P 10	STB	EP998	
10 398	同上	金	筒	—	—	221	—	口 P 12, タツリ	口 P 10	STB	EP104	
11 421	同上	金	筒	—	—	27	ナリガナ	口 P 12	口 P 10	SL24	EM106	茶色化
12 399	同上	金	筒	155	—	29	—	口 P 12, タツリ	口 P 10	STB	EP433	
13 402	同上	金	筒	—	—	123.5	—	口 P 12	口 P 10	STB SL2	EP101	
14 424	赤地土器	黒	筒	190	141.5	59	—	口 P 12, タツリ	口 P 10	STB	EP511	
15 391	同上	金	筒	—	—	72	—	口 P 12, 錆落き斑状	口 P 10	STB EL		
16 395	赤地土器	黒	筒	140	—	170	—	口 P 12	口 P 10	STB EL		
17 422	赤地土器	黒	筒	—	—	590	—	口 P 12	口 P 10	STB		
18 430	赤地土器	黒	筒	—	—	380	—	口 P 12	口 P 10	STB		
19 404	同上	金	筒	—	—	214	—	ハサワリ, タツリ	ハサワリ, タツリ	STB EL, EP21		
2 402	赤・2	青銅品	斧	80	50	—	—	—	—	STB F1.	EM106	
3 397	赤地土器	黒	筒	132	56	49.5	無削り	口 P 12	口 P 10	MKA	近縄文孔(浮遊孔)	
2 395	赤地土器	黒	筒	160	—	121	ナリガナ	口 P 12	口 P 10	STB EL	EP231	
1 407	同上	金	筒	150	—	95	無削り	口 P 12	口 P 10	STB		
2 406	同上	金	筒	—	—	130.5	—	口 P 12, 錆落き斑状	口 P 10	STB	EP425	
3 408	同上	金	筒	130	94	40	—	口 P 12	口 P 10	STB EL	EP433	
4 409	同上	金	筒	90	—	125	ハサワリ	口 P 12	口 P 10	STB		茶色化
5 410	同上	金	筒	—	—	185	—	口 P 12	口 P 10	STB	EP408	茶色化, 亂れ
6 410	同上	金	筒	160	—	161	無削り	口 P 12	口 P 10	STB		
7 412	同上	金	筒	—	—	121	—	口 P 12, タツリ	口 P 10	STB		

表6 遺物観察表(6)

序号	支番	種類	器種	口径	底径	高さ	底部切削・調整	外観		内観		遺構	文	備考
								外	内	外	内			
1	411	手掘器	鉢	360	330	ハサメ		口	内	口	内	ST4		
1	413	手掘器	鉢	340	310	ハサメ		口	内	口	内	STB1・STB2	EP200	
2	418	手掘器	鉢	340	310	ハサメ		口	内	口	内	STB	EP206・207	
1	419	手掘器	鉢	370	340	ハサメ		口	内	口	内	STB	EP215	
2	420	手掘器	鉢	370	340	ハサメ		口	内	口	内	STB	EP215	
3	208	手掘器	鉢	370	340	ハサメ		口	内	口	内	STB	EP215	
4	420	手掘器	鉢	360	330	ハサメ		口	内	口	内	STB	EP218	新老茎接合
5	413	手掘器	鉢	330	300	ハサメ		口	内	口	内	STB	EP230	
1	420	手掘器	鉢	320	290	ハサメ		口	内	口	内	STB	EP230	新老茎接合
2	417	手掘器	鉢	320	290	ハサメ		口	内	口	内	STB	EP230	新老茎接合
1	212	土壤器	鉢	320	300	ハサメ		口	内	口	内	SKA	EP1	新色化
1	200	手掘器	鉢	128	64	50	ハサメ	口	内	口	内	SKA	STC1・STC2	
2	039	手掘器	鉢	66	30	20	ハサメ～薄刃	口	内	口	内	SKA		新色化
3	201	手掘器	鉢	720	340	30	ハサメ	口	内	口	内	SKA		
4	202	手掘器	鉢	128	52	48	ハサメ	口	内	口	内	SKA	EP402	
5	208	手掘器	鉢	140	70	30	ハサメ	口	内	口	内	SKA	EP406	
6	203	手掘器	鉢	127	48	30	ハサメ	口	内	口	内	SKA	EP404	
7	206	手掘器	鉢	126	60	34	ハサメ	口	内	口	内	SKA	EP440・449	
8	210	手掘器	鉢	126	48	40	ハサメ	口	内	口	内	SKA	EP460	
9	204	手掘器	鉢	126	54	36	ハサメ	口	内	口	内	SKA	EP461	新色化
10	038	手掘器	鉢	128	53	44	ハサメ	口	内	口	内	SKA	EP461・462	
11	197	手掘器	鉢	120	50	36	ハサメ	口	内	口	内	SKA	EP460・462	
12	201	手掘器	鉢	126	56	36	ハサメ	口	内	口	内	SKA	EP465	
13	213	手掘器	鉢	110	48	37	ハサメ	口	内	口	内	SKA		
14	171	手掘器	鉢	132	54	41	ハサメ	口	内	口	内	SKA	EP462	
15	172	手掘器	鉢	132	51	38	ハサメ	口	内	口	内	SKA	EP470	
1	178	手掘器	鉢	114	52	37	ハサメ	口	内	口	内	SKA	EP442	
2	203	手掘器	鉢	122	48	37	ハサメ	口	内	口	内	SKA	EP391・438	
3	165	手掘器	鉢	148	70	30	菊花ナガ	口	内	口	内	SKA	EP470・479	新色化
4	80	手掘器	鉢	70	30	20	菊花ナガ	口	内	口	内	SKA	EP480	
5	121	手掘器	鉢	129	52	46	菊花	口	内	口	内	SKA	EP500	
6	215	土壤器	鉢	140	54	40	菊花	口	内	口	内	SKA	STC1・STC2	
7	194	手掘器	鉢	130	54	48	菊花	口	内	口	内	SKA	EP570	
8	195	手掘器	鉢	130	50	44	菊花ナガ	口	内	口	内	SKA	EP571	
9	192	手掘器	鉢	130	53	34	菊花	口	内	口	内	SKA	EP580	
10	126	手掘器	鉢	172	77	60	口	口	口	口	口	SKA	EP570	
11	114	手掘器	鉢	124	56	36	口	口	口	口	口	SKA	EP571	
12	193	手掘器	鉢	200	90	50	口	口	口	口	口	SKA	EP570	
1	190	土壤器	鉢	190	50	30	口	口	口	口	口	SKA	EP417	
2	400	手掘器	鉢	135	50	30	口	口	口	口	口	SKA	EP580	
3	423	土壤器	鉢	161	50	30	口	口	口	口	口	SKA	EP580	
4	414	手掘器	鉢	166	50	37	口	口	口	口	口	SKA	EP580	
5	426	土壤器	鉢	80	20	口	口	口	口	口	SKA	EP580		
6	420	土壤器	鉢	130	75	45	ハサメ	口	口	口	口	SKA	EP580	
7	430	土壤器	鉢	180	57	55	ハサメ	口	口	口	口	SKA	EP580	
8	431	手掘器	鉢	190	50	45	ハサメ	口	口	口	口	SKA	EP580	
9	432	手掘器	鉢	130	64	62.5	菊花ナガ	口	口	口	口	SKA	EP580	
10	423	手掘器	鉢	130	50	35	口	口	口	口	口	SKA	EP580	
11	425	手掘器	鉢	130	50	35	口	口	口	口	口	SKA	EP580	
12	427	手掘器	鉢	180	56	50	口	口	口	口	口	SKA	EP580	
13	430	手掘器	鉢	140	50	30	口	口	口	口	口	SKA	EP580	
14	441	手掘器	鉢	140	50	30	口	口	口	口	口	SKA	EP580	
15	225	土壤器	古瓶	36	—	—	蓮瓣文	口	口	口	口	SKA	[新旧文]	
16	431	調光土器	古瓶	36	—	—	蓮瓣文・施EIL	口	口	口	口	SKA	EP580	
17	434	調光土器	古瓶	36	—	—	施EIL	口	口	口	口	SKA	EP580	
1	214	手掘器	鉢	132	56	44	菊花	口	口	口	口	SKA	中央部(近口)	
2	218	手掘器	小鉢	34	34	—	菊花	口	口	口	口	SKA	中央部(近口)	
3	213	石器	石臼	84	30	32	—	—	—	—	—	SKA	新色化	

## V まとめ

調査では、主に奈良～平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、土坑、溝跡、河川跡などを検出した。遺物は、竪穴住居跡を中心に当該期の須恵器や土師器、赤焼土器などの土器群、鉄製品が出土した。他に中世の遺物も散見された。以下に古代の遺構と遺物を整理しまとめとする。

本遺跡で主体を占める奈良～平安時代では、竪穴住居跡や掘立柱建物跡を中心とする。これらは、大まかにみれば、調査区の中央～南半部(北区南半・南区北半～中央部)の自然堤防上(微高地)の最も高い部分に、大型を含む中～小の竪穴住居群が集中する。掘立柱建物群は、 $2 \times 2$ ・ $2 \times 3$ 間程度の建物だが、全体に竪穴住居群の外側(両端)に概ね主軸方向と同じくして分布し関連性が推測され、分布状況からは竪穴住居群の付属的な役割も考えられる。

竪穴住居跡は、平面方形を主とし、一部長方形がある。一辺7mを超える大型(北からST6・85・90・35)や5m前後の中型、3m以下の小型等に分けられる。全体的に大型住居や中型住居の一部には、カマドや主柱穴、貯蔵穴等が認められる。小型住居は、地床炉や炉跡がないものが多く、主柱穴や貯蔵穴は認められない傾向がある。

カマド形態では、地山の削平等も考慮する必要があるが、A類：煙道部が住居外に突出するもの(長い煙道:A1類・短い煙道:A2類)、B類：カマド全体が住居壁から張出すもの(長い煙道:B1類・短い煙道:B2a類・短い煙道で袖に石を伴うB2b類)、C類：明確な煙道部がないもの(住居内部に長い袖部(煙道):C1類・住居壁際に焼土や袖部:C2類)、D類：地床炉(壁際:D1類・床中央:D2類)等に判別できる。全体にA類が一般的で多く、B・C類は限定的で近接や重複関係のある住居に認められる。D類も少なく小型住居に一定数確認できる。

これら竪穴住居跡は、各住居が近接して断続的に構築され、重複関係(ST12→ST15C→ST15A→ST15B)から少なくとも4時期以上の変遷が認められた。また、これら竪穴住居群は、住居の近接した分布状況や重複関係、住居の形態、カマド位置や形態の類似性から、幾つかの小ブロックに分ける事も可能であった。

具体的には、北から①ST6[大型]・25等の北区中央(平面方形・住居主軸南北・南カマドでA類)、②ST85[大型]・86・89A・74A等の北区南西(平面長方形・主軸南北から傾き有り・東カマドでC1類が主。一部北カマドやB類有り)、③ST90[大型]・8・100B・C等の北区南東(平面方形・主軸南北又は東に傾き有り・北カマドA類主。一部南カマド有り)、④ST15A～C・12・13・14・16・17等の南区北東(平面方形・主軸南北・南カマドでA類が主。一部北・東カマド・C1類有り)、⑤ST28・29・30等の南区北西(平面方形か・主軸南北から西に傾き有り・東カマドでB類を主)、⑥ST35[大型]・42A・B・39・41・36等の南区中央(平面方形・南北主軸・北カマドでA類が主。一部東・北カマドでB～D類有り)等に大別される。他に北区北端(ST159)、南区南端(ST68～79)もあるが、調査区外に延び詳細は不明である。

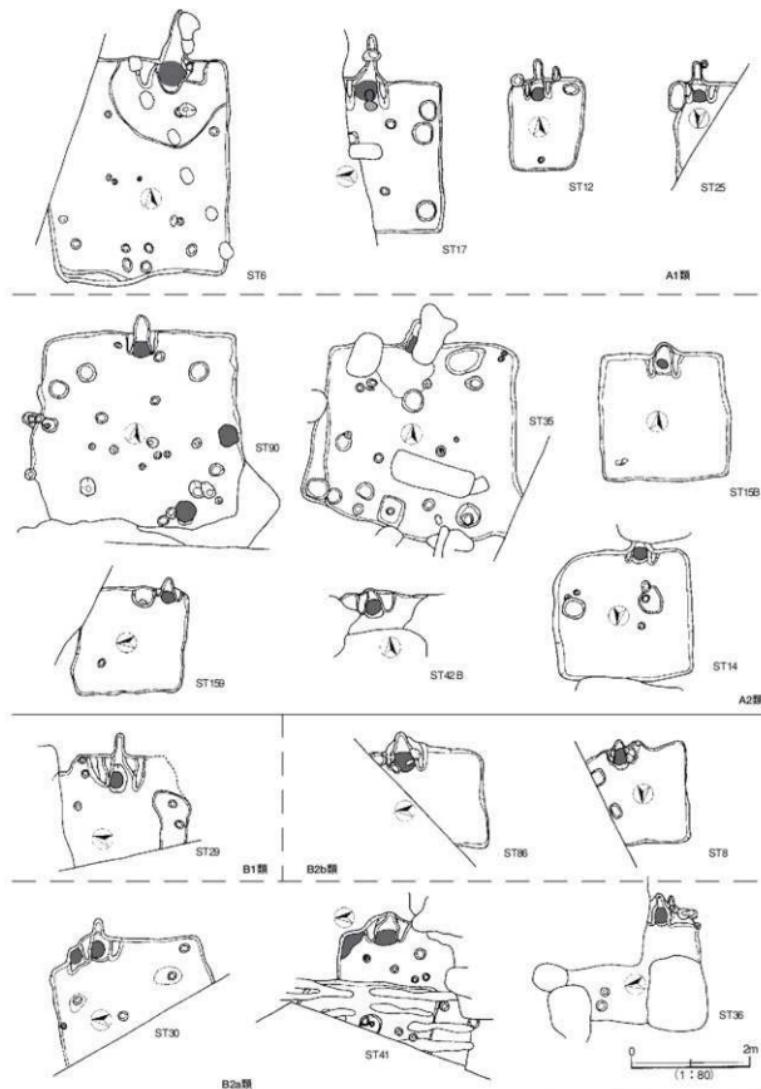
これらからは、一部調査区が限定的で判然としないが、竪穴住居群の各小ブロックが大型住居を中心とした中・小住居の変遷又は構成される状況が見取れ、重複関係からは住居のカマド位置の相違等は時期的な変移の一とともに考えられた。

遺構の分布

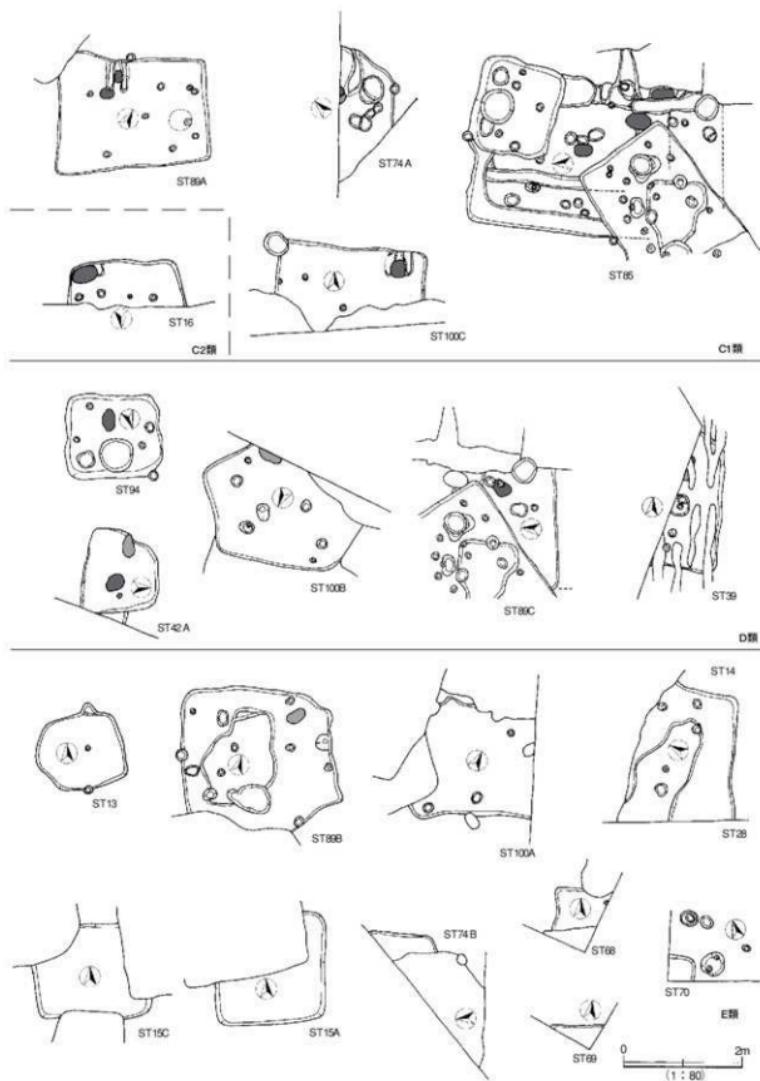
住居形態

カマド、炉跡形態

住居のブロック  
(まとまり)



第94図 壁穴住居カマド分類図(1)



第95図 壁穴住居カマド分類図(2)

## 出土遺物

一方、遺物相では、堅穴住居跡や土坑を主に奈良～平安時代の土器群が出土し、重複関係等から時期的な変遷が窺えた。出土器種の中心である供膳器を主に大別Ⅰ～Ⅳ期の変遷を記す。

I期  
須恵器と非ロクロ土師器

最も古相の土器群のⅠ期では、北からST6・14・17・29等の床面や覆土最下位の資料があり、須恵器の優位性と前代(古墳時代)の系譜を引く非ロクロの土師器が主体となる。須恵器は、箱型や逆台形を呈する器形で、口径に比して器高が低く、高径指数は約25～30前後である。底径が9cmと大きく、底部切り離しはヘラ切り主で一部静止糸切りも認められる。体部下端にヘラケズリするものもある。供伴する土師器は、非ロクロの無段平底で内面黒色処理する。東北地方南半部で一般的な奈良時代(8世紀)の国分寺下層式期の新段階に相当する。同古段階とされ前代の系譜を引く有段丸底の壺(ST14)や高杯(ST29)も若干出土する。

II期  
須恵器(ヘラ切り)とロクロ土師器、赤焼土器の出現

次期のⅡ期では、ST15A・30・70・89A等の床面や覆土最下位の資料が上げられる。須恵器は前期より逆台形で、高径指数はあまり変化がないが、底部がやや小径化し7～8cm大である。底部切り離しはヘラ切りが主だが、同形の壺に回転糸切りを用いるものもある。土師器は内面黒色処理のロクロ土師器に変り、赤焼土器が新たに出現する段階である。赤焼土器は深身の碗形を呈し、他遺構だが体部下端にヘラケズリを行うもの(高径指数35～40前後)もある。また、当期で逆台形の須恵器模倣の赤焼土器が認められる。

III期  
須恵器(回転糸切り)と赤焼土器の増加

Ⅲ期は、ST13・35・74A・86・90等の床面資料がある。須恵器と共に赤焼土器の増加、土師器の減少等が指摘できる。須恵器はやや碗状になり、高径指数は約30を超えるものがあり、底径が小径化し、底部切り離しが回転糸切りの段階である。赤焼土器は、依然深身のものが主体的だが、器高がやや低下したもの(高径指数35前後)も認められる。土師器は前期を引き継ぎ一定量存在し、高台が施釉陶器模倣と考えられるものがある。

IV期  
赤焼土器の主体

Ⅳ期は、ST8・12・94・100B・100C・159・SK5等の床面や覆土下位の資料がある。須恵器の減少と赤焼土器の増大と小型化、土師器の一定量の存在等が見取られ、赤焼土器が主体を占める段階である。赤焼土器は、器高の低下(高径指数30～35前後)や底径の縮小化が認められ、ロクロ目が著しい歪みのあるものも多い。当期の最も新相と考えられるSK5の赤焼土器では、高径指数30前後で、一部皿状を呈するものや、法量が大きい足長高台壺が出現する。

## 915年の火山灰

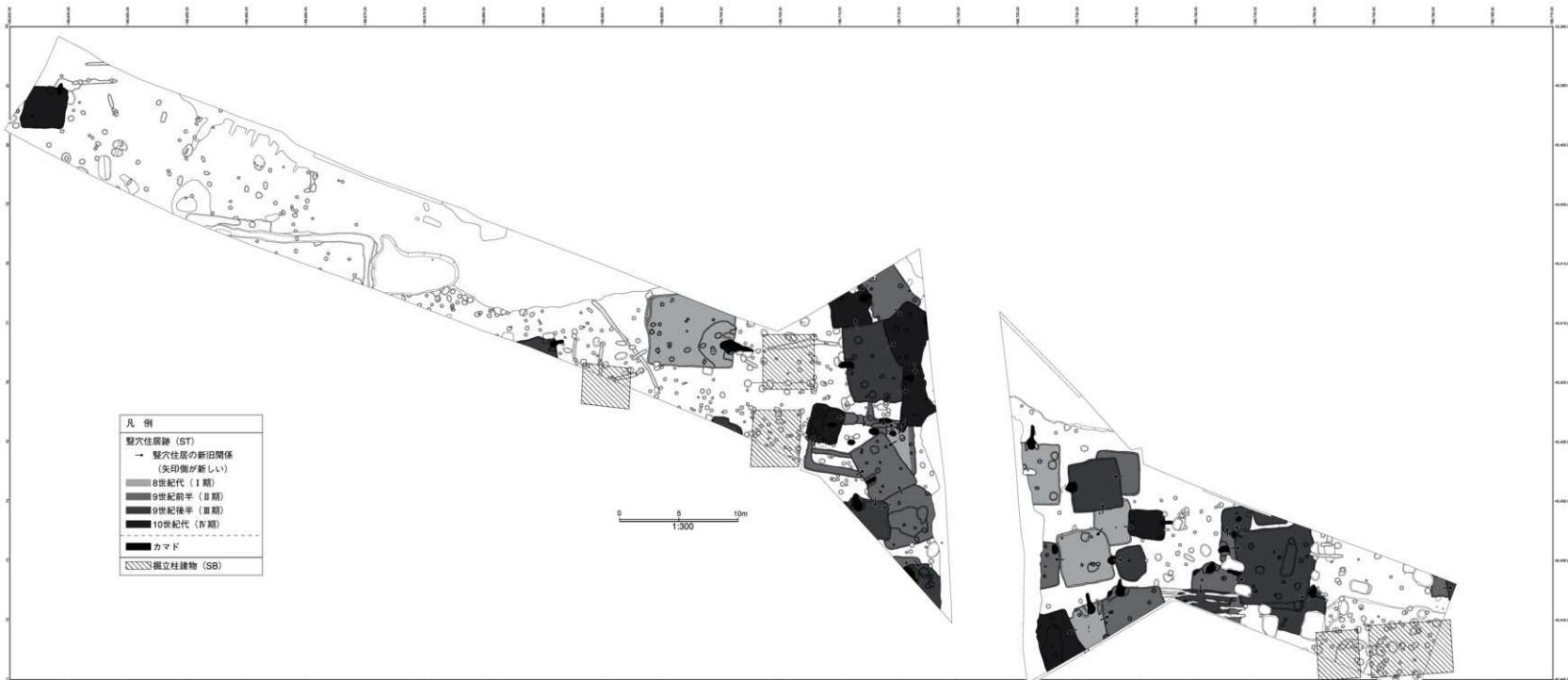
これから主な遺構群の主体的な変遷と年代観は、Ⅰ期：ST6・14・15C・17・29・89B・

## 遺構の変遷

89C(8世紀中葉～後半)、Ⅱ期：ST15A・16・30・41・70・85・89A(9世紀前半)、Ⅲ期：ST13・15B・35・36・39・42A・74A・86・90(9世紀後半)、Ⅳ期：ST8・12・25・28・94・100B・100C・159・SK1・2・5(10世紀)が推測される。

## 集落の変遷

以上の事から今調査の全体的な集落構成を概観すれば、当初集落は、8世紀中葉～後半に大型住居(ST6・90)や中型の堅穴住居が各ブロック単位で出現する。次期の8世紀末～9世紀前半に住居群は増加し(大型ST85・90)、掘立柱建物跡も当期までには構築されただろう。9世紀後半にも前期同様に大型(ST35・90)・中型住居群は安定した分布を示し、カマド形態も小ブロック単位で同系譜の類似形態(ST29→30:B類、ST85→89A→74A:C1類)が認められる。しかし、10世紀前半には、堅穴住居は、全体に小型化し、カマドも地床炉(D類)等に変化し、單発的である。最も新相段階では、骨片や赤焼土器を埋設する土坑(北区:SK1・2・5)等が散発的に認められ住居群等は希薄で、集落の移転や廢棄等が考えられる。



第96図 竪穴住居変遷図

## 写真図版

---





調査区全景（上空写真）



南区発掘状況（上空）



調査前状況（↑S）



基本層序（北区北西壁）



基本層序（北区中央東壁）



基本層序（北区中央東壁）



北区南半完掘状况（上空）



基本層序（北区中央東壁）



基本層序（北区中央西壁）



基本層序（北区南半西壁）



基本層序（南区南半西壁）



遺構検出状況（北区北半）（↑ N）



遺構検出状況（北区南半）（↑ N）



遺構検出状況（北区南半）（↑ E）



遺構検出状況（北区中央）（↑ NW）



遺構検出状況（北区南半）（↑ E）



遺構完掘状況（北区南半）



遺構完掘状況（北区南半）（↑ NE）



遺構完掘状況（北区南半）（↑ W）



遺構完掘状況（北区中央）（↑ N）



遺構完掘状況（北区南半）（↑ S）



遺構検出状況（南区中央）（↑ S）



遺構検出状況（南区北半）（↑ S）



遺構検出状況（南区北半）（↑ N）



遺構検出状況（南区南半）（↑ S）



遺構検出状況（南区南半）（↑ N）



遺構完掘状況（南区中央）（↑ S）



遺構完掘状況（南区北半）（↑ S）



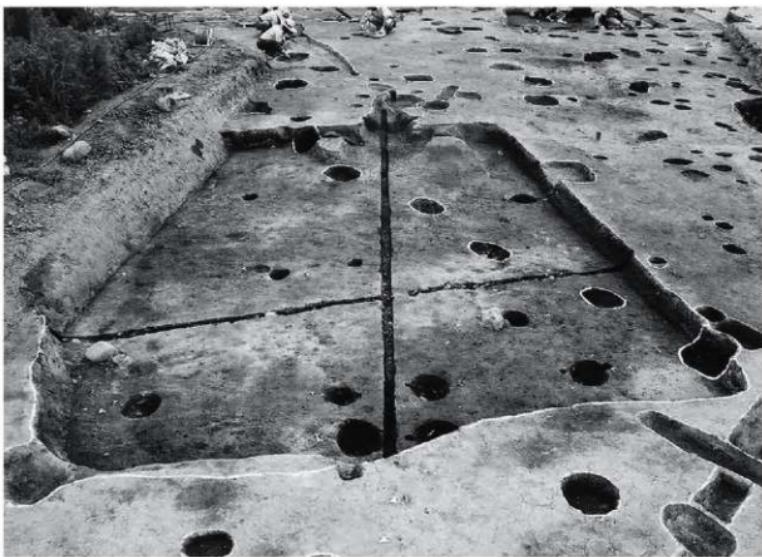
遺構完掘状況（南区北半）（↑ S）



SB群完掘状況（南区南西部）（↑ S）



遺構完掘状況（南区南半）（↑ N）



ST6 完掘状況 (↑ N)



ST6 完掘状況 (↑ W)



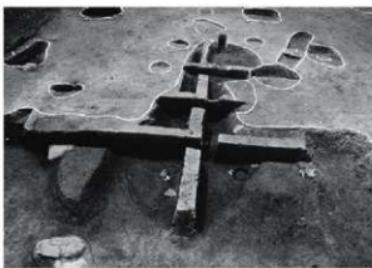
ST6 完掘状況 (↑ S)



ST6 土層断面 (↑ E)



ST6 上層遺物出土状況 (↑ N)



ST6 EL 土層断面 (↑ N)



ST6 EL 完掘状況 (↑ N)



ST6 EL 遺物出土状況 (↑ N)



ST6 遺物 (RP101・102) 出土状況 (↑ S)



ST6 EP11 土層断面 (↑ S)



ST6 EP11 完掘状況 (↑ S)



ST6 EP3～6 土層断面 (↑ S)



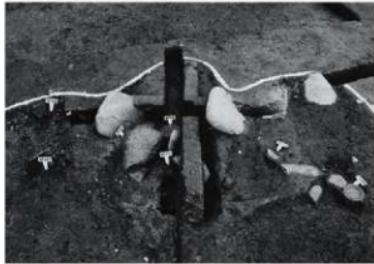
ST6 EP1 完掘状況 (↑ N)



ST8 完掘状況 (↑ N)



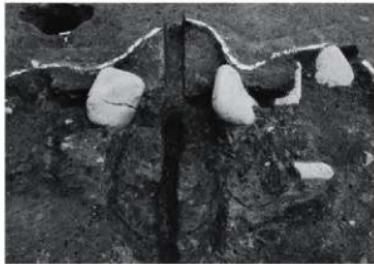
ST8 精査状況 (↑ E)



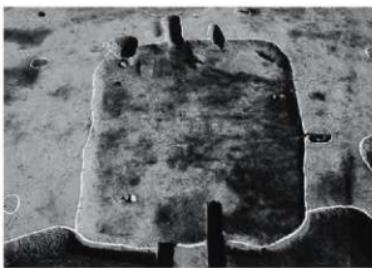
ST8 EL 遺物出土状況 (↑ N)



ST8 遺物 (RP228 ~ 231) 出土状況 (↑ SE)



ST8 EL 完掘状況 (↑ N)



ST12 完掘状況（↑ N）



ST12 EL 完掘状況（↑ N）



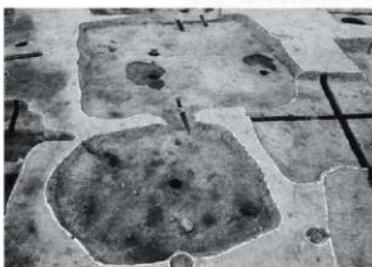
ST12 EP21 遺物出土状況（↑ N）



ST12 貼床外し状況（↑ N）



ST13 遺物出土状況（↑ S）



ST13 完掘状況（↑ S）



ST13 遺物出土状況（↑ S）



ST13 遺物（RP59・60）出土状況（↑ N）



ST14 完掘状況 (↑ S)



ST14 土層断面 (↑ W)



ST14 遺物出土状況 (↑ N)



ST14 遺物出土状況 (↑ W)



ST14 EP 検出状況 (↑ N)



ST14 完掘状況 (↑ N)



ST14 EP1 土層断面 (↑ E)



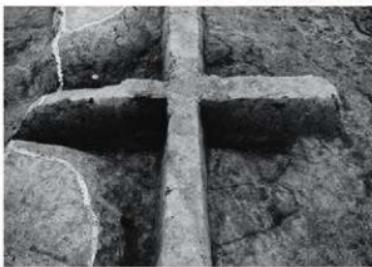
ST14 貼床外し状況 (↑ N)



ST14 EL 完掘状况 (↑ S)



ST14 EL 土層断面 (↑ S)



ST14 EL 土層断面 (↑ W)



ST14 遺物出土状況 (↑ S)



ST14 遺物 (RP77) 出土状況 (↑ S)



ST14 遺物 (RP86) 出土状況 (↑ W)



ST14 遺物 (RP98) 出土状況 (↑ S)



ST14 遺物 (RP87) 出土状況 (↑ W)



ST15A・B 遺物出土状況 (↑ S)



ST15A・B 精査状況 (↑ N)



ST15A・B 完掘状況 (↑ S)



ST15B 貼床完掘状況 (↑ E)



ST15A・B 貼床外し状況 (↑ S)



ST15B EL 完掘状况 (↑ S)



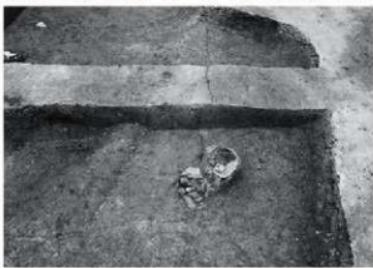
ST15B EL 土層断面 (↑ W)



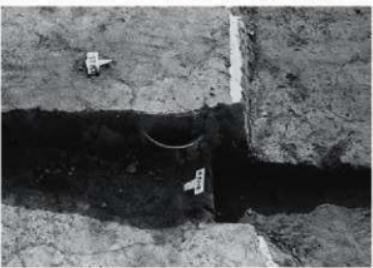
ST15B 遺物 (RP132・117・116・131) 出土状況 (↑ E)



ST15B 遺物 (RP66・115・104・128・133・136) 出土状況 (↑ S)



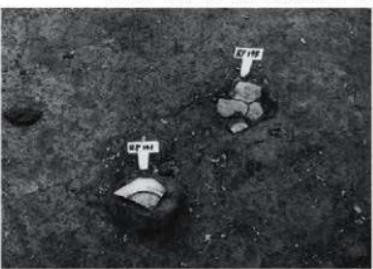
ST15A・B 土層断面 (↑ S)



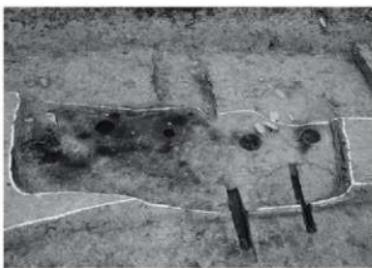
ST15A 遺物 (RP105) 出土状況 (↑ E)



ST15C 精査状況 (↑ S)



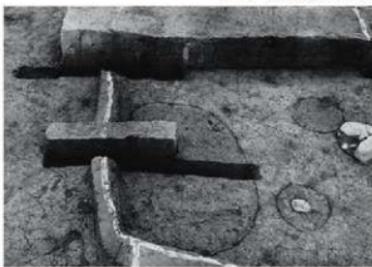
ST15C 遺物 (RP141・195) 出土状況 (↑ S)



ST16 完掘状況 (↑ S)



ST16 土層断面 (↑ E)



ST16 EL 土層断面 (↑ E)



ST16 遺物 (RP69) 出土状況 (↑ S)



ST17 完掘状況 (↑ W)



ST17 遺物出土状況 (↑ S)



ST17 EL 完掘状況 (↑ W)



ST17 土層断面 (↑ W)



ST17 EP1・2 土層断面 (↑ W)



ST17 EP1 土層断面 (↑ W)



ST17 遺物出土状況 (↑ W)



ST17 遺物 (RP88) 出土状況 (↑ S)



ST25 土層断面 (↑ E)



ST25 EL 実掘状況 (↑ N)



ST25 EL 土層断面 (↑ E)



ST25 遺物 (RP490・494) 出土状況 (↑ E)



ST29・30 遺物出土状況 (↑ W)



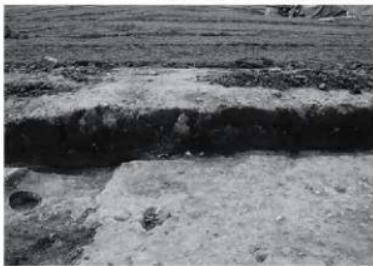
ST28・29・30 検出状況 (↑ S)



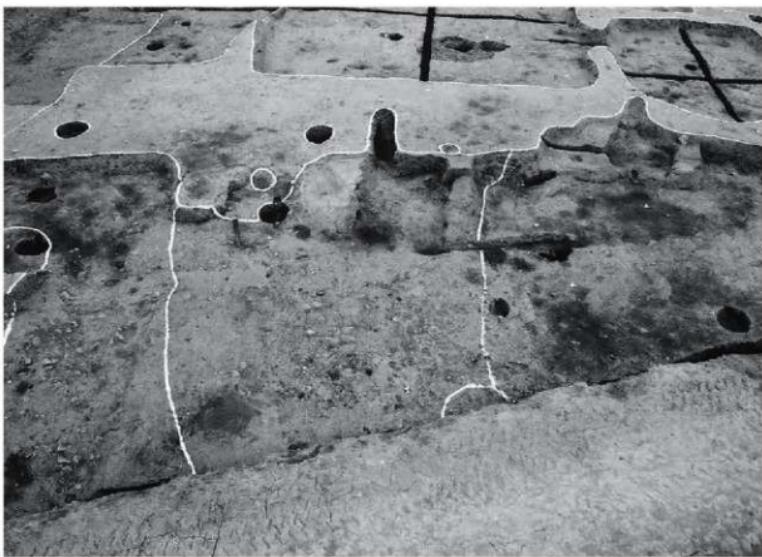
ST28・29・30 精査状況 (↑ S)



南区北半西侧 精査状況 (↑ N)



ST29・30 西壁 土層断面 (↑ E)



ST29·30 完掘状况 (↑ W)



ST28·29 精查状况 (↑ S)



ST28·29 EP 精查状况 (↑ S)



ST28·29 完掘状况 (↑ S)



ST29 遗物 (RP148·149·150·155·448·449·450) 出土状况 (↑ E)



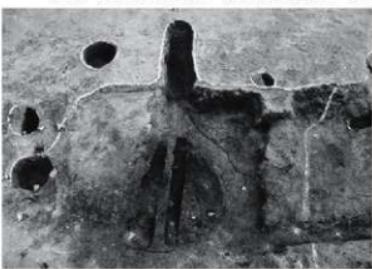
ST29 EL 土層断面 (↑ N)



ST29 EL 遺物 (RP183・182) 出土状況 (↑ SE)



ST29 EL 遺物 (RP179・182・422) 出土状況 (↑ W)



ST29 EL 完掘状況 (↑ W)



ST29 遺物 (RP148・149・150・155・448・449・450) 出土状況 (↑ S)



ST29 遺物 (RP450) 出土状況 (↑ S)



ST29 EP22・25・27 精査状況 (↑ W)



ST30 EP1 半截状況 (↑ S)



ST30 完掘状况 (↑ W)



ST30 完掘状况 (↑ S)



ST30 贴床外し状況 (↑ W)



ST30 EL 完掘状况 (↑ W)



ST30 EL 土層断面 (↑ W)



ST30 EP1 土層断面 (↑ S)



ST30 EP4・5 土層断面 (↑ S)



ST29 遺物 (RP177) 出土状況 (↑ S)



ST30 遺物 (RP173・174・176) 出土状況 (↑ S)



ST28 貼床外し状況 (↑ W)



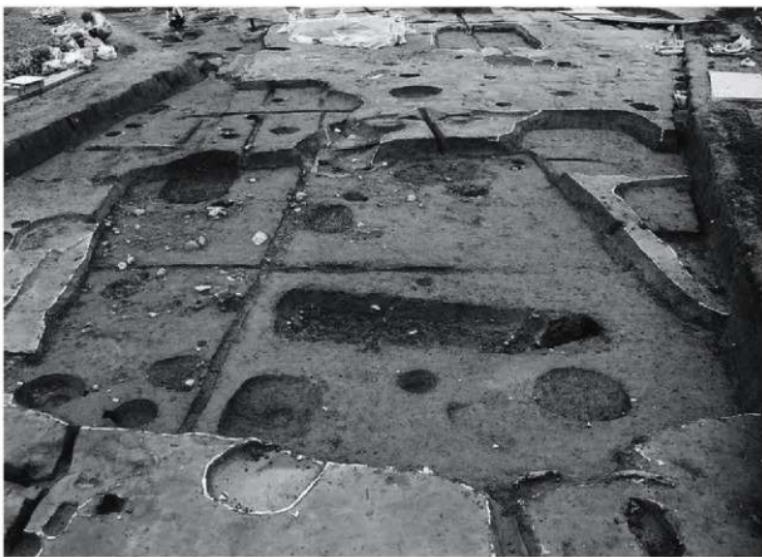
ST28 遺物出土状況 (↑ E)



ST28 土層断面 (↑ E)



ST28 遺物 (RP148～150) 出土状況 (↑ N)



ST35 完掘状況 (↑ S)



ST35 完掘状況 (↑ SW)



ST35 精査状況 (↑ S)



ST35 EP 検出状況 (↑ S)



ST35 貼床外し後 EP 検出状況 (↑ S)



ST35 完掘状況 (↑ W)



ST35 EL 土層断面 (↑ S)



ST35 EL 精査状況 (↑ SW)



ST35 EL 完掘状況 (↑ S)



ST35 EP1 完掘状況 (↑ S)



ST35 EP2 完掘状況 (↑ S)



ST35 EP83a + b 土層断面 (↑ SW)



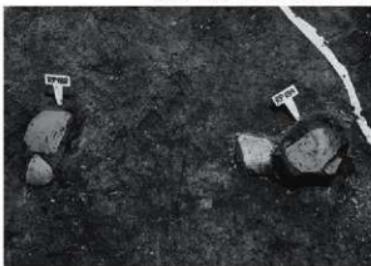
ST35 EP7 完掘状況 (↑ S)



ST35 EP3・21 土層断面 (↑ W)



ST35 遺物 (RP420) 出土状況 (↑ W)



ST35 遺物 (RP188・189) 出土状況 (↑ W)



ST35 遺物 (RP199・201) 出土状況 (↑ N)



ST36B EL 完掘状況 (↑ W)



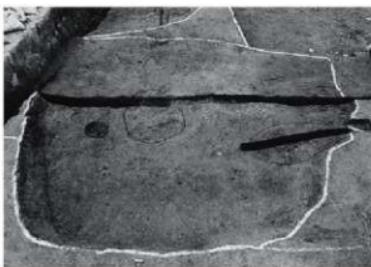
ST36B EL 土層断面 (↑ W)



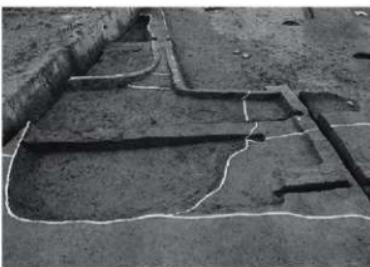
SK36A・ST36B 完掘状況 (↑ S)



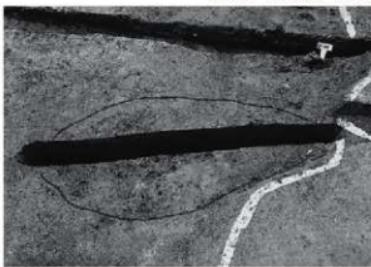
ST36 貼床外し状況 (↑ W)



ST42A 完掘状况 (↑ N)



ST42A 精查状况 (↑ S)



ST42A EL 土層断面 (↑ N)



ST42A EL 土層断面 (↑ S)



ST42A 土層断面 (↑ N)



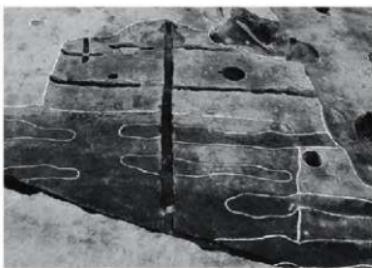
ST37 精查状况 (↑ N)



ST42B EL 土層断面 (↑ W)



ST42B EL 土層断面 (↑ S)



ST39・41 完掘状況 (↑ W)



ST39・41 精査状況 (↑ S)



ST41 EL 土層断面 (↑ W)



ST41 EL 土層断面 (↑ S)



ST41 EL 完掘状況 (↑ W)



ST41 EK1 土層断面 (↑ S)



ST39・41 貼床外し状況 (↑ W)



ST39 EL 土層断面 (↑ E)



ST39 EP21 土層断面 (↑ S)



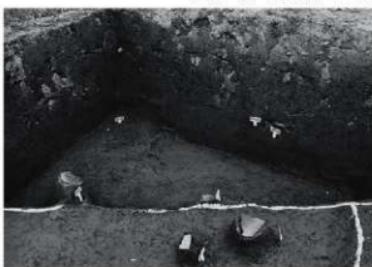
ST39・41 EP 精査状況 (↑ S)



ST68・69 完整状況 (↑ N)



ST68・69 遺物出土状況 (↑ W)



ST68・69 遺物出土状況 (↑ E)



ST68 遺物 (RP204・205・206・207) 出土状況 (↑ W)



ST70 貼床外し状況 (↑ N)



ST70 遺物 (RP212・378・379・380) 出土状況 (↑ E)



ST74A・B 完掘状況 (↑ SW)



ST74A 土層断面 (↑ S)



ST74A EL 土層断面 (↑ S)



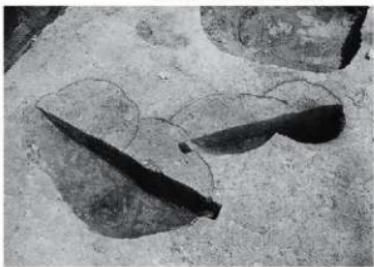
ST74A EL 土層断面 (↑ S)



ST74A EK 遺物出土状況 (↑ W)



ST74A EK 土層断面 (↑ W)



ST74A EP 半截状況 (↑ N)



SL78 遺物 (RP219 ~ 222・269) 出土状況 (↑ E)



ST85 完掘状況 (↑ S)



ST85 精査状況 (↑ S)



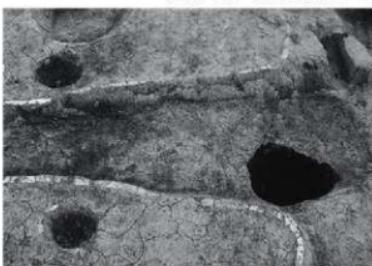
ST85 ED1・2 土層断面 (↑ S)



ST85 ED1・2 土層断面 (↑ E)



ST85 東側 ED2 土層断面 (↑ W)



ST85 東側 ED2 完掘状況 (↑ W)



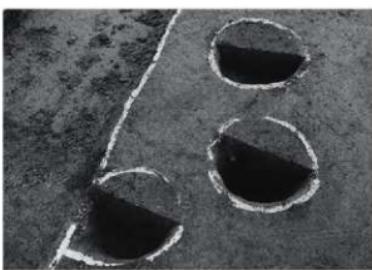
ST85 EL・ED2 遺物(RP469～472・474)出土状況 (↑ W)



ST85 EL・ED2 土層断面 (↑ S)



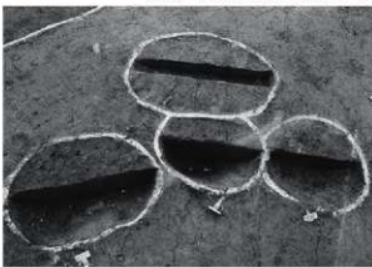
ST85 EP6 土層断面 (↑ S)



ST85 西側 EP 群土層断面 (↑ S)



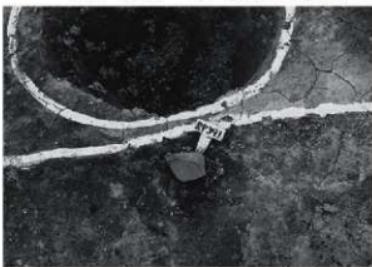
ST85 ED1 · EP133 土層断面 (↑ S)



ST85 EP135 ~ 137 · EL187 土層断面 (↑ E)



ST85 ED1 遺物出土状況 (↑ W)



ST85 ED2 遺物 (RP391) 出土状況 (↑ W)



ST89C 完掘状況 (↑ S)



ST89C EL 検出状況 (↑ S)



ST86 完掘状況 (↑ E)



ST86 遺物出土状況 (↑ E)



ST86 EL 完掘状況 (↑ S)



ST86 EL 土層断面 (↑ S)



ST86 EK 遺物 (RP492 ~ 496) 出土状況 (↑ S)



ST86 EK 遺物 (RP493) 出土状況 (↑ E)



ST86 EP20 精査状況 (↑ S)



ST86 遺物 (RP261・263・264) 出土状況 (↑ S)



ST89A 完掘状况 (↑ S)



ST89A 遗物出土状况 (↑ E)



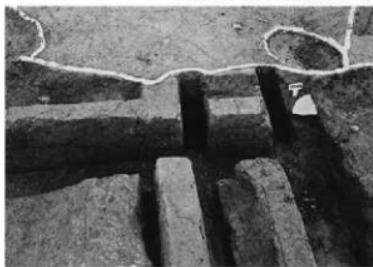
ST89A EP 精査状况 (↑ S)



ST89A EL 精査状况 (↑ S)



ST89A EL 土層断面 (↑ E)



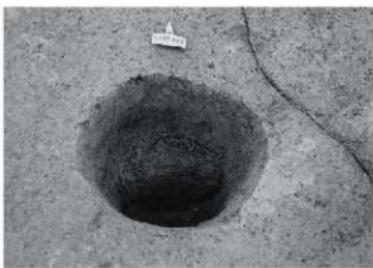
ST89A EL 土層断面 (↑ S)



ST89A EK 土層断面 (↑ S)



ST89A EP3 遗物 (RP487) 出土状况



ST89A EP4 精査状況 (↑ W)



ST89A EL 完掘状況 (↑ S)



ST89A 遺物 (RP278 ~ 280・301・411) 出土状況 (↑ S)



ST89A 遺物 (RP291 ~ 293・300・410) 出土状況 (↑ W)



ST89A 遺物 (RP292・293・300) 出土状況 (↑ NE)



ST89A 贴床下遺構検出状況 (↑ S)



ST89B 贴床精査状況 (↑ S)



ST89B 贴床除去 (↑ N)



ST90 完掘状况 ( $\uparrow$  S)



ST90 完掘状况 ( $\uparrow$  W)



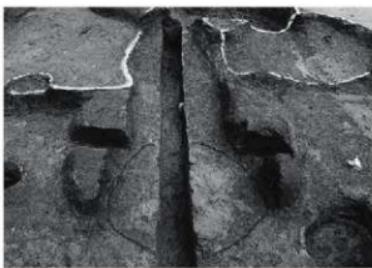
ST90 · 100B · 100C 精查状况 ( $\uparrow$  W)



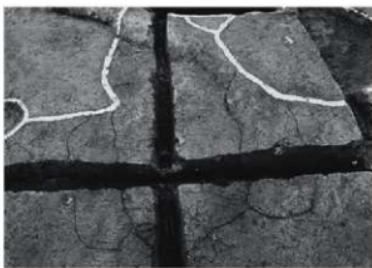
ST90 EP 半截状况 ( $\uparrow$  S)



ST90 南東側貼床土層断面 ( $\uparrow$  E)



ST90 EL 完掘状況 (↑ S)



ST90 EL 土層断面 (↑ S)



ST90 東側 EL 土層断面 (↑ S)



ST90 南側 EL・EP32 土層断面 (↑ N)



ST90 EP20 土層断面 (↑ S)



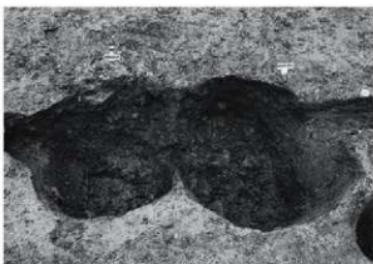
ST90 EP20 完掘状況 (↑ S)



ST90 EK2 土層断面 (↑ S)



ST90 EP21 土層断面 (↑ S)



ST90 EP21 · ST100B EP1 完整状况 (↑ S)



ST90 EP8 土層断面 (↑ S)



ST90 EK5 遺物 (RP482) 出土状况 (↑ S)



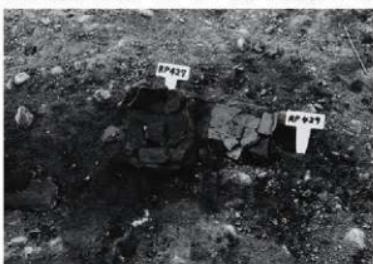
ST90 EK7 土層断面 (↑ S)



ST90 遺物 (RP338 · 420 · 427 · 429) 出土状况 (↑ W)



ST90 遺物 (RP334 · 335) 出土状况 (↑ S)



ST90 遺物 (RP427 · 429) 出土状况 (↑ S)



ST90 遺物 (RP347) 出土状况 (↑ W)



ST90 遺物 (RM366) 出土状況 (↑ S)



ST90 貼床遺物 (RP498 + 499) 出土状況 (↑ W)



ST90 遺物 (RP499) 出土状況 (↑ E)



ST90 貼床遺物出土状況 (↑ N)



ST94 完掘状況 (↑ S)



ST94 土層断面 (↑ S)



ST94 EP3 遺物 (RP462) 出土状況 (↑ S)



ST94 EK1 遺物出土状況 (↑ W)



ST100B 完掘状况 (↑ S)



ST100A・B 精查状况 (↑ W)



ST100B EP 精查状况 (↑ S)



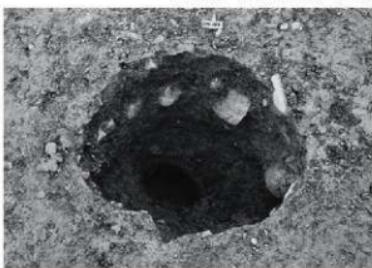
ST100B EL 遗物 (RP321・323・324) 出土状况 (↑ W)



ST100B EP1 土層断面 (↑ S)



ST100A EP2 土層断面 (↑ S)



ST90 EP8 完掘状况 (↑ S)



ST100B 遗物 (RP318・322) 出土状况 (↑ S)



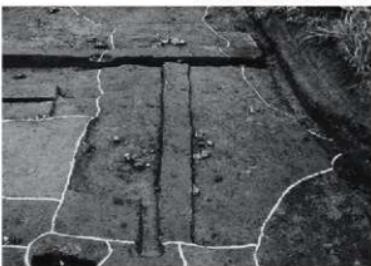
ST100B 遗物 (RP428) 出土状況 (↑ E)



ST100A 完掘状況 (↑ S)



ST100C 完掘状況 (↑ S)



ST100C 遗物出土状況 (↑ W)



ST100C 土層断面 (↑ E)



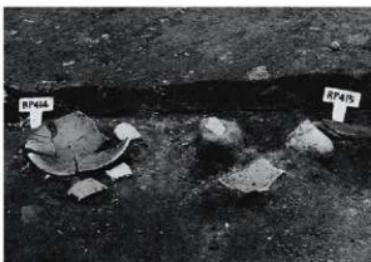
ST100C EL 土層断面 (↑ S)



ST100C EL 遗物 (RP310・311・312・313) 出土状況 (↑ E)



ST100C 遗物 (RP362 ~ 365・367・368) 出土状況 (↑ S)



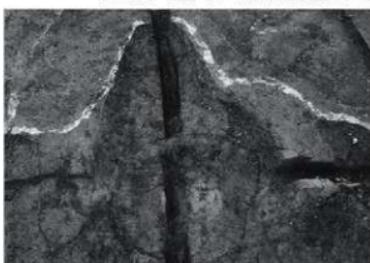
ST100C 遺物（RP414・415）出土状況（↑ S）



ST100C 遺物（RP416）出土状況（↑ E）



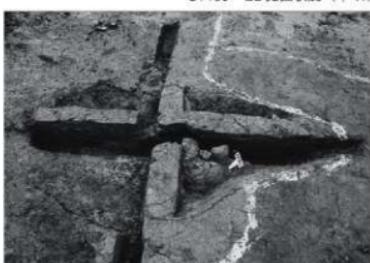
ST159 完整状況（↑ S）



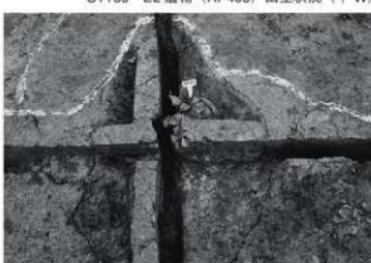
ST159 EL 完整状況（↑ W）



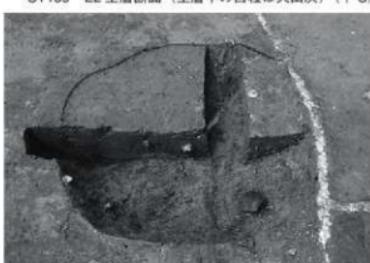
ST159 EL 遺物（RP405）出土状況（↑ W）



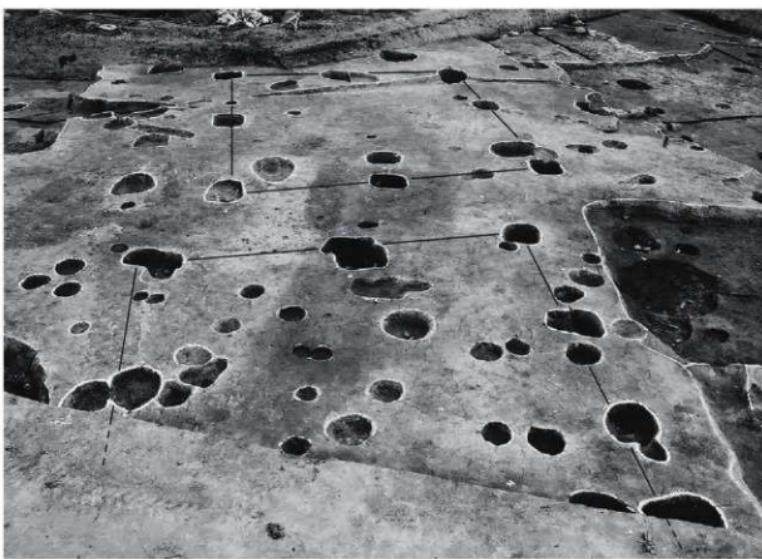
ST159 EL 土層断面（土層中の白粒は火山灰）（↑ S）



ST159 EL 土層断面（↑ W）



ST159 EK 土層断面（↑ S）



SB101・SB102 完掘状況 (↑ W)



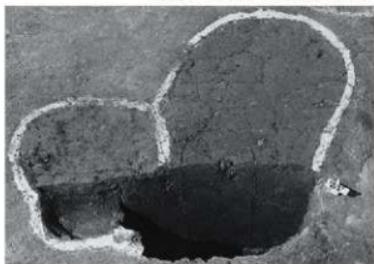
SB101・SB102 完掘状況 (↑ E)



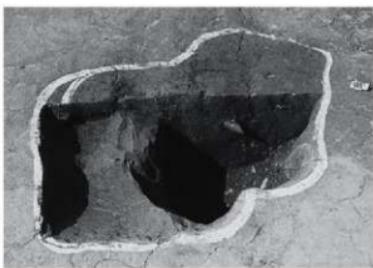
SB101・SB102 棚出状況 (↑ W)



SB102 精査状況 (↑ W)



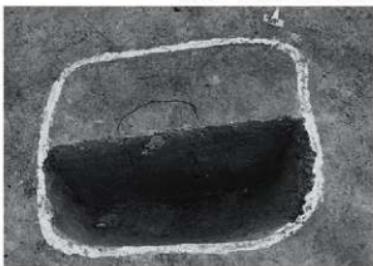
SB101 EP2 土層断面 (↑ S)



SB101 EP3 土層断面 (↑ S)



SB101 EP6 完掘状況 (↑ S)



SB102 EP2 土層断面 (↑ S)



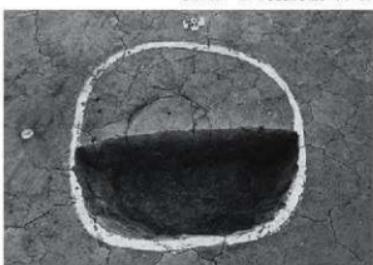
SB102 EP4 土層断面 (↑ S)



SB102 EP2 完掘状況 (↑ S)



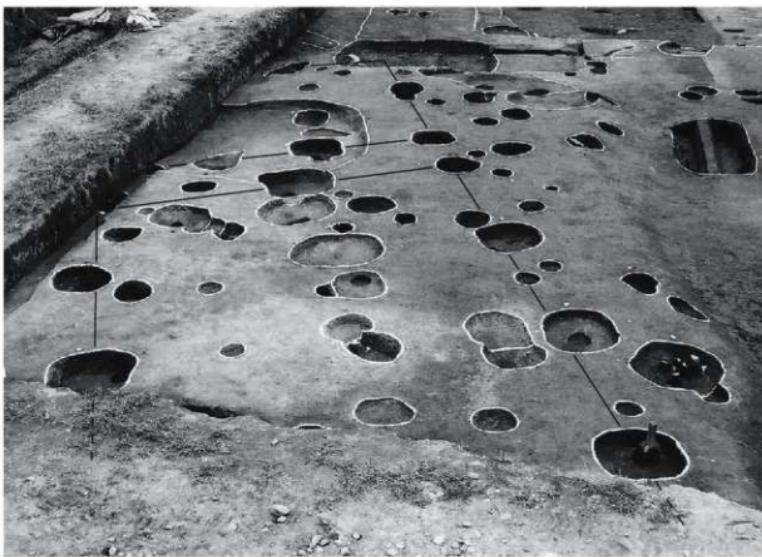
SB102 EP3 完掘状況 (↑ S)



SA103 EP3 土層断面 (↑ S)



SA103 EP4 土層断面 (↑ S)



SB156・157 完掘状況 (↑ S)



SB156・157 検出状況 (↑ S)



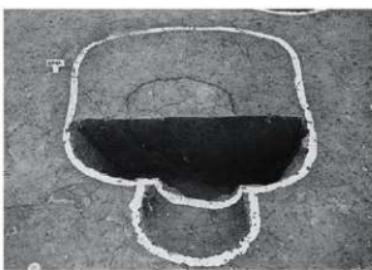
SB156 完掘状況 (↑ S)



SB156・157 完掘状況 (↑ N)



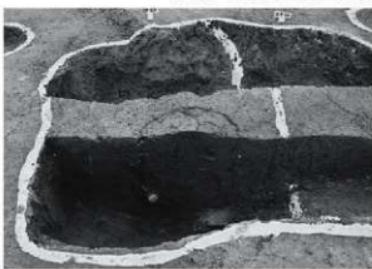
SB157 EP 検出状況 (↑ S)



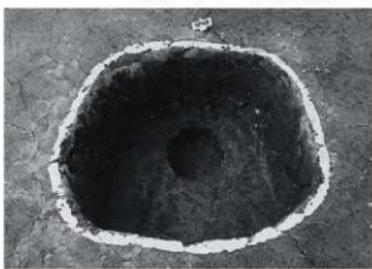
SB157 EP66 土層断面 (↑ S)



SB157 EP47+147 完掘状況 (↑ E)



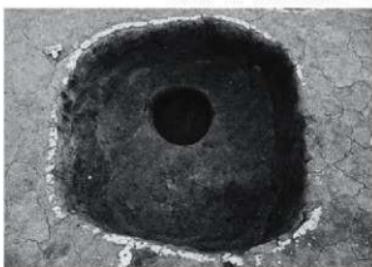
SB156 EP63-64 土層断面 (↑ W)



SB157 EP48 完掘状況 (↑ E)



SB156 EP56 完掘状況 (↑ E)



SB157 EP66 完掘状況 (↑ S)



SB156 EP55 完掘状況 (↑ S)



SB156 EP50 完掘状況 (↑ S)



SB108 完掘状況 (↑ N)



SB108 EP2 土層断面 (↑ S)



SD9 掘出状況 (↑ N)



SD9 完掘状況 (↑ NW)



SD9 土層断面 (↑ S)



SD9 土層断面 (↑ S)



SK7 遺物 (RP3・4・5・52) 出土状況 (↑ E)



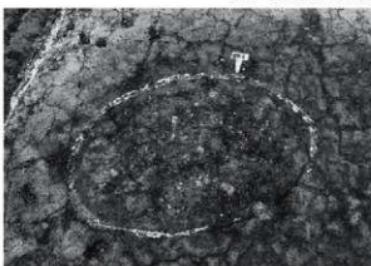
北区 旧河川路（東壁）土層断面 (↑ W)



SK2 検出状況 (↑ S)



SK2 遺物 (RP302) 出土状況 (↑ W)



SK1 検出状況 (↑ S)



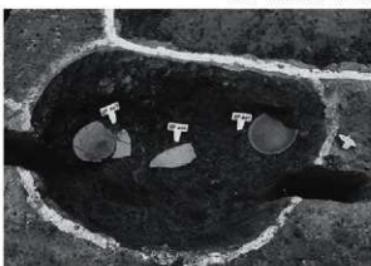
SK1 土層断面 (↑ S)



SK5 土層断面 (↑ S)



SK5 上位遺物 出土状況 (↑ W)



SK5 中位遺物 出土状況 (↑ W)



SK5 下位遺物 出土状況 (↑ SW)



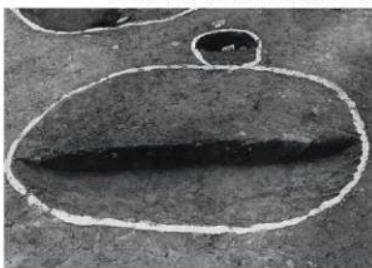
SP138 土層断面 (↑ S)



SP130 遺物 (RP373) 出土状況 (↑ S)



SK31 土層断面 (↑ S)



SK58 半截状況 (↑ S)



SP52 遺物 (RP190・377・382) 出土状況 (↑ S)



SP60 遺物 (RP216) 出土状況 (↑ SE)



SK36A 精査状況 (↑ SE)



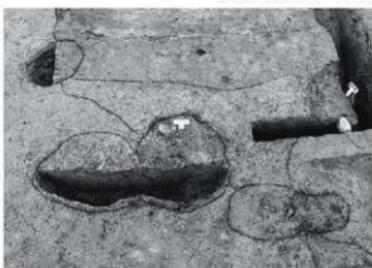
SG32 精査状況 (↑ S)



SG32 土層断面 (↑ S)



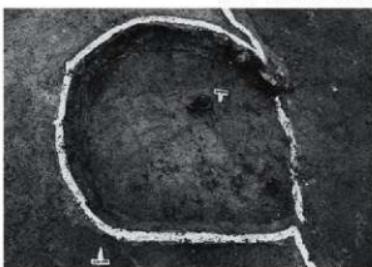
SP60 遺物 (RP216) 出土状况 (↑ N)



SP44 土層断面 (↑ S)



SP20 遺物 (RP62) 出土状况 (↑ N)



SK177 遺物 (RP434) 出土状况 (↑ S)



SP91・92、SK93 精査状況 (↑ S)



SP60、SK75・76 精査状況 (↑ W)



北区南半 SK198 土層断面 (↑ E)



10-1



10-2



10-3



10-4



10-5



10-6



10-7



10-9



10-10



10-11



10-12



11-1



11-3



11-4



11-5



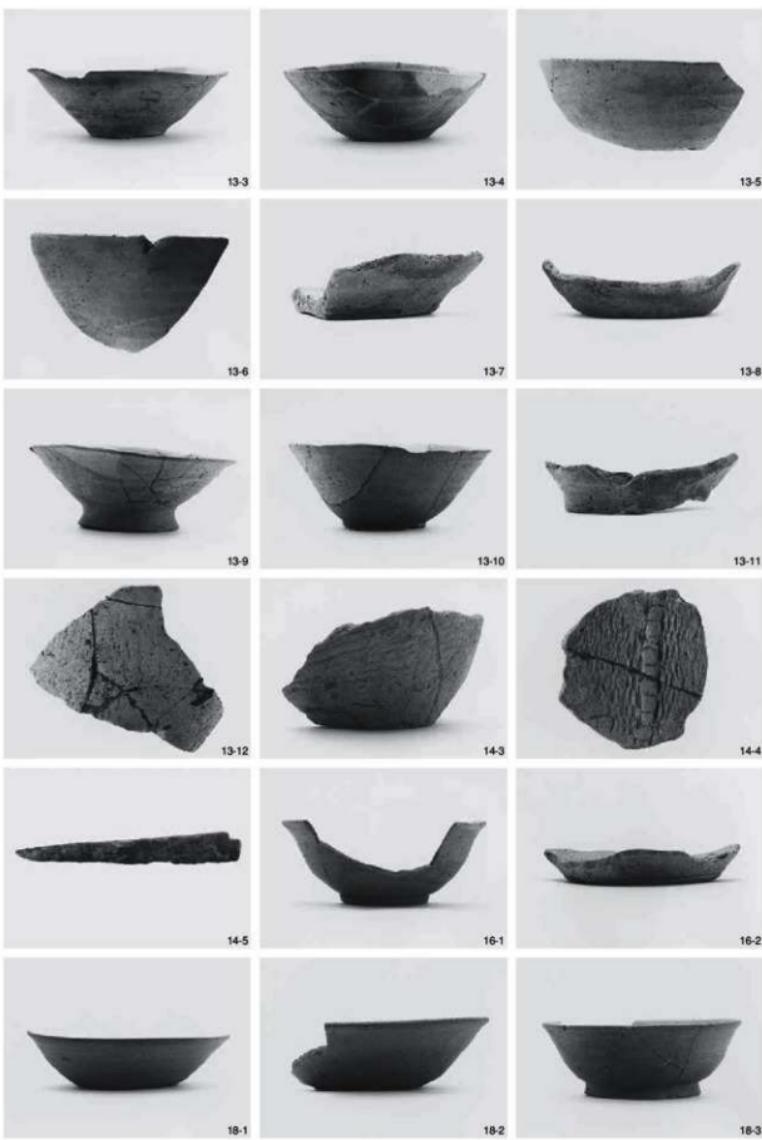
11-6

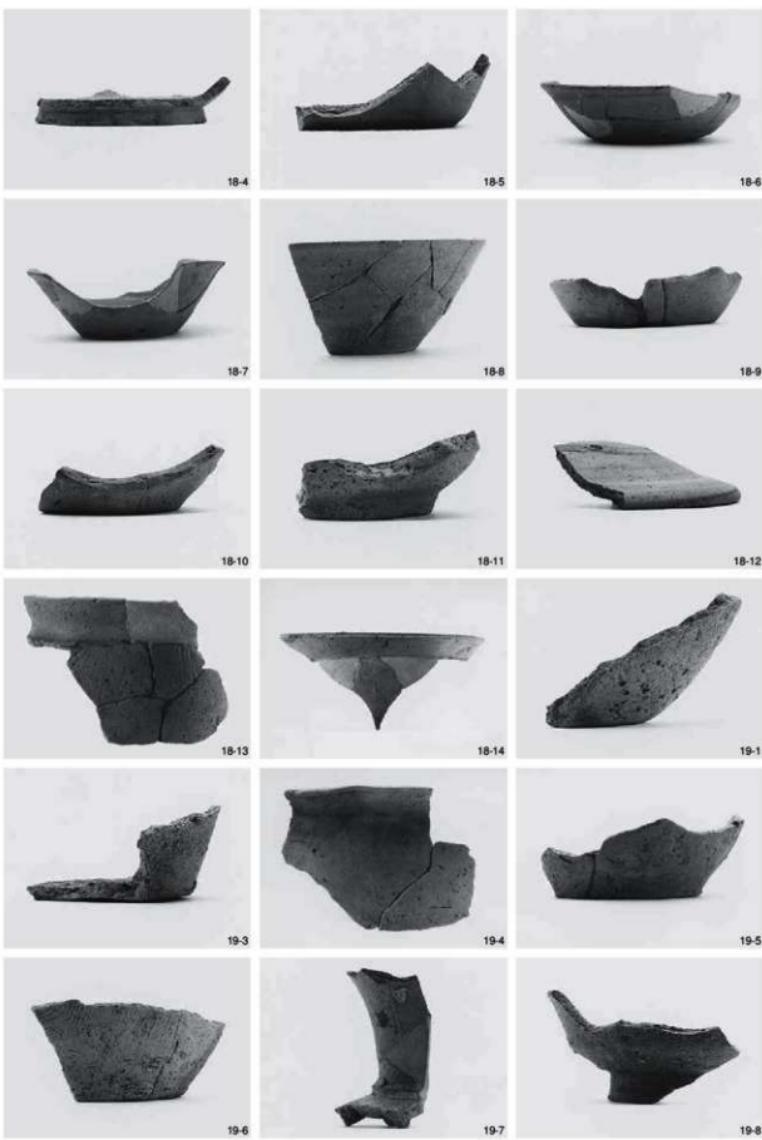


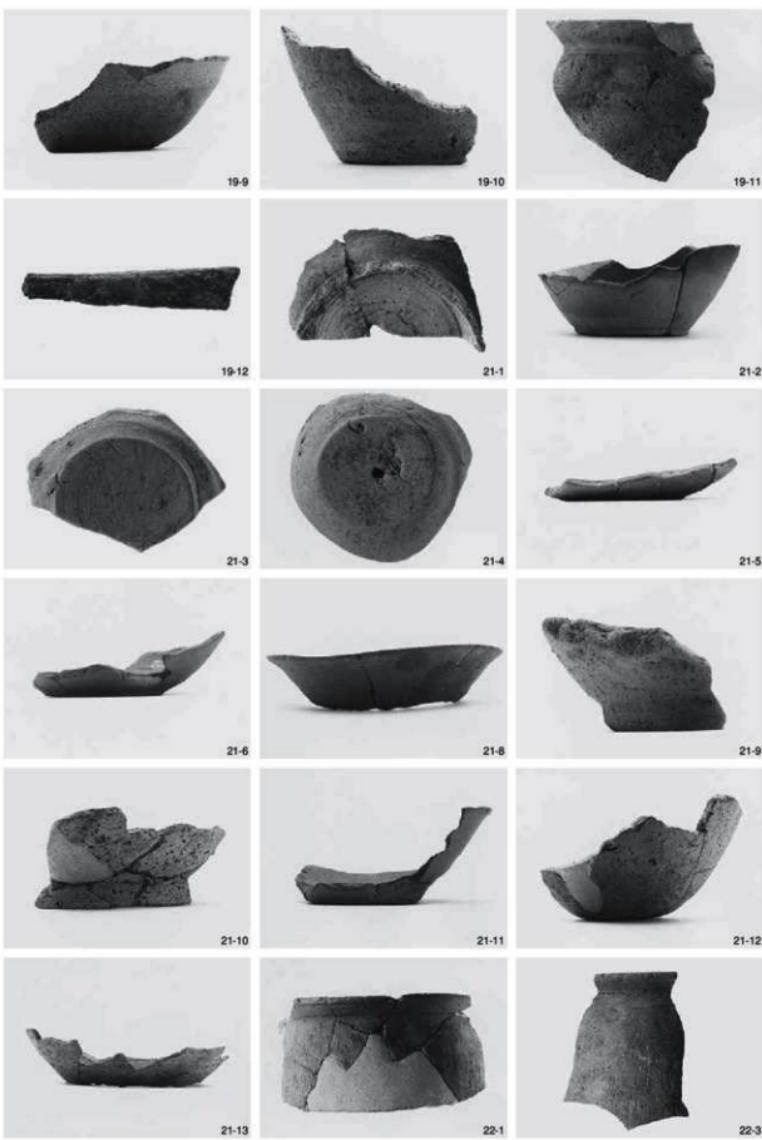
13-1

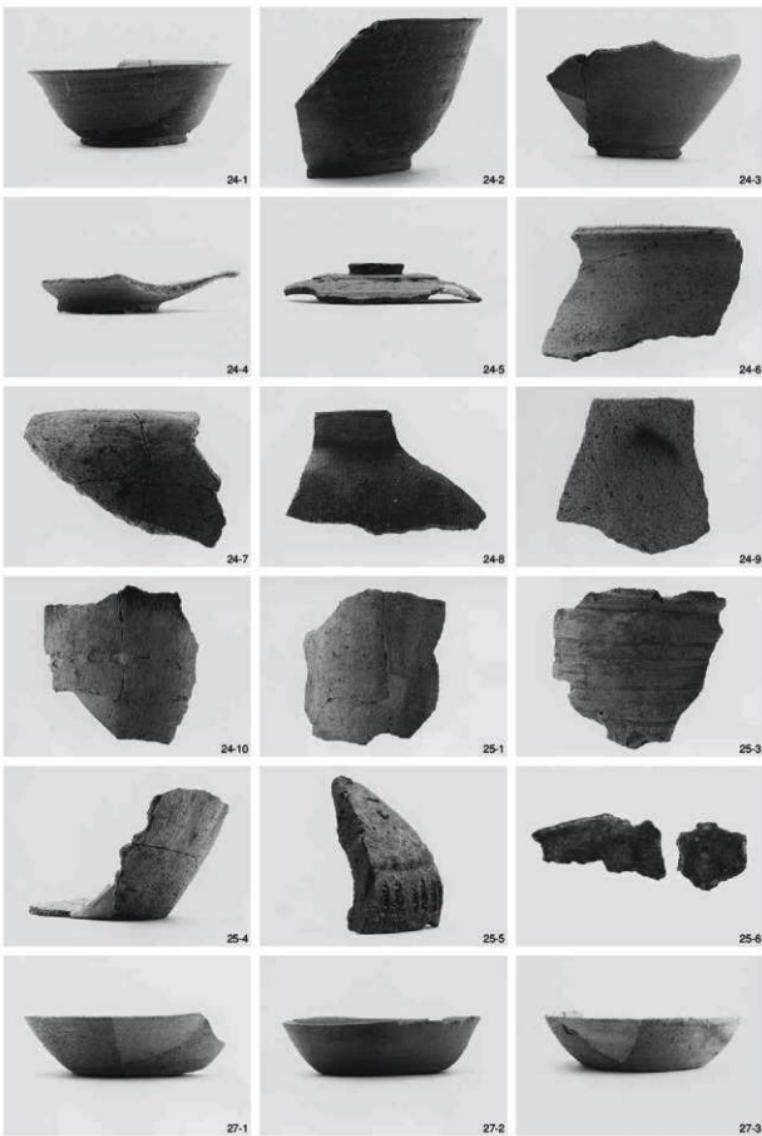


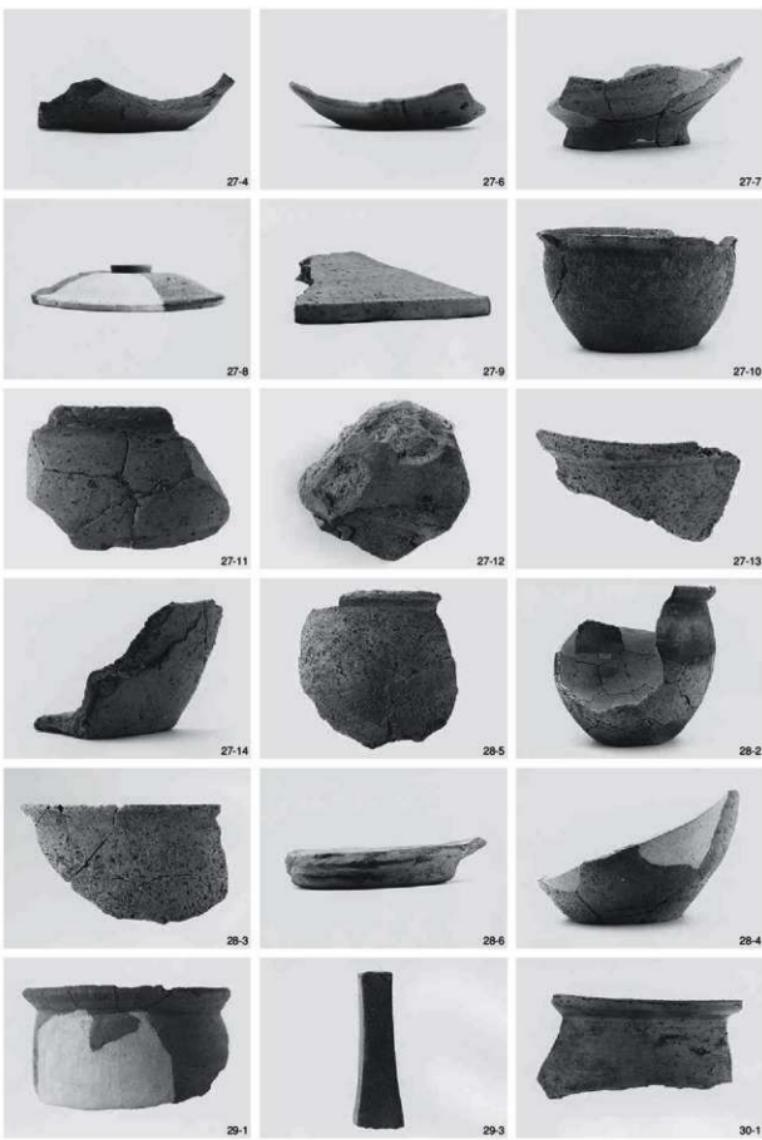
13-2

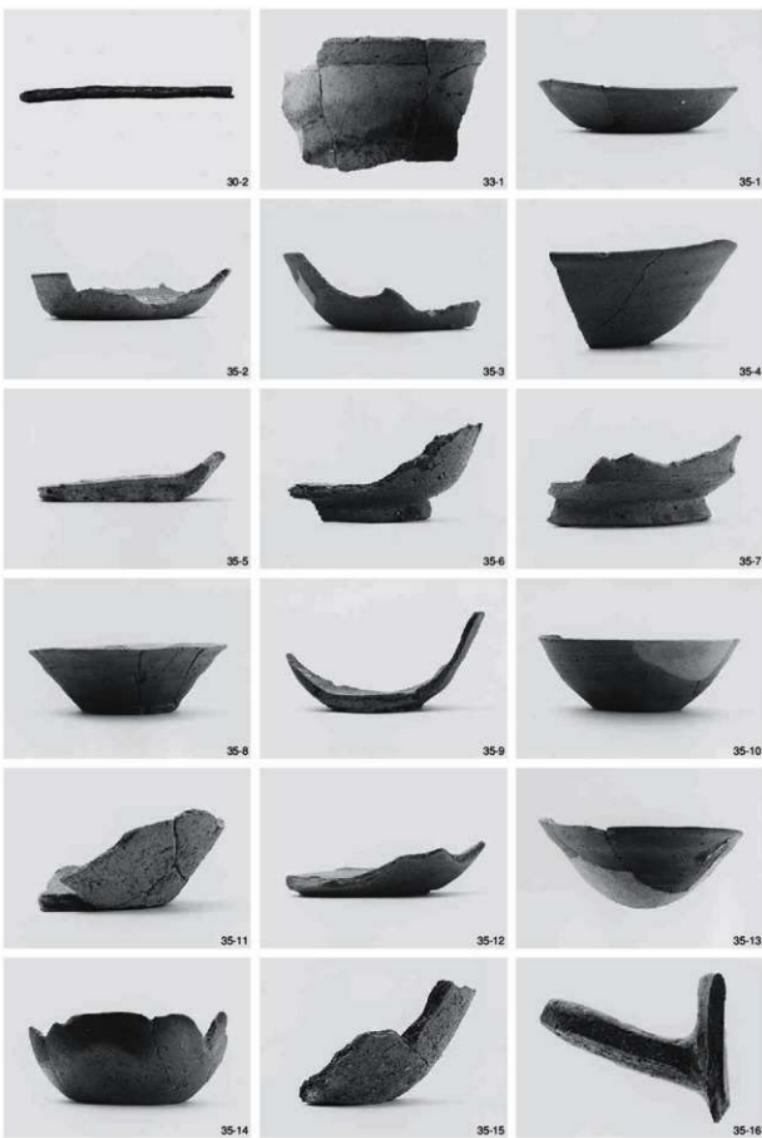


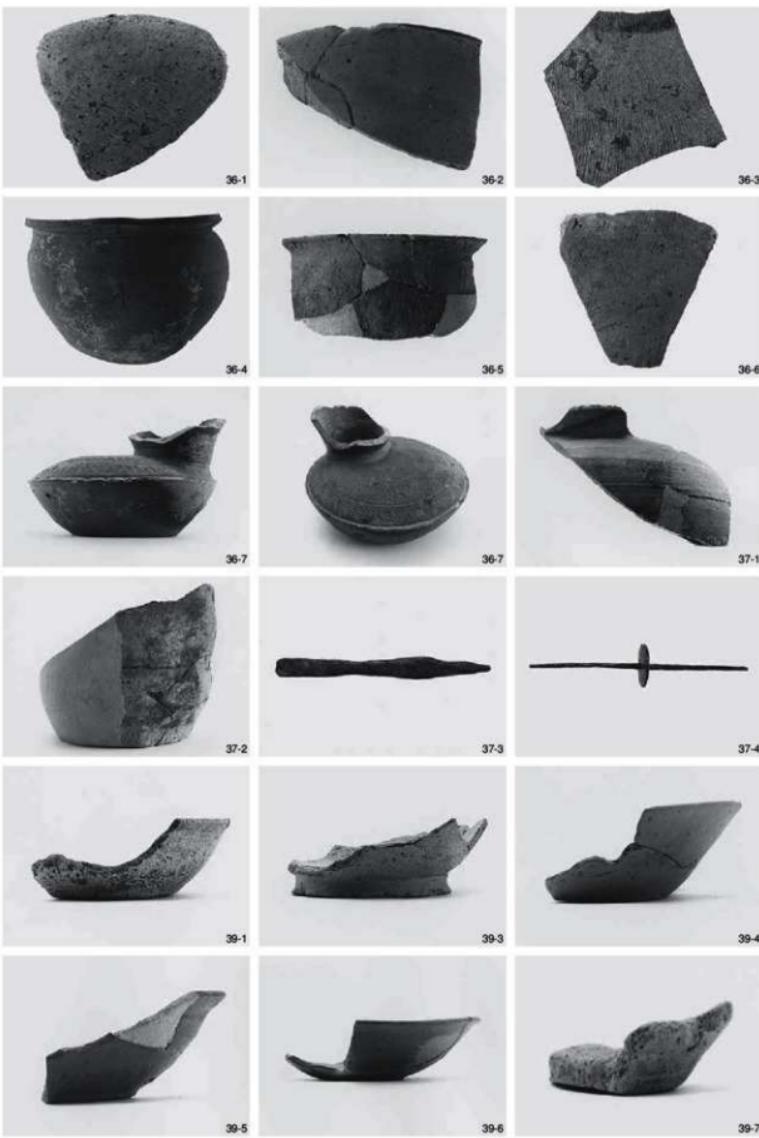


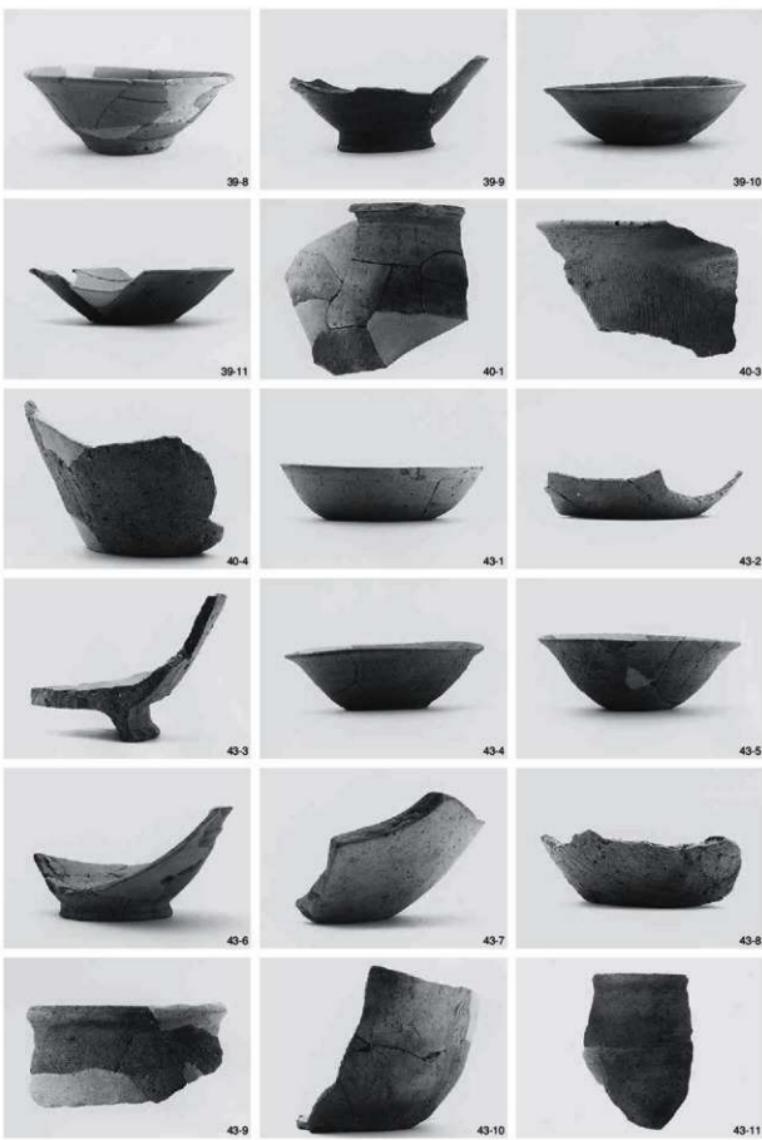


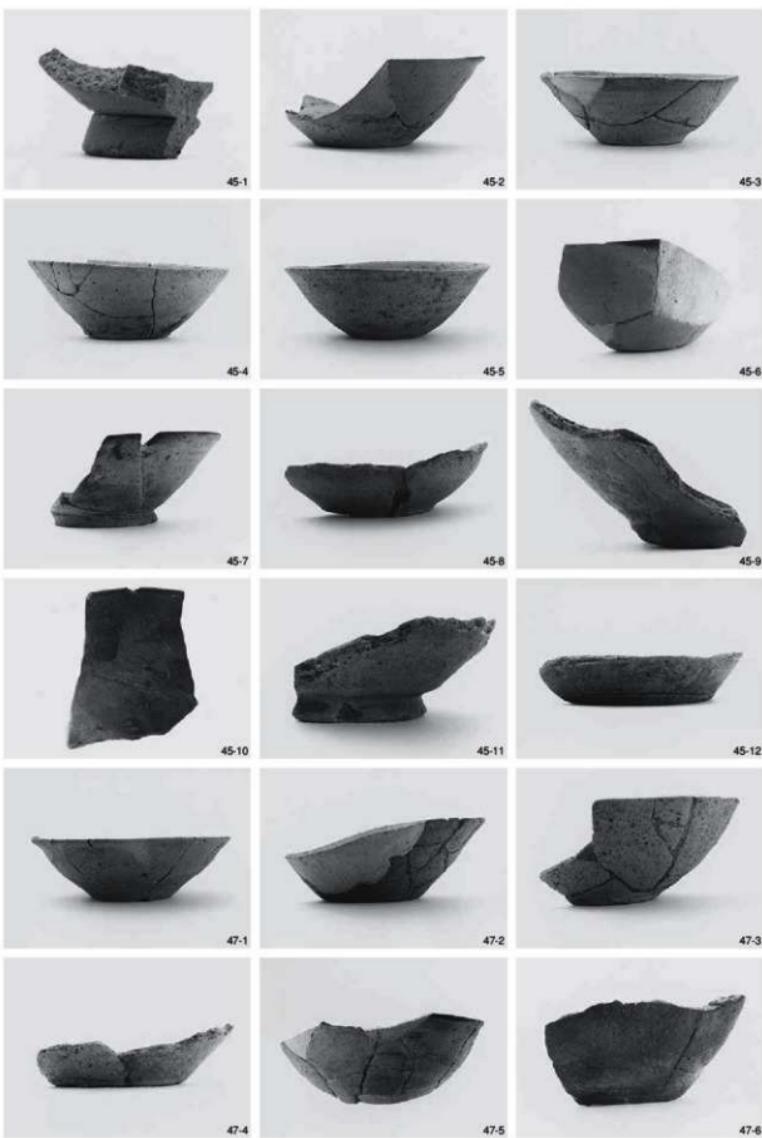


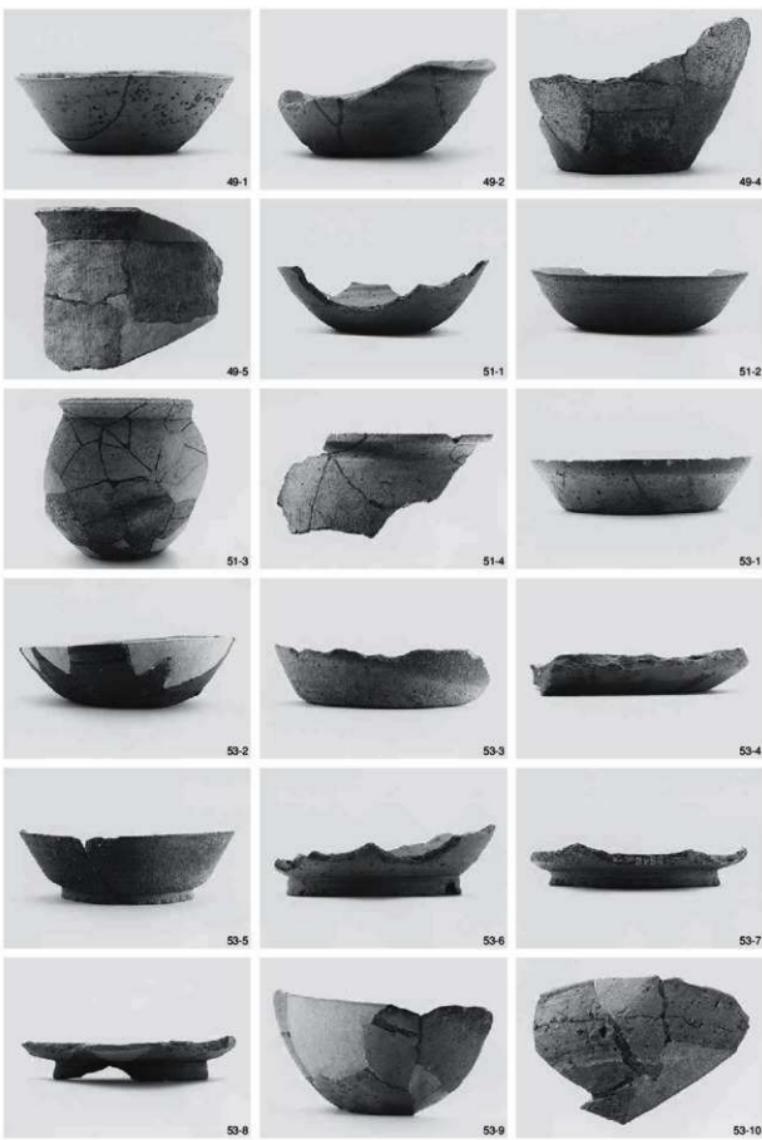


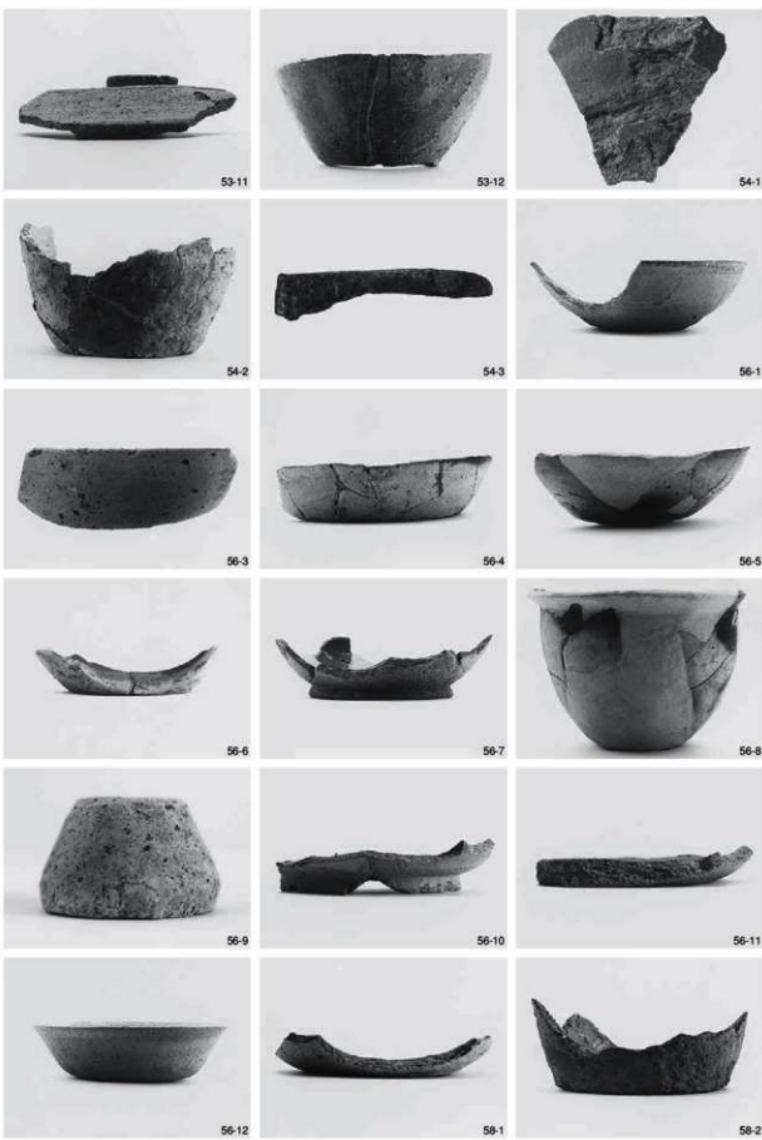


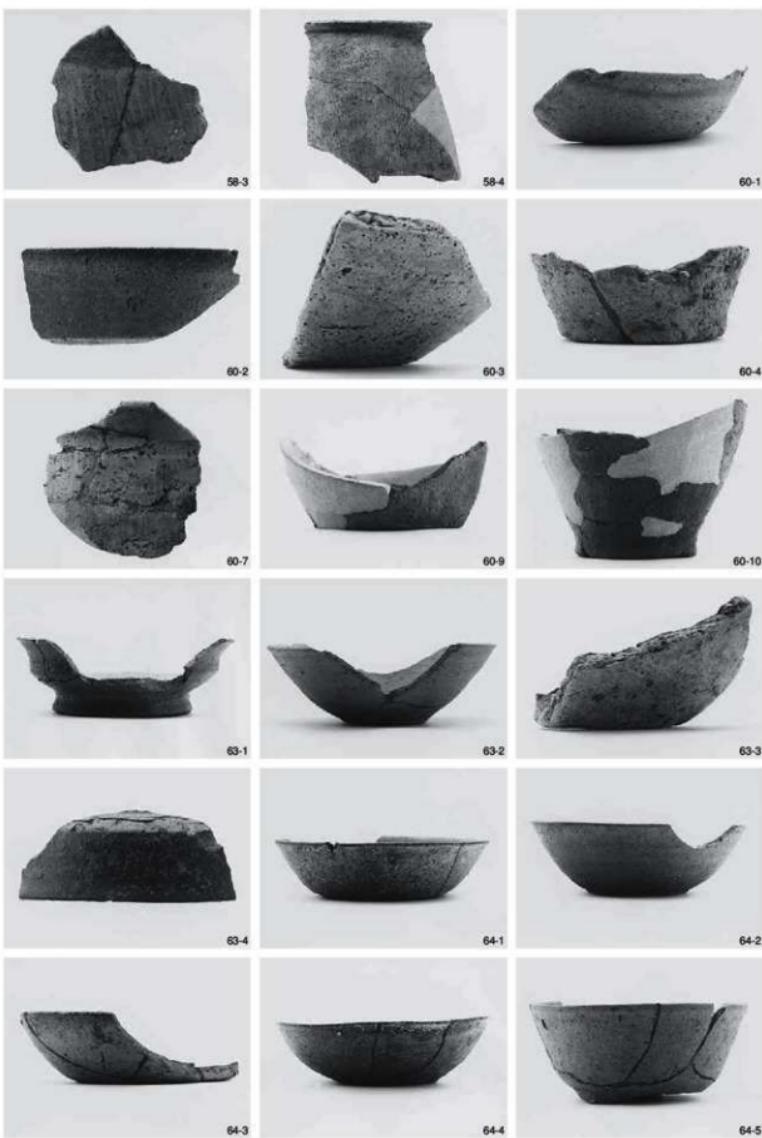


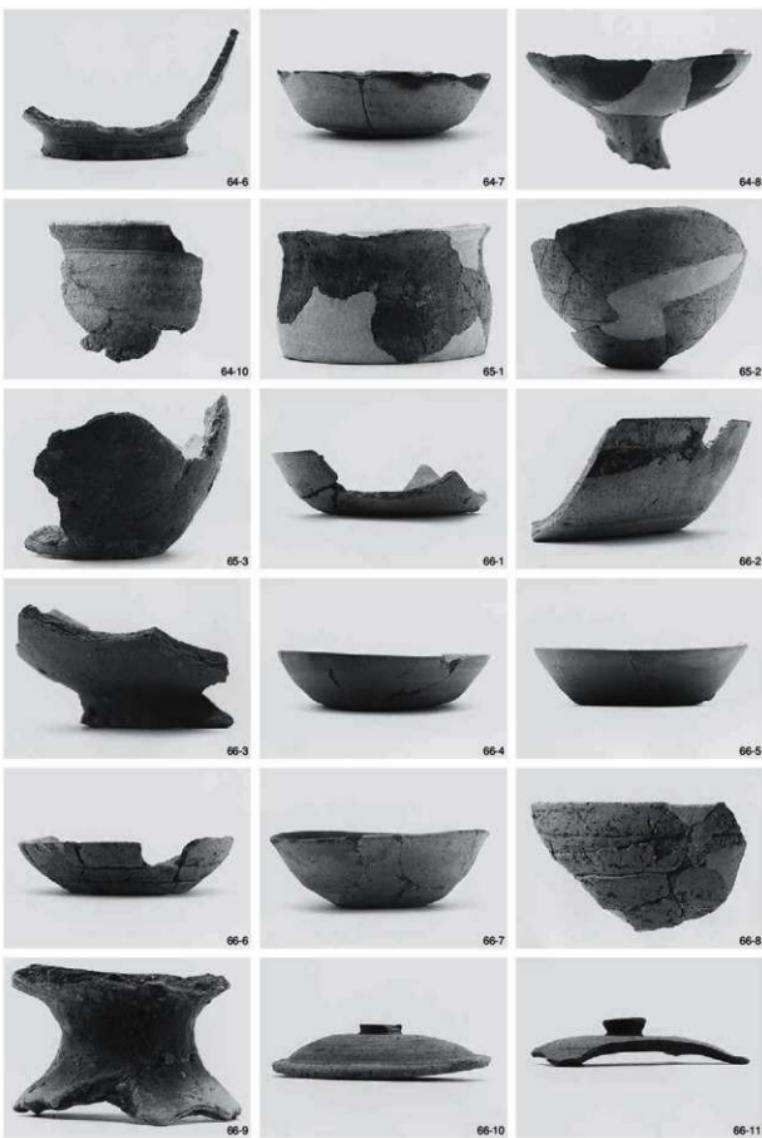


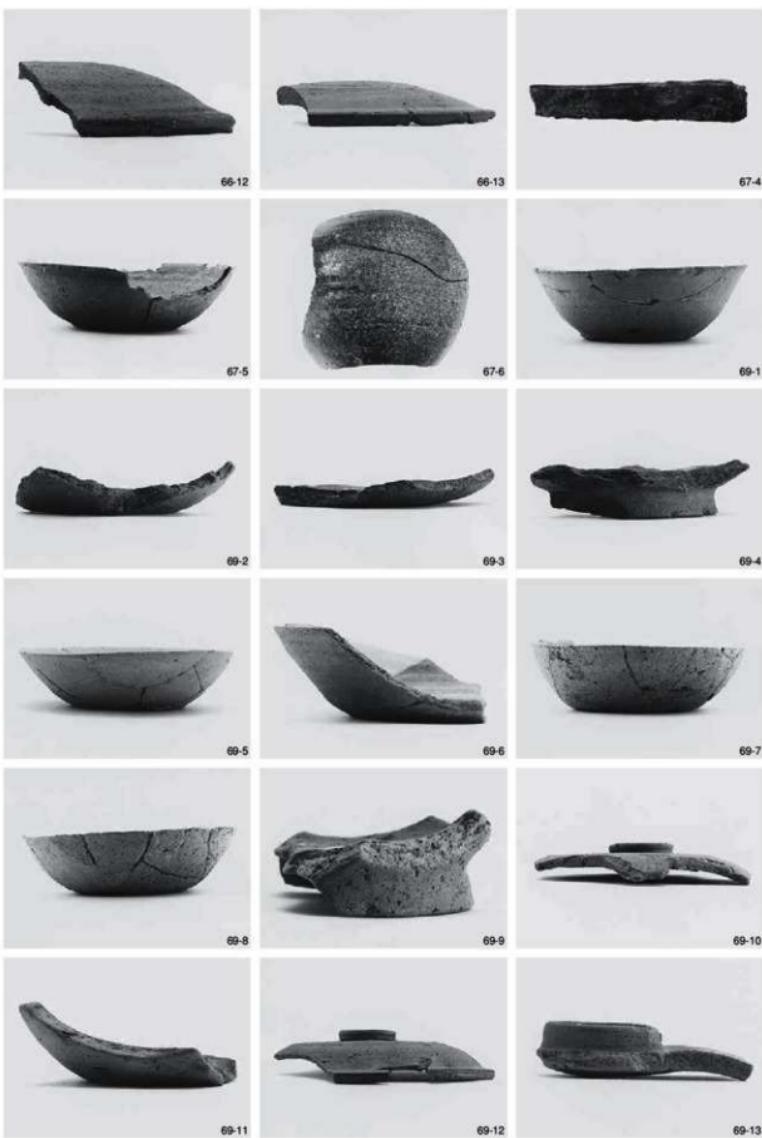


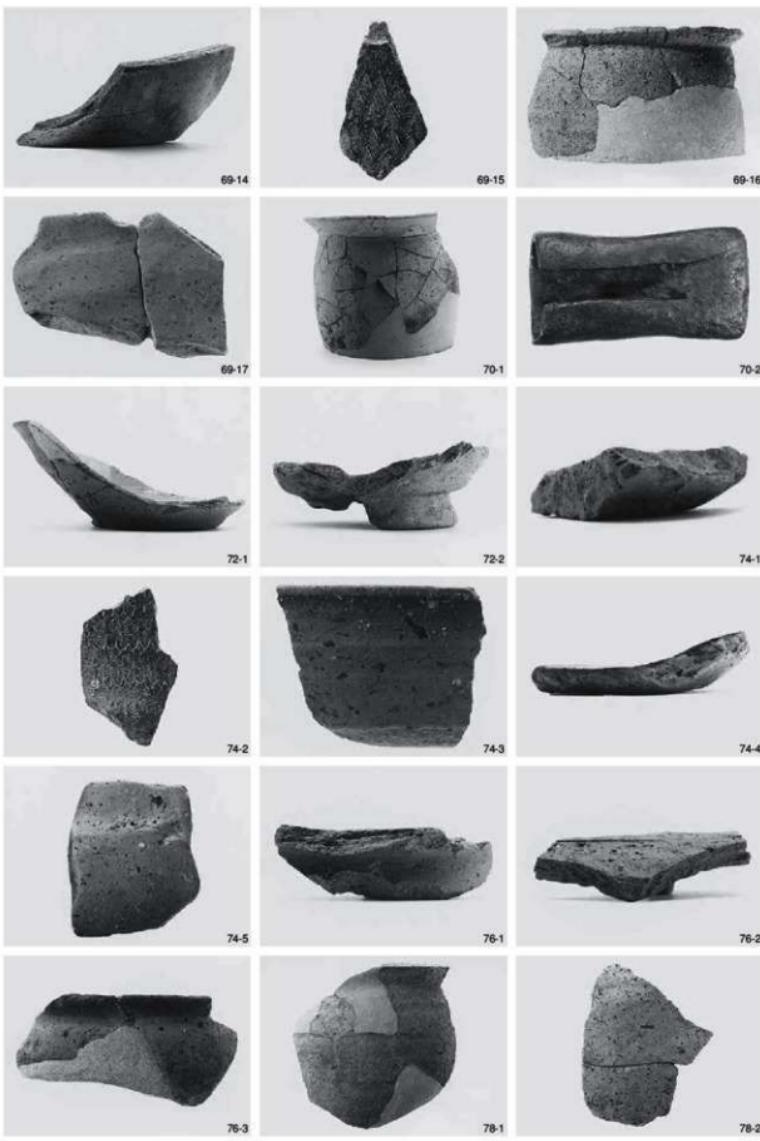


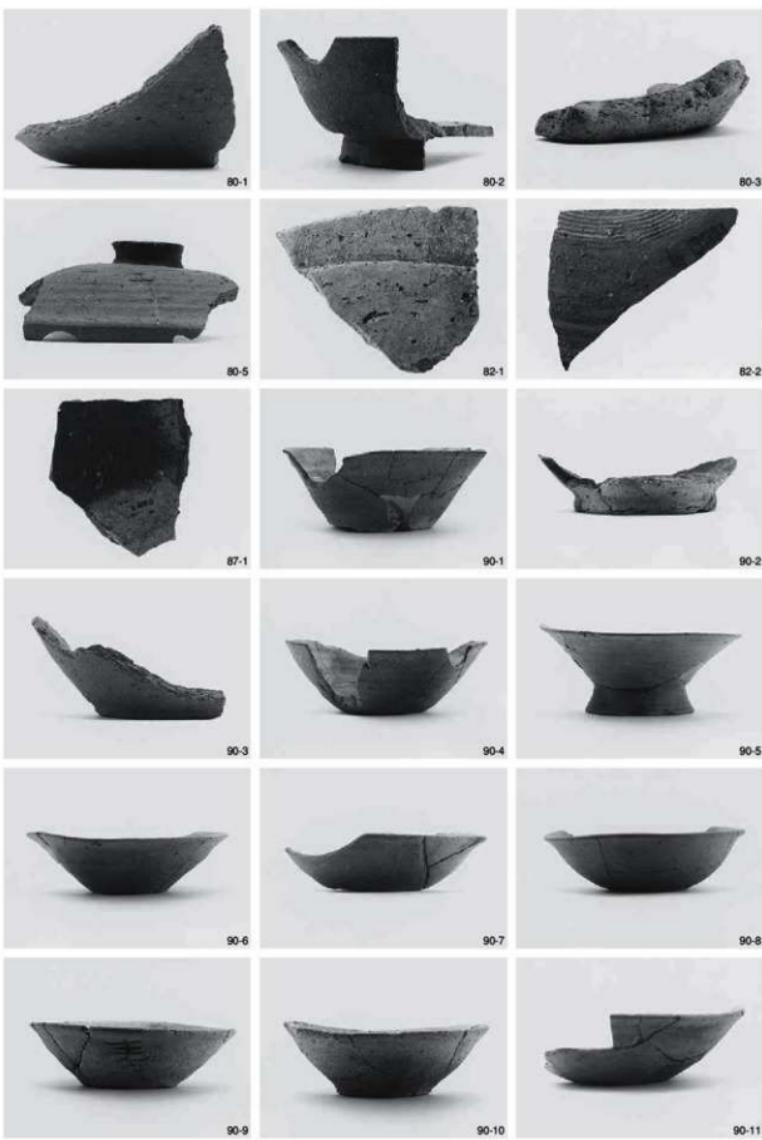


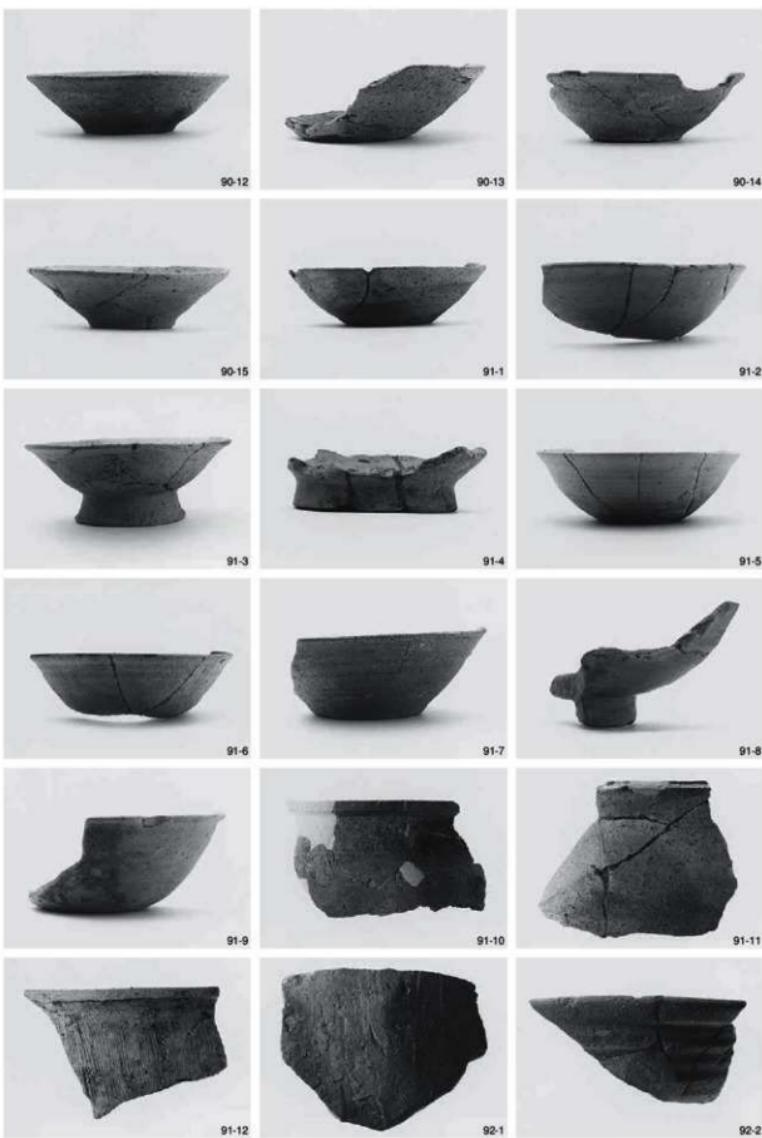


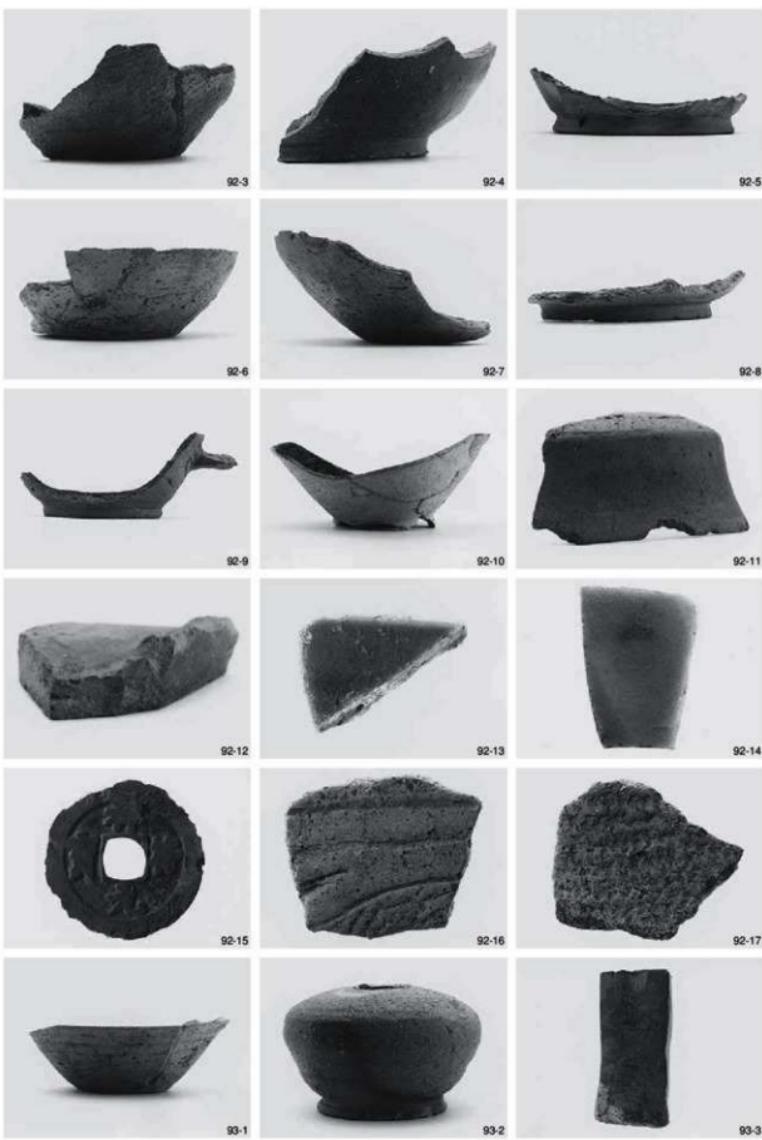


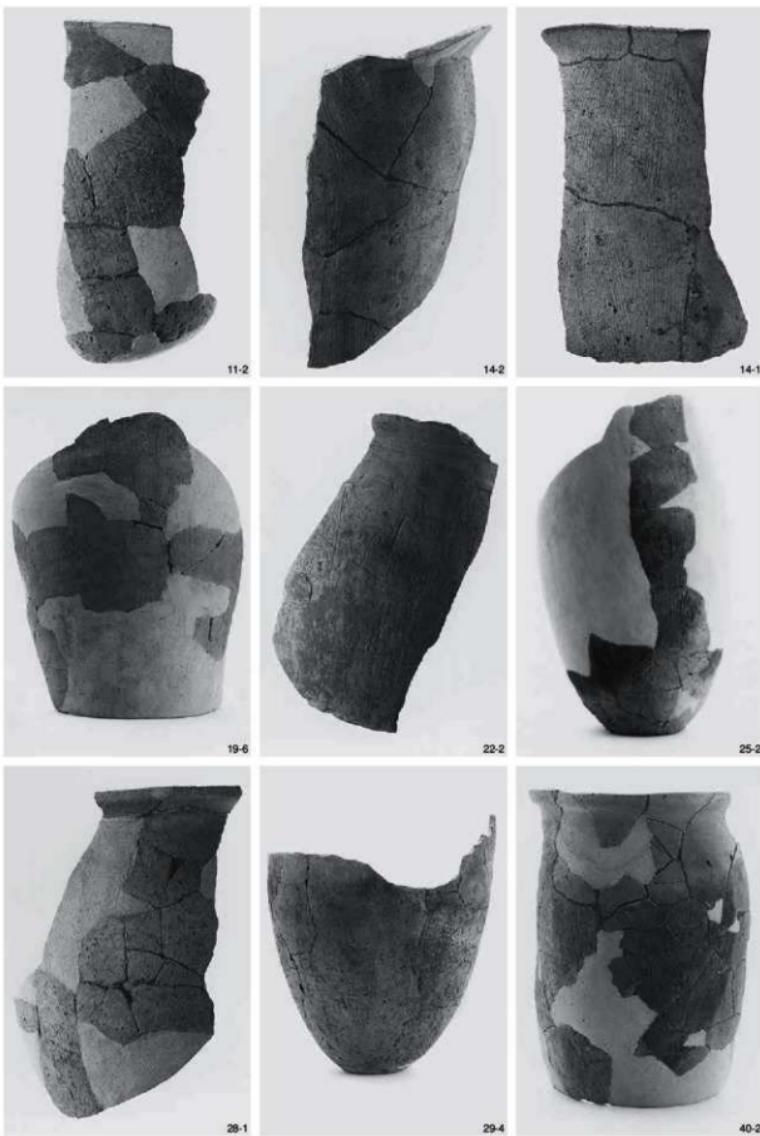


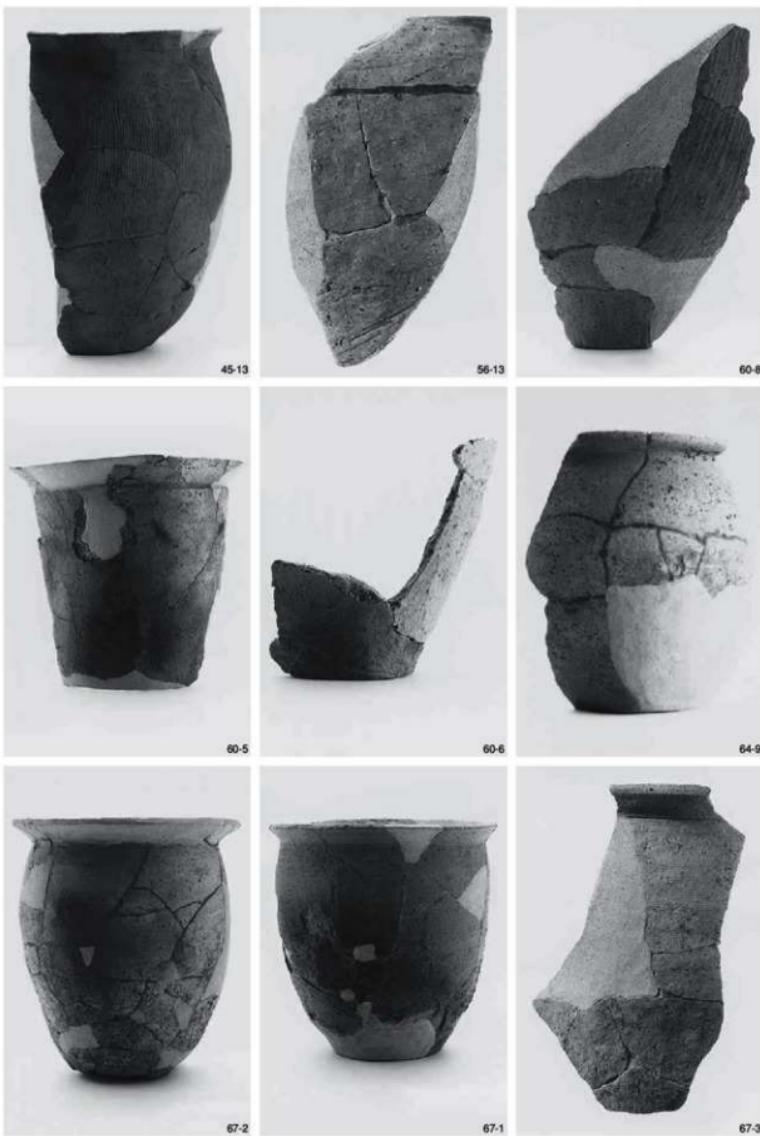












45-13

56-13

60-8

60-5

60-6

64-9

67-2

67-1

67-3

付 編

---



## 北向遺跡の自然科學分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

北向遺跡（山形県山形市大字青柳字一本木に所在）は、村山高瀬川左岸に位置し、立谷川により形成された扇状地の末端部に位置する。これまでの発掘調査により、古代の竪穴住居跡群や掘立柱建物跡群などが検出されている。また、古代の住居跡を掘り込んで長軸 70-100cm、短軸 40-80cm、深さ 10-40cm を測る楕円形から円形を呈する用途不明の土坑が検出されており、焼土が確認されている。これらの土坑は屋外炉の可能性もあると考えられている。また、貯蔵穴の可能性がある埋甕を伴った土坑なども検出されている。

本報告では、住居跡カマド内および調査区壁面の旧河川より確認された火山灰を対象に、年代に関する情報を得ることを目的としてテフラ分析および屈折率測定を実施する。また、屋外炉の可能性がある用途不明の土坑覆土を対象に、用途推定を目的として土壤微細物分析、リン・炭素分析により土坑内容物の情報を得る。本分析には、比較資料を得るために、住居跡カマドの覆土も選択する。さらに、貯蔵穴の可能性がある土坑から検出された埋甕内覆土を対象に、用途推定・植物利用状況に関する情報を得ることを目的として植物珪酸体分析、土壤微細物分析、リン・炭素分析を実施する。

### 1. 試料

#### (1) 遺構の年代

10世紀前半の住居跡とされる ST159 のカマド内より確認されたテフラの可能性があるとされる堆積物（試料番号 1）と、旧河川とされる北区東壁Ⅲ層（古代の包含層）の中下部より採取された堆積物（試料番号 2）の、計 2 点について、テフラ分析、屈折率測定を実施する。いずれにもぶい黄褐色を呈する砂混じりのシルトである。

#### (2) 土坑の内容物

古代の住居跡を掘り込んで構築された用途不明の土坑 SL78（試料番号 3）、SL34（SK34: 試料番号 4）、SL1（SK1: 試料番号 5）の覆土から採取された 3 点と、これらの比較対照試料として採取された住居カマド覆土 ST8-EL（試料番号 6）、ST86-EL（試料番号 7）、ST16-EL22（試料番号 8）の 3 点の計 6 点について、土壤微細物分析、リン・炭素分析を実施する。

貯蔵穴とみられる土坑 ST89-EK2 埋甕内覆土（試料番号 9）の 1 点について、植物珪酸体分析、土壤微細物分析、リン・炭素分析を実施する。なお、リン・炭素分析については、対照試料として古代の包含層である基本層序Ⅲ層（試料番号 10）も併せて計 8 点の分析を行う。

また、各遺構覆土における土壤微細物分析により炭化材が検出されたため、これらの炭化材について樹種同定を実施する。さらに、SL1 の覆土からは焼骨片も検出されたため、骨同定を実施する。

### 2. 分析方法

#### (1) テフラ分析・屈折率測定

試料約 20g を蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の 3 タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラス、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた纖維束状のものとする。

さらに火山ガラスについては、その屈折率を測定し、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤（1995）のMAIOTを使用した温度変化法を用いる。

#### （2）土壤微細分析

土壤試料200cc（試料番号3.4は150cc、試料番号9は50cc）を水に一晩液浸し、試料の泥化を促す。0.5mmの篩を通して水洗し残渣をシャーレに集め、双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な果実、種子などを抽出する。種実の形態的特徴を所有の現生標本および原色日本植物種子写真図鑑（石川,1994）、日本植物種子図鑑（中山ほか,2000）などと比較し、種類を同定し、個数や乾燥重量を求めた。微細片を含み個数推定が困難な種類を破片と表示する。分析後の種実遺体は、種類毎にビンに入れ、70%程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施す。乾燥処理後の種実遺体は、乾燥剤を入れ保存する。

また、試料中から検出された炭化材については、自然乾燥の後、実体鏡による木材組織の観察で樹種同定を実施する。同じく検出された骨についても、自然乾燥の後、肉眼およびルーペで観察し、その形態的特徴から種類および部位の特定を行う。なお、骨の同定および解析には、金子浩昌先生の協力を得た。

#### （3）リン・炭素分析

リン酸は硝酸・過塩素酸分解バナドモリブデン酸比色法、炭素（腐植含量）はチューリン法でそれぞれ行う（土壤養分測定法委員会,1981）。以下に各項目の具体的な操作工程を示す。

試料を風乾後、軽く粉碎して200mmの篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、5時間）により測定する。風乾細土試料の一部を粉碎し、0.5mmの篩を全通させる（微粉碎試料）。

風乾細土試料2.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、硝酸約5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>）濃度を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g）を求める。

また微粉碎試料0.100～0.500gを100ml三角フラスコに正確に秤りとり、0.4Nクロム酸・硫酸混液10mlを正確に加え、約200℃の砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2N硫酸第1鉄アソニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量（Org-C乾土%）を求める。これに1.724を乗じて腐植含量（%）を算出する。

#### （4）植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料について過酸化水素水、塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離、濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下、乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）、およびこれらを含む珪化組織片を近藤・佐藤（1986）の分類に基づいて同定し、計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、植物珪酸体群集と珪化組織片の産状を図化する。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めれる。

### 3.結果

#### （1）テフラ分析・屈折率測定

試料番号1より得られた砂分には、少量の細砂～極細砂径の火山ガラスが認められた。火山ガラスは無色透明

の塊状の軽石型、纖維束状の軽石型およびバブル型が混在する。火山ガラスの屈折率は、n1.504 ~ 1.508 のレンジに入り、n1.505 ~ 1.506 にモードがある (図1)。なお、本試料の砂分の主体は、粗砂径の亜円~亜角繩状の凝灰岩を主とする岩石片と石英、長石粒である。

試料番号2より得られた砂分は、多量の細砂~極細砂径の火山ガラスにより構成される。

火山ガラスは無色透明の塊状の軽石型、纖維

束状の軽石型およびバブル型が混在するが、塊状の軽石型が多い。火山ガラスの屈折率は、n1.504 ~ 1.508 のレンジに入り、n1.505 ~ 1.506 にモードがある (図1)。

## (2) 土壤微細物分析

土壤微細物分析の結果を表1に示す。試料番号5から、草本3分類群14個の種実が検出されたのみで、他の試料からは同定可能な種実は検出されなかった。その他に、炭化材や部位・種類共に不明の炭化物が検出された。また、試料番号5からは動物遺存体(焼骨)の破片が検出された。検出された種実は、單子葉植物2分類群4個(イネ3個、イネ科1個)、双子葉植物1分類群10個(ナデシコ科)である。栽培植物のイネは炭化しており遺存状態は悪い。一方、イネ科とナデシコ科は炭化しておらず、検出後に発芽するなど遺存状態が非常に良好である。吉崎(1992)によると、低湿地跡遺以外から出土する炭化していない種実は、後代からの混入の可能性があるとして、炭化種実と同様に扱わないように警告している。ここでも、遺構廃絶後の後代に混入した種実遺体の可能性がある。以下に、本分析によって得られた種実の形態的特徴などを記述する。なお、試料中から検出された炭化材については、樹種同定の結果、クリ、広葉樹、樹皮、樹種不明に分類された(表1)。同じく試料中より検出された骨については、別項に示す。

表1. 土壤微細物分析結果

試料番号	出土遺構	区	遺構番号	土壤分析量	検出種類名	個数	状態・個数	乾燥重量	備考
3 SL76	北	ST74を彫り込む(焼土)	150cc(296.6g)	炭化材	広葉樹	破片	0.02g	樹種同定対象	
4 SL34	南	ST74を彫り込む(焼土)	150cc(284.3g)	炭化材	破片	0.26g	樹種同定対象		
5 SL1	北	ST90-100を彫り込む(焼土)	200cc(347.0g)	イネ 炭化胚乳	—	2個	—	0.014g	
				イネ	—	1個	—		
				イネ科	種子	—	10個		検出後発芽。後代からの混入?
				大明炭化物	—	破片	0.01g	未満	検出後発芽。後代からの混入?
				炭化材	不明	破片	0.01g	未満	樹種同定対象
				動物遺存体(焼骨)	—	破片	26.87g	動物遺存体同定対象	
6 STB-EL	北	SL1との比較資料	200cc(349.7g)	炭化材	不明	破片	0.01g	未満	樹種同定対象
7 STB-EL	北	SL1との比較資料	200cc(367.8g)	炭化材	不明	破片	0.01g	未満	樹種同定対象
8 ST16-EL22	南	SL1との比較資料	200cc(382.1g)	炭化材	クリ	破片	0.01g	未満	樹種同定対象
9 STB-EK2	北	野鹿穴(埋里内層土)	50cc(83.40g)	炭化材	樹皮	破片	0.05g	未満	樹種同定対象

・イネ (*Oryza sativa L.*) イネ科イネ属

胚乳が検出された。炭化しており黒色を呈す。長楕円形でやや偏平。長さ 4mm、幅 2.5mm、厚さ 1.5mm 程度。基部には胚が脱落した凹部がある。焼き彫れや発泡しているなど遺存状態は悪いが、表面には 2-3 本の縱溝がみられる。

・イネ科 (Gramineae)

穎が検出された。淡褐色、狹卵形でやや偏平。長さ 2mm、径 1.5mm 程度。穎は薄く柔らかくて弾力がある。表面には微細な網目模様が継列する。検出後に発芽した。淡黄緑色、線形で 1 枚の子葉が鞘状に展開する。

・ナデシコ科 (Caryophyllaceae)

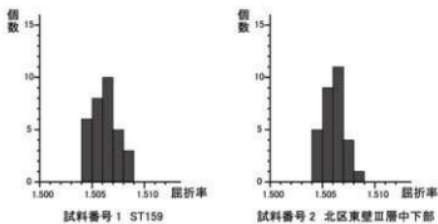


図1. 火山ガラスの屈折率測定結果

種子が検出された。茶褐色、腎臓状円形でやや偏平。径1mm程度。基部は凹み、脐がある。種皮は薄く柔らかい。種皮表面には、脐を取り囲むように瘤状突起が同心円状に配列する。検出後に発芽した。赤みを帯びた淡黄緑色、楕円形で2枚同形の子葉が、主軸の子葉節に対生する。

### (3) 骨同定

結果を表2に示す。検出された焼骨は、ヒトの頭骨片、肋骨／四肢骨片（形態からみて上腕骨、桡骨、尺骨などとみられる）、大腿骨頭部片を初めとして骨頭部分などの骨端関節部の海綿質部片などである。この他、寛骨の臼部とみられる破片も検出される。

表2. 骨同定結果

試料番号	出土遺構	区	分類群	部位	部分	数量	重量	備考
5 SL1	北ヒト	頭骨 肋骨／四肢骨片 四肢骨 寛骨 大腿骨 部位不明	破片 破片 骨端関節部 寛骨臼部片 骨頭部片 破片	1 19 6 2 1 多	1.10g 16.96g 内13点(12.31g)が土壤微細物分析から検出 2.26g 全点土壤微細物分析から検出 2.27g 全点土壤微細物分析から検出 4.60g 12.73g 内10.03gが土壤微細物分析から検出			

### (4) リン・炭素分析

結果を表3に示す。腐植含量は、0.70-1.93%といずれの試料においても低い測定値であり、試料間の変動もそれほど大きくない。一方、リン酸含量は、2.19-13.12P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/gを示し、試料間の差が大きい。試料番号9が最も低く、試料番号5が最も高い。

表3. リン・炭素分析結果

試料番号	地点	層位等	区	土性	土色	腐植含量(%)	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> (mg/g)
3 SL78	土坑覆土	北	LIC	7.5YR3/1 黒褐	1.37	4.21	
4 SL34	土坑覆土	南	LIC	7.5YR3/2 黒褐	1.45	3.27	
5 SL1	土坑覆土	北	LIC	7.5YR3/2 黒褐	1.68	13.12	
6 ST8-EL	カマド覆土	北	LIC	7.5YR4/3 褐	1.24	6.75	
7 ST86-EL	カマド覆土	北	LIC	7.5YR4/3 褐	0.70	3.17	
8 ST16-EL22	カマド覆土	南	LIC	7.5YR3/1 黒褐	1.93	2.63	
9 ST89-EK2	貯蔵穴?埋蔵土	北	LIC	10YR3/1 黒褐	1.55	2.19	
10 基本層序	Ⅲ層	北	LIC	7.5YR3/1 黒褐	1.49	2.30	

注1)土色:マンセル色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修, 1987)による。

注2)土性:土壤調査ハンドブック(ペドロジスト懇談会編, 1984)の野外土性による。

LIC…粘土質土(粘土25~45%、シルト0~45%、砂10~55%)

### (5) 植物珪酸体分析

結果を表4、図2に示す。試料番号9からは、栽培植物であるイネ属の葉部に由来する短細胞列、初穀に形成される顆粒珪酸体が認められる。また、単体の植物珪酸体では、クマザサ属とヨシ属の産出が目立ち、イネ属、コブナグサ属やススキ属、イチゴツナギ亞科なども認められる。また、栽培種を含む分類群であるオオムギ族も検出されるが、検出された植物珪酸体の形態からは栽培種か否かの判別が難しい。

### 4. 考察

#### (1) 遺構の年代

2点の試料に認められた火山ガラスは、形態と屈折率がほぼ同様であることから、同一テフラに由来する。上述した火山ガラスの特徴および北向遺跡の地理的位置と、これまでに研究された東北地方におけるテフラの産状(町田ほか, 1981, 1984; Arai et al., 1986; 町田・新井, 2003

表4. 植物珪酸体分析結果

種類	試料番号	9
イネ科葉部短細胞珪酸体		
イネ族イネ属		28
キビ族ゴマサ属		3
タケ科クマザサ属		60
ヨシ属		128
ウシクサ族コブナギ属		3
ウシクサ族ススキ属		16
イチゴツナギ亞科オムギ族		7
イチゴツナギ亞科オムギ族		52
不明キビ型		81
不明クサバ型		18
不明ダニチ型		2
イネ科葉部機能細胞珪酸体		
イネ族イネ属		13
タケ科クマザサ属		33
ヨシ属		37
ウシクサ族		11
不明		15
合計		
イネ科葉部短細胞珪酸体		398
イネ科葉部機能細胞珪酸体		109
總計		507
珪化組織片		
イネ属珪化組織片		8
イネ属珪化組織片		8

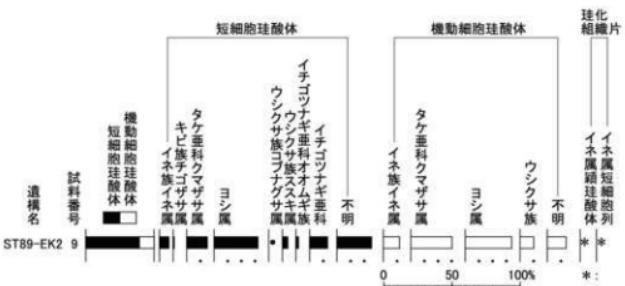


図2 植物珪酸体群集と珪化組織片の産状

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●は1%未満の種類を示す。また、珪化組織片の産状を\*で示す。

など)との比較から、火山ガラスの由来するテフラは、十和田aテフラ (To-a) であると考えられる。To-aは、平安時代に十和田カルデラから噴出したテフラであり、給源周辺では火碎流堆積物と降下軽石からなるテフラとして、火碎流の及ばなかった地域では軽石質テフラとして、さらに本遺跡のように給源から離れた地域では細粒の火山ガラス質テフラとして、東北地方のはば全域で確認されている (町田ほか, 1981)。また、その噴出年代については、早川・小山 (1998) による詳細な調査によれば、西暦915年とされている。なお、町田・新井 (2003) に記載された To-a の火山ガラスの屈折率は、n1.496 ~ 1.508 の広いレンジを示す。ただし、n1.502以下の低い屈折率の火山ガラスを主体とする火山灰層は、南方へは広がらず、十和田周辺とその東方地域に分布が限られるとされている (町田ほか, 1981)。おそらく、今回検出された火山ガラスは、低屈折率の火山ガラスを含まない To-a に由来するものと考えられる。

調査所見によると、ST159の年代は10世紀前半と考えられており、テフラ分析から得られた年代とよく一致する。また、検出された To-a の火山ガラスが ST159 の住居が廃棄された後にカマド内に降下堆積したものであるなら、住居の構築年代は To-a の噴出年代すなわち 915 年よりも古いことが検証されることになる。

一方、旧河道の北区東壁Ⅲ層中下部より検出されたテフラも To-a の降下堆積物とされることから、その検出層準は 915 年前後に堆積したと考えられる。今回の分析により、北向遺跡の遺構や遺物の年代を検証する良好な指標が得られたといえる。

## (2) 土坑の内容物

土坑とカマドから採取された試料の腐植含量は、試料間に著しい差が無く、全体的に低く、基本土層Ⅲ層と類似した測定値を示す。これに対し、リン酸含量は試料間による差が大きい。このことを考慮すると、遺構内覆土では、土壤腐植による影響、すなわち植物体に由来するリン酸の富化がそれほど大きくないといえる。

ここで、リン酸が土壤中に普通に含まれる量、つまり天然賦存量については Bowen (1979)、Bolt & Bruggenwert (1976)、川崎ほか (1991)、天野ほか (1991) などにより調査されている。これらの調査事例から推定される天然賦存量の上限は、約  $3.0\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$  程度である (なお、各調査例の記載単位が異なるため  $\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$  に統一している)。これらの値を著しく越える土壤では、人為的影響など外的要因によるリン酸成分の富化が指摘できる。今回の結果をみると、S T 16-EL22 のカマド覆土、S T 89-EK2 の貯蔵穴とみられる土坑内の埋甕内覆土では、リン酸含量が基本土層Ⅲ層とはほぼ同程度の測定値であり、しかも上記した天然賦存量の範囲内にある。のことから、2基の遺構覆土には、外的要因すなわち動物遺体等によってリン酸が富化されたとは言い難い。

一方、土坑から採取された3点は、上記した天然賦存量の上限を上回る測定値が得られた。特にSL1では、リン酸含量が著しく高いことから、動物遺体によるリン酸の富化が指摘できる。同試料では、ヒトの焼骨が検出され、また炭化材も認められることから、SL1は火葬墓の可能性がある。なお、本遺構から検出された炭化したイネは、本遺跡周辺で栽培もしくは持ち込まれ利用されていたものと考えられ、副葬品などとして被葬者と共に埋納された可能性もある。なお、馬場ほか(1986)を参考にすると、人骨を焼いた際、600℃以下ではほとんど変化がなく、800℃付近では灰白色になり、収縮・硬化が見られ、歯のエナメル質が崩壊し歯冠が失われるなど、最も激しく変化するとされている。今回検出された焼骨は、灰白色や灰黒色を呈し、表面に細かなひび割れが生じていることから、800℃以上で火葬されたと考えられる。

また、SL1を除く2基の土坑も、リン酸含量が天然賦存量の上限を上回ることから、動物遺体の影響によってリン酸が富化されている可能性がある。一方、カマドから採取された試料の内、ST 8-ELとST 86-ELでも天然賦存量の上限を上回り、対照試料とされた基本土層Ⅲ層よりも高い測定値が得されることから、動物遺体によるリン酸の富化の可能性がある。これらの遺構については、土壤微細物分析結果では明瞭な違いが認められなかったため、今回の分析結果を見る限り、土坑が土葬墓あるいは屋外炉であるかは断定できない。今後、遺物や他の遺構の検出状況なども含めて、検討することが望まれる。

### (3) 貯蔵穴について

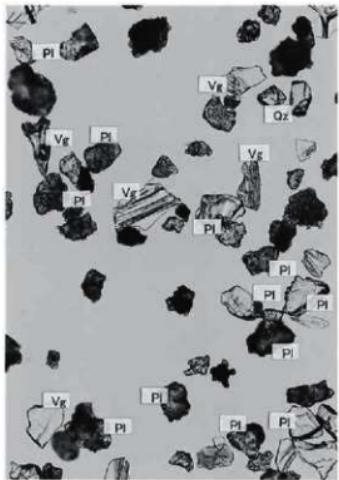
古代とされる住居跡ST89の貯蔵穴EK2より出土した埋甕RP299内覆土の腐植含量をみると、基本土層Ⅲ層と類似した測定値となっている。また、リン酸含量も上記した天然賦存量の範囲内にある。このことから、埋甕内には、外的要因によってリン酸が富化されたとは言い難く、内部に動物遺体が存在していたとは言い難い。一方、植物遺体をみると、種実遺体は検出されないが、イネ属の葉部や稻穀に由来する珪化組織片や植物珪酸体が検出される。この産状から、埋甕内あるいは土坑内に稻穀や稻穀が含まれていた可能性がある。この点については、さらに埋甕周辺の土壤や覆土の由來となった基本土層の植物珪酸体組成を比較することも望まれる。なお山形市内の梅ノ木遺跡でも、同様に古代とされる貯蔵穴から稻穀に由来する珪化組織片が多産し、稻穀が含まれていた可能性が指摘されている(パリノ・サーヴェイ株式会社、未公表)。また、検出されたオオムギ族が栽培種に由来するものであれば、ムギ類の貯蔵も想定される。今回の結果は、古代の食糧貯蔵を考える上で貴重な成果であるといえる。

### 引用文献

- 天野 洋司・太田 健・草場 敏・中井 信,1991,中部日本以北の土壤型別蓄積リンの形態別計量.  
農林水産省農林水産技術会議事務局(編),土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発,28-36.
- Arai,F.・Machida,H.・Okumura,K.・Miyauchi,T.・Soda,T.・Yamagata,K.1986,Catalog for late quaternary marker-tephras in Japan II - Tephras occurring in Northeast Honshu and Hokkaido -,Geographical reports of Tokyo Metropolitan University No.21.223-250.
- 馬場 悠男・茂原 信生・阿部 修二・江藤 盛治,1986,根古屋遺跡出土の人骨・動物骨,  
靈山根古屋遺跡の研究 -福島県靈山町根古屋における再葬墓群-,福島県靈山町教育委員会,93-113.
- Bolt,G.H. & Bruggenwert,M.G.M.1976 SOIL CHEMISTRY[岩田 進午・三輪 審太郎・井上 隆弘・  
陽 捷行(訳),1980,土壤の化学,学会出版センター,235-236.
- Bowen,H.J.M.1979,Environmental Chemistry of Elements[浅見 輝男・茅野 光男(訳),1983,  
環境無機化学 -元素の循環と生化学-,博友社,297p.
- 土壤養分測定法委員会(編),1981,土壤養分分析法,養賢堂,440p.

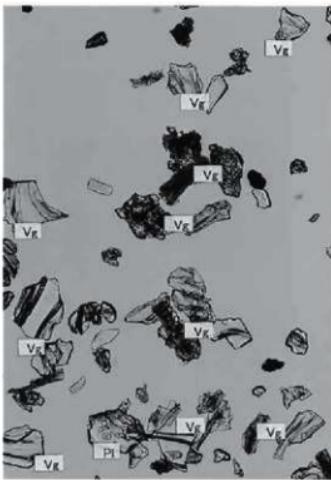
- 古澤 明,1995.火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別.地質学雑誌,101,123-133.
- 早川由紀夫・小山真人,1998.日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日-十和田湖と白頭山-.火山,43,403-407.
- 石川 茂雄,1994.原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
- 川崎 弘・吉田 澄・井上 恒久,1991.九州地域の土壤型別蓄積リンの形態別計量.
- 農林水産省農林水産技術会議事務局(編),土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発,23-27.
- 近藤 鍊三・佐瀬 隆,1986.植物珪酸体分析,その特性と応用.第四紀研究,25,31-64.
- 町田 洋・新井房夫,2003.新編 火山灰アトラス.東京大学出版会,336p.
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広,1981.日本海を渡ってきたテフラ.科学,51,562-569.
- 町田 洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦,1984.テフラと日本考古学-考古学研究と関連するテフラのカタログ-.渡辺直経(編)古文化財に関する保存科学と人文・自然科学.同朋舎,865-928.
- 中山 至大・井之口 希秀・南谷 忠志,2000.日本植物種子図鑑.東北大学出版会,642p.
- ペドロジスト懇談会(編),1984.土壤調査ハンドブック.博友社,156p.
- 吉崎 昌一,1992.古代雑穀の検出.考古学ジャーナル,355,2-14.

図版1 テフラ



1.To-a の火山ガラス (ST159)

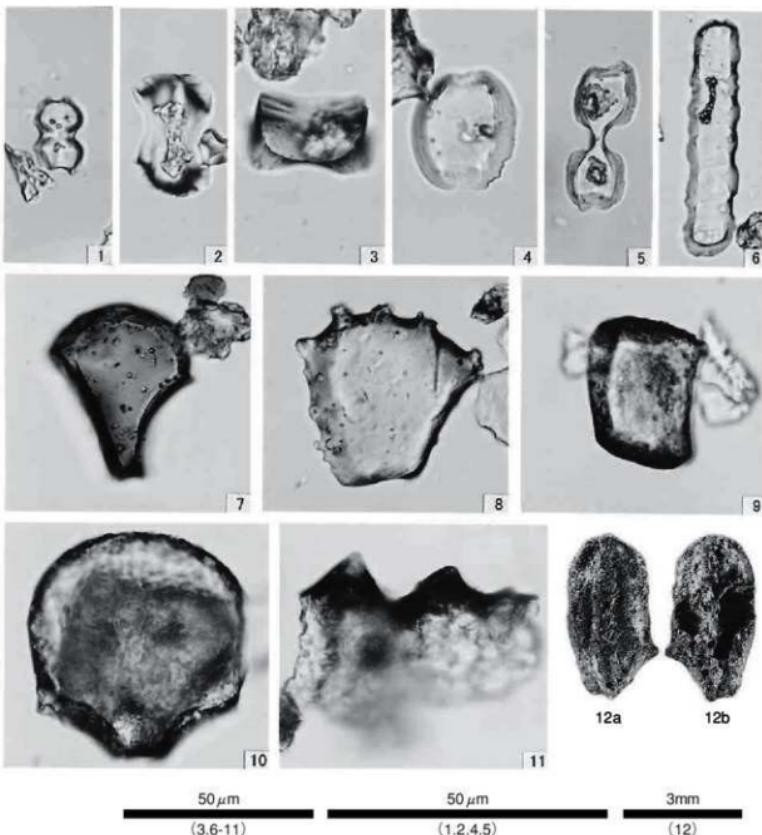
Vg: 火山ガラス .Qz: 石英 .Pl: 斜長石 .



2.To-a の火山ガラス (北区東壁Ⅲ層中下部)

0.2mm

図版2 植物珪酸体・種実遺体



1. イネ属短細胞珪酸体 (ST89-EK2)
3. クマザサ属短細胞珪酸体 (ST89-EK2)
5. ススキ属短細胞珪酸体 (ST89-EK2)
7. イネ属機動細胞珪酸体 (ST89-EK2)
9. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (ST89-EK2)
11. イネ属穎珪酸体 (ST89-EK2)

2. チゴザサ属短細胞珪酸体 (ST89-EK2)
4. ヨシ属短細胞珪酸体 (ST89-EK2)
6. オオムギ族短細胞珪酸体 (ST89-EK2)
8. クマザサ属機動細胞珪酸体 (ST89-EK2)
10. ヨシ属機動細胞珪酸体 (ST89-EK2)
12. イネ胚乳 (SL1)



## 報告書抄録

ふりがな	きたむかえいせきはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	北向遺跡発掘調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第146集							
編著者名	植松晚彦 佐竹桂一							
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター							
所在地	〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番地1号 TEL 023-672-5301							
発行年月日	平成18年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	しょざいち 所在地	コード 市町村	北緯	東経	調査期間	調査期間 (nd)	調査原因	
きたむかえいせき 北向遺跡	やまがたけん 山形県 やまとさん 山形市 おおあざかぎま 大字風間 あざかわくわん 字北向	6201	平成14年度 新規登録	38度 18分 6秒	140度 22分 3秒	20040507 ? 20040729	1.170	臨時道路整備事業一般 県道東山七浦線
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項				
集落跡	奈良～平安時代	掘立柱建物跡5棟	土師器	遺跡は、古代の堅穴住居が重複して多数検出され、当地域の土器変遷が検討できる資料が得られた。他に10世紀初頭とされる火山灰が遺構内に混入し定点資料が得られた。(出土遺物数:60箱)				
		竪穴住居跡38棟 土坑 溝跡	須恵器 赤焼土器					
	中世	土坑	青磁					

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第146集

## 北向遺跡発掘調査報告書

2006年3月31日発行

発行 財團法人 山形県埋蔵文化財センター  
〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号  
電話 023-672-5301

印刷 田宮印刷株式会社  
〒990-2251 山形県山形市立谷川三丁目 1410-1  
電話 023-686-6111